

山口遺跡・川辺遺跡発掘調査報告書

－県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良工事に伴う発掘調査－

2005年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

山口遺跡・川辺遺跡発掘調査報告書

－県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良工事に伴う発掘調査－

2005年3月

財団法人 和歌山県文化財センター



山口遺跡から紀伊山脈を望む



川辺遺跡から紀ノ川を望む



山口 1 次 掘立柱建物 1



川辺 2 次 掘立柱建物 1



川辺 3 次 土坑137遺物出土状況



川辺 3 次 土坑129 遺物出土状況

序

和歌山県北部を西流する紀ノ川の下流域には、肥沃な和歌山平野が形成されています。この和歌山平野を中心とした地域には、太古から人々が生活を営んだ結果、数多くの遺跡が残され、発見されています。

山口遺跡・川辺遺跡は、その右岸の沖積平野に位置しております。山口遺跡は、近隣に山口廃寺の存在し、過去の調査では弥生時代末～古墳時代の集落の一部が、川辺遺跡でも縄文時代以降の集落や墓などが発見され、両遺跡とも交通の要衝として長期間にわたる人々の生活の痕跡が発見されておりました。

財団法人 和歌山県文化財センターでは、8度にわたり、両遺跡の発掘調査を実施いたしました。その結果、弥生時代末以降、中世にいたるまでの多数の住居跡、掘立柱建物、溝等を検出いたしました。

ここに、その成果を取りまとめ報告書を刊行いたします。この成果が、郷土の歴史を知るための一資料ともなれば、幸いかと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書作成にあたりご指導、ご助言をいただいた関係各位の方々に深く感謝申し上げますとともに、今後とも当文化財センターへのより一層のご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。

平成17年 3 月31日

財団法人 和歌山県文化財センター

理 事 長 木 村 良 樹

例 言

1. 本書は県道和歌山貝塚線および県道粉河加太線道路改良工事に伴う山口遺跡・川辺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および出土遺物等整理作業は、和歌山県海草振興局建設部道路課より財団法人 和歌山県文化財センターが委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに実施した。
3. 調査ならびに本書で使用した座標値は、直角平面座標系第Ⅵ系（日本測地系）で、図示した北は座標北である。使用した標高は、東京湾標準潮位（T.P.+）の数値である。土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修2000年度版「新版標準土色帖」に準じた。
4. 航空写真撮影は山口遺跡・山口1次・川辺1次：株式会社パスコ、山口2次：株式会社マエダ、山口3次：株式会社サンヨー、山口4次・川辺2・3次：南紀航空にそれぞれ委託した。調査現場写真は、各調査担当者が各々撮影した。遺物写真は埋蔵文化財課副主査黒石哲夫が主に撮影し、一部藤井も行った。
5. 調査では、各調査次毎に遺構の種別を問わず1～順次遺構番号を付した。ただし、掘立柱建物のみは、構成する柱穴を組み合わせ、これらとは別に「掘立柱建物」○（数字）のように、各調査次毎に1～改めて順次番号を付与した。
6. 本書掲載の遺物実測図と写真図版に付した番号は、一致する。ただし、山口遺跡と川辺遺跡は各々1～順次番号を付した。遺物実測図中、網点を被せた範囲は丹が塗布された範囲を、一点鎖線は器面の色調の変化や黒斑の範囲をそれぞれ意味する。
7. 発掘調査・整理作業で作成した図面・写真などの記録類は財団法人和歌山県文化財センターで、出土遺物は和歌山県教育委員会で各々保管している。
8. 本書の編集は藤井が主に担当したが、写真図版については村田が担当した。執筆は目次に各々記したとおりである。

【調査組織】

・事務局

事務局長

(専務理事兼務)

鍋島伊津夫 (山口遺跡)

中谷博昭 (山口 1 次～ 3 次・川辺 1 次)

田中嘉一 (山口 4 次・川辺 2 次)

岩橋 驍 (川辺 3 次)

事務局次長

菅原正明 (山口遺跡・山口 1～3 次・川辺 1 次)

吉田宣夫 (山口 4 次・川辺 2 次)

畑中照雄 (山口 4 次・川辺 2 次)

松田正昭 (川辺 3 次)

篠原 隆 (川辺 3 次)

埋蔵文化財課長

松田正昭 (山口・山口 1 次～ 4 次・川辺 1・2 次)

渋谷高秀 (川辺 3 次)

管理課長

西本悦子 (川辺 3 次)

・調査担当

埋蔵文化財課主査

村田 弘 (山口遺跡)

主査

佐伯和也 (山口 1～4 次・川辺 1・2 次)

技師

藤井幸司 (川辺 3 次)

専門調査員

齋藤有美 (川辺 2・3 次)

【出土遺物整理】

・事務局

専務理事 (事務局長兼務)

岩橋 驍

事務局次長

松田正昭

埋蔵文化財課長

渋谷高秀

管理課長

西本悦子

・整理担当

埋蔵文化財課主任

佐伯和也 (1 次)

埋蔵文化財課技師

藤井幸司 (2 次)

目 次

第Ⅰ章 序 章	1
第1節 調査の経緯と経過	1 (藤井)
第2節 位置と環境	3
1. 地理的環境	3 (村田)
2. 歴史的環境	4 (村田)
3. 既往の調査	6 (藤井)
第3節 調査の方法	10 (藤井)
1. 発掘調査	10
2. 出土遺物整理	12
第Ⅱ章 山口遺跡の調査成果	14
第1節 基本層序	14 (藤井)
第2節 山口遺跡(94-01・142)の調査成果	16
1. 遺 構	16 (村田)
2. 遺 物	24 (藤井)
第3節 山口遺跡1～4次の調査成果	37
1. 山口1次(97-01・142)調査成果	37
A. 遺 構	37 (村田)
B. 遺 物	41 (藤井)
2. 山口2次(98-01・142)調査成果	45
A. 遺 構	45 (村田)
B. 遺 物	49 (藤井)
3. 山口3次(99-01・142)調査成果	51
A. 遺 構	51 (村田)
B. 遺 物	59 (藤井)
4. 山口4次(00-01・142)調査成果	67
A. 遺 構	67 (村田)
B. 遺 物	69 (藤井)
第4節 山口遺跡小結	71 (村田)

第Ⅲ章 川辺遺跡の調査成果	74
第1節 基本層序	74 (藤井)
第2節 1次調査(97-01・145)の成果	76
1. 遺構	76 (佐伯)
2. 遺物	98 (藤井)
第3節 2次調査(00-01・145)の成果	108
1. 遺構	108 (佐伯)
2. 遺物	124 (藤井)
第4節 3次調査(01-01・145)の成果	138 (藤井)
1. 遺構	138
2. 遺物	155
第5節 川辺遺跡小結	168 (藤井)
第Ⅳ章 まとめ	171 (藤井)

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

- | | | | |
|--------|------------------------------|--------|-----------------------|
| 第 1 図 | 周辺の自然地形 | 第 38 図 | 山口 3 次上面遺構断面図 |
| 第 2 図 | 周辺の遺跡 | 第 39 図 | 山口 3 次下面遺構概略図 |
| 第 3 図 | 山口遺跡・川辺遺跡調査区位置図 | 第 40 図 | 山口 3 次掘立柱建物 4～9 |
| 第 4 図 | 山口遺跡区画図 | 第 41 図 | 山口 3 次掘立柱建物10～12 |
| 第 5 図 | 川辺遺跡区画図 | 第 42 図 | 山口 3 次溝78・79・118断面図 |
| 第 6 図 | 山口遺跡土層柱状図 | 第 43 図 | 山口 3 次出土遺物 1 |
| 第 7 図 | 山口遺跡遺構概略図 | 第 44 図 | 山口 3 次出土遺物 2 |
| 第 8 図 | 山口遺跡掘立柱建物 1・2 | 第 45 図 | 山口 3 次出土遺物 3 |
| 第 9 図 | 山口遺跡掘立柱建物181・182・183 | 第 46 図 | 山口 3 次出土遺物 4 |
| 第 10 図 | 山口遺跡溝断面図 | 第 47 図 | 山口 3 次出土遺物 5 |
| 第 11 図 | 山口遺跡 S X 31～33 | 第 48 図 | 山口 3 次出土遺物 6 |
| 第 12 図 | 山口遺跡出土遺物 1（包含層） | 第 49 図 | 山口 4 次遺構概略図 |
| 第 13 図 | 山口遺跡出土遺物 2 | 第 50 図 | 山口 4 次溝 3・5・6 |
| 第 14 図 | 山口遺跡出土遺物 3 | 第 51 図 | 山口 4 次出土遺物 1 |
| 第 15 図 | 山口遺跡出土遺物 4 | 第 52 図 | 山口 4 次出土遺物 2 |
| 第 16 図 | 山口遺跡出土遺物 5 | 第 53 図 | 山口遺跡の遺構分布状況 |
| 第 17 図 | 山口遺跡出土遺物 6 | 第 54 図 | 調査区と推定古道 |
| 第 18 図 | 山口遺跡出土遺物 7 | 第 55 図 | 川辺遺跡土層柱状図 |
| 第 19 図 | 山口遺跡出土遺物 8 | 第 56 図 | 川辺 1 次上面遺構概略図 |
| 第 20 図 | 山口遺跡出土遺物 9 | 第 57 図 | 川辺 1 次掘立柱建物 1・2 |
| 第 21 図 | 山口 1 次遺構概略図 | 第 58 図 | 川辺 1 次掘立柱建物 3・4・5・6 |
| 第 22 図 | 山口 1 次掘立柱建物 1 | 第 59 図 | 川辺 1 次掘立柱建物 7・8 |
| 第 23 図 | 山口 1 次掘立柱建物 2 | 第 60 図 | 川辺 1 次掘立柱建物 9・10 |
| 第 24 図 | 山口 1 次溝 1・72断面図 | 第 61 図 | 川辺 1 次上面遺構断面図 |
| 第 25 図 | 山口 1 次土坑16 | 第 62 図 | 川辺 1 次土墳墓362・365・375 |
| 第 26 図 | 山口 1 次出土遺物 1 | 第 63 図 | 川辺 1 次下面遺構概略図 |
| 第 27 図 | 山口 1 次出土遺物 2 | 第 64 図 | 川辺 1 次竪穴住居17 |
| 第 28 図 | 山口 1 次出土遺物 3 | 第 65 図 | 川辺 1 次竪穴住居495 |
| 第 29 図 | 山口 2 次第 3 層上面検出遺構 | 第 66 図 | 川辺 1 次周溝墓536 |
| 第 30 図 | 山口 2 次 B 地区 第 5 層上面遺構概略図・土層図 | 第 67 図 | 川辺 1 次下面遺構断面図 |
| 第 31 図 | 山口 2 次最終遺構面遺構概略図 | 第 68 図 | 川辺 1 次土坑364・371・井戸354 |
| 第 32 図 | 山口 2 次最終遺構面溝土層図 | 第 69 図 | 川辺 1 次出土遺物 1 |
| 第 33 図 | 山口 2 次出土遺物 1 | 第 70 図 | 川辺 1 次出土遺物 2 |
| 第 34 図 | 山口 2 次出土遺物 2 | 第 71 図 | 川辺 1 次出土遺物 3 |
| 第 35 図 | 山口 3 次上面遺構概略図 | 第 72 図 | 川辺 1 次出土遺物 4 |
| 第 36 図 | 山口 3 次掘立柱建物 1～3 | 第 73 図 | 川辺 1 次出土遺物 5 |
| 第 37 図 | 山口 3 次溝36石列図および地鎮遺構67 | 第 74 図 | 川辺 1 次出土遺物 6 |
| | | 第 75 図 | 川辺 1 次出土遺物 7 |

- | | | | |
|--------|-----------------------|-------|-----------------|
| 第 76 図 | 川辺 2 次遺構概略図 | 第116図 | 川辺 3 次出土遺物 6 |
| 第 77 図 | 川辺 2 次掘立柱建物 1・2 | 第117図 | 川辺 3 次出土遺物 7 |
| 第 78 図 | 川辺 2 次掘立柱建物 3・柵列 1 | 第118図 | 川辺 3 次出土遺物 8 |
| 第 79 図 | 川辺 2 次竪穴住居592・558 | 第119図 | 川辺 1～3 次遺構変遷概略図 |
| 第 80 図 | 川辺 2 次竪穴住居611・612 | | |
| 第 81 図 | 川辺 2 次竪穴住居579 | | |
| 第 82 図 | 川辺 2 次竪穴住居575・586・587 | | |
| 第 83 図 | 川辺 2 次竪穴住居 1・2 | | |
| 第 84 図 | 川辺 2 次竪穴住居 4・480 | | |
| 第 85 図 | 川辺 2 次竪穴住居361・517 | | |
| 第 86 図 | 川辺 2 次土坑群 | | |
| 第 87 図 | 川辺 2 次溝群断面図 | | |
| 第 88 図 | 川辺 2 次出土遺物 1 | | |
| 第 89 図 | 川辺 2 次出土遺物 2 | | |
| 第 90 図 | 川辺 2 次出土遺物 3 | | |
| 第 91 図 | 川辺 2 次出土遺物 4 | | |
| 第 92 図 | 川辺 2 次出土遺物 5 | | |
| 第 93 図 | 川辺 2 次出土遺物 6 | | |
| 第 94 図 | 川辺 2 次出土遺物 7 | | |
| 第 95 図 | 川辺 2 次出土遺物 8 | | |
| 第 96 図 | 川辺 2 次出土遺物 9 | | |
| 第 97 図 | 川辺 3 次 1 調査区上面遺構概略図 | | |
| 第 98 図 | 川辺 3 次 1 調査区上面遺構 | | |
| 第 99 図 | 川辺 3 次 1 調査区下面遺構概略図 | | |
| 第100図 | 川辺 3 次竪穴住居44 | | |
| 第101図 | 川辺 3 次竪穴住居44遺物出土状況 | | |
| 第102図 | 川辺 3 次調査区下面遺構 | | |
| 第103図 | 川辺 3 次 2・3 調査区遺構概略図 | | |
| 第104図 | 川辺 3 次 2・3 調査区建物断面図 | | |
| 第105図 | 川辺 3 次竪穴住居68 | | |
| 第106図 | 川辺 3 次竪穴住居90 | | |
| 第107図 | 川辺 3 次竪穴住居94 | | |
| 第108図 | 川辺 3 次溝断面図・遺物出土状況 | | |
| 第109図 | 川辺 3 次土坑101・102 | | |
| 第110図 | 川辺 3 次土坑68-4・129・137 | | |
| 第111図 | 川辺 3 次出土遺物 1 | | |
| 第112図 | 川辺 3 次出土遺物 2 | | |
| 第113図 | 川辺 3 次出土遺物 3 | | |
| 第114図 | 川辺 3 次出土遺物 4 | | |
| 第115図 | 川辺 3 次出土遺物 5 | | |

図 版 目 次

P L - 1	山口遺跡調査区全景（北上空から）・山口遺跡代替地全景（西上空から）		土坑84（南西から）
P L - 2	山口遺跡掘立柱建物1・2（南から）・山口遺跡掘立柱建物1・2（北から）・山口遺跡掘立柱建物1（東から）	P L - 15	山口1次土坑64（南から）・山口1次土坑16セクションベルト（南から）・山口1次土坑16完掘状況（南から）
P L - 3	山口遺跡掘立柱建物2（南東から）・山口遺跡土坑248（南から）・山口遺跡代替地遺構全景（北から）	P L - 16	山口1次掘立柱建物1柱穴6断割状況（西から）・山口1次掘立柱建物2柱穴80断割状況（西から）・山口1次溝1セクションベルト（西から）
P L - 4	山口遺跡溝261（北から）・溝261セクションベルト（南から）・山口遺跡溝262（東から）	P L - 17	山口1次溝72セクションベルト（南西から）・山口1次基本土層西壁（東から）・山口1次下面遺構全景（南から）
P L - 5	山口遺跡A地区全景（南から）・山口遺跡掘立柱建物183（南から）・山口遺跡掘立柱建物183（東から）	P L - 18	山口2次A調査区西半部全景（東から）・山口2次A調査区西半基本層序（南から）
P L - 6	山口遺跡掘立柱建物182（南から）・山口遺跡掘立柱建物181（南から）・山口遺跡掘立柱建物181（東から）	P L - 19	山口2次A調査区溝11（東から）・山口2次A調査区溝87・88（東から）・山口2次A調査区溝87・88（北から）
P L - 7	山口遺跡溝145（北から）・溝145セクションベルト（南東から）・山口遺跡溝111・112・113（南西から）	P L - 20	山口2次A調査区東半全景（西から）・山口2次A調査区溝66（西から）
P L - 8	山口遺跡B地区全景（北側上空から）	P L - 21	山口2次B調査区第3層上面遺構面全景（東から）・山口2次B調査区第5層上面遺構面全景（南から）・山口2次B調査区最終遺構面全景（南から）
P L - 9	山口遺跡B地区全景（南から）・山口遺跡B地区全景（北から）・山口遺跡溝35全景（南から）	P L - 22	山口3次C調査区上面遺構面全景（西から）・山口3次C調査区下面遺構面全景（西から）
P L - 10	山口遺跡溝35北半部（南から）・山口遺跡溝35南半部（北から）・溝35セクションベルト4（南から）	P L - 23	山口3次C調査区掘立柱建物4（北から）・山口3次C調査区掘立柱建物5（北から） ・山口3次C調査区掘立柱建物6（北から）
P L - 11	溝35遺物出土状況（南西から）・山口遺跡溝30・51（南から）・溝30遺物出土状況（東から）	P L - 24	山口3次C調査区掘立柱建物7（北から）・山口3次C調査区掘立柱建物8（北から） ・山口3次C調査区溝79（西から）
P L - 12	山口遺跡S X - 31・32・33（北から）・S X - 31セクションベルト（東から）・山口遺跡B調査区北西隅柱穴群（南から）	P L - 25	山口3次D調査区土坑66（北から）・山口3次D調査区下面遺構全景（北西から）・山口3次E調査区上面遺構全景（西から）
P L - 13	山口1次全景（南から）・山口1次西半部掘立柱建物1・2（南から）・山口1次東半部溝1・72（南から）		
P L - 14	山口1次掘立柱建物1（南から）・山口1次掘立柱建物2（東から）・山口1次		

- P L - 26 山口 3 次 E 調査区掘立柱建物 2・3
(南西から)・山口 3 次 E 調査区下面柱
穴群と溝118 (西から)・山口 3 次 E 調
査区掘立柱建物 9 (南から)
- P L - 27 山口 3 次 E 調査区掘立柱建物10 (北か
ら)・山口 3 次 E 調査区掘立柱建物11
(南から)・山口 3 次 E 調査区掘立柱建
物12 (北から)・山口 3 次 E 調査区溝118
(南から)
- P L - 28 山口 4 次 G・H調査区全景 (東から)・
山口 4 次 G調査区土坑 3 (南から)・山
口 4 次 H調査区溝 6 (西から)
- P L - 29 山口遺跡出土遺物
- P L - 30 山口遺跡出土遺物
- P L - 31 山口遺跡出土遺物
- P L - 32 山口遺跡出土遺物
- P L - 33 山口遺跡出土遺物
- P L - 34 山口遺跡出土遺物
- P L - 35 山口遺跡出土遺物
- P L - 36 山口遺跡出土遺物
- P L - 37 山口遺跡出土遺物
- P L - 38 山口遺跡出土遺物
- P L - 39 山口遺跡出土遺物
- P L - 40 山口遺跡出土遺物
- P L - 41 山口遺跡出土遺物
- P L - 42 山口遺跡出土遺物
- P L - 43 山口遺跡出土遺物
- P L - 44 山口遺跡出土遺物
- P L - 45 川辺 1 次調査区全景 (西上空から)・川
辺 1 次北側調査区上面遺構全景 (北から)・
川辺 1 次南側調査区上面遺構全景 (西か
ら)
- P L - 46 川辺 1 次掘立柱建物 1 (北から)・川辺
1 次掘立柱建物 2 (東から)・川辺 1 次
掘立柱建物 3 (東から)・川辺 1 次掘立
柱建物 4 (北から)・川辺 1 次掘立柱建
物 5 (北から)
- P L - 47 川辺 1 次掘立柱建物 6 (北から)・川辺
1 次掘立柱建物 7 (北から)・川辺 1 次
掘立柱建物 8 (北から)・川辺 1 次掘立
柱建物 9 (東から)
- P L - 48 川辺 1 次溝403・410・411・415 (東から)・
川辺 1 次溝465 (東から)・川辺 1 次溝490
(東から)
- P L - 49 川辺 1 次土壇墓362 (北から)・川辺 1 次
土壇墓365 (南から)・川辺 1 次土壇墓375
(東から)
- P L - 50 川辺 1 次北側調査区下面遺構全景 (北か
ら)・川辺 1 次北側調査区下面遺構南半
部全景 (南から)・川辺 1 次南側調査区
下面遺構全景 (西から)
- P L - 51 川辺 1 次竪穴住居17 (西から)・川辺 1
次竪穴住居17炭・焼土検出状況 (西から)・
川辺 1 次竪穴住居495 (南から)
- P L - 52 川辺 1 次溝44・48 (北から)・川辺 1 次
溝48セクションベルト (南から)・川辺
1 次溝357・12 (南から)・川辺 1 次溝357
セクションベルト (南から)
- P L - 53 川辺 1 次溝465・468・469 (東から)・川
辺 1 次溝467・490 (東から)・川辺 1 次
土坑354半裁状況 (南東から)
- P L - 54 川辺 1 次遺構536 [方形周溝墓] (東から)・
周溝部土器出土状況 (上から)・周溝部
土器出土状況 (南から)・北側周溝南壁
土層 (北から)
- P L - 55 川辺 2 次調査区全景 (西上空から)・川
辺 2 次 A 調査区全景 (西から)
- P L - 56 川辺 2 次 A 調査区東半部全景 (西から)・
川辺 2 次 A 調査区土坑26 (南から)・川
辺 2 次 A 調査区土坑31 (南から)
- P L - 57 川辺 2 次 A 調査区竪穴住居 1 (東から)・
川辺 2 次 A 調査区竪穴住居 1 竈部分
(北西から)・川辺 2 次 A 調査区竪穴住
居 2 (西東から)
- P L - 58 川辺 2 次 A 調査区竪穴住居 4 (北から)・
同上竪穴住居 4 (東から)・同上竈断割
状況 (西から)
- P L - 59 川辺 2 次 B 調査区東半部全景 (西から)・
川辺 2 次 B 調査区土坑35・39 (西から)・
川辺 2 次 B 調査区土坑37 (南東から)

- P L - 60 川辺 2 次 C 調査区上面遺構全景（東から）・川辺 2 次 C 調査区中央掘立柱穴群（南から）・川辺 2 次 C 調査区下面遺構全景（東から）
- P L - 61 川辺 2 次 C 調査区掘立柱建物 1（南から）・同上柱穴 222 断割状況（西から）・川辺 2 次 C 調査区掘立柱建物 2（東から）
- P L - 62 川辺 2 次 C 調査区中央竪穴住居群（東から）・川辺 2 次 C 調査区竪穴住居 572（南東から）・川辺 2 次 C 調査区竪穴住居 558（北から）
- P L - 63 川辺 2 次 C 調査区竪穴住居 558 セクションベルト（北東から）・川辺 2 次 C 調査区竪穴住居 611（南から）・川辺 2 次 C 調査区竪穴住居 612（南から）
- P L - 64 川辺 2 次 C 調査区竪穴住居 579・586（北から）・同上（東から）・竪穴住居 579 炉土層（北東から）
- P L - 65 川辺 2 次 C 調査区竪穴住居 586 セクションベルト（北東から）・竪穴住居 586 炉跡断割状況（東から）・川辺 2 次 C 調査区竪穴住居 587（北から）
- P L - 66 川辺 2 次 C 調査区竪穴住居 575（西から）・川辺 2 次 C 調査区竪穴住居 361（南西から）・同上竈・煙道部（西から）
- P L - 67 川辺 2 次 C 調査区竪穴住居 480（南東から）・同上鉄斧出土状況（北から）・川辺 2 次 C 調査区竪穴住居 517（東から）・川辺 2 次 C 調査区竪穴住居 149（北から）
- P L - 68 川辺 2 次 C 調査区土墳墓 591（西から）・川辺 2 次 C 調査区土坑 425（北から）・川辺 2 次 C 調査区溝 359・368（東から）
- P L - 69 川辺 2 次 D 調査区全景（東から）・川辺 2 次 F 調査区溝 67・68・71（東から）・川辺 2 次 F 調査区溝 495（東から）
- P L - 70 川辺 3 次 1 調査区上面遺構全景（西から）・川辺 3 次土坑 17（西から）・川辺 3 次土坑 30（北から）
- P L - 71 川辺 3 次土坑 45（東から）・川辺 3 次 1 調査区下面遺構全景（西から）・川辺 3 次竪穴住居 44（南から）・同上・遺物出土状況（南から）
- P L - 72 川辺 3 次溝 21・22（南西から）・川辺 3 次土坑 44（南西から）・川辺 3 次土墳墓 123 の遺物 1 ～ 3 出土状況（北西から）・同遺物 4 ～ 6 出土状況（南東から）
- P L - 73 川辺 3 次 2 調査区全景（西から）・川辺 3 次 3 調査区全景（西から）・川辺 3 次掘立柱建物 1（南から）・川辺 3 次掘立柱建物 2（南から）
- P L - 74 川辺 3 次竪穴住居 68（南から）・同上・竈部分（南から）・川辺 3 次竪穴住居 90（南から）
- P L - 75 川辺 3 次竪穴住居 94（南から）・川辺 3 次溝 54（南東から）・同上底部遺物出土状況（南西から）
- P L - 76 川辺 3 次土坑 101 遺物出土状況（南から）・川辺 3 次土坑 68-4 遺物出土状況（南から）・川辺 3 次土坑 137 遺物出土状況（南から）
- P L - 77 川辺 3 次土坑 129 検出状況（南から）・川辺 3 次土坑 129 須恵器高坏検出状況（南から）・川辺 3 次土坑 129 f 層検出状況（南から）
- P L - 78 川辺 1 次基本層序北側調査区東壁（K 4 区 g 13 付近）・川辺 1 次基本層序南側調査区北壁（J 4 区 s 19 付近）・川辺 2 次基本層序 A 調査区南壁（J 4 区 e 22 付近）・川辺 2 次基本層序 B 調査区南壁（I 4 区 r 20 付近）・川辺 2 次基本層序 C 調査区北壁（I 4 区 f 21 付近）・川辺 2 次基本層序 C 調査区南壁（H 5 区 w 8 付近）・川辺 3 次基本層序 1 調査区北壁（J 4 区 f 17 付近）・川辺 3 次基本層序 2 調査区東壁（J 4 区 j 18 付近）
- P L - 79 川辺遺跡出土遺物
- P L - 80 川辺遺跡出土遺物
- P L - 81 川辺遺跡出土遺物
- P L - 82 川辺遺跡出土遺物
- P L - 83 川辺遺跡出土遺物

P L - 84 川辺遺跡出土遺物
P L - 85 川辺遺跡出土遺物
P L - 86 川辺遺跡出土遺物
P L - 87 川辺遺跡出土遺物
P L - 88 川辺遺跡出土遺物
P L - 89 川辺遺跡出土遺物
P L - 90 川辺遺跡出土遺物
P L - 91 川辺遺跡出土遺物
P L - 92 川辺遺跡出土遺物
P L - 93 川辺遺跡出土遺物
P L - 94 川辺遺跡出土遺物
P L - 95 川辺遺跡出土遺物
P L - 96 川辺遺跡出土遺物
P L - 97 川辺遺跡出土遺物
P L - 98 川辺遺跡出土遺物
P L - 99 川辺遺跡出土遺物
P L - 100 川辺遺跡出土遺物

第Ⅰ章 序 章

第1節 調査の経緯と経過

和歌山県では、県道和歌山貝塚線の道路改良工事を実施する事を決めていたが、その工事予定地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である山口遺跡（01・142）と川辺遺跡（01・145）に該当していた。そのため、遺跡の概要確認のための調査が両遺跡とも実施された。以下、その経過について遺跡ごとに概観する。

山口遺跡については、県道和歌山貝塚線の道路敷設予定地南北300mの範囲で、14トレンチを設定し、計620㎡の試掘確認調査を、和歌山県教育委員会からの依頼により、和歌山土木事務所と契約のうえ、平成5年に当文化財センターが行った。その結果、弥生時代後期～近世の包含層2層と遺構面の存在を確認した。この試掘結果を受けて、試掘調査範囲内の道路敷設予定地およびその西側に隣接する代替地の記録保存を目的とした発掘調査の実施が決定し、当文化財センターが平成6年6月～7年3月まで調査を実施した（以下「山口遺跡」）。

その後、県道和歌山貝塚線と県道粉河加太線の接続、およびそれに伴う県道粉河加太線の拡幅することとなり、それらについても当文化財センターが平成10年度～平成12年度の間に4度にわたり、発掘調査を実施した（「山口1・2・3・4次」）。

平成7～9年度の間断期間は存在したものの、以上のように4年度、5次にわたる山口遺跡の発掘調査を当文化財センターで実施した。これらの調査面積は延べ約7,500㎡に及ぶ。

川辺遺跡については、昭和62・63、平成3・4年度に一般国道24号線バイパス線敷設工事に先立ち、発掘調査が実施されており、遺構の存在が認知されていた。しかし、県道和歌山貝塚線の道路敷設予定地のうち、国道24号線バイパス線から離れている範囲については和歌山県教育庁文化財課が平成9年12月に4トレンチ、362㎡の試掘確認調査を実施した。その結果、弥生時代後期・飛鳥時代・中世に帰属する遺物の出土と竪穴住居や溝などが検出される遺構面1ないしは2面の存在を確認した。この試掘結果をうけて、道路敷設予定地のうち約7,400㎡の範囲が、発掘調査の対象地となった。この調査対象地についても、平成9・12・13年度の3度にわたり、当文化財センターが記録保存のための発掘調査を実施した（「川辺1・2・3次」）。

以上のように、県道和歌山貝塚線および県道粉河加太線の道路改良工事に伴い、山口・川辺の両遺跡をあわせて計8次、約15,000㎡の発掘調査が実施され、遺物収集箱（28ℓ）約200箱の遺物を採取した。

出土遺物等整理については、各発掘調査事業において、大半の図面・現場写真の整理、出土遺物の洗浄を完了していた。そして、平成15年度に出土遺物の注記・接合・復原、一部の実測・トレース、平成16年度に実測・トレース・遺物写真撮影を実施したほか、報告書作成作業を2年次にわたり行い、本書の刊行する運びとなった。

表 1 山口・川辺遺跡 発掘調査および整理事業工程表

	平成 5 年度		平成 6 年度		平成 9 年度		平成 10 年度		平成 11 年度		平成 12 年度		平成 13 年度		平成 14 年度		平成 15 年度		平成 16 年度																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	

第2節 位置と環境

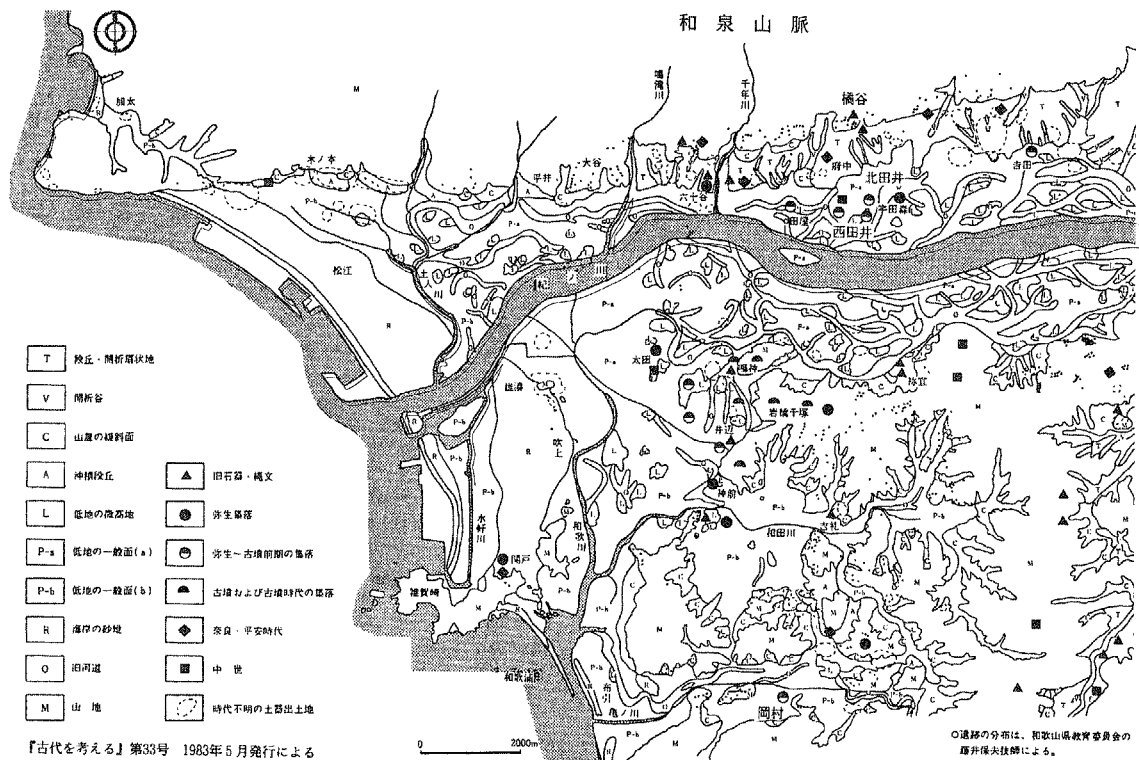
1. 地理的環境

山口遺跡および川辺遺跡はともに紀ノ川下流右岸に所在し、北側の和泉山脈、南側の紀ノ川の間に位置する。行政区画上では、和歌山市の北東部、岩出町との境近くに所在している。

このうち山口遺跡は和歌山市里および谷集落周辺に広がる遺跡であり、地形的に言えば東西に連なる和泉山脈の麓に近く、山峡から南下して流れる雄ノ山川が、段丘に造り出した扇状地に立地しており、標高は13～30mほどである。現況は、先に述べた集落のほかは大部分が水田もしくは畑地となっている。

川辺遺跡は山口遺跡の南、紀ノ川により近いところに所在しており、周知されている範囲は東西約1.2kmと広範囲に及ぶ遺跡である。

地形的には沖積地に相当する部分であるが、詳しく見ればこの辺りの沖積地は地理的分類の沖積Ⅲ面に相当するものである。この沖積Ⅲ面上に北側の和泉山脈から南流して紀ノ川に注ぐ河川および自然流路が扇状地を造り出しており、川辺遺跡はこの扇状地の末端部分もしくはその延長上に位置するものである。したがって沖積地の中ではやや微高地となっている。逆に言えば、川辺遺跡は低湿地を避け沖積地の微高地に形成された集落ということができよう。現況は一部が現在の集落となっているが、大部分は水田で、中央を一般国道24号バイパス線が横断している。



第1図 周辺の自然地形

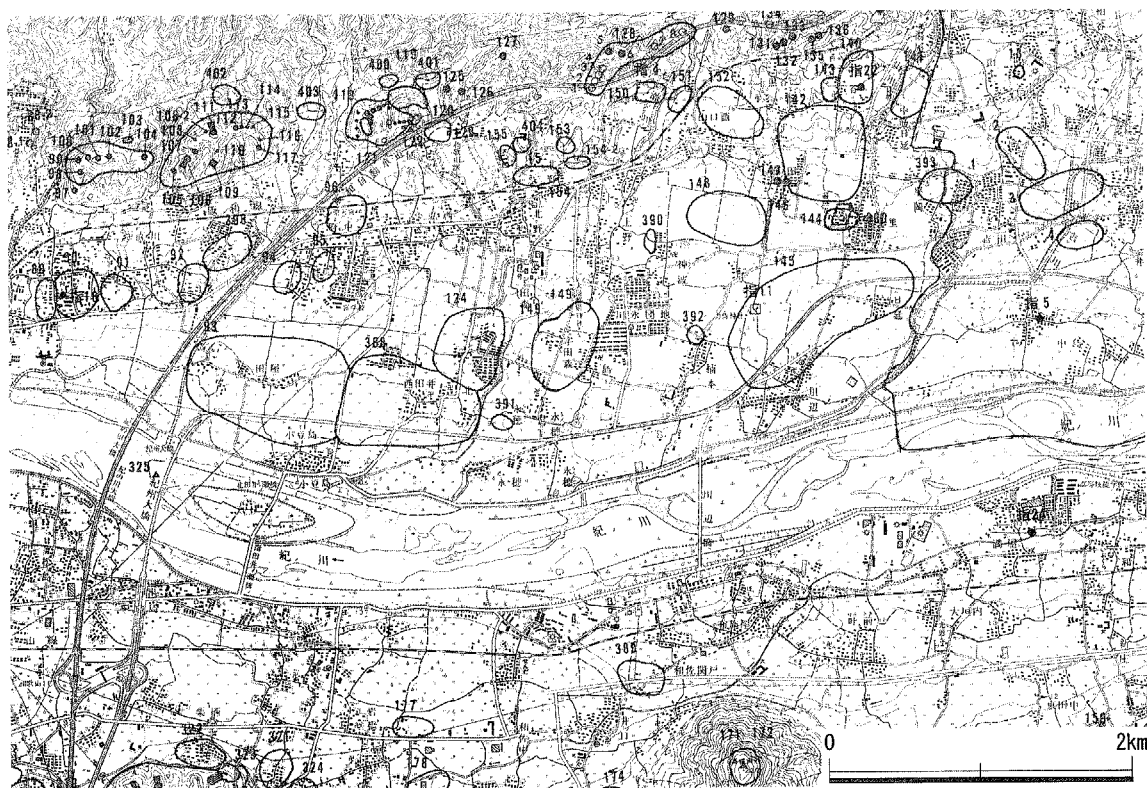
2. 歴史的環境

先に述べたように両遺跡は現在の行政区画で言う和歌山市と岩出町の境近くに位置しているが、古代の区画で言えば名草郡の東部、那賀郡との境付近に相当する。

山口遺跡については、ほぼ現在の和歌山市山口地区がそのまま相当するものと思われるが、川辺については古代から中世にかけては現在の川辺集落のほか、西隣りにあたる楠本・神波・上野一帯を含む地域の総称であり、国衙領田井郷の内であったと考えられている。

この川辺の名称が記録上に現れるのは古く、「日本書紀」安閑天皇二年五月（536年か）の条に諸国への屯倉設置のことが記されているが、その中に紀国の「河辺屯倉」が見えており、おそらくこの「河辺」が先に述べた広義の川辺を指すものであり、その所在地については特定し難いがこの付近に屯倉が設置されていたものであろう。このことから川辺付近は紀ノ川に近いところにあってもその氾濫、湿地化を免れえる地で、古代より安定していたことが窺えよう。

同じ古代でもやや時代は下るが、この付近にとって重要な点は南海道との関連であろう。いうまでもなく南海道とは奈良時代以降整備された五畿七道一つで、平城京を起点として紀ノ川沿い



91.高井遺跡
93.田屋遺跡
98～104.北山古墳群
105～117.直川八幡山古墳群
118.八王子山古墳群
119～121.橋谷Ⅰ～Ⅲ遺跡
122.橋谷銅鐸出土地点

123.弘西遺跡
124.北田井遺跡
128.上野古墳群
129～139.山口古墳群
140.山口廃寺
142.山口遺跡
145.川辺遺跡

149.宇田森遺跡
150.上野廃寺
325.紀の川銅鐸出土地点
380.山口御殿跡
388.西田井遺跡
393.吉田遺跡
398.府中Ⅳ遺跡

第2図 周辺の遺跡 (S=1/50000)

を西進し和歌山市加太を経て淡路・四国へと通じる古代の官道である。そのルートについては、確定したものではないが、当地付近では山口遺跡内の南側、現在の山口小学校および遍照寺辺りを通り、紀伊国府の所在していた府中へとほぼ直進して西走していたものと考えられている。また官道に伴う駅家についても名草駅がやはり遺跡内の東側にあたる里集落付近に置かれていたという説が有力となっている。

この南海道については、平城京から平安京への遷都に伴いルートの変更があり、新たに大阪南部から山越えて紀伊へと入るコースが設定されるようになる。この山越えルートが山口遺跡のすぐ北、雄ノ山峠を越えてくる道であり、弘仁二年（811）名草駅が廃止されるとともに翌年新たに萩原駅が設置される。この萩原駅の所在地については諸説あり確定したものではないが、遺跡の北、現在の山集落あたりに設けられたと推定されている。つまり山口遺跡は、このルート改変に伴って紀伊国の入り口に位置することになったわけである。

さらに時代が下り古代末から中世にかけて熊野詣が盛んになると、雄ノ山峠を越えてから西折するのではなく、まっすぐ南下し、川辺へと向かうコースの利用が頻繁となる。いわゆる熊野街道として知られる道である。街道沿いには王子社が設けられるが、建仁元年（1201）の「後鳥羽院熊野御幸記」にも「次参山口王子、次参川辺王子云々」とあり山口から川辺へのルートを辿っていたことが知られる。また川辺からは紀ノ川を渡り対岸の吐前村へと向かうわけで、川辺は渡河地としても重要な地点であった。以上述べたように、当地周辺は古代より交通の要衝であったということが言えよう。

周辺の遺跡について述べれば、当地周辺は県下でも遺跡の多い地域として知られており、宇田森遺跡・藤田遺跡・吉田遺跡・中筋日延遺跡など弥生時代から奈良時代の集落跡が密度濃く分布している。

宇田森遺跡は本遺跡の南西約2 kmほどに位置しており、昭和41年から43年にかけて発掘調査が実施されており、弥生時代中期の竪穴式住居7棟、溝2条、弥生時代後期の溝3条などが検出されている。とりわけ第1次調査のピット12およびA溝出土土器は、県下の弥生土器遍年の基準資料となっている。吉田遺跡は本遺跡の東約1 kmほどに位置し、昭和44年から45年にかけて発掘調査で、弥生時代中期の竪穴式住居、・壺棺・方形周溝墓、古墳時代から奈良時代にかけての掘立柱建物など多くの遺構が検出されている。

また、山口遺跡のすぐ西側には藤田古墳が所在している。この古墳は直径15mほどの円墳で、主体部は竪穴式石室であり、土器とともに鉄刀が出土したと伝えられている。丘陵上に古墳が築造されることの多い紀ノ川流域にあって、本古墳は平地に近い立地を示し、かつ5世紀代の古墳として注目されよう。そのほか山口遺跡の北東には飛鳥時代の寺院として知られる山口廃寺が所在している。

3. 既往の調査

山口・川辺遺跡については、すでに発掘調査が過去に実施されているので、それらについてここで概観したい。

A. 山口遺跡

周知の埋蔵文化財包蔵地としての山口遺跡自体では、発掘調査は行われていないものの、隣接する里遺跡ならびに山口御殿跡では和歌山市教育委員会ならびに（財）和歌山市文化体育振興事業団によりすでに、計6次にわたる発掘調査が実施されている。その第5次調査を担当報告した前田氏によりその内容が山口遺跡と同様の性格を帯び、それらの調査を山口遺跡の発掘調査として包括するという立場をとられている。本書ではそれに従い、以下にそれらの各調査の成果についてここで触れておく。

第1次調査 昭和57年度に和歌山市教育委員会により山口小学校グラウンド整備工事に伴い実施された。調査は、7トレンチ、113㎡実施され、近世の山口御殿周濠の東肩部を検出したようである。包含層からは2次的堆積とみられるものの弥生土器のほか、須恵器、格子目タタキの平瓦が出土した。

第2次調査 第1次調査と同じく昭和57年度に和歌山市教育委員会により校舎改築に伴い、680㎡の調査が実施された。近世と古墳時代の遺構面2面が確認されている。近世の遺構面では、石組井戸、ピット列が検出され山口御殿関連遺構と考えられている。古墳時代の遺構面では、溝状遺構が検出されている。出土遺物には、弥生土器、須恵器、陶磁器、宋銭、寛永通宝、唐草文軒平瓦等が認められている。

第3次調査 昭和59年度に和歌山市教育委員会により幼稚園園舎建築工事に伴い、約300㎡の調査が実施された。3面の遺構面が確認され、各遺構面で古墳時代、奈良～中世、中世～近世の溝が検出されている。出土遺物には、サヌカイト片、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、円筒埴輪、フイゴ羽口、紡錘車などが認められている。

第4次調査 昭和62年度に和歌山市教育委員会により山口小学校体育館建設工事に伴い、約800㎡の調査が実施された。4つの遺構面が検出され、近世の山口御殿関連とみられる周濠、礎石、瓦敷き溝、埋桶等の諸遺構、時期不明の溝、古墳～奈良時代の遺構面、弥生時代後期～古墳時代初頭の溝、井戸、土坑と古墳時代後期の土坑などが検出されている。

第5次調査 昭和62年度に山口小学校プール建設に伴い和歌山市教育委員会により約78㎡の調査が実施され、弥生時代の溝、古墳時代後期の掘立柱建物などが検出された。包含層から弥生時代後期～古墳時代初頭の土器群が出土し、報告書で型式学的編年が試みられている。

第6次調査 平成10年度に山口小学校敷地拡張に伴い財団法人和歌山市文化体育振興事業団により3調査区、約214㎡の発掘調査が実施された。3面の遺構面が検出され、近世の山口御殿関



第3図 山口遺跡・川辺遺跡調査区位置図 (S=1/5000)

連遺構、中世～近世末の遺構面、古墳時代に比定される水田区画などが検出されている。

以上のように、里遺跡や山口御殿跡なども含めた山口遺跡では弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代後期、奈良～平安、中世、近世と各時代の遺物が採取されているが、そのうちでも弥生時代後期～古墳時代初頭と近世の紀州徳川家別宅である山口御殿跡の遺構・遺物群が顕著である。

B. 川辺遺跡

川辺遺跡は、一般国道24号バイパス線が遺跡を横断しており、その建設工事に伴い昭和62・63、平成3・4年度の4箇年をかけて9区、幅30m、延長1,021m、約30,641㎡の発掘調査が当文化財センターにより実施され、調査では1～3面の遺構面が検出されている。Ⅰ区では、上面で中世の掘立柱建物、木棺墓が、下面では飛鳥時代の方形竪穴住居、掘立柱建物を中心に、弥生時代後期の溝等が検出されている。飛鳥時代の掘立柱建物は、大形の方形掘形をもつ総柱形式の建物である。Ⅱ区では中世の遺構は検出されず、上面で近世の、下面で弥生～奈良時代の遺構が検出されている。Ⅲ区では遺構面は1面のみの検出で、奈良～平安時代の遺物とともに溝で区画された道路状遺構が検出されている。Ⅳ区では上面で古墳時代後期ないしは飛鳥時代の溝、下面で縄文時代晩期の可能性のある竪穴住居2棟が検出された。Ⅴ区は、今回の調査地と接続する箇所、上面では飛鳥時代初頭の溝、下面では弥生時代後期後半～古墳時代初頭の溝が検出されている。Ⅵ区では遺構面は3面検出されているが、層位的に整理された報告がなされていないものの、中世の石組井戸、石敷き土坑、土坑、古墳時代後期～飛鳥時代の掘立柱建物、溝のほか、最下面では縄文時代晩期の溝、弥生時代後期の溝などが検出されている。包含層からは遮光器土偶腕部が出土している。Ⅶ区では上面で飛鳥時代や中世の溝のほか、中世には木棺墓・石組井戸なども検出された。木棺墓には、土師器皿のほか鉄剣が副葬されていた。下面では、落ち込み状遺構から多数の縄文土器が出土し、そのなかには東日本の大洞式に属すものも含まれる。Ⅷ区では、縄文時代晩期の深鉢を使用した土器棺墓が6基検出されたほか、弥生時代中期の方形周溝墓1基、古墳時代ないしは飛鳥時代の竪穴住居1棟などのほか、弥生時代から中世の溝を検出している。また、Ⅲ区同様の奈良～平安時代の溝に区画された道路状遺構も検出されている。Ⅸ区では、弥生時代中期の竪穴住居1棟のほか道路状遺構や掘立柱建物などが検出された。

このほかに、平成13年度には財団法人和歌山市文化体育振興事業団により遺跡の実態解明を目的とした約192㎡の発掘調査が実施されている。遺構面は1面で、弥生時代中期から近世の遺構が同一面で検出されている。弥生時代中期後半とみられる円形の竪穴住居が2棟検出され、ともに楕円形の中央土坑の両側に柱穴をもつ松菊里系住居である。このほかに住居と同時期の木棺墓とみられる土坑、近世の畦畔状遺構を検出している。

以上のように、川辺遺跡では縄文時代晩期以降の各時代の遺構が多数検出されており、大規模な複合遺跡の様相を呈すとみられる。

第3節 調査の方法

1. 発掘調査

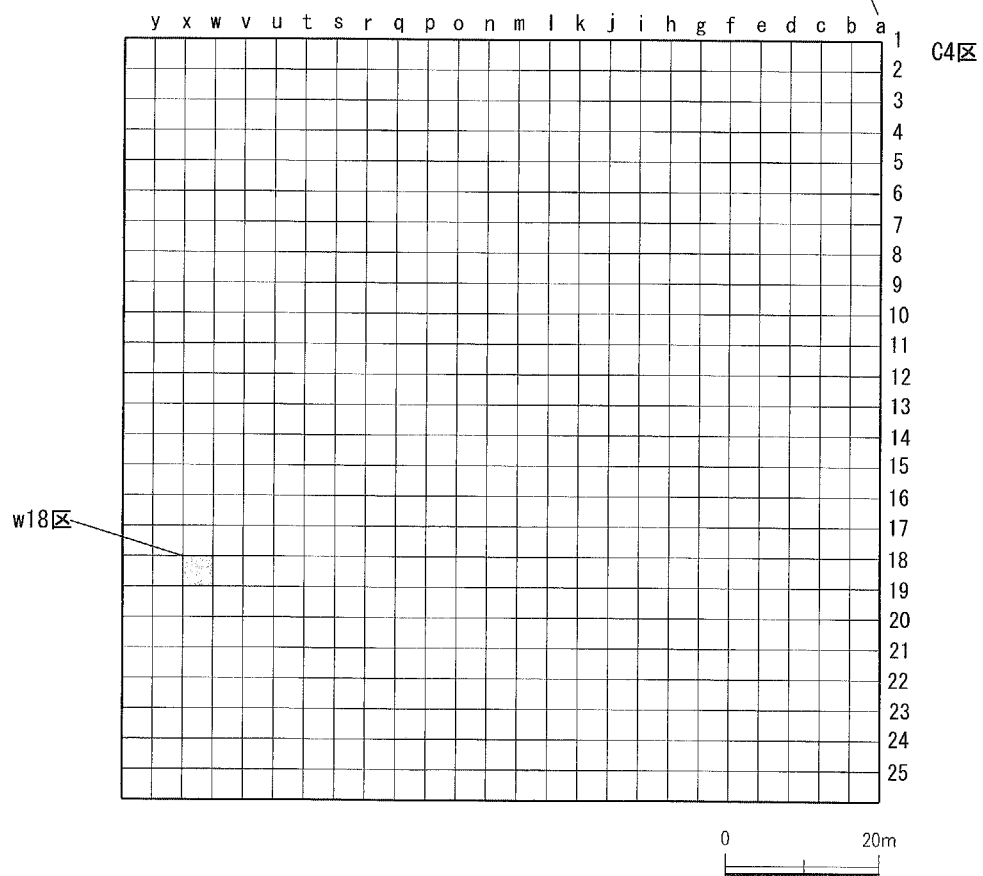
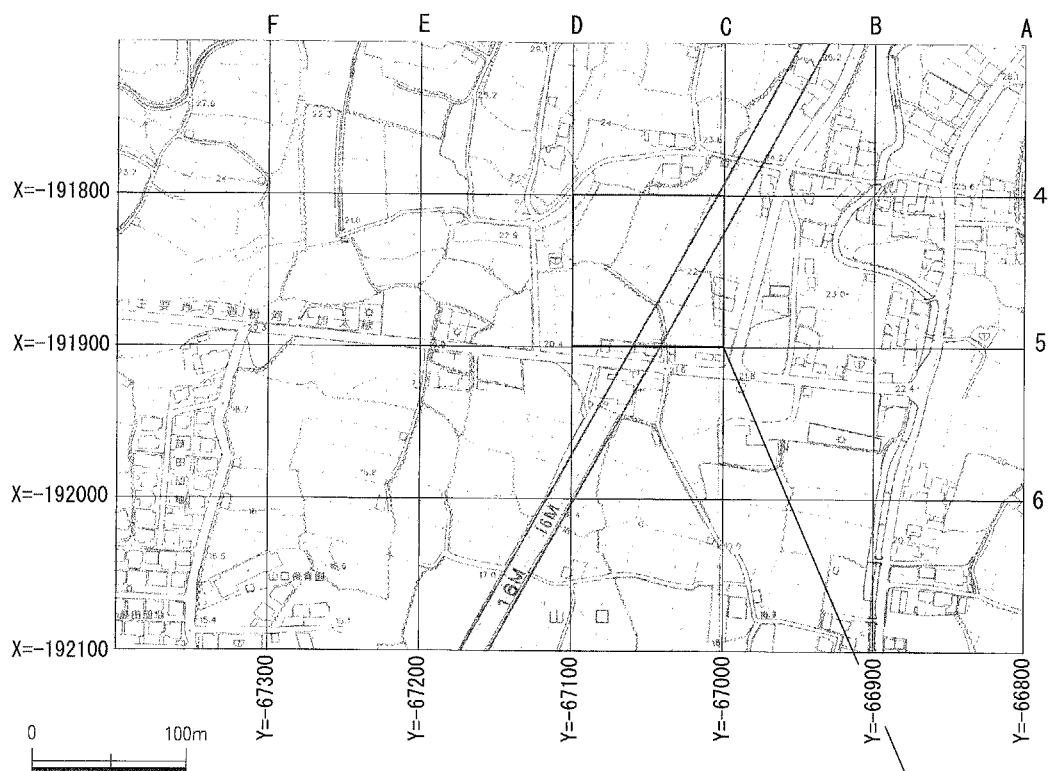
調査区の設定は、基本的には里道等により分断された調査区ごとに調査区名を付与しているが、その方法は各調査次ごとによって異なり、統一されていない。その調査区名称等は、各遺跡の基本層序の項ならびに各調査次の項を参照していただきたい。ただし、山口遺跡2～4次調査については調査区名が連続しており、調査区が1箇所のみであった山口1次調査においては調査区名は付与されていないなど注意を要する。

次に、地区設定についてであるが、山口遺跡の地区設定には、2つの方法が使用されている。まず、平成6年度に実施した山口遺跡では、調査区北東付近の平面直角座標系（日本測地系）第VI系 $X=-191900\text{m}$ 、 $Y=-67068\text{m}$ を基点として設定し、その基点から西方向に（A～Z 続けてア～サ）、南方向に（1～67）一辺4mの正方形区画（例10C区や60カ区など）を設定し、この区画に従い包含層等の遺物の採取を行っている。ただし、後述するようにこの区画は当該調査のみに適用される性格の地区設定であるため、本報告では使用していない。ただし、出土遺物の管理には調査当時のままであるため、包含層等の出土遺物を確認する際には注意を要する。

平成10～12年度に実施した山口遺跡1～4次調査では、上記の地区設定と異なり周知の埋蔵文化財包蔵地である山口遺跡を網羅する範囲の北東に任意の基点を設定し、この基点から地区設定を行っている。基点は、平面直角座標系（日本測地系）第VI系 $X=-191.500\text{m}$ 、 $Y=-66.800\text{m}$ に設定し、西方向（A～）と南方向（1～）とにそれぞれ一辺100mの正方形区画（A1区～）を大区画として設定した。さらに、この大区画を北東隅から25分割した一辺4mの正方形区画（a1区～）を小区画として設定した。包含層や遺構の遺物の採取は、この小区画を基本として行った。この結果、山口遺跡1～4次調査の調査区は、B～D4区に位置することとなった。ちなみにこの地区設定の場合、平成6年度の山口遺跡の調査区はC5・D5・D6区に位置することとなる。なお、以上のように山口遺跡では異なる地区設定方法を行っているが、ここでは第4図で後者の地区設定のみ図示しておく。

調査コードは、平成6年度の山口遺跡が「94-01・142」で、そのうち後述するA・B地区が「94-01・142・R」、代替地が「94-01・142・D」と標記している。このほか山口1次が「97-01・142」、山口2次が「98-01・142」、山口3次が「99-01・142」、山口4次が「00-01・142」である。調査記録類や出土遺物は、この調査コードにより管理している。

川辺遺跡の地区設定には、周知の埋蔵文化財包蔵地である川辺遺跡を網羅する範囲の北東に任意の基点を設定し、それに基づいて地区設定を行った。基点は、平面直角座標系（日本測地系）第VI系の $X=-192.500\text{m}$ 、 $Y=-66.500\text{m}$ に設定し、この基点から山口遺跡1～4次調査と同様に西方向（A～）と南方向（1～）とにそれぞれ一辺100mの正方形区画（A1区～）を大区画と



第4図 山口遺跡区画図

して設定した。さらに、この大区画を北東隅から25分割した一辺4mの正方形区画（a1区～）を小区画として設定した。包含層や遺構の遺物の採取は、この小区画を基本として行い、この地区設定は1～3次調査まで踏襲している。この結果、今回の調査区は大区画G4・H3・H4・I2・I3・I4・J2・J3・J4区に位置することとなった。

調査コードは、川辺1次が「97-01・145」、川辺2次が「00-01・145」、川辺3次が「01-01・145」で、この調査コードにより記録類・出土遺物を管理している。

調査に際しては、試掘・確認調査の結果に基づき客土・耕作土等は重機により掘削・排土を行い、包含層以下については人力により掘削した。検出した遺構の遺構番号は、遺構の種別を問わず、各遺跡各調査次ごとに調査区に係らず、通番で1～付与している。ただし、掘立柱建物については、建物を構成する柱穴に遺構番号を付与し、いくつかの柱穴をまとめて建物と認識しているため、各調査次ごとに「掘立柱建物1」から順次再度番号を付与することとした。

2. 出土遺物整理

両遺跡あわせて計8次、約14,900㎡の調査の結果、遺物収集箱で約196箱の出土遺物が採取された。調査と併行して応急整理作業により大半の水洗は行っていたが、報告書刊行に際して、以下の作業を行った。

登録作業を全出土遺物を対象として行い、遺物収集袋単位で管理している。注記は、遺構出土遺物全量と遺構面直上の包含層を主体とする層位からの出土遺物を対象に実施し、先述の調査コードと遺物登録番号のみを遺物に記入した。接合は注記を行った遺物を対象に遺物登録番号ごとに行い、その後層位ごと、遺構ごと、小区画ごとに各々実施した。接合により遺構や包含層の内容が把握できる遺物や特徴的な遺物を検討した上で抽出し、実測・復原・写真撮影等の各作業を行った。このほかに、現地調査での記録類の整備を行い、遺構および出土遺物をあわせて検討した上で、報告書の版下作成、トレース、本文の作成を実施した。なお、現地調査での記録類の整備に際して、記録写真の一部についてはカラー写真の退色・劣化・損傷から未然に保護し、調査資料の長期保存を目的として、コダック photoCD 方式によるスキャニングを行いデジタル化を実施し、保管している。

このような作業は、平成15・16年度の2年度にかけて実施し、これらの作業を経た出土遺物は、報告書掲載遺物、実測図作成遺物、未抽出の遺物収納袋の遺物に分別したうえで遺物収納箱に再収納した。また調査記録類やこれらの作業過程で作成した遺物カードやコンテナ台帳・実測図台帳などの台帳類や写真類等は、当センター岩橋整理事務所で保管している。ただし、出土遺物については報告書作成後に和歌山県教育委員会に移管する予定である。

第Ⅱ章 山口遺跡の調査成果

第1節 基本層序

山口遺跡では、基本的に遺構検出面は2～3面存在する。今回の調査地は直線距離で、南北300m以上の距離を測り、現況で標高が15～21mと調査地に比高差であるため、土層の堆積状況が異なるが、Ⅰ：耕作土・床土、Ⅱ：旧耕作土・床土、Ⅲ：中世遺物包含層、Ⅳ：飛鳥時代以降の遺物包含層、Ⅴ：庄内併行期ないしは飛鳥時代以前の堆積層（地山）の5つの層序に基本的に大別される。ただし、各対応層の内容や位置付けが調査区によっては異なるため、注意を要する。以下、南側の調査区から順次概観する。

山口遺跡でA地区では70層が飛鳥時代の遺物包含層であるⅣ対応層で、その下層では庄内併行期～飛鳥時代の遺構、その上面では平安時代以降の遺構が検出されている。B地区でも9層がⅣ対応層となり、下面で飛鳥時代の遺構が、上面で近世の遺構が検出された。そのため、山口遺跡A・B・代替地の調査区では純粋なⅢ対応層は確認されないが、飛鳥時代以降近世以前の堆積層である69・53層などがⅢ対応層に該当すると認識される。

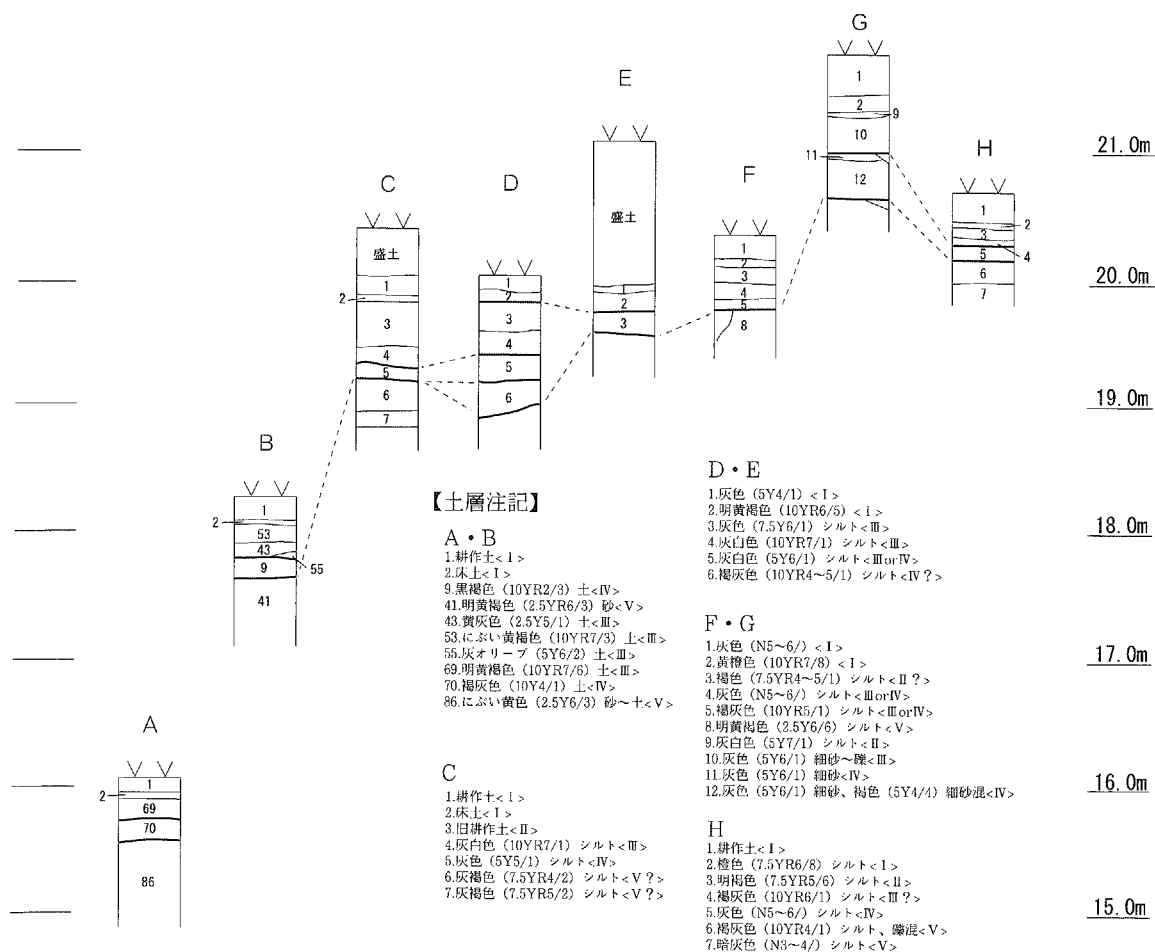
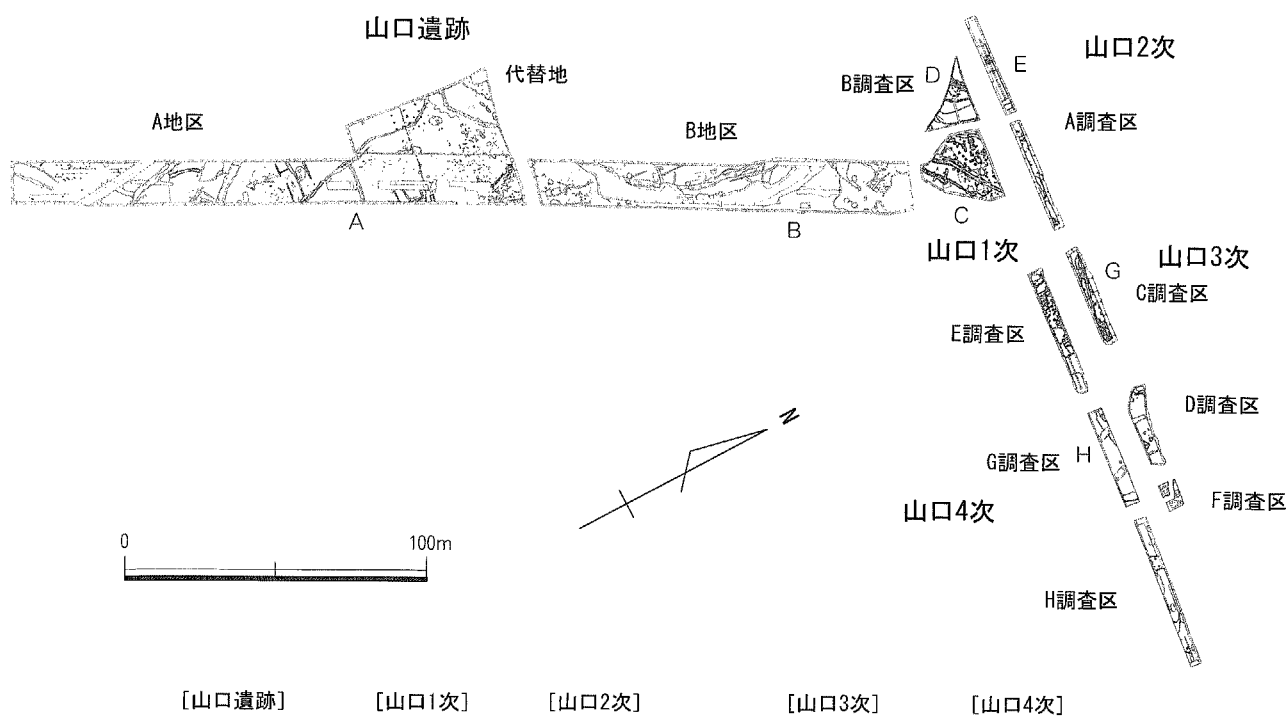
山口1次では、4層がⅢ対応層、5層がⅣ対応層となる。しかし、5層は調査区内全体広がる状況でなく、一部での検出のみのようで、山口遺跡B地区には及ばない。なお、山口1次では基本的に最終遺構面となる飛鳥時代の遺構のみを調査対象としている。

山口2次では、B調査区では遺構検出面3面確認しており、3層上面、5層上面、6層上・下面で最終遺構面で遺構の検出を行った。3・4層の遺物の出土はなく時期は不明だが、4層はⅢ対応層で、5層上面が中世に、6層はⅣ対応層になる可能性があり、最終遺構面はそれ以前に帰属する。A調査区ではⅣ対応層が不在で、3層上面と最終遺構面の遺構検出面は2面となる。

山口3次では、遺構検出面は2面であった。C・D調査区とE調査区で状況が異なる。E調査区では4・5層がⅢ・Ⅳ対応層となり中世と飛鳥時代の遺構がその上下面で検出された。これに対し、C・D調査区ではⅢ対応層下面では飛鳥時代～中世前半までの遺構を、Ⅲ対応層上面では中世後半～近世の遺構が検出されており、純粋なⅣ対応層は確認されない。なお、11・12層が相対的にはⅣ対応層に該当するが、他のⅣ対応層よりも堆積開始は遅れる模様である。

なお、山口4次では遺構密度が低く、調査区より東側へ谷状地形となるため、堆積状況が他調査区と異なり、詳細は不明である

山口1～4次では、調査区の中央に所在する県道粉河加太線を挿んで土層の堆積状況がかなり異なるものの、基本的には飛鳥時代（一部奈良時代）と中世の遺構面2面が存在する。この状況は山口遺跡B地区も近い様相にあるのに対し、山口遺跡A地区・代替地では、飛鳥時代と庄内併行期の遺構とが同一面で検出され、中世の遺構は基本的に不在で、同一遺跡だが遺構の帰属時期が異なる。



第6図 山口遺跡土層柱状図 (S=1/60)

(土層注記末尾の<I~V>は対応層名)

第2節 山口遺跡（94-01・142）の調査成果

1. 遺 構

当該調査区は幅16m、延長距離は約300mを測る。調査区がこのように長いことから、調査区を横断する農道を挟んで南側（延長約180m）をA地区、北側（延長約120m）をB地区と仮称して調査を進めた。また、A地区北端部で西側に張り出した部分があるが、これは道路建設に伴い立ち退きを余儀なくされた医院の代替地であり、この部分についても今回の調査区に含まれている。調査区の現況はすべて水田であり、標高は北端で20.2m、南端で15mと両端では5m以上の比高差が認められる。調査区全域で見れば、北半部では飛鳥時代の遺物が多いのに対し、南半部では古墳時代前期の遺物が多いという傾向が認められる。また、遺構密度について言えば北側で高く、南に下がるにつけて希薄となる傾向が窺いえると言えよう。

以下、本調査における主要遺構・遺物について概述する。

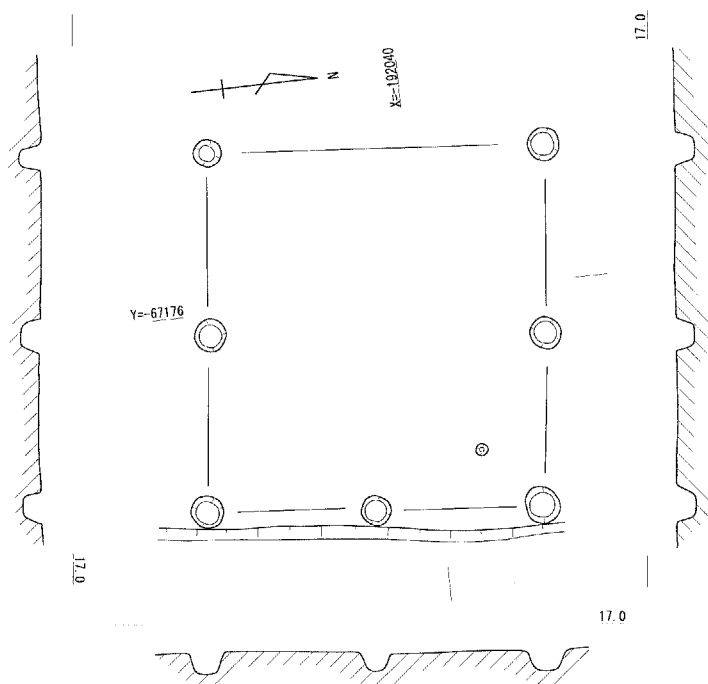
掘立柱建物1 代替地の土層で検出された建物で、南北2間、東西2間以上の規模を有する。柱間はそれぞれ2.4m前後を測り、柱掘形40cm前後、検出面からの深さは20～30cmであった。埋土は包含層に酷似した暗褐色土である。遺物は僅かに土師器の細片が2片出土しているのみで、この建物の時期については断定できかねるが、検出状況などから古墳時代以降、中世までの期間であることはまず間違いなく、後述する掘立柱建物2との関係から飛鳥時代のものである可能性が高いと考えている。

掘立柱建物2 前述の掘立柱建物1の北側で検出した建物で、東西3間以上、南北2間の規模となるものである。柱間および掘形の大きさなどはほぼ掘立柱建物1と同様であり、埋土も酷似する。柱穴の一つ（柱穴221）から飛鳥時代と思われる須恵器片が出土していることを根拠にこの時期の建物と考えた。

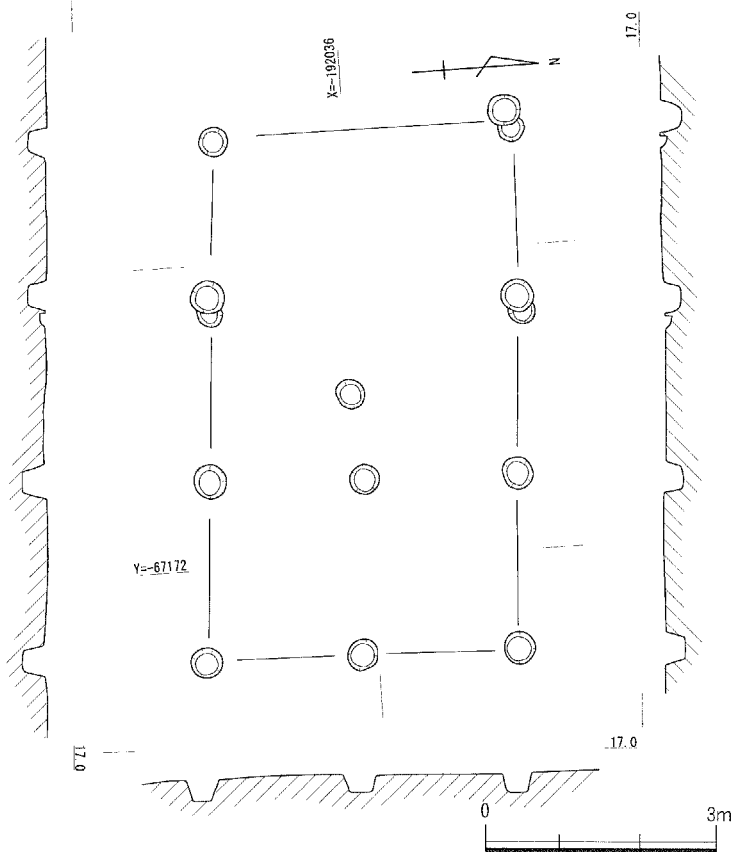
掘立柱建物183 代替地と道路敷部にまたがって検出された掘立柱建物である。東西3間、南北2間の規模で、柱間はそれぞれ2.1mを測る。掘形は直径30cm前後、深さについてはばらつきがあり、20～40cmを測る。この建物についても出土遺物がなく時期を決めがたいが、検出状況および柱穴の埋土といった状況証拠からやはり飛鳥時代に帰属するものと考えている。

掘立柱建物181 東西2間、南北3間の規模で、総柱となる掘立柱建物である。柱間はそれぞれ2.1m、掘形の直径は40cm前後を測る。柱当りは直径20cmほどであるが、柱についてはまったく遺存していなかった。遺物については、柱穴の一つ（柱穴171）から古墳時代前期の土器片が

掘立柱建物 1



掘立柱建物 2



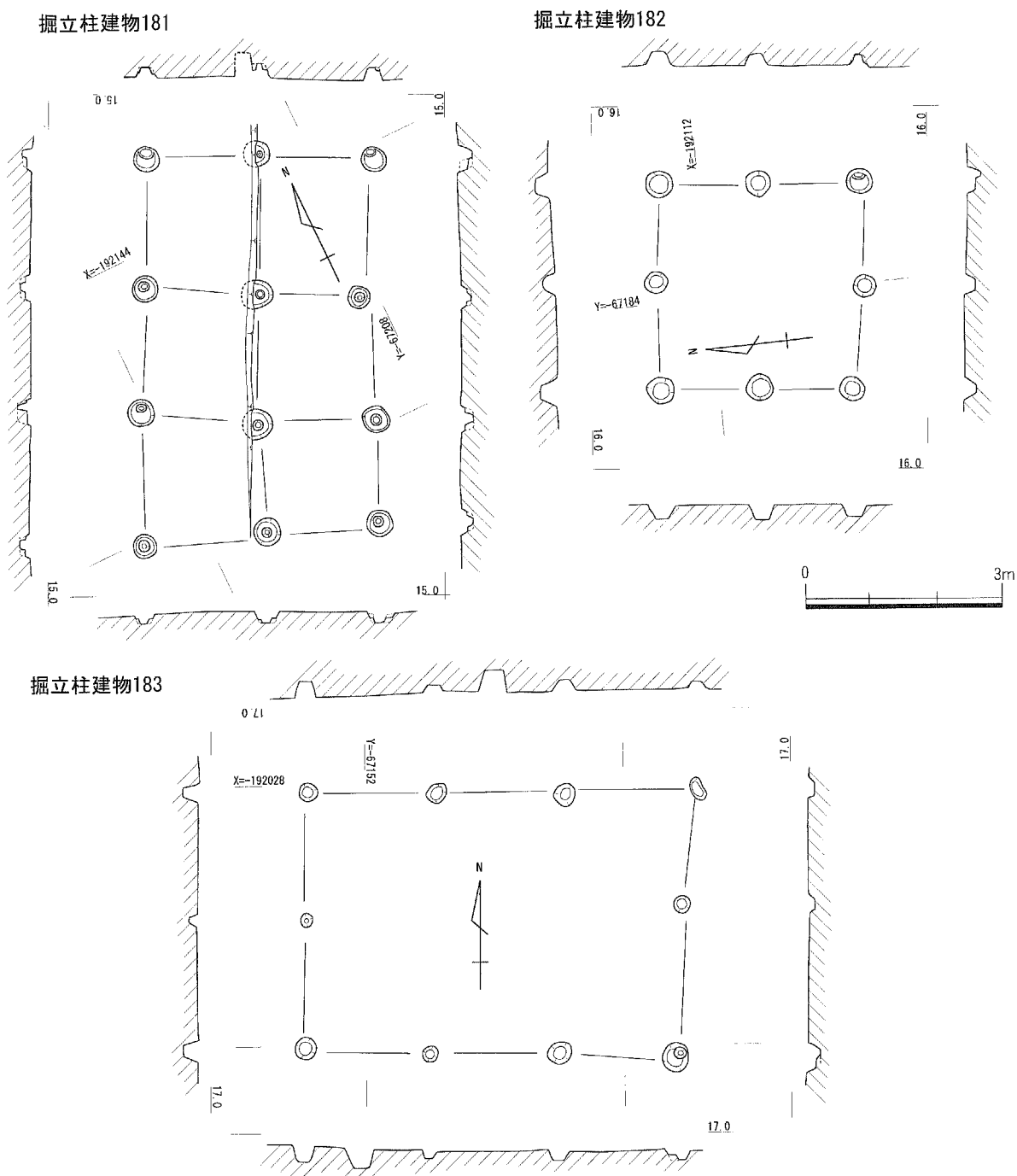
第8図 山口遺跡掘立柱建物 1・2 (S=1/100)

出土している。

ただ、少なくともこの建物は飛鳥時代の遺物を含む包含層の上で検出したものであり、飛鳥時代かそれ以降のものであることは確実である。さらに範囲を狭めれば、掘形内の埋土が中・近世のものとは考えがたく(本遺跡では中・近世の遺構埋土は通例灰色味を帯びた土である)、それ以前の可能性が高い。したがってその時期としては、飛鳥時代～平安時代の間に求めることが妥当と考えている。

掘立柱建物182 2間×2間の小規模な掘立柱建物である。柱間はそれぞれ1.9mほどで、掘形の直径は30cm 前後を測る。深さはいずれも検出面から20cmほどであり、柱当りは確認できなかった。この建物については、飛鳥時代の包含層を取り除いた面での検出であり、また柱穴の三つからそれぞれ庄内式併行期の土器片が出土していることから、この時期のものと判断している。なお、建物の軸線は真北より7° ほど東へ振っている。

土坑248 個別図としては明示していないが、前述の掘立柱建



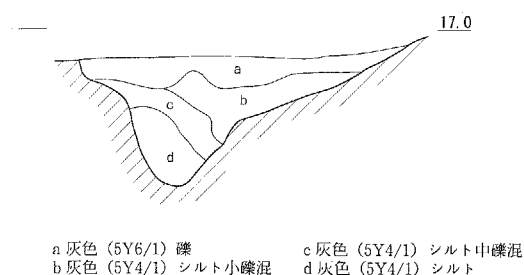
第9図 山口遺跡掘立柱建物181・182・183 (S=1/100)

物183のすぐ西側で検出された土坑である。長径1.2m、短径0.6mほどの楕円形を呈し、深さは15cmと比較的浅い。この土坑からは平安時代中頃のものと考えられる黒色土器の埴、土師器の皿・小形の甕、須恵器の甕が出土している。その詳細は遺物の項目に譲るが、これらの土器はまとまって出土しており、椀・皿については破損しているものの完形に近い状況であった。ただ、須恵器の甕については口縁部の一部しかなく、意識的に埋納したような形跡は窺がわれない。

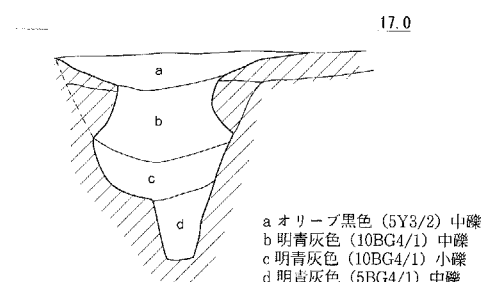
溝35 B地区で検出した大溝で、緩やかに蛇行しながら南に流れ、調査区の西に外れていく。規模は上流部でもっとも大きく、幅12m、深さ2mを測り、下流部では幅4m、深さ1.5mと小さくなっている。溝の埋土は、直径1～4cm大の礫が大部分で、これにやや粘質の砂層が互層となって堆積している。遺物は、最下層から上層まで出土しているが、量的にはさほど多くない。期的には古墳時代前期のものも少量含まれてはいるが、大部分は飛鳥時代のものである。一応ここでは溝として扱っているが、大きく蛇行していることや幅が一定でないことから自然流路であった可能性が高いものと考えている。

溝30 溝35の西側で検出した幅60cm、深さ40cmほどの溝である。最下層には暗灰色の粘質土の堆積が認められるが、それより上層は礫混じりの土で、とくに最上層では1～5cm大の灰色の礫により埋まっていた。この溝からはやはり飛鳥時代と思われる須恵器の甕・壺などが出土して

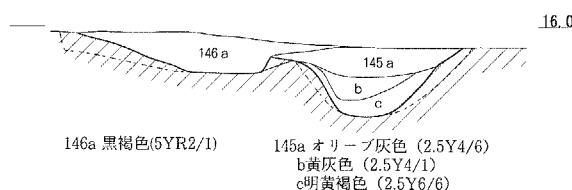
溝30



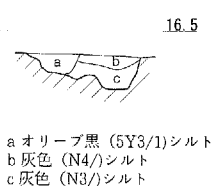
溝262



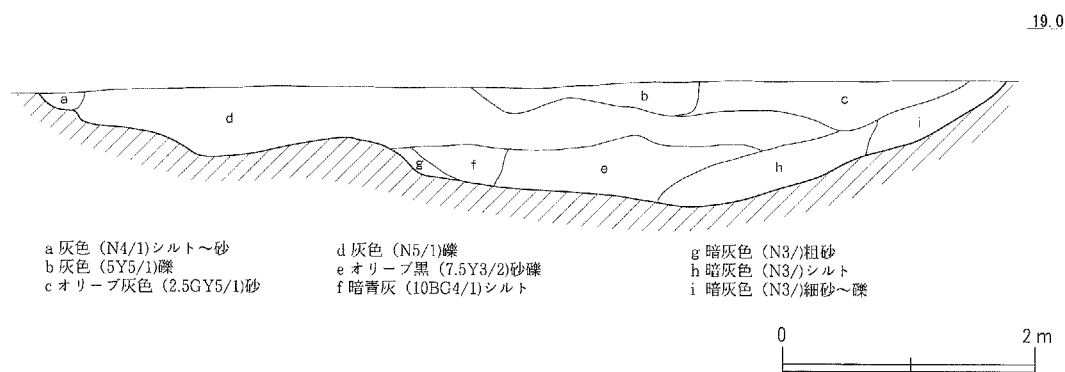
溝146・145



溝261



溝35

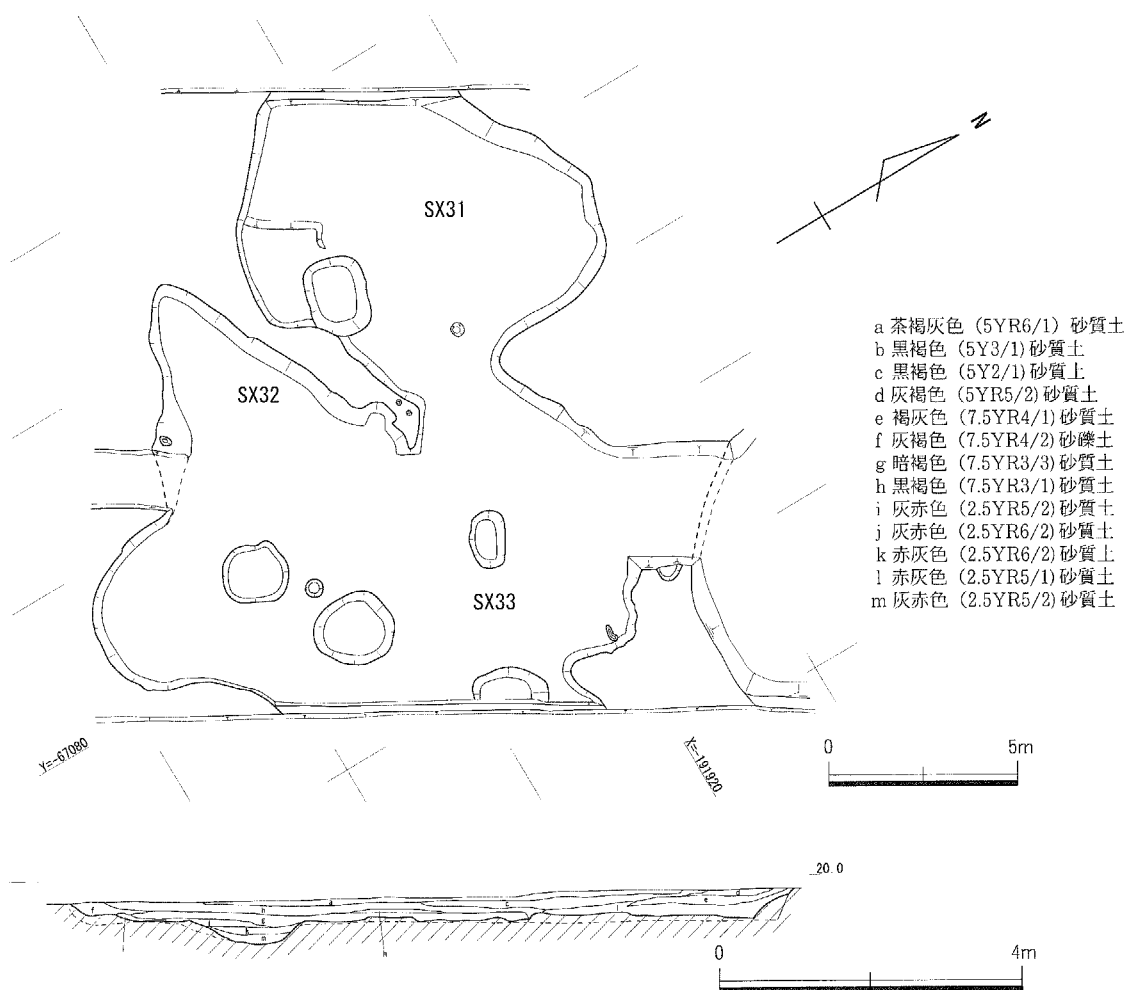


第10図 山口遺跡溝断面図 (S = 1/60)

いる。時期的には溝35とさほど変わらないものと考えているが、溝35によって切られていることから、この溝の方が古いことが判明している。

溝145・261 代替地からA地区中央部にかけて南西方向に流れる溝である。代替地で検出したものを溝261、A地区で検出したものを溝145と遺構番号を付して調査に当たったものであるが、両者は同一の溝と考えられるものである。幅は90cm前後、深さは30cmほどである。溝の堆積状況について言えば、土層図に明示したように両地区では多少の異同はあるものの暗黄茶色土および茶灰色土によって埋まっており、最下層においても砂および粘土質の土の堆積は見られなかった。出土遺物は多く、古墳時代初めと思われる甕・壺・高坏・鉢などが出土している。

溝146 前述の溝145と並行し、一部重複して南西方向に流れる溝である。幅は0.8～1mほどで



第11図 山口遺跡SX31～33 (S=1/100・S=1/200)

あるが、深さは20cmほどと浅い。両者の切り合い関係から溝145より新しいことはわかっているが、出土遺物が少なく、わずかに土師器の碎片のみであり時期の確定は困難な状況である。ただ、溝145と重複していることや検出状況などからみて、この溝についても古墳時代前期の可能性が高いものと考えている。

溝262 代替地の北西部を北東から南西方向に延びる溝である。幅70cm前後、深さは最深部で1.2mを測る。埋土は1～5cm大の角礫がぎっしりと詰まった状況で、この中からは1片の遺物も出土していない。土層図にも示したように、溝の断面は通常の溝とは考えがたい形状を成している。これらのことからこの溝は人工的に掘削されたものではなく、地震による地殻変動によって生じた亀裂の痕跡ではないかと考えた。

S X31～33 B地区の北端近くで検出された不整形な土坑である。当初3基の土坑が重なり合っているものと判断して、個々に遺構番号を付したものであるが、掘り進めた結果、埋土の状況などからこれらは同一の大規模な土坑となる可能性が高いものと判断している。極めて不整形な形状をなしているが、大まかに言えば東西は両端ともに調査区外に延びており、16m以上、南北は最も幅の広い箇所10mほどである。垂直とは言えないまでも切り立ち気味に掘られており、深さは40cmほどで、底面はほぼ水平に掘られている。埋土は上層から淡茶色砂質土・暗黒褐色土・暗褐色砂質土などといった黒っぽい土が比較的平行に堆積している状況であった。出土遺物は多く、飛鳥時代の須恵器の坏身・坏蓋・高坏・甕・甕、土師器の高坏・皿などが出土している。また、特筆すべき遺物としてサヌカイトの剥片が14点出土している。出土状況は、土坑内の径3mほどの範囲に散らばっており、埋土中に浮いたかたちで見つかる。この土坑の用途・性格については不明と言わざるを得ないが、土取穴であった可能性も考えられよう。なお、この土坑の底面で1m前後の方形もしくは楕円形の土坑をいくつか検出している。当初その形状から墓の可能性も考えたが、骨片はもとより供献されたと思われる土器もなく、その兆候は窺がわれなかった。

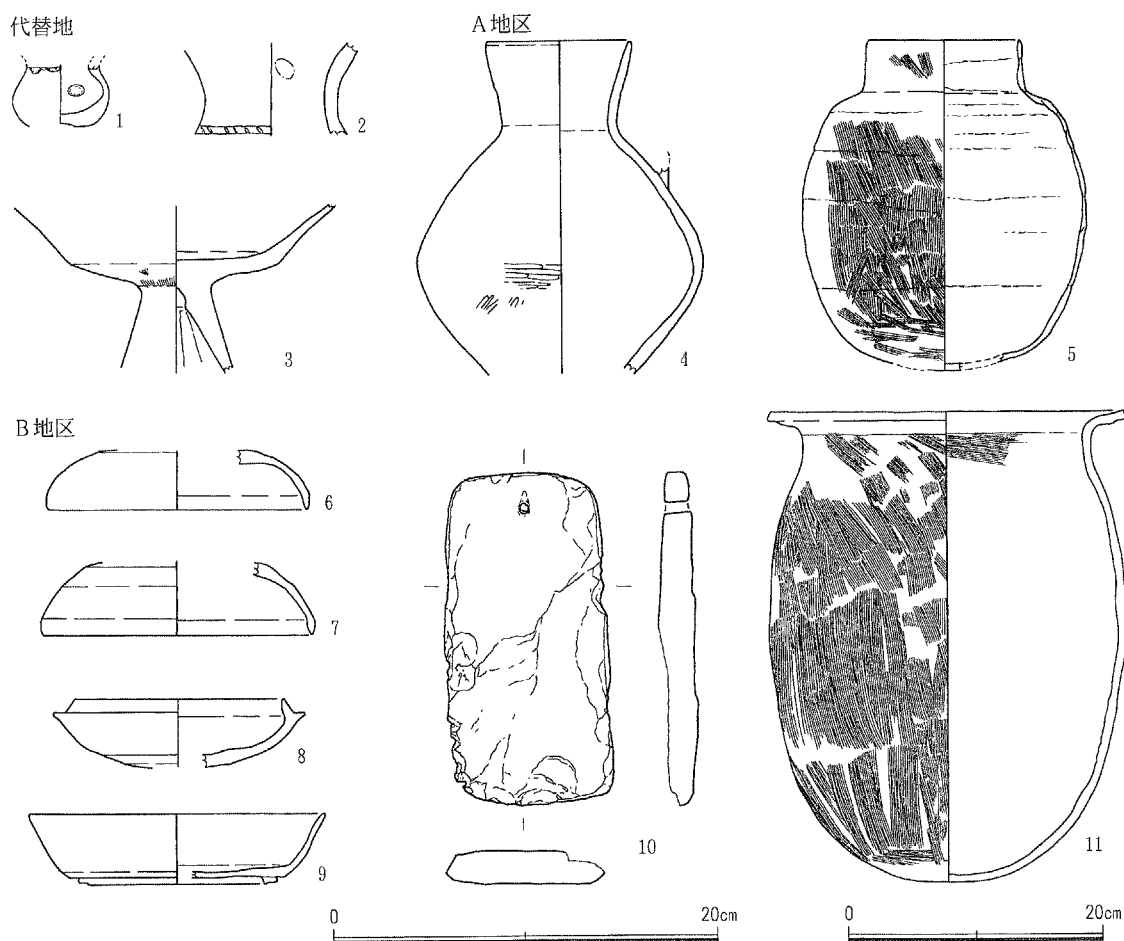
以上、主要な遺構について述べてきたが、調査区全体を概括すれば、遺構についても包含層出土の遺物の傾向を裏付けるように調査区北側で飛鳥時代のものが多く、古墳前期のものについては、中央から南側に集中して見られる傾向が認められるものと言えよう。

その境は概ね現地表の標高16mを境とするものであり、古墳時代前期の遺構が集中する標高14～16m付近は遺跡の立地する扇状地の中ではもっとも緩やかな傾斜をなしている。このことは、より平坦な土地から人々がまずその営みをはじめたことを傍証するものかもしれない。

2. 遺 物

1～3は、代替地包含層出土遺物である。1は、体部高3.8cm、底部径3.8cmを測る壺形ミニチュア土器である。器表には指頭圧痕の残存が顕著で、手捏ねによる製作と考えられる。胎土は、庄内併行期の土器群に類似し、当該期に帰属すると考えられる。2は壺頸部で、頸部径6.8cmを測る。体部との境界に刻目入りの突帯が貼付され、頸部も直立することから、二重口縁壺の頸部と理解される。3は口縁および脚裾部を欠損する高坏で、坏部は水平な底部に直線的な口縁部を備える。脚部は中空で、直線的な形態を呈し、裾部へは屈曲する。坏部外面はタテ方向のハケ、脚柱部内面にヨコ方向のケズリが認められる。

4・5は、A 調査区包含層出土遺物である。4は口縁部がやや短く内湾気味に伸びる細頸直口壺である。体部最大径は15cmを測り、体部中位に位置する。体部下半外面にはナナメ方向の、中位にはヨコ方向のミガキが認められる。肩部には把手の剥離面が認められる。5は甕形の土器で、長胴気味の体部に、短く直立する口縁部を備える。体部は、外面に乱雑なナナメハケが、内面にランダムなナデが施される。内面には粘土紐接合痕が明瞭に残存し、1.5～2cm幅の粘土



第12図 山口遺跡出土遺物 1 (包含層) (S = 1/4、ただし11は S = 1/6)

紐を積み上げている。口縁部はヨコナデ調整でなく、乱雑なナナメナデが最終的な調整で、5の製作に回転性が認められる痕跡はなく、体部外面には固形物の付着、2次的焼成による色調の変化と器面の剥離が認められる。以上の特徴から、5は布留式古相の甕形製塩土器と理解される。

6～11は、B調査区包含層出土遺物である。6・7は須恵器坏H蓋で、いずれも天井部と口縁部の境界は不明瞭で、稜は創出されない。8は須恵器坏H身で口径10.9cmを測る。受部の立ち上がりは、短く内傾する。6～8の坏Hの天井部・底部は、いずれも回転ヘラケズリが認められる。9は須恵器坏B身で、高台は底面やや内方に貼付され、断面形態ハの字形を呈す。11は土師器甕で、丸底に長胴の体部から外方に屈曲する口縁部を付す。口縁端部は端面を形成し、中央部分が浅く凹む。体部外面の下半がタテハケで、それ以上の範囲はナナメハケで調整され、内面は大半がナデで、頸部付近のみハケにより調整される。なお、底部～体部下半1/4と体部上半3/4とで、外面調整のハケ原体が異なり、甕成形に際し、ハケ原体が交換される箇所で粘土紐積み上げを休止し、内外面調整を行ったとみられる。

10は滑石製の石製品である。長17.4cm、幅8.3cm、厚1.9cm、重さ510gを測る。上下面には研磨痕が残存する。上端部から1.5cmの箇所に径5mmの小孔が認められる。両面穿孔で、孔上端および上端部には紐ズレの痕跡が確認される。小孔に紐等を通して、吊り下げて使用したとみられるが、用途は不明である。

以上が、本調査区各地区の包含層出土遺物である。代替地・A調査区では庄内併行期～布留式古相の、B調査区では飛鳥時代の遺物の出土が顕著である。

12～22は、溝145出土遺物である。12は二重口縁壺口縁部で、口径27.5cmを測る。口縁部・頸部ともに緩やかに外反する。2次口縁外面には、竹管文が押印された円形浮文により加飾される。13～15・20は壺底部である。底面が突出し平坦面をもつ15・20と底面中央が凹む底部輪台技法の13・14が認められる。16・17は甕口縁部で、頸部の屈曲が緩い形態である。口縁端部は丸く収められる。18は、口径22cmを測る中形鉢で体部外面はタタキ、内面はナデ調整が認められる。19・21は鉢の底部とみられ、壺底部同様底面が平坦な19と底部周辺が外下方に拡張され、上げ底状を呈す21が確認できる。19は外上方へ直線的な体部を備えることから鉢と考えた。22は埴形高坏の坏底部～脚柱部にかけての部位である。脚柱部は棒状工具により中空化され、短い脚柱部から屈曲して直線的な脚裾部へ繋がると推測される。

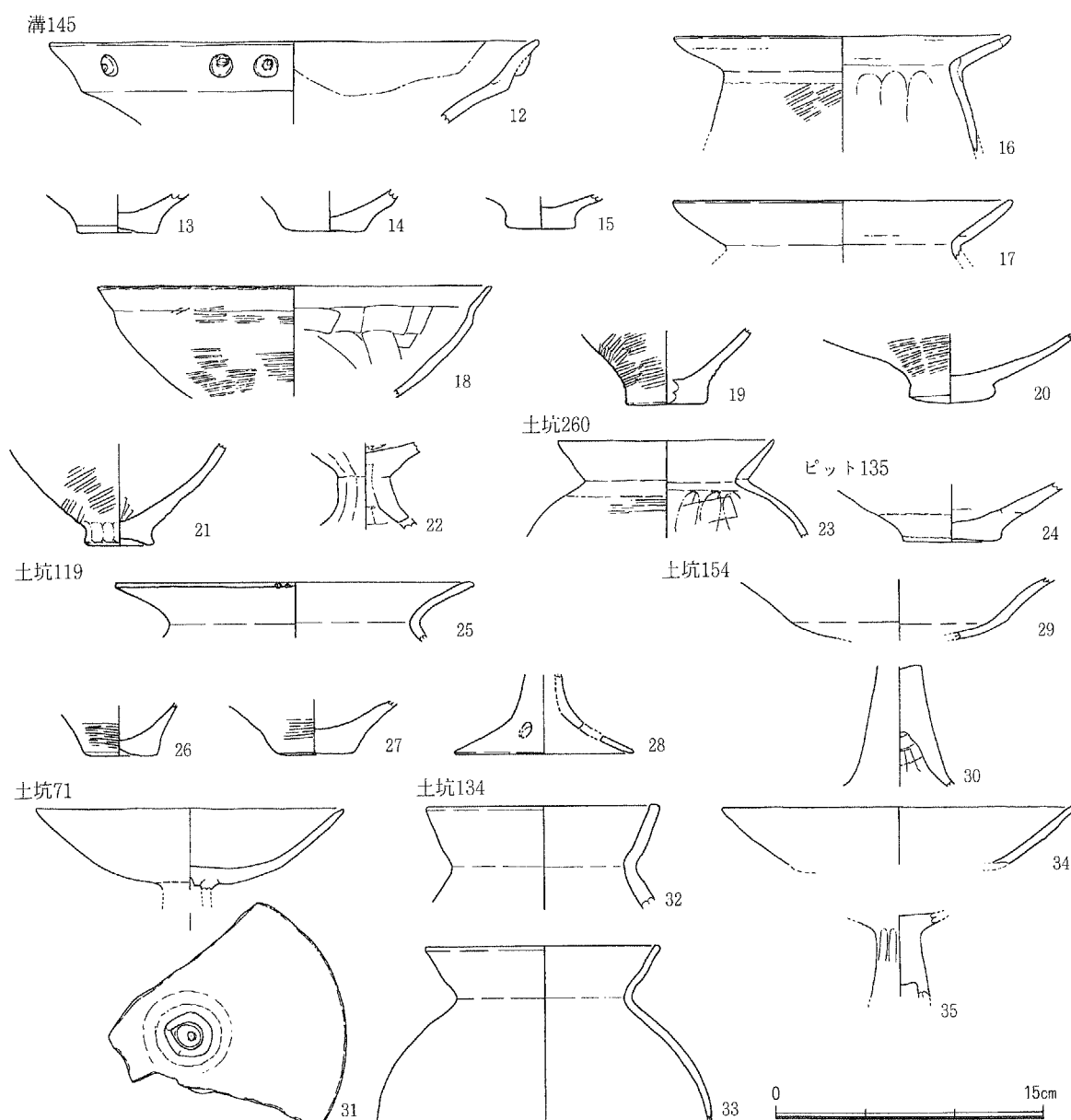
詳細な時期の検討は困難だが、これらの出土遺物の特徴から溝145の出土遺物は庄内併行期から布留式古相を中心とし弥生時代後期まで遡ることはなく、溝145の延長部分である溝261の出土遺物も後述するように同様の理解が可能である。

23は土坑260出土の甕口縁部で、口径12.1cmを測る。口縁端部は丸く収められる形態で、体部内面にはケズリの使用が確認されるものの、頸部内面までは及ばない。

24はピット135出土の壺底部で、平らな底面に球形の体部を備える形態を呈す。体部外面にはタタキののちナデまたはミガキにより平滑に調整される。

25～28は土坑119出土遺物である。25は甕口縁部で、口径20cmを測る。頸部内面は緩く屈曲する形態で、口縁端部は端面を外側に形成し、刻目を付す。26・27は壺・鉢の底部で、底面が凹む26と平坦な27とが確認される。28は埴形高坏脚部で、裾部径は10cmを測る。脚柱部は中空で、緩く外反して脚裾部へ至る。脚裾部の穿孔は3方向へ行われる。

29・30は土坑154出土遺物である。29は高坏坏部で、坏部稜線はあまり顕著でない。口縁部は外反して、端部に至る。30は高坏脚柱部で、半中実である。

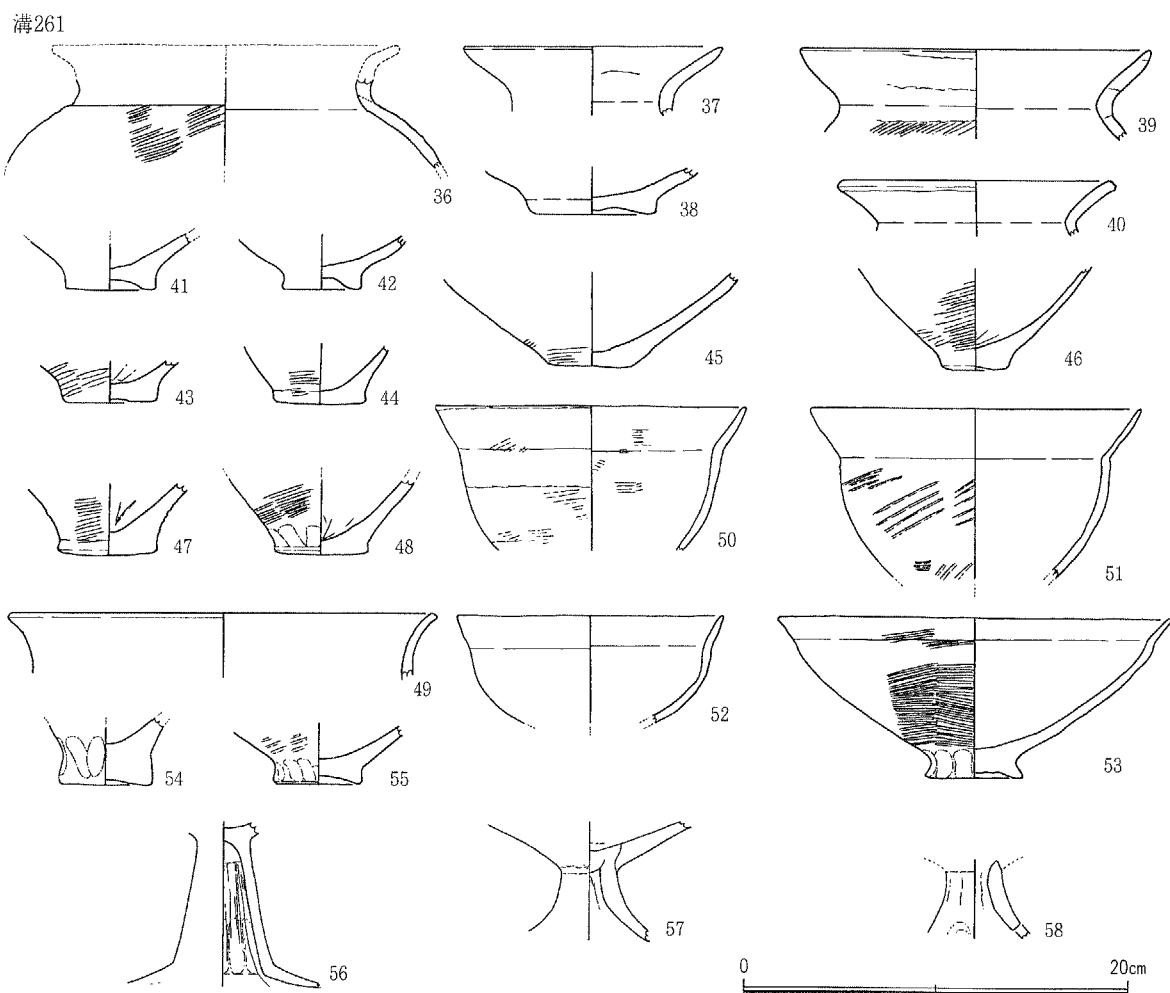


第13図 山口遺跡出土遺物 2 (S = 1/4)

31は土坑71出土の高坏坏部である。口径は17.3cm、坏部高は4.2cmを測る。調整は磨滅のため不明だが、坏部稜線は明確でなく、底部～口縁部へは緩やかに開く形態を呈す。中空の脚柱部からは坏底部に径・深さともに5mm程度の刺突痕が確認された。布留系高坏と判断される。

32～35は土坑134出土の甕口縁部および高坏坏部と脚柱部である。いずれも調整が確認できないが、35の高坏脚柱部は半中実で外面にはタテ方向の幅広のミガキが確認される。

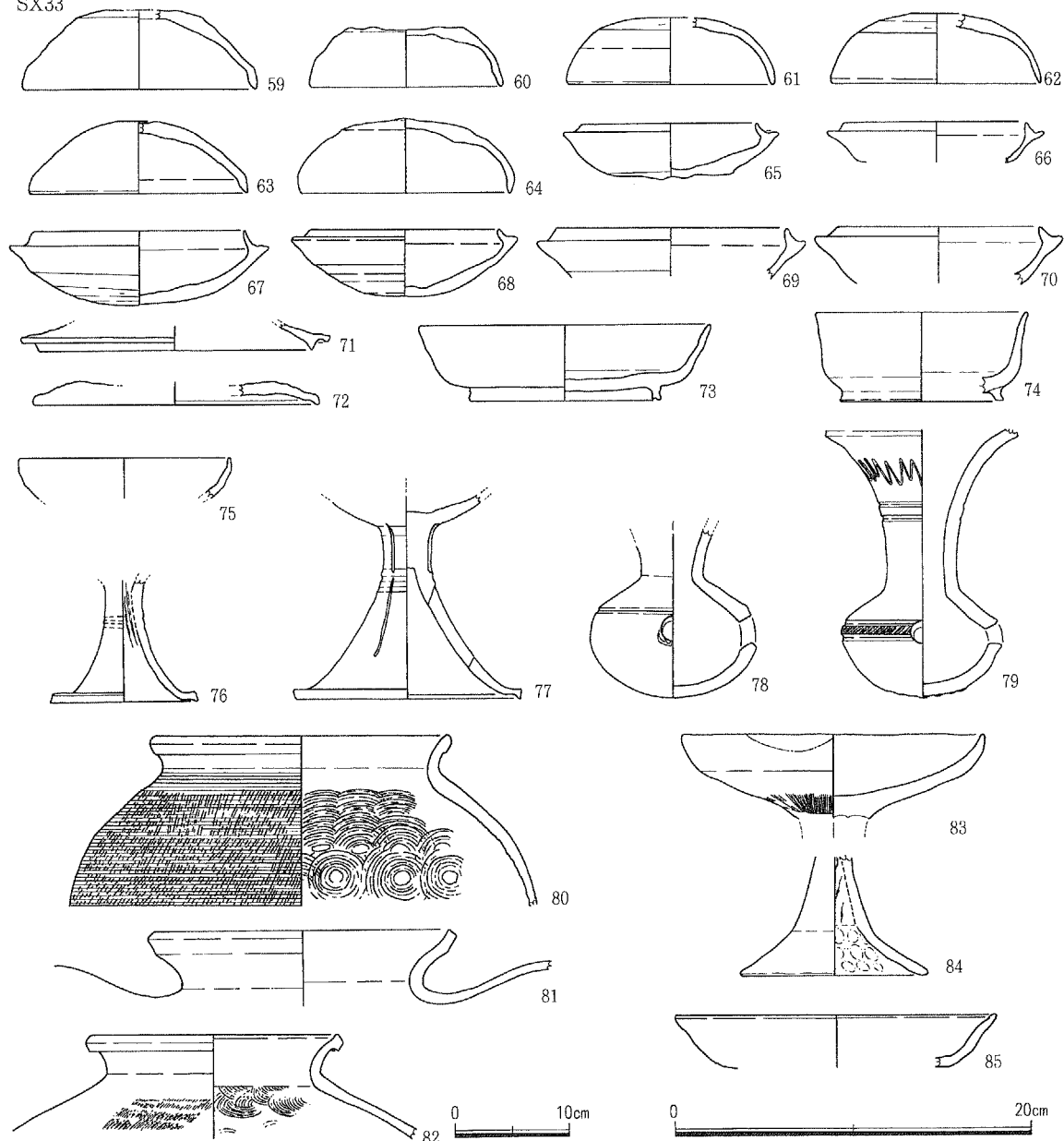
36～58は先述の溝145の延長部分溝261出土遺物である。36・37は広口壺口縁部である。36は頸部が短く直立する気味に立ち上がり、口縁部を外上方へ備える。体部外面にミガキが不徹底なため、タタキが残存する。38は壺底部で、底面中央が凹み底部輪台技法の使用が認められる。球形を呈すとみられる体部外面は、平滑に仕上げられる。39・40は甕口縁部で、ともに頸部内面の屈曲は緩い。39は口縁部がやや内湾気味で、口縁端部は面をもつ。41～48は甕または鉢底部で体部には明瞭にヨコ～右上がりタタキが残存する。底部の形態には、底面中央が凹む41～43と平坦な45～48とが認められる。49は外面にタテ方向のミガキが残存することから、鉢または広口壺口縁



第14図 山口遺跡出土遺物 3 (S = 1/4)

部と考えられるが、復原口径からは中形鉢の可能性が高い。50～53は小形鉢で、52以外は半球形の体部から屈曲して短い口縁部が外上方へ伸びるのに対し、52は体部が頸部直下で内湾し、短い口縁部が上方に付加され、やや形態が異なる。この差は、外面調整の差にも対応する。53の底部は外周が外下方に拡張され、底面が上げ底状を呈す。54・55は、53同様の形態、調整であることから、同様に鉢底部と考えられる。56は有稜系高坏の中空の脚柱部で、屈曲して脚裾部に広がる。57・58は埴形高坏脚柱部である。57では脚柱部から坏底部へ粘土紐積み上げて成形し、坏底部は円盤充填技法により製作されることが観察できる。以上が溝261出土遺物であるが、基本的には庄内式新段階～布留式古相に帰属すると理解している。

SX33



第15図 山口遺跡出土遺物 4 (S = 1/4、ただし81・82は S = 1/6)

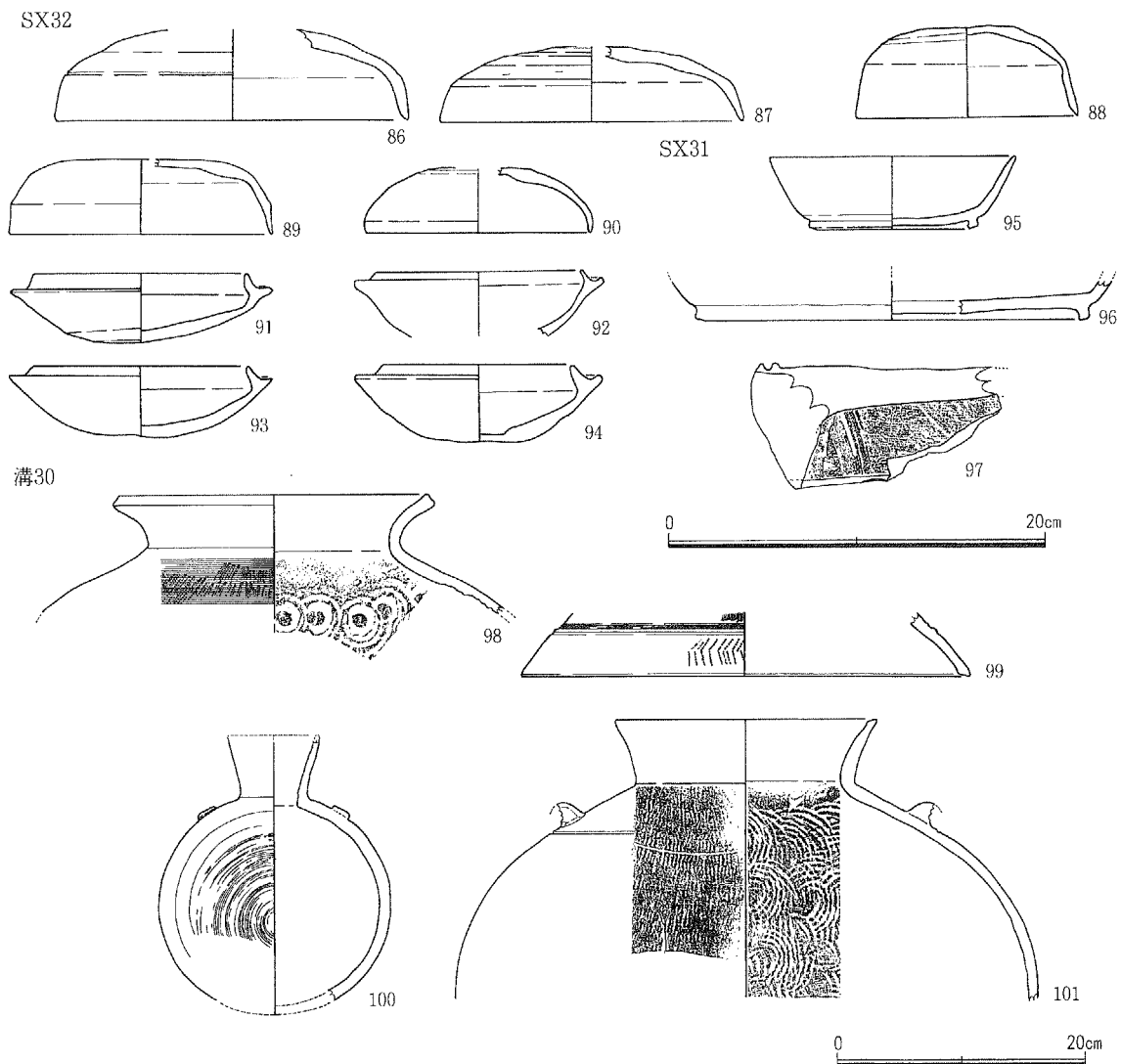
本調査区出土の庄内式併行期前後の土器群の様相は、以上のとおりである。庄内式古段階まで遡る可能性がある土坑119・154出土の高坏脚部も認められるが、庄内式新段階～布留式古相が主体を占める。

59～85はSX33出土遺物で、このうち59～82は須恵器である。59～64と65～70はそれぞれ坏H蓋と身である。蓋口径は10.7～13cm、身口径は9.7～11.9cmを測る。天井・底部が、回転ヘラケズリを行う61・62・67・69と回転ヘラ切り不調整の59・60・63～65とが確認される。蓋は、いずれも平坦な天井部と口縁部の境界は不明瞭で稜を形成しない。71・72は坏B蓋で、かえりのある71とない72とが存在する。72の天井部はヘラ切り不調整であることが確認できる。73・74が坏B身で、比較的高い高台を両者とも貼付する。口縁部は、直線的な73とやや外反する74が認められる。75は無蓋高坏口縁部で、内湾する体部に直立気味の口縁端部を付加する。76・77は高坏脚柱部である。いずれも脚柱部中央に2本の凹線を施しており、長脚2段の高坏と評価されるが、76はやや脚の短小化、およびスカシの省略などが行われる。77は長脚2段スカシの高坏であるが、スカシはすでに穿孔されず、タテ方向に線刻を施すのみで、穿孔を痕跡的に残すのみとなる。78・79は甕で、いずれも細い頸部から大きく開く口縁部が発達する形態である。78は底部回転ヘラケズリを行い、体部に施文されないのに対し、79は底部静止ヘラケズリで、体部には2条の凹線で区画した範囲に列点文が、口縁部には波状文が施文される。なお、79は自然釉の釉着が著しく、その位置関係から79が横位の重ね焼により焼成されたことが観察できる。80は、口径16.3cmを測る短頸壺口縁部である。外面には体部から連続してカキメが頸部中位まで施されているため、口縁端部が外側へ拡張する形態を呈す。還元炎焼成の達成度が低いため、色調はにぶい橙色（10YR7/3）を呈しており、土師質焼成の様相であるが、焼成自体は堅緻である。81は焼成時の歪みが著しい。いずれも頸部等への施文は認められない。

83～85は、SX33出土の土師器である。83は高坏坏部、浅い皿形の形態を呈し、内湾する体部の先細りの口縁部を備える。器面の磨滅が著しいため調整はほとんど残存しないが、坏底部～脚部にかけては外面にタテ方向のハケが一部に確認される。84は高坏脚部で、中空の脚柱部から脚裾部へと緩く屈曲して大きく外方へ広がる形態である。脚裾部内面には指頭圧痕が明瞭に残存する。85は、平らな底部に外反する口縁部を外上方に備える土師器皿で、口縁端部は内側へ肥厚する。須恵器群の時期よりもやや新相の段階に帰属する可能性がある。

以上が、SX33出土の土器群である。須恵器坏Hと坏Bの共伴する段階としては、飛鳥Ⅱをその段階として求めることもできるが、かえりを備えない須恵器坏B蓋の存在から飛鳥Ⅳまで下る。後述するようにサヌカイト製の石製品も同遺構から出土しSX33の一括性は乏しい。また土師器皿も平城宮Ⅱまで下る可能性があることから、一定の時間幅が存在すると理解する方が妥当であり、埋没は飛鳥Ⅱ～平城宮Ⅱの幅で捉え、飛鳥Ⅲが主体を占めると位置付けられる。86～94

はSX32出土遺物である。同遺構は、隣接する SX31・33と同一遺構を構成する一部と考えられる。86～94は、須恵器坏 H 蓋および身である。口径は蓋が11.8～18.2cm、身が10～11.3cmを測り、総じて縮小化が進行している。ただし、蓋では規格の大きい86・87は天井部に回転ヘラケズリが行われるが、規格の小さい88・90はヘラ切り不調整である。身では規格による底部処理に差はないが、回転ヘラケズリの91とヘラ切り不調整の92が存在する。蓋は、総じて天井部と口縁部の境界は不明瞭だが、86のみは僅かに浅い凹線により稜を残す。なお、93は色調が浅黄色（2.5Y7/3）を呈し、酸化炎焼成の様相で、器壁自身も軟質である。以上がSX32出土遺物だが、基本的な構成はSX33と変わるものでなく、同一遺構との認識は誤りでないと考えられる。ただし、土師質焼成の須恵器、新たな認識された点である。



第16図 山口遺跡出土遺物 5 (S = 1/4、ただし98～101はS = 1/6)

95～97は、SX32・33と同一遺構を構成するSX31出土遺物である。95は須恵器坏B身で、高台は短く細いものが、やや底部外方よりに貼付される。96も須恵器坏または皿B底部で、短く直立気味の高台がやはり底部外方に貼付される。97は軒丸瓦の丸瓦部で、瓦当は残存しない。瓦当裏面直上付近に位置する丸瓦部凸面に2条の突線の貼付が確認される。なお、剥離面から瓦当部は丸瓦を包み込むように接合されていることが観察される。以上がSX31出土遺物だが、坏または皿Bの高台の形態的特徴を直接比較するとSX32・33のものよりも低く、後出する要素をもっていると考えられ、飛鳥Ⅳ～Ⅴに帰属する可能性がある。また、山口遺跡北側に位置する山口廃寺に帰属するとみられる軒丸瓦も包含していたことから、SX33同様埋没は飛鳥時代でも後半ないしは奈良時代まで下ると理解され、SX33の土師器皿(85)の位置付けと一致する。

98～101は、溝30出土遺物である。98は須恵器甕口縁部で、口径16.4cmを測る。口縁部は頸部から外反し、断面三角形の口縁端部に至る。99は、器台または加飾された脚台部とみられ、裾部径は27.3cmを測る。裾部から4.5cmの位置に突線が廻り、その上側に櫛描文、裾側に列点文を綾杉文調に施す。列点文原体は、9箇所先端をもつ櫛状工具により一括で施文する。100は提瓶で、体部は片面が回転ヘラケズリにより平坦に、もう一方の面が膨らむ形態となり、これにやや内湾気味の直立した口縁が付加される。肩部には、耳部に基石状の粘土塊が貼付される。101は甕口縁部で、頸部から口縁部が外上方へ直線的に広がる形態である。外面には平行条線の痕跡が残存し、頸部にも体部のタタキが及び、その後回転ヨコナデにより大半がナデ消されている。この調整順序は体部外面においても観察される。なお、残存部の範囲において肩部には90°の位置関係で屈曲する耳部が貼付されるのが確認されることから、4方向に耳部を備えていたと復原される。以上が溝30出土の土器群だが、時期の限定が可能な器種が限定されるため、細かな時期まで詳らかにできない。

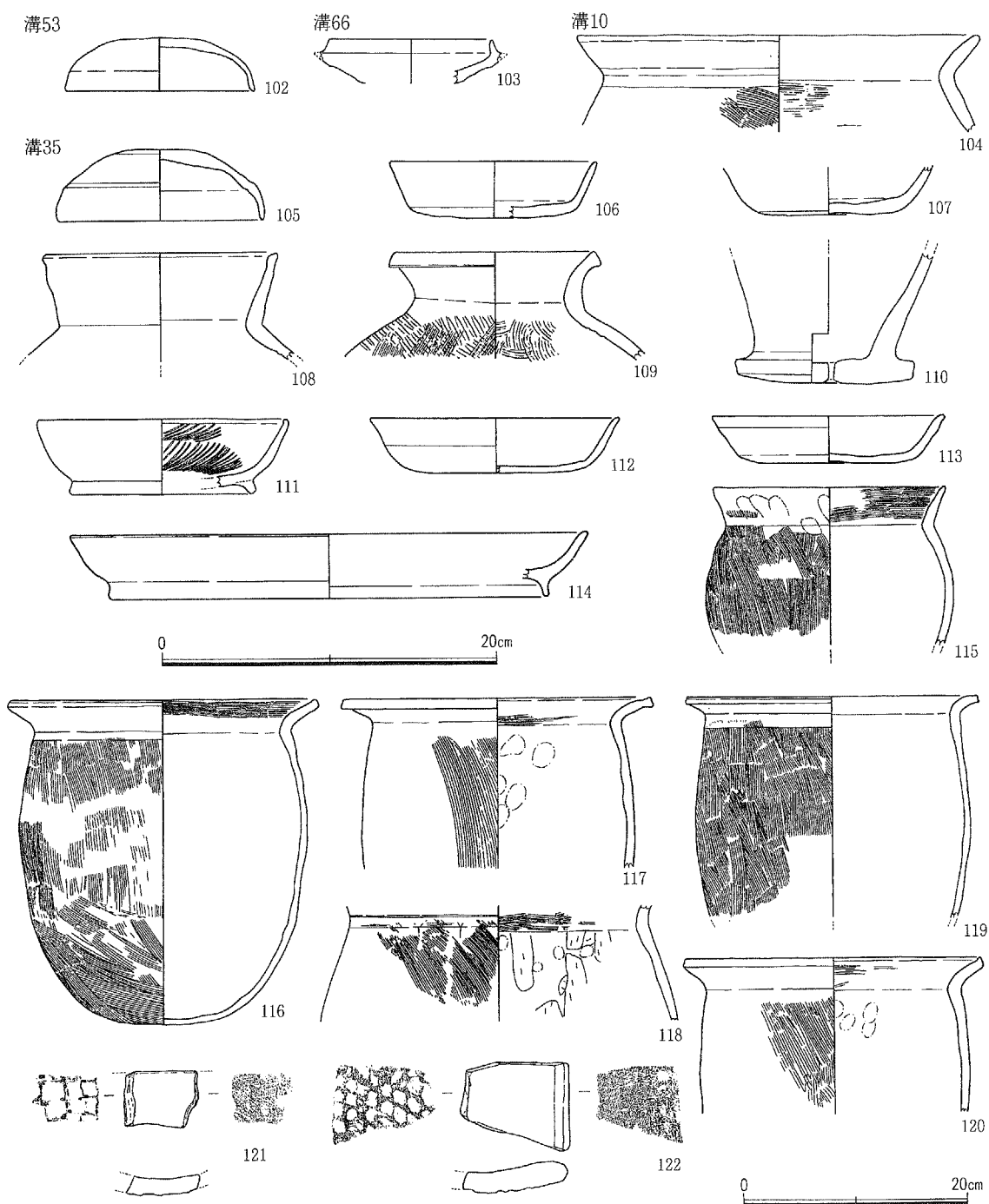
102は溝53出土の須恵器坏H蓋で、口径は11.2cmを測る。天井部は回転ヘラケズリが行われる。

103は溝66出土の須恵器坏H身で、口径9.7cmを測る。受部立ち上がりは短く内傾する。底部は回転ヘラケズリが行われる。

104は溝16出土の土師器甕口縁部で、口径24cmを測る。頸部から屈曲して外反する短い口縁を備える。体部は、内外面ともナナメハケにより調整される。

105～122は溝35出土遺物で、このうち105～110が須恵器、111～120は土師器である。105は坏H蓋で、天井部には回転ヘラケズリが行われ、天井部と口縁部の境界は比較的明瞭で、稜線が残存する。106・107は坏G身で、平らな底部から外上方に直線的な口縁部が伸びる。底面は、いずれも回転ヘラ切り不調整である。108・109は甕口縁部だが、形態には直立する口縁部に内傾する端部の108と外反する口縁部に外側へ肥厚する端部の109が認められる。110は、円盤状底部のやや内方から外上方にやや内湾気味の体部が立ち上がる播鉢といわれる器形である。底面には

貫通する径4mm程度の穿孔が1箇所のみ行われる。底面は回転ヘラケズリだが、その他の部位は、回転ナデによる調整が行われる。111は土師器坏B身で、口径14.5cm、器高4.5cmを測り、深身を呈す。底部から緩い屈曲により内湾する口縁部へといたる。口縁端部は、内側へやや肥厚する。口縁部外面にはヨコ方向の、内面には2段の放射状ミガキが確認される。112・113は、平らな底部に外上方へのびる直線的ないしはやや外反傾向の口縁部を備える土師器皿である。口径は14.8



第17図 山口遺跡出土遺物 6 (102~115: S = 1/4、116~122: S = 1/6)

cm、13.7cm、器高はともに3cm前後を測る。口縁端部は、ヨコナデにより丸く収められる。調整は磨滅のため、不詳である。114は土師器皿Bで、口径30.8cm、器高3.9cmを測り、皿部は112・113と同形態を示す。これも調整は観察されない。115～120は、土師器甕である。このうち115は、球形の体部から口縁部が外上方に伸び、頸部でやや締まる形態を呈すのに対し、116～120は、長胴の体部に大きく外方に開く短い口縁部を備える形態を呈す。口縁端部には、内側端部をやや上方へ拡張する116・117・120と外側に端面をもつ119とがみられる。土師器甕には、形態的な差が認められるものの、体部外面ナナメハケ、内面ナデ、口縁部外面ヨコナデ、内面ハケののちヨコナデという調整順序は一致する。

121・122は平瓦で、いずれも凸面に斜格子タタキ、凹面に粗い布目が残存する。121は端面が、122は側辺が残存し、いずれも面取りが確認される。121が厚1.3cmで瓦質焼成なのに対し、122は厚1.7～2.0cmで須恵質焼成で鈍重な印象を受ける。

以上が、溝35出土の遺物である。須恵器坏H蓋、坏Gなど飛鳥Ⅱ～Ⅲに帰属する遺物が認められ、この段階の遺物が主体的と認識されるが、土師器皿Bおよび坏Bの存在が認められることから、埋没は飛鳥Ⅳ～Ⅴまで遅れると考えられる。また、斜格子タタキの山口廃寺に帰属すると理解される平瓦の出土もその傍証となる。

123は、土坑20出土の土師器高坏坏底部から脚柱部である。中空の脚柱部は、外面に11面を数えるタテ方向のケズリが確認される。脚柱部の直立部分は2cmあまりであることから、脚部は低いと推測される。また、坏部は残存部からは平らな底部が広がると推測され、飛鳥Ⅴ（平城宮Ⅰ）～平城宮Ⅱ前後に帰属すると考えられる。

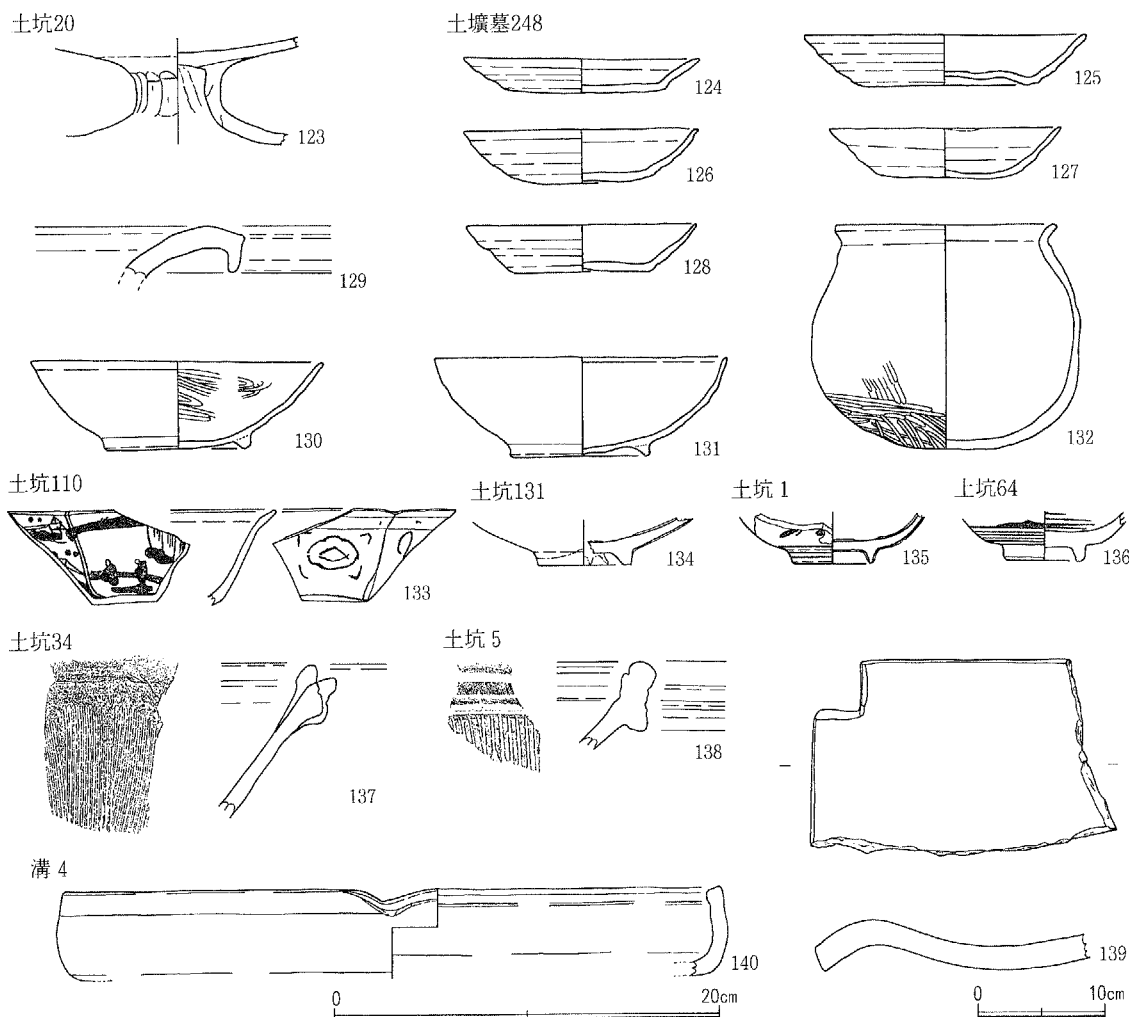
以上が、山口遺跡の調査で出土した飛鳥ないしは奈良時代の時期の遺物群である。これらの遺物群は、いずれも溝、不整形な浅い土坑などの遺構からの出土で、土器群の一括性は低く、一定の時間幅が認められる。それは、土器編年上では飛鳥Ⅱ～平城宮Ⅱの幅として認識されるもので、その中で主体的な位置を占めるのは、飛鳥Ⅲ前後と考えられる。

124～132は、土壙墓248出土遺物である。124～128は土師器皿で、平らな底部に直線的な口縁部が外上方に付加される。口縁部には、内外面ともヨコナデによる凹凸が2ないし3段残存する、いわゆる「多段ヨコナデ技法」と認識される。図示していない個体も含めて、計6個体の「多段ヨコナデ技法」の土師器皿の出土が認められた。130・131は黒色土器で、内面のみ黒色処理するA類である。いずれも丸みを帯びた底部にやや内湾気味の口縁部を備える。高台はハの字形に広げて貼付され、内面には粗雑なミガキが施される。土師器皿ほど明瞭でないが、口縁部外面にはヨコナデによる凹凸が3～4週の単位で確認されるが、底部付近までは至らない。132は土師器甕で、球形の体部に短い口縁部を付す形態を示す。外面は幅4mm程度のミガキが疎らに行われる。ミガキは1回の単位が短く、粘土紐接合箇所集中して意識的に行ったような箇所も認めら

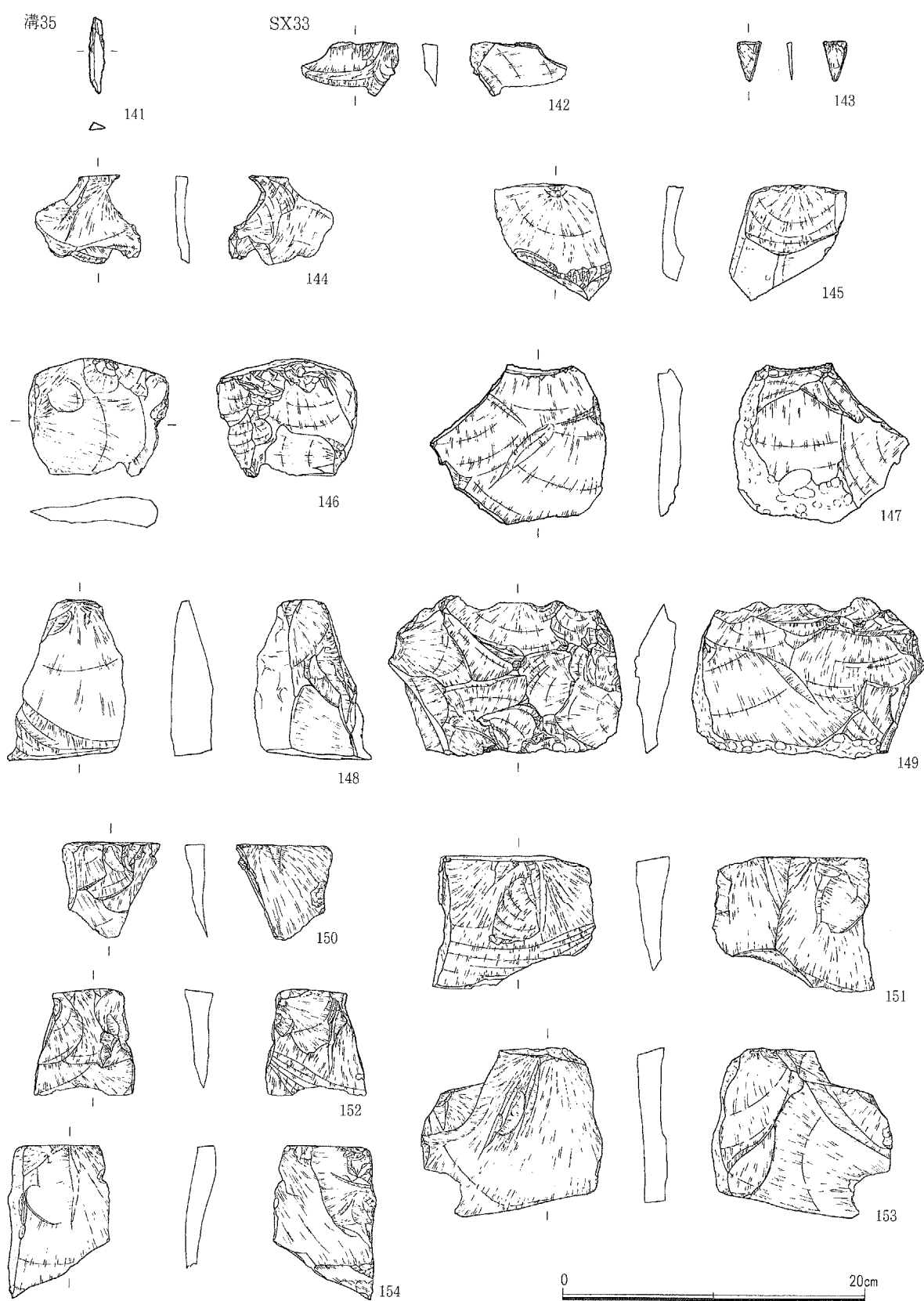
れ、器面を平滑に仕上げる目的よりも、粘土紐接合面付近の内外面の粘土をミガキにより引き伸ばして、密着度の向上を意図した施行方法である。

以上が、土墳墓248出土遺物である。土師器皿・黒色土器の形態や使用される技法などから、10世紀中葉から後葉の土器群と理解され、一括性が高い。

133は、土坑133出土の肥前系磁器角鉢である。型打成形で、外面に線描きにより幾何学文、内面に人物2人を描く。134は、土坑131出土の肥前系磁器青磁碗底部である。見込には、蛇ノ目釉剥ぎが認められる。135は土坑1出土の肥前系磁器碗底部で、くらわんか碗の形態を呈し、見込に蛇ノ目釉剥ぎが認められる。136は土坑64出土の肥前系陶器碗底部で、体部内外面は刷毛目による文様が施される。畳付以外には施釉が認められ、高台に硅砂が付着する。137は土坑34、138は土坑5から出土した備前播鉢口縁部である。139は、138と同じ土坑5出土の棧瓦である。140は溝4出土の土師器焙烙で、2次的焼成により器面劣化が著しいが、型成形による。以上が本調査区出土の近世遺物で、17世紀後半～19世紀中葉までの遺物の存在が確認される。



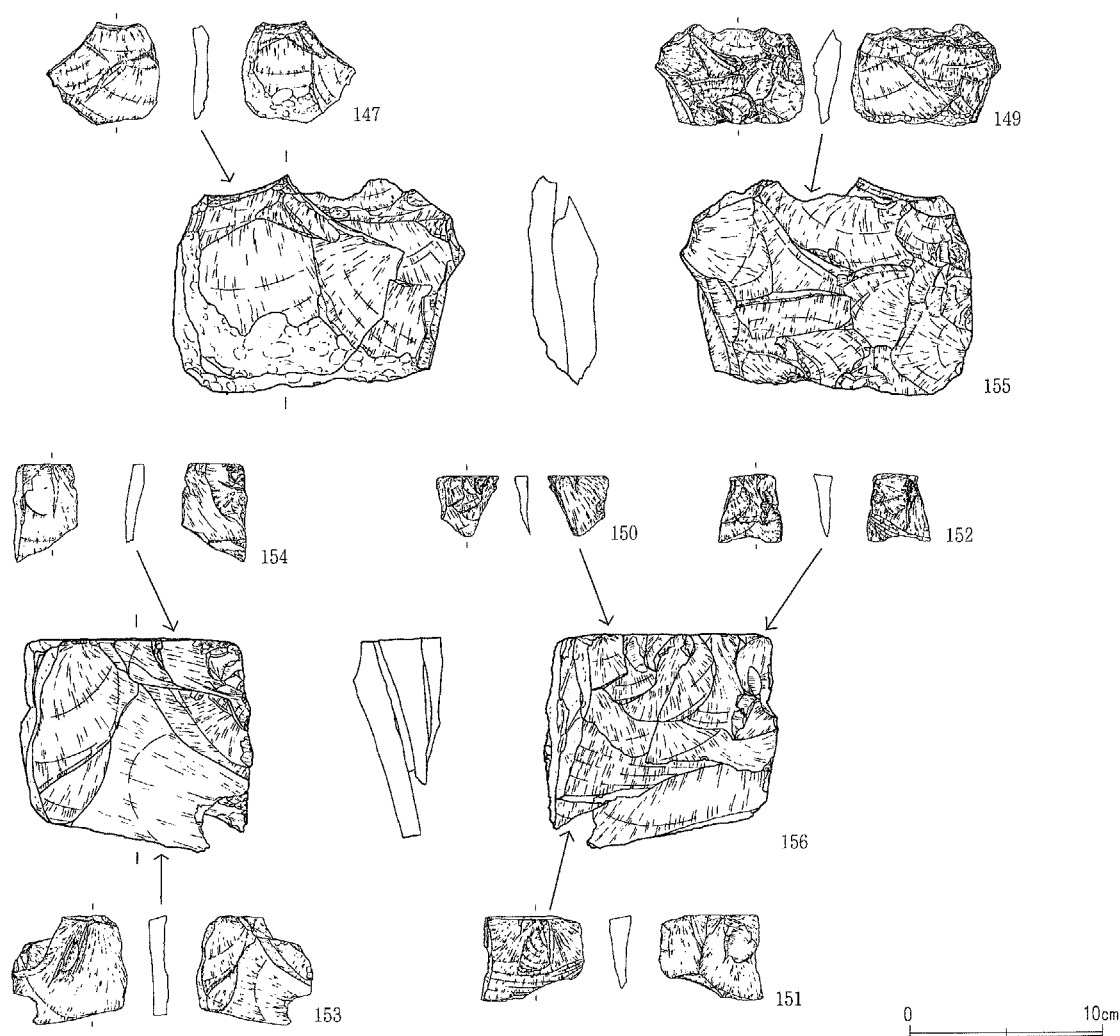
第18図 山口遺跡出土遺物 7 (S = 1/4、ただし139のみ S = 1/6)



第19図 山口遺跡出土遺物 8 (S = 1/4)

141～154はSX33出土のサヌカイト製石製品ないしは剥片である。141～143は小形であるが、144～154は大形の剥片で、142・144・146は横長剥片で、141が縦長剥片、それ以外はルーズな縦長剥片である。145・146には打瘤痕が観察され、打撃による割裂が認められる。155は、147と149の2点の接合資料、156は150～154の4点の接合資料である。156は152→150→151→154→153の順に押圧剥離され、一方向から連続で剥片が剥離されるのが観察される。

以上が、山口遺跡で出土した遺物である。概ね庄内新段階～布留式古相の時期、飛鳥～奈良時代初頭、平安時代、近世の時期の出土遺物が確認された。このうち、平安時代と近世の遺構・遺物は部分的な検出にとどまり、主たる遺構の時期は前2者の時期である。なお、庄内新段階～布留式古相はA調査区・代替地に、飛鳥～奈良時代はB調査区に遺構が集中する。ただし、両遺構群とも住居・掘立柱建物などの検出はほとんどなく、両時期の主たる遺構は、調査地周辺に所在すると推測される。また、SX33にはサヌカイト石材の接合資料が含み、剥離順序が判明する資料であることから、紀ノ川流域では貴重な石製品資料として位置付けられる。



第20図 山口遺跡出土遺物 9 (S = 1/4、155・156以外は S = 1/8)

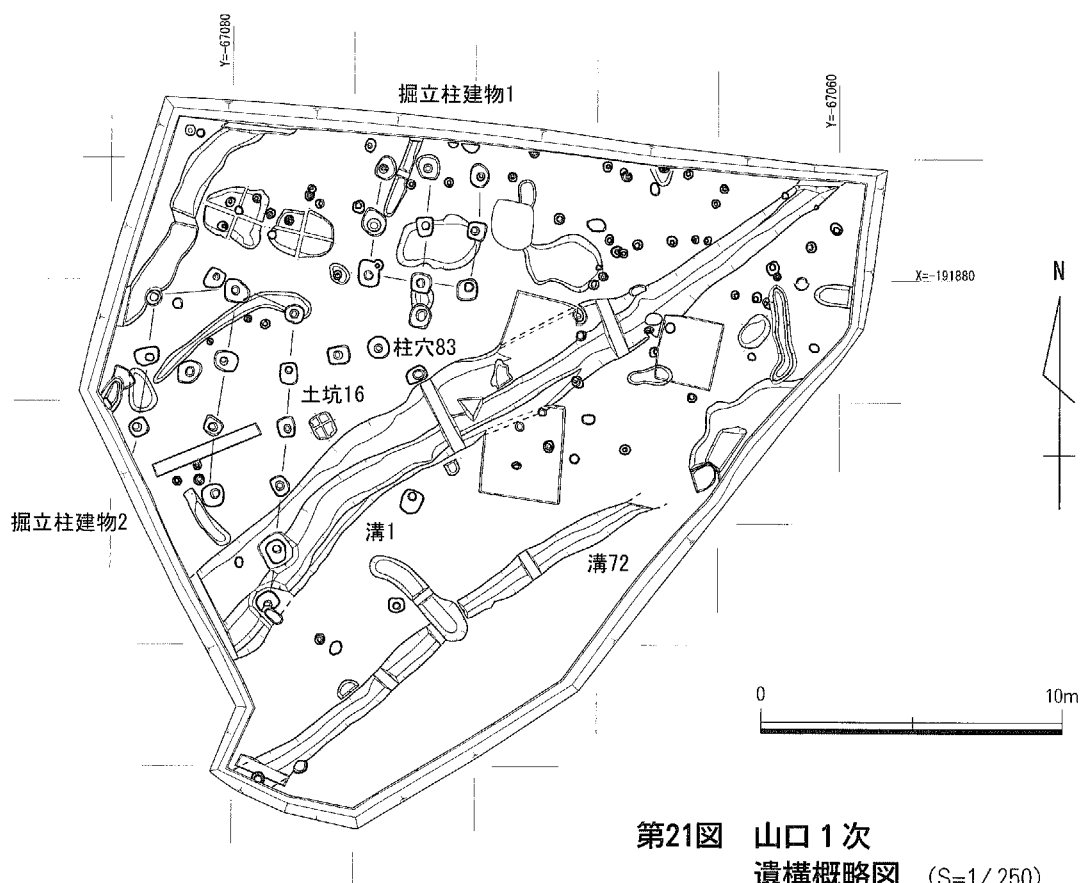
第3節 山口1～4次の調査成果

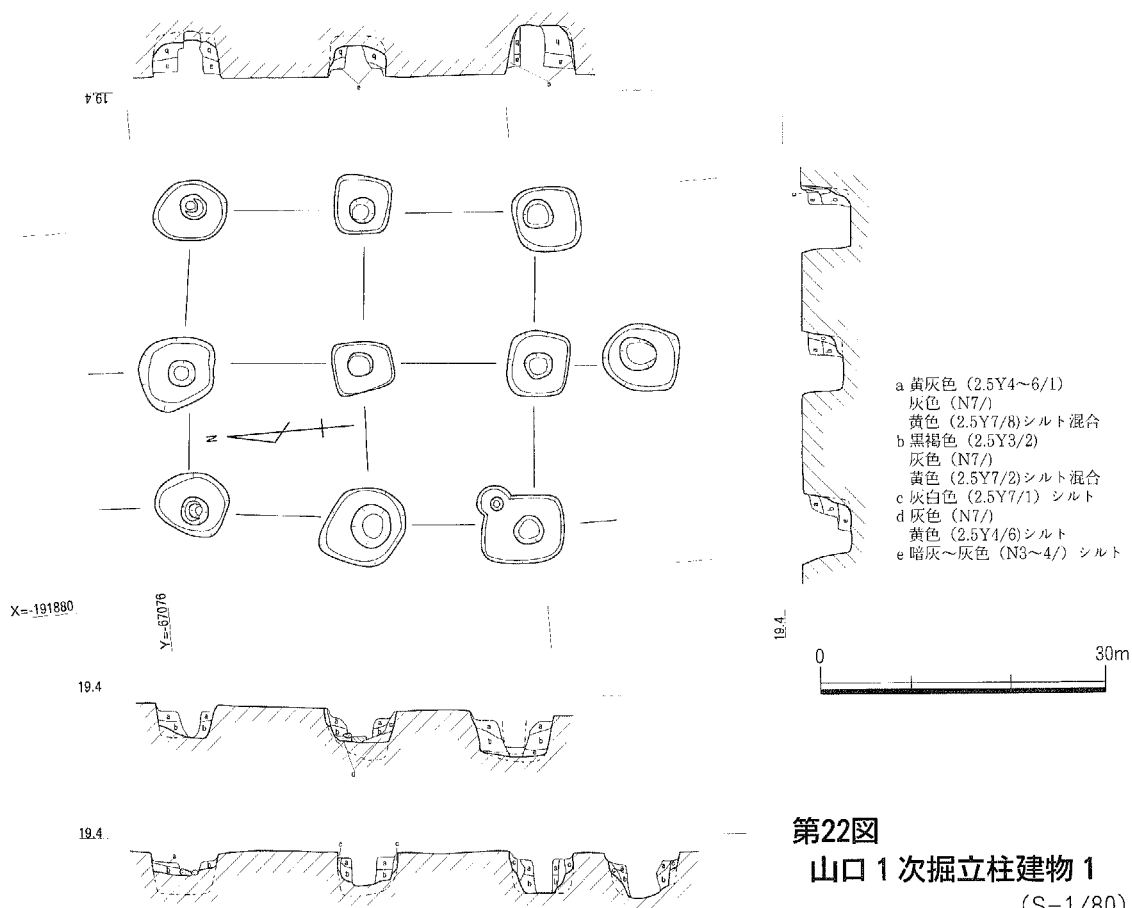
1. 山口1次(97-01・142)の調査成果

本調査区は、前述した94年度の山口遺跡調査区の北側に隣接する箇所である。調査面積は約420㎡であるが、既存建物の基礎によりかなりの部分が攪乱を受けていた。検出した遺構の時期は、中世と飛鳥時代のものである。とりわけ、94年度調査区でもそうであったが、その延長と思われる飛鳥時代の建物の柱穴が数多く検出されている。なお、調査区の基本層序について言えば、盛土下に新しい水田耕作土、その下層には近世のものと思われる旧耕作土が堆積する。さらにその下層にはマンガン粒子の混ざった黒色のシルト層が堆積しており、この層を除去した5層上面が上層遺構面であり、時期的には中世と考えられる。この5層は褐灰色のシルト層であるが、やや不安定な層で調査区全域に広がるものではない。この5層を取り除いた6層上面を下層遺構面と認識しており、時期的には飛鳥時代と考えている。以下、主要な遺構について詳述しておく。

A. 遺 構

掘立柱建物1 確認規模で東西2間、南北2間を測るが、北側が調査区外に延びていく可能性が充分に考えられよう。柱穴の芯々間は、約1.8mである。柱の掘形は方形を呈し、一辺70～90cmとばらつきが見られる。これに対して深さはいずれも40cmほどである。柱当りから使われていた柱の直径は20cmほどと考えられる。柱穴の埋土は、いずれも暗灰色と黄色の土塊が入り混じっ



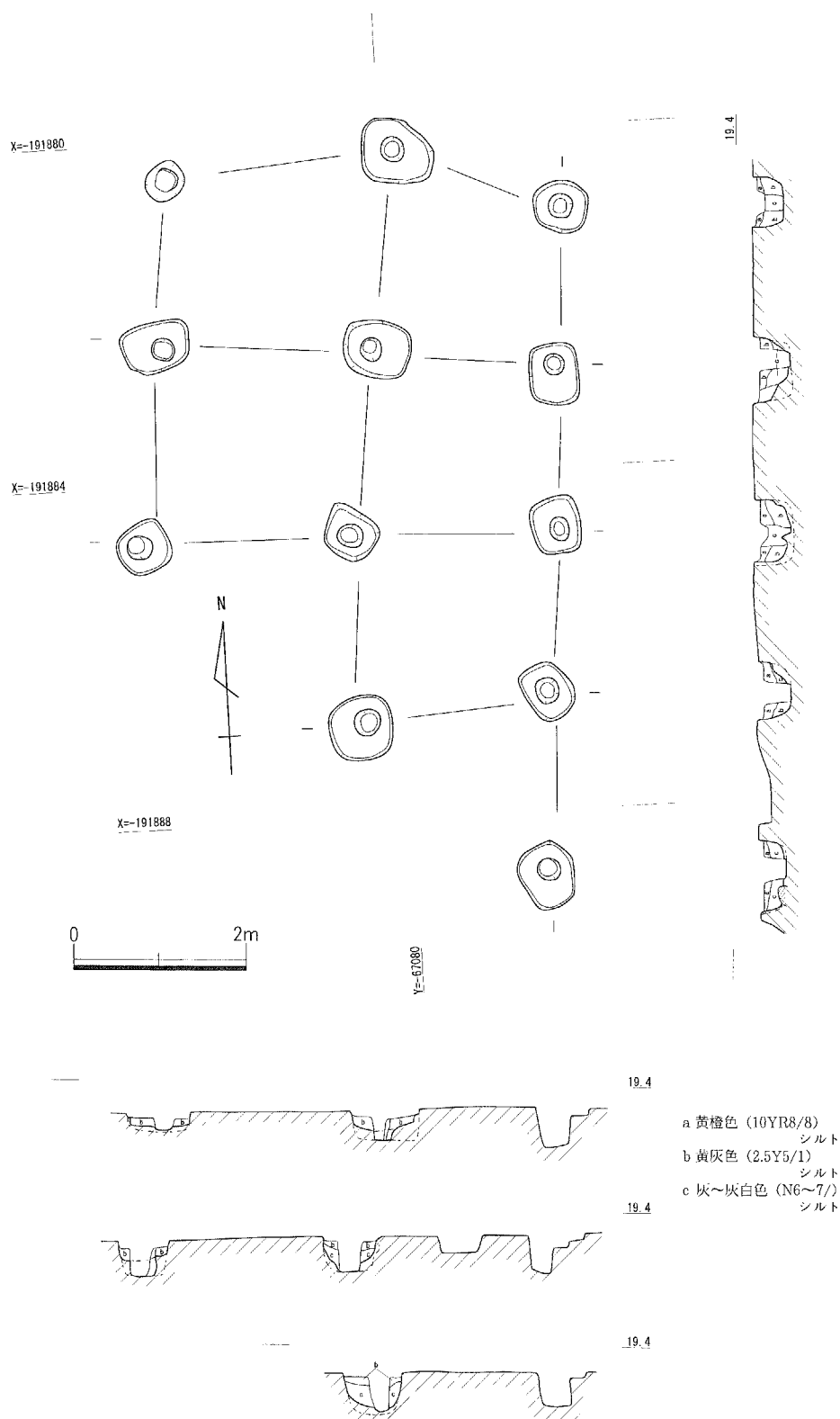


第22図
 山口1次掘立柱建物1
 (S=1/80)

た土であり、一気に埋められた様相が窺がえる状況であった。なお、建物の軸線は座標北より
 6° ほど東へ振っている。建物に伴う出土遺物は、きわめて少ない状況であったが、いくつかの
 柱穴から須恵器の坏蓋片が出土しており、この土器の年代観から建物の時期については飛鳥時代
 のものと考えている。

掘立柱建物2 東西2間以上、南北4間以上の規模となると考えている建物である。柱の並びは
 ややいびつである。したがって当然ながら柱間について言えば、ばらつきが認められ2.20~2.40
 mを測る。しかし、柱通りの整然とした箇所では2.40mとなっていることから、基本的には柱
 間はこの数値を基準としていたものと推察される。柱の掘形は概ね方形を呈し、一辺60~70cm
 を測る。深さは浅いもので30cmほどであるが、その他のものは40~50cmほどであった。柱当
 りから推定すれば用いられていた柱の大きさは直径25cmほどであったものと考えられる。埋土
 について言えば、各々の微妙な違いは認められるもの、概ね黄灰色のシルトと灰色のシルトによ
 って埋められていた。この建物についても出土遺物は少なく、わずかにいくつかの柱穴から須恵器
 の甕・坏蓋と思われる破片が出土しているのみである。これらの遺物については小破片であるため

時期が確定し難いが、おそらく飛鳥時代のものである。また、前述の建物1と建物の軸線方向を同じくし、建物同士の間隔もきわめて自然な位置にあると言えよう。こうしたことなどを勘案すれば、両者が同時期に建てられている可能性は高いものと考えている。なお、建物については、この2棟のみの復元にとどまったが、このほかにも調査区内には柱穴と考えられるに充分な一辺50cm前後の方形を呈した遺構をいくつか検出している。このことからすれば、復元には至らなかったものの当該地にはこれ以外の掘立柱建物が存在していた可能性が考えられよう。



溝1 調査区の北東から南西にかけて延びる溝である。北東の上流部では幅はやや狭く1mほどであるが、下

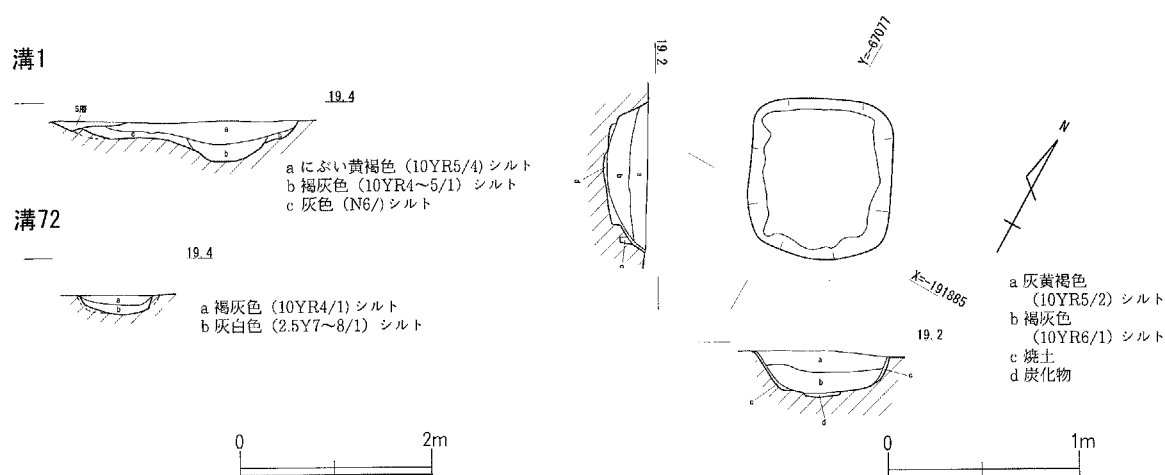
第23図 山口1次掘立柱建物2 (S=1/80)

流部では3m近くと広がってきている。深さは上・下流とも40cmほどであり、幅に較べればやや浅い溝と言えよう。埋土は上層ににぶい黄褐色のシルトが、下層には褐灰色のシルトが堆積していた。出土遺物は比較的多く、別項で詳述するが飛鳥時代の須恵器坏・瓶・壺、土師器の椀・高坏・甕などが出土している。なお、この溝と前述した建物2とは、切り合い関係にあり、この溝が埋まった後から建物が建てられたことが判明している。

溝72 前述の溝1とほぼ平行し、その南東側で検出された溝である。幅は最も広いところで90cm、狭いところでは50cmほどである。深さは深いところでも30cmほどと比較的浅い溝である。埋土は上層が褐灰色のシルト、下層は浅黄色のシルトと上層の土が混じった状況であった。この溝からは、土師器の細片しか出土しておらず、時期は明確にし難い。ただ、6層上面での検出遺構であることや埋土の状況も比較的溝1と似ていることなどから、この溝についても飛鳥時代のものである可能性が高いものと考えている。

土坑16 溝1の西側で検出した土坑で、隅丸の長方形を呈し、長辺1.6m、短辺1.4mほどを測るものである。深さは20cmほどで、埋土は上層が灰褐黄色のシルト、下層はそれよりやや薄い褐灰色のシルトであったが、緩やかに立ち上がる壁際のほぼ四周には厚さ1cmほどの焼土が見られる。また底部には炭の堆積が認められた。ただし直接火を受けたような痕跡は認められず、その用途については不明と言わざるを得ない。時期的には、これまでと同様に飛鳥時代のものと考えている。出土遺物は土師器の細片のみであった。

土坑64 長辺2.0m、短辺1.6mほどの不整形な土坑で、深さは15cmほどであった。埋土は褐色のシルトで、飛鳥時代の須恵器が少量出土している。



第24図 山口1次溝1・72断面図 (S=1/80)

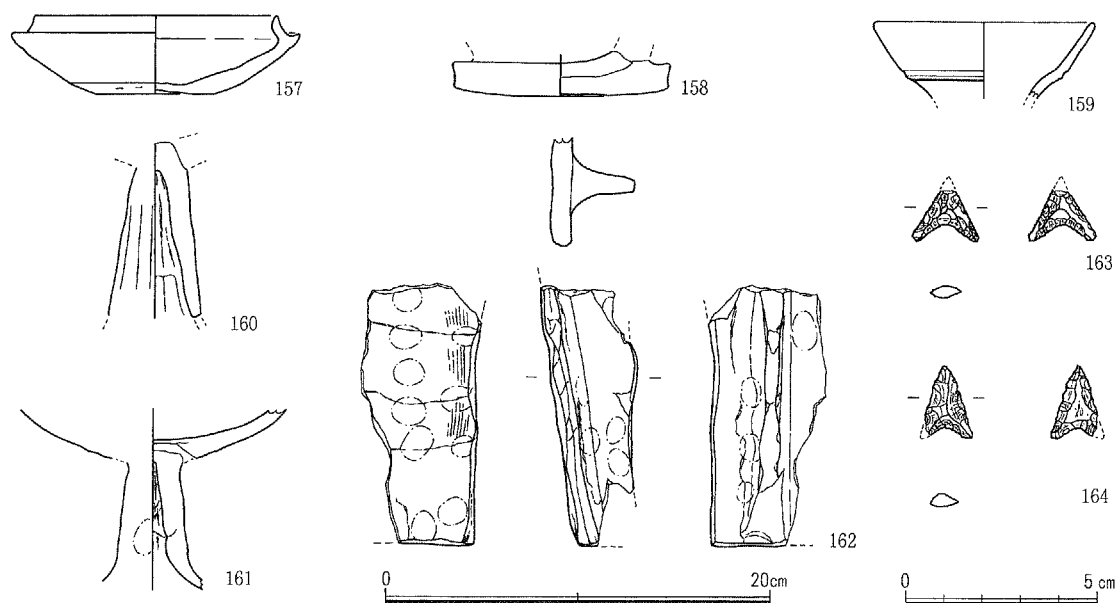
第25図 山口1次土坑16 (S=1/40)

B. 遺 物

157～164は、包含層出土遺物である。157は須恵器坏 H 身で、口径12.5cmを測る。底部には回転ヘラケズリが認められ、受部立ち上がりは外反しながら、内傾する。158は、円盤状の底部に直線的な体部を備える須恵器播鉢底部である。159は、内湾する口縁部に1条の凹線が認められることから、甕口縁部と考えられる。これらは包含層出土の須恵器群で、坏 H の存在や口縁部が発達した甕の形態などから飛鳥Ⅰ～Ⅱに帰属すると理解される。160・161は土師器高坏で、脚柱部は中空で外下方に直線的に広がり、内面にはしぼり痕が観察される。坏部は形の形態を呈す。162は土師質の甕の一部である。焚口左側底部付近で、焚口に沿ってそこから約2cmの位置に粘土紐により底が貼付される。底は高約3cmを測る。内面には幅2.5～3.5cmの粘土紐接合痕が観察され、タテ方向のハケにより調整される。これらも須恵器とほぼ同時期かやや後出すると考えられる。163・164はサヌカイト製凹基式石鏃である。163に比して164が長大化がやや進展している。

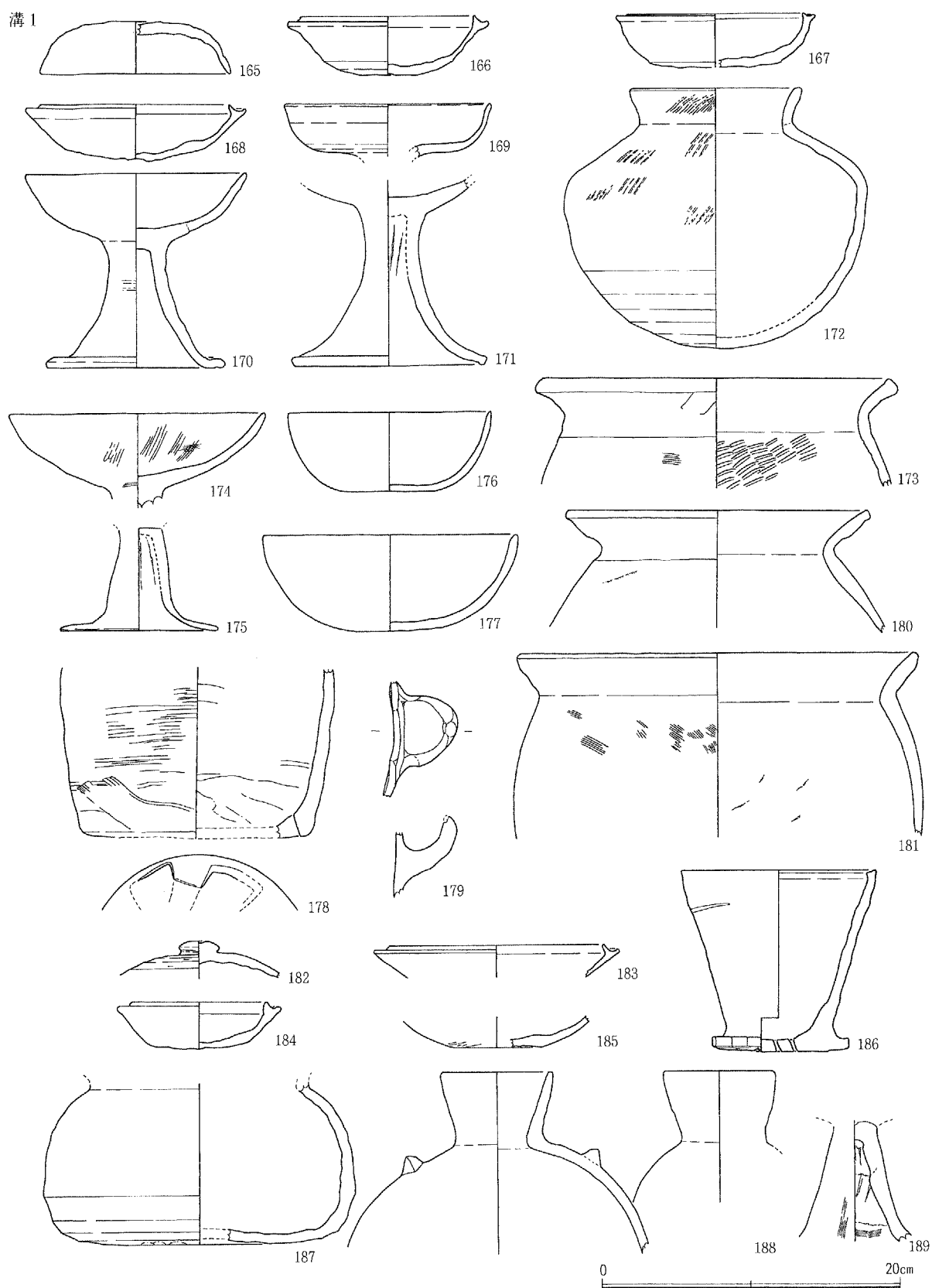
165～189は、調査区中央を貫流する溝1出土遺物である。このうち165～179は1層、180～189は2層の出土である。1層からは、須恵器では坏 H、長脚の高坏、短頸壺、土師器では高坏、坏、甕、甗などが出土した。

165～168は須恵器坏 H で、166を除いていずれも天井・底部はヘラ切り不調整で、166の回転ヘラケズリも徹底されておらず、省略化が看取される。蓋口径は12.6cm、身は11.5～12.5cmを測る。坏身の受部立ち上がりは、いずれも内傾し著しく短く、痕跡的なものとなっており、坏 H 身としては最終末の形態と判断される。なお、167の内面には「×」のヘラ記号が付される。



第26図 山口1次出土遺物1 (S = 1/4、ただし163・164はS = 1/2)

溝 1



第27図 山口 1 次出土遺物 2 (S = 1/4)

169・170は須恵器高坏で、坏部形態は皿形（169）と碗形（170）が認められる。170の脚部は、坏底部からラッパ状に裾部へ広がる脚柱部には2条の凹線が認められ、長脚2段の形態を留め、脚裾端部は屈曲して折り曲げられる。171は、170とほぼ同様の形態・長さの高坏脚部で、回転ヨコナデも確認されるが、色調は浅黄橙色（10YR8/4）を呈し、土師質焼成である。172は短頸壺で、外面は体部下半に回転ヘラケズリ、上半にタタキののち回転ヨコナデが行われる。体部外面には凹線等の装飾は施されない。173は甕口縁部で、緩く屈曲する頸部から短い口縁部がのび、口縁端部は上方へやや拡張する。体部内面には同心円文、外面にはカキメが認められ、形態的・技法的に須恵器と認識されるが、これも171同様土師質の焼成である。

174・175は土師器高坏で、坏部は大きく開く形の形態で、内外面にタテ方向のミガキが認められる。脚部は、脹らみをもつ柱状の脚柱部から屈曲して大きく開く裾部を備える。176・177は土師器坏で、平坦な体部に大きく内湾する口縁部を備え、深の形態を示す。器面の磨滅が著しく、調整は詳らかでない。それぞれ口径・器高は、13.6・5.4cm、16.7・6.5cmを測り、規格差が認められる。178は土師器甕で、平らな底面は底径に沿って穿孔される。底部から内湾する体部が直立気味に伸びる。調整は内面がヨコナデ、外面がナデののち断続的なヨコハケが行われる。179～181は土師甕の部品である。179は甕体部に貼付される把手で、上方へ屈曲し幅広なものである。180は球形の体部に外上方へ口縁部が付す形態とみられるのに対し、181は体部は長胴の形態を呈すと考えられる。いずれも外面にはタテ方向のハケが観察される。

2層からは、須恵器坏H、擂鉢、提瓶、土師器高坏などが出土した。182は須恵器坏G蓋で、回転ヘラケズリされた天井部につまみが付加される。つまみは扁平な形態を呈す。183～185は坏H身で、口径には8.9cmと14.3cmの規格差があり、底面には回転ヘラ切り不調整（184）と回転ヘラケズリ（185）とが認められる。186は円盤状底部から直線的な口縁部が広がる擂鉢である。規格は、底径9cm、口径12.8cm、器高12.2cmを測る。口縁部はやや内湾しており、端部は中央が凹む端面が内傾する。円盤状の底部は、外周を0.5～2cmの単位で刀子で面取りし、底面外周付近も端部の面取りの後ケズリにより端部処理を行い、丁寧な製作が行われる。底面には、直径1cm以下の小穿孔が未貫通、貫通の別を問わず多数行われる。187は、平底の底部から内傾する体部を備える壺類と思われる。残存部上端から屈曲して口縁部がつながる。188は提瓶口縁部で、肩部には三角形の耳が付加される。体部にはカキメが施されない。189は土師器高坏脚柱部で、内面には螺旋状の粘土紐接合痕が確認される。幅3cm程度の粘土紐1本を、坏部から脚裾部へ広げながら螺旋状に巻き上げて脚柱部を製作することが観察される。

以上が、溝1出土遺物である。1・2層の出土遺物に型式的な差異はなく、最終段階に近い須恵器坏Hと、2層から坏Gも出土する。また、坏Bは認められないことから、飛鳥Ⅲまで下らず、飛鳥Ⅰ～Ⅱの帰属と理解される。

190は掘立柱建物1を構成する柱穴5出土の須恵器坏B蓋で、平坦な天井部から屈曲し、口縁部に至る。内面にはかえりを付さず、飛鳥Ⅲ以降に帰属する。

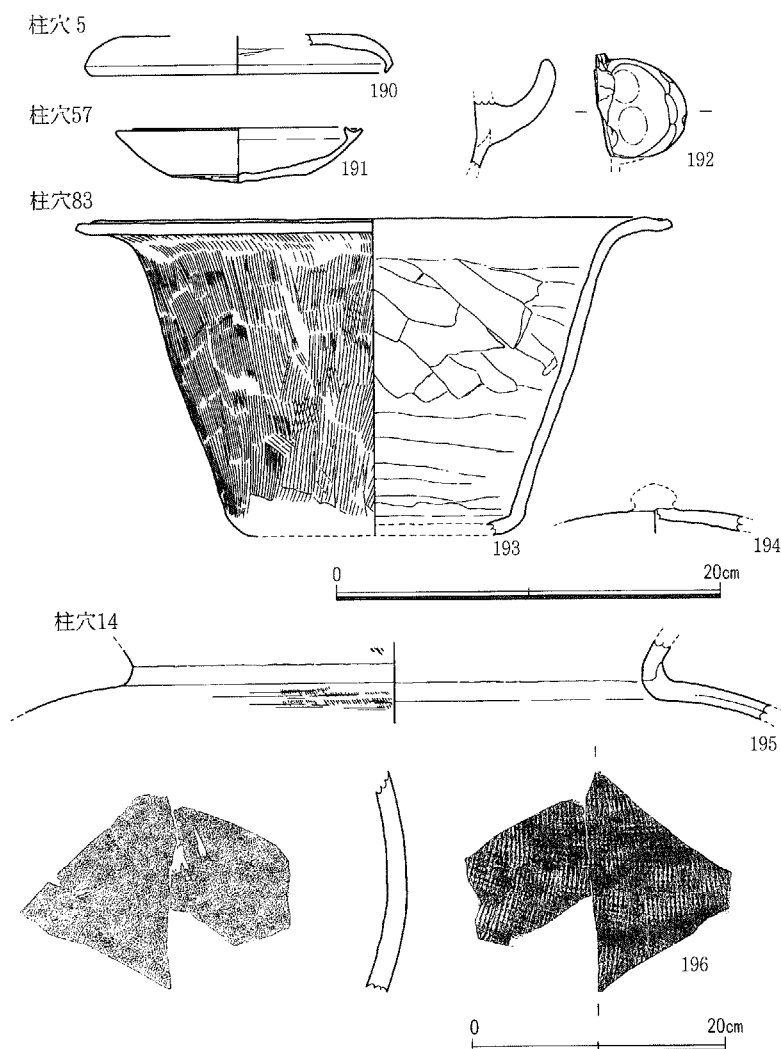
191は掘立柱建物2を構成する柱穴57出土の須恵器坏H身で、底部はへう切り不調整である。192は同じく柱穴57出土の土師器甕把手で、厚手で幅広なものである。

193・194は、溝1に隣接する柱穴83出土遺物である。193は底面はほとんど残存しないが、おそらくは平坦な底部で、外上方へ直線的な体部がのび、口縁部が大きく屈曲して広がる。底面の穿孔は確認できないが、器形は甕と考えられる。調整は、外面が底部から口縁

部までタテ方向に一気に、内面はナデが行われる。194は須恵器坏蓋天井部で、つまみの剥離痕が観察される。

195・196は掘立柱建物2を構成する柱穴14出土の須恵器甕口縁部と体部である。いずれも器厚は1.5cm以上を測る厚手のもので、外面には平行タタキが残存するが内面は同心円文を丁寧にナデ消している。詳細な時期は不明だが、他の土器群より古相を呈す。

以上が1次調査出土の土器群である。掘立柱建物1は柱穴5出土遺物から飛鳥Ⅲ以降に、掘立柱建物2は古相の遺物も含むが、溝1との重複関係から、それ以降に比定される。柱穴83もほぼ同時期と考えられる。溝1は飛鳥Ⅰ～Ⅱに帰属し、多数検出された柱穴群は溝1よりも後出する。この理解は遺構の重複関係からも支持され、溝1が飛鳥Ⅰ～Ⅱに、柱穴群が飛鳥Ⅲにそれぞれ比定し、両遺構には若干の時間差の存在が認められる。



第28図 山口1次出土遺物3 (S = 1/4 ただし、196はS = 1/4)

2. 山口2次(98-01・142)の調査成果

本調査区は1次調査区の西側に隣接する箇所(B調査区)と県道粉河加太線を挟んだ反対側の箇所(A調査区)に相当する。調査面積は約450㎡で、現況は水田及び盛土された雑種地であった。遺構面は大きく分けて3面を確認している。以下、各面ごとに分けて概述する。

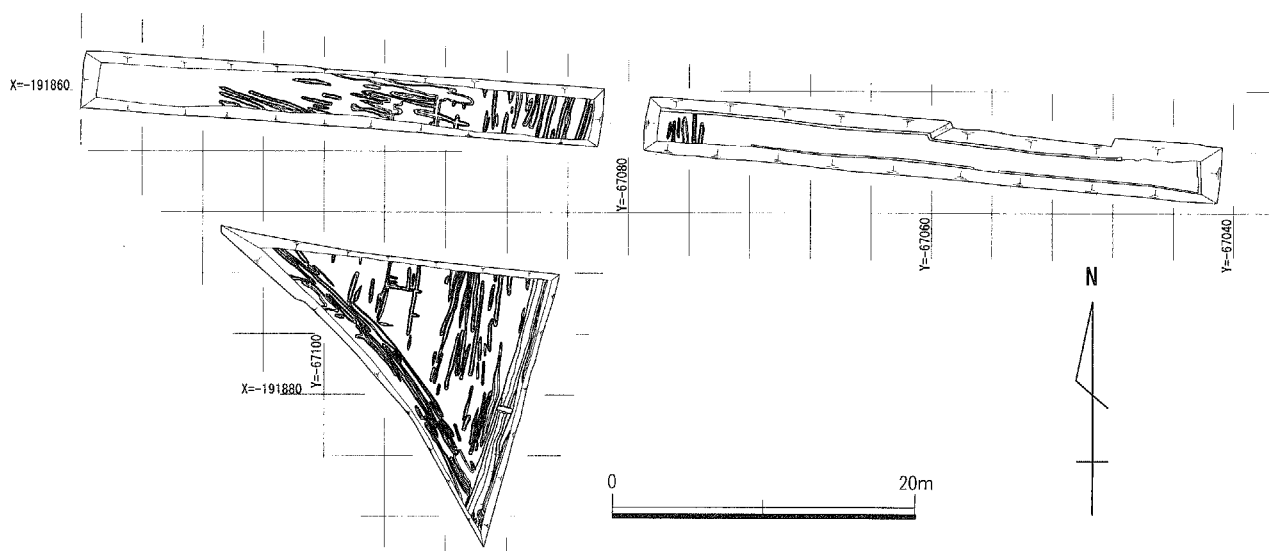
A. 遺 構

a. 第3層上面遺構

この面で検出した遺構は耕作に伴う鋤溝である。鋤溝の幅は、概ね20cm前後で深さは5cmほどであった。鋤溝の方向は、座標北から15°ほど東へ振っている。B調査区においては、ほぼ全面で検出しているが、A調査区の西側は削平をうけておりこの部分では検出することができなかった。鋤溝自体からは中世の瓦器・土師器の細片が出土しているが、層序及び包含層出土の遺物を検討した結果、この鋤溝については、近世のものであると判断している。なお、先に述べた鋤溝の方向は、現在の水田方向と一致しており、少なくとも近世以降現在に至るまで、連綿と水田耕作がなされていたことを窺がわせるものと言えよう。

b. 第5層上面遺構

第5層上面で検出したものとしては、B調査区の溝状遺構がある。ほぼ1m弱の間隔で、8条検出しているが、いずれも幅1mほどで、深さは10cmほどと浅く、平らになっている。埋土は灰色のシルトである。出土遺物は少ないが、この溝状遺構からは13ないし14世紀のものと思われる土師器の皿、瓦器の椀などが出土している。また、層序から考えてもこの第5層上面は中世のものであり、これらの溝状遺構については鎌倉時代から室町時代のものと考えて大過ないものと思



第29図 山口2次第3層上面検出遺構 (S=1/500)

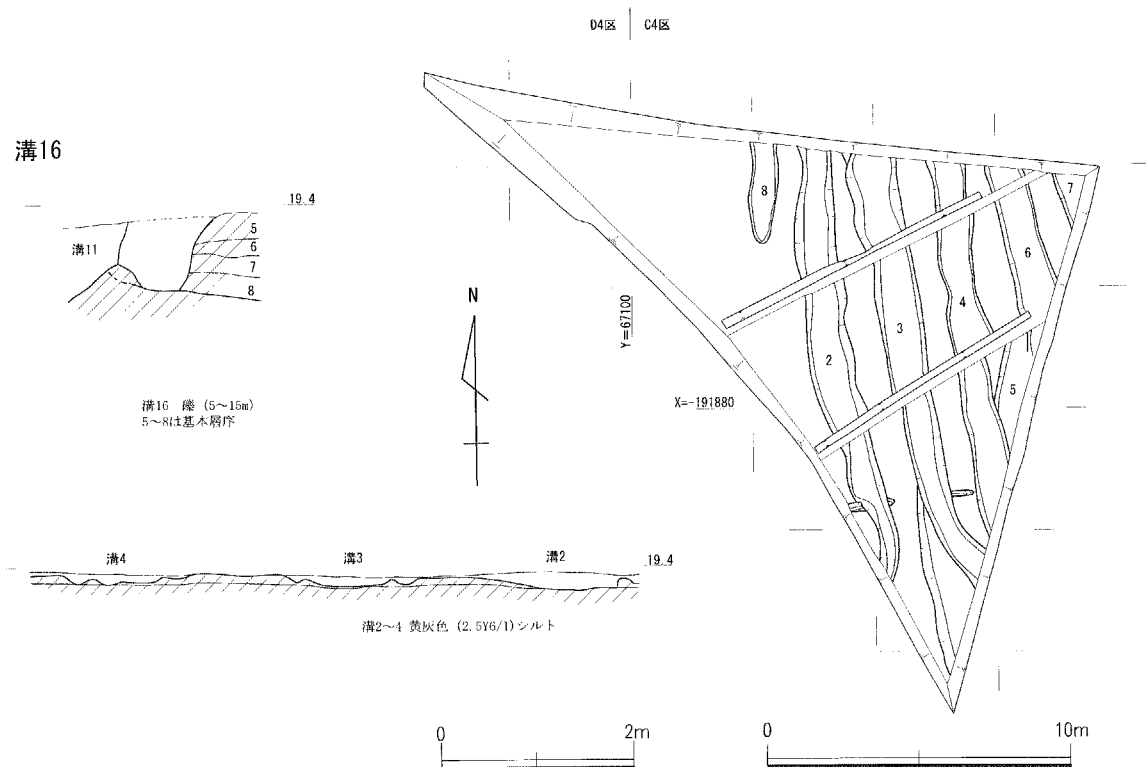
われる。その性格・用途については判然としがたいが、畑作の畝の痕跡である可能性が高いものと考えている。

溝16 幅1m、深さ80cmほどの南東から南西へと延びる溝である。埋土は5～15cm大の礫層であった。出土遺物がなく、時期は確定できないが、層序から考えれば中世のものである可能性が高い。

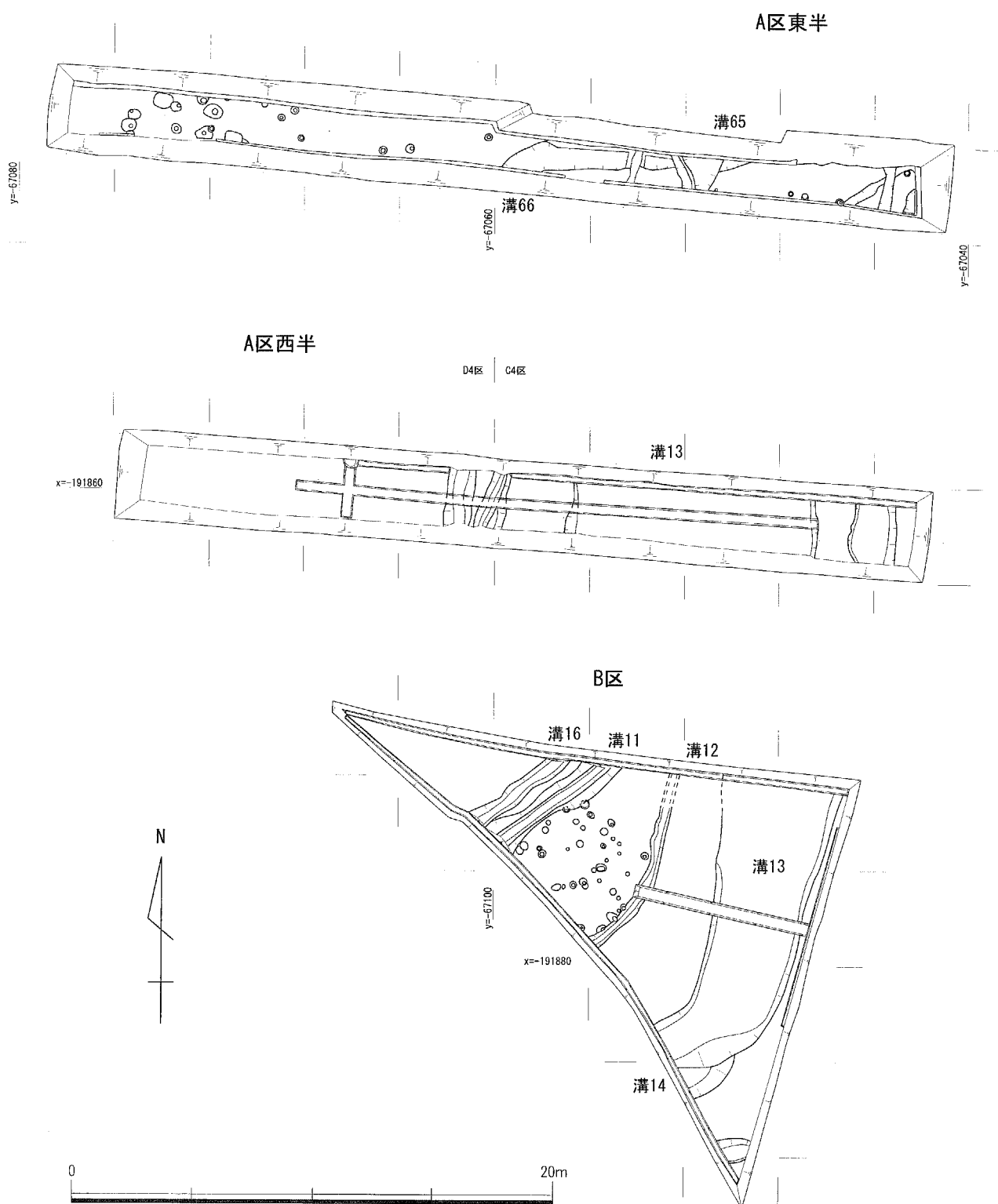
c. 最終遺構面

最終遺構面としているものは、第6層上面および第6層下面に相当するものである。この面ではA調査区・B調査区とも、溝・柱穴などの遺構が検出された。このうち主要なものについてその概要を記すことにする。

溝11 A調査区東半部の東端で検出したもので、B調査区の西側を南東方向に流れる溝につながり一連のものになると考えている。幅は1.0～1.2mほどで、深さは1.6mを測る。底部は20～30cmほどの平となっており、全体としては逆台形状を呈している。溝の埋土は褐色シルトに1cm大の黄色シルトのブロックが混じっている状況であった。遺物は少量であるが、飛鳥時代の土師



第30図 山口2次B地区第5層
上面遺構概略図・土層図 (S=1/250・S=1/80)



第31図 山口2次最終遺構面遺構概略図 (S=1/250)

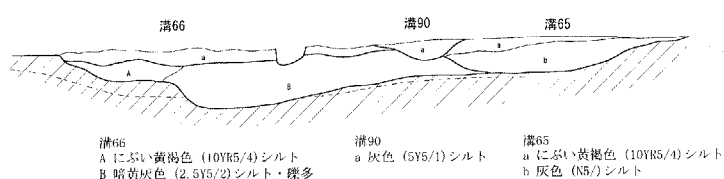
器の埴、須恵器の坏などが出土している。

溝13 A調査区西半の東部から県道部分を経てB調査区の東側へとつづく幅6～10mの溝である。深さは約1mほどで、1～10cm大の礫によって埋まっていた。この溝からは斜格子の叩きのある瓦のほか黒色土器などが出土している。一応ここでは溝として扱っているが、埋土の状況などからも自然流路である可能性が高い。また、この自然流路は埋土の状況その方向などを勘案すれば、94年度の山口遺跡の発掘調査で検出された自然流路（SD-35）へとつながっているものと考えられよう。

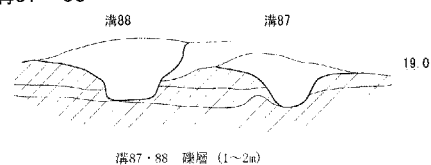
溝65 A調査区東半部で検出した幅約1.5m、深さ40cmほどの溝である。この溝自体から出土遺物はなく時期を確定するには困難であるが、第6層で検出されていることから新しくみても平安時代のもので言えよう。また、この溝については、前年度調査（山口遺跡1次調査）で検出されている溝（溝1）へとつながっていく可能性を考えている。

そのほか数多くの柱穴と思われる遺構が検出されているが、これらについては、残念ながら具体的な建物を復原するには至らなかった。

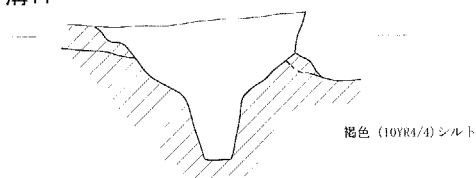
溝65・66・90



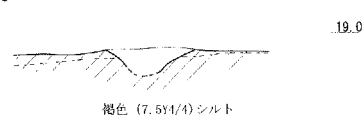
溝87・88



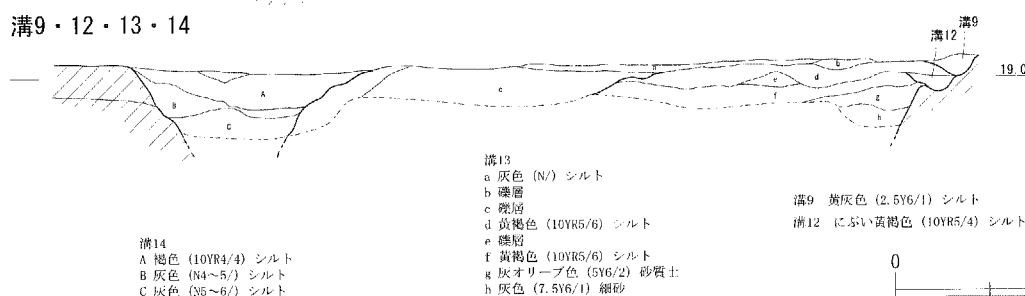
溝11



溝15



溝9・12・13・14



第32図 山口2次最終遺構面溝土層図 (S=1/80)

B. 遺 物

山口2次調査では、出土遺物がコンテナ4箱と極少数であった。197～202は、包含層出土遺物である。197は、3層から出土した土師質の管状土鍾である。長4.6cm、最大径2.8cmを測り、寸胴な形態を示す。2次的焼成を受け、にぶい橙色(2.5YR6/4)を呈す。198・199は4層出土の瓦器皿および小碗である。皿は平らな底面から外上方に短い口縁が付加される。小碗は、体部下半は指頭圧痕、口縁部はヨコナデが認められ、底面には断面三角形の高台が付すもので、通常の瓦器として理解すれば13世紀前半の特徴と類似する。

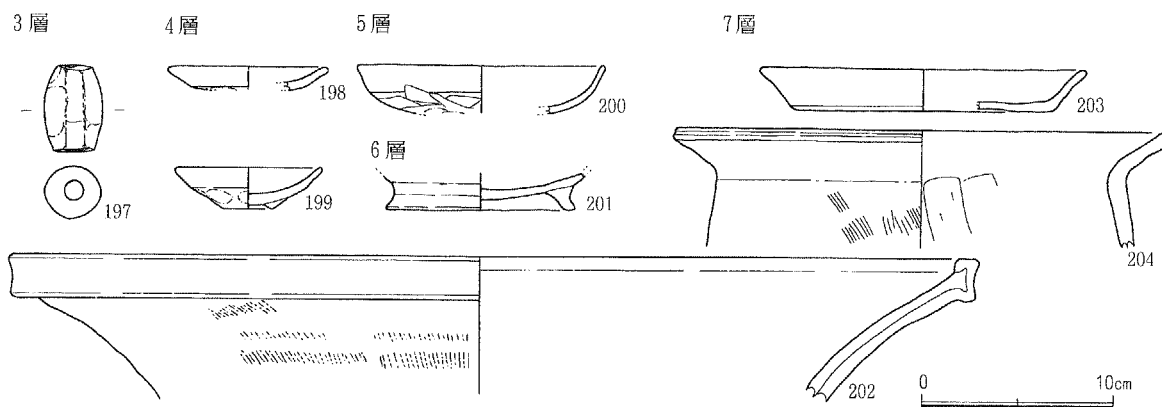
200は、5層出土の口径12.8cmの土師器皿である。底部は指頭圧痕が残存し、丸底の形態を呈し、それに内湾する口縁部を備える。13世紀代の中世前半に帰属するか。

201・202は6層出土遺物である。201は黒色土器碗底部である。内面のみ黒色処理されるA類で、高台は比較的高くて外反形態のものがハの字形に貼付される。10～11世紀代に帰属するか。202は須恵器大甕口縁部で、口縁端部は上下に拡張され、内側に肥厚する。頸部には凹線や文様は施されず、平行文タタキののち回転ナデが行われるにとどまる。

203・204は7層出土遺物である。203は土師器皿で、平らな底面に外反気味の短い口縁部を備える。口径は16.7cm、器高2.2cmを測り、浅身の形態である。底面は不調整で、口縁部は確りとしたヨコナデを2周行うため、やや凹凸を伴う。「多段ヨコナデ」技法の範疇で理解されるのであれば、10世紀後半に帰属する。204は土師器甕口縁部で、外面をタテハケ、内面をケズリにより調整する。口縁端部は外形する面をもち、その端面中央には凹線が入る。体部は残存しないが、おそらく長胴の形態を呈すと推測され、飛鳥～奈良時代の所産とみられる。

層序の出土遺物は、以上のとおり飛鳥～奈良、古代、中世のものが断続的に確認される。

205～208は、5層上面検出の溝2・3出土遺物である。205・206は、溝2出土の瓦器皿・土師器皿である。いずれも底面は丸く、口縁部が内湾する。207・208は、溝3出土の土師器皿・瓦器口縁部である。208には疎らなミガキが残存する。



第33図 山口2次出土遺物1 (S = 1/4)

209～216は、最終遺構面検出の遺構出土遺物である。

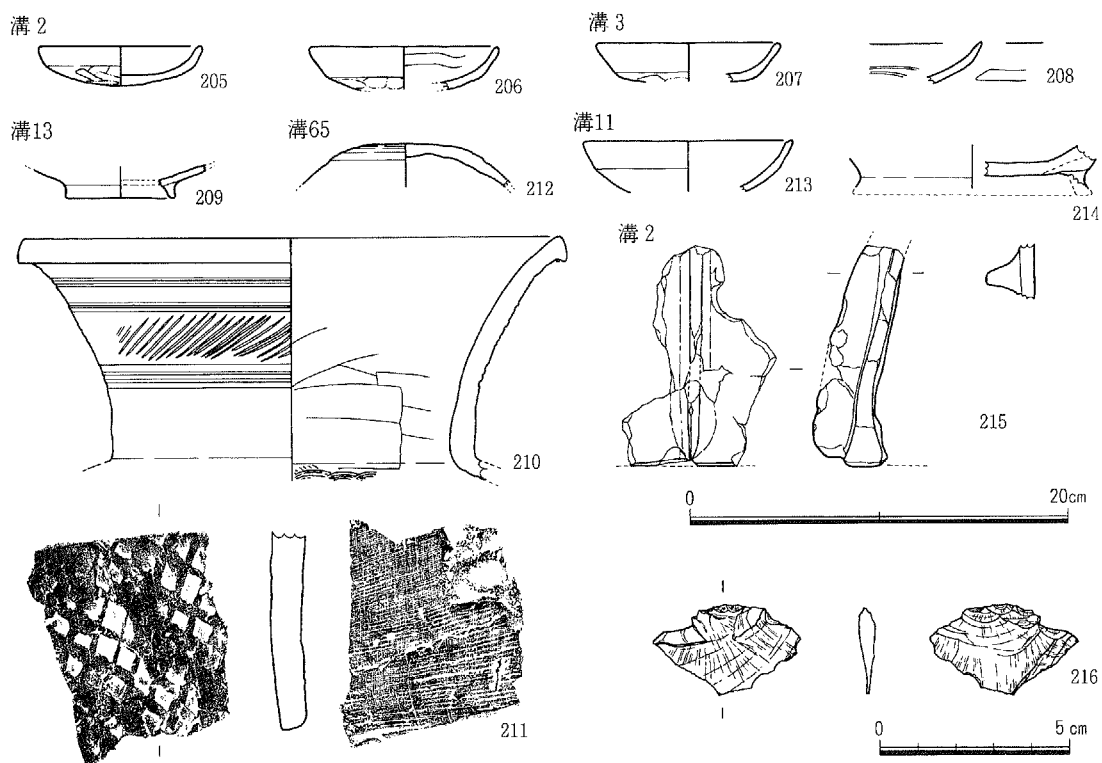
209～211は溝13出土遺物である。209は、黒色土器 A 類の底部である。高台は直立気味で短く、やや簡略的なものである。210は須恵器大甕口縁部である。頸部から口縁部まで外反し、口縁端部は断面三角形形状を呈す。頸部は凹線による区画され、その間に斜線が連続してヘラ描きにより線刻される。これは、古墳時代の甕頸部に認められる波状文や列点文をヘラ描き斜線で表したものと考えられ、文様の簡略化を認識できる。211は平瓦で側縁が一部残存し、側縁はケズリにより面取り端部処理される。凸面には一部ケズリにより整形されるが斜格子タタキが残存し、凹面には布目と、側縁と同一方向の細かい条線が残存する。比重が重く、須恵質の焼成である。調査区北側に位置する山口廃寺帰属の瓦と考えられる。

212は、A 区溝65出土の須恵器坏である。坏 H 蓋天井部または H 身底部の可能性があり、今回は蓋で図示したが、然したる根拠はない。図上の天井部は、回転ヘラケズリが認められる。

213・214は、溝11出土の土師器坏または皿・須恵器壺類底部である。213は丸みを帯びた底部に内湾する口縁部を備え、端部が内傾する。調整は不明である。

215は溝14出土の土師質竈である。底は突帯状に底部まで貼付されている。底の角度から、焚口右底側と考えられる。216はピット56出土のサヌカイト製横長剥片である。

以上 2 次調査の出土遺物である。遺構および包含層出土遺物から、第5遺構面が13世紀を中心とする中世に、最終遺構面が飛鳥時代～古代後半に帰属すると理解することが可能である。



第34図 山口 2 次出土遺物 2 (S = 1/4、ただし216は S = 1/6)

3. 山口3次(99-01・142)の調査成果

A. 遺 構

3次調査区は、2次調査区の西側に当る地区であり、県道粉河加太線の北側と南側の拡張部分約485㎡を対象として調査が実施された。この内、県道の北側をC・D調査区、南側をE調査区としている。現況はすべて水田であった。

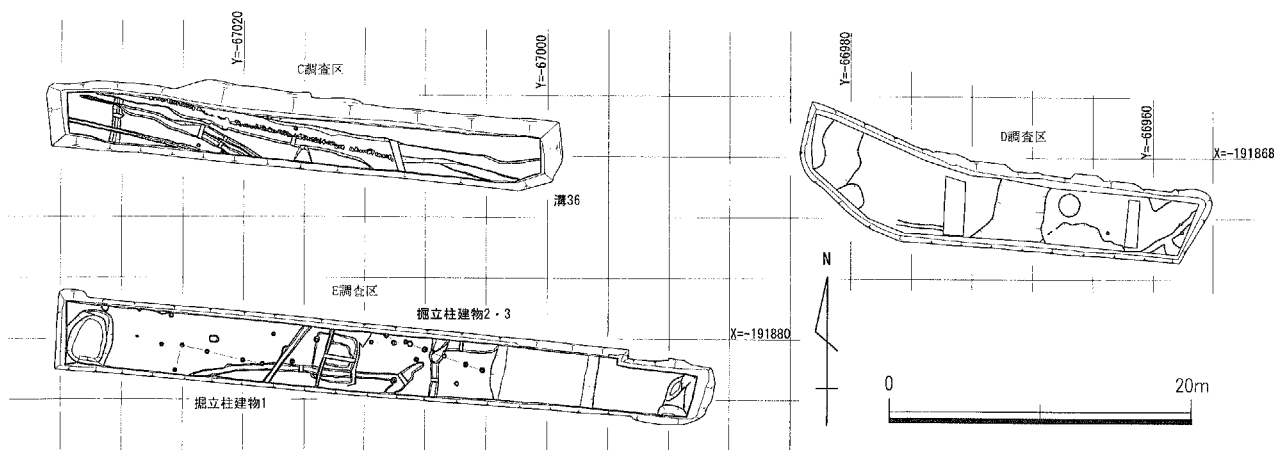
検出した遺構面は、基本的には2面であるが、各調査区において微妙な差異があり、たとえばC調査区の上面は近世～中世後半(室町時代)にかけてのものと思われ、下面は古代～中世前半(鎌倉時代)のものと思っている。これに対し、E調査区では上面は近世～中世、下面は古代(飛鳥時代および平安時代)のものであると認識している。

以下、各面及び各調査区において検出された遺構について記述する。

a. 上面遺構

掘立柱建物1 E区東側で検出した建物である。確認規模で、東西2間、南北1間以上となる。掘形はいずれも直径20cmほどで、深さも20cmほどである。建物の軸線は磁北に対して12°ほど東に振っている。柱の掘形から中世の土師器の皿が出土している。

掘立柱建物2 E区中央北よりで検出した建物である。東西に6間と長くなっており、さらに大きくなる可能性もある。南北は1間分を確認したのみで、調査区北側外に延びていく。掘形の直径は20cm前後、深さはばらつきがあり15～25cmほどであった。柱間は1.5m前後である。建物の軸線は磁北に対して20°ほど東に振っている。柱穴から出土遺物はなく、時期を確定し難いが、層序・埋土などから推定すれば中世の建物と考えて大過ないものと思っている。

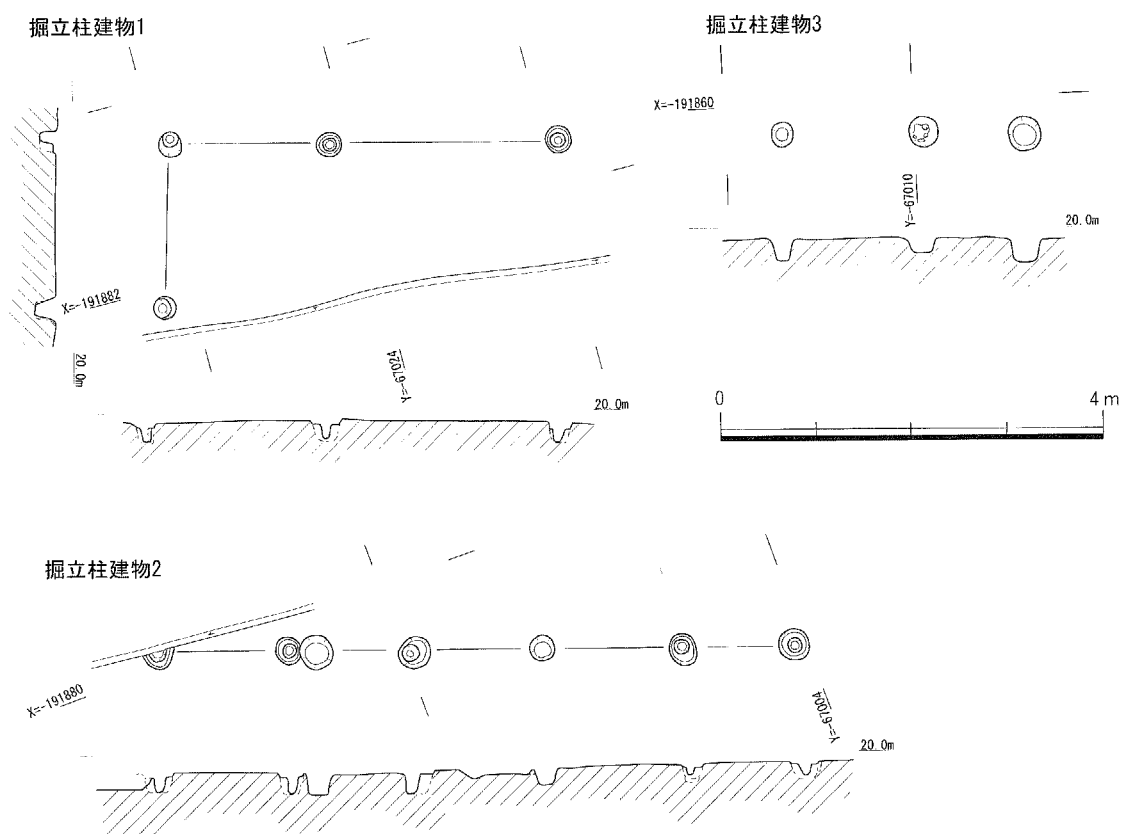


第35図 山口3次上面遺構概略図 (S=1/500)

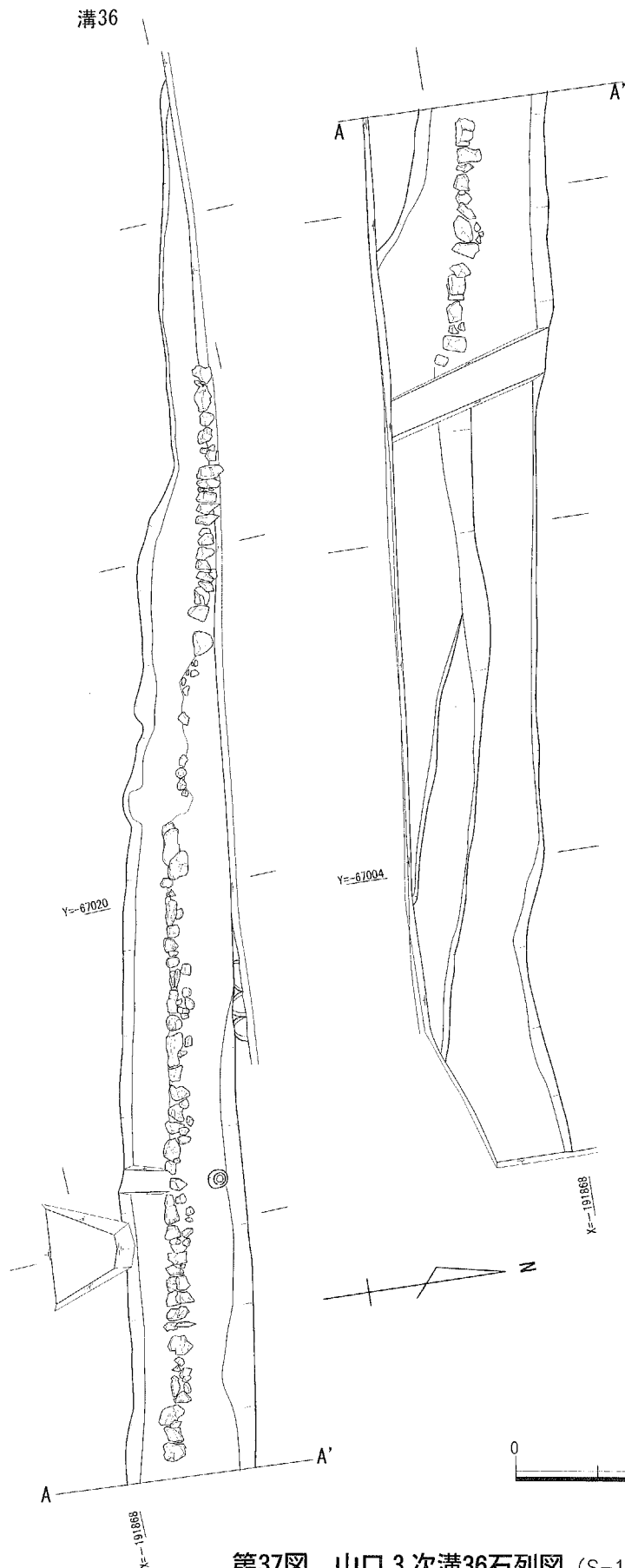
掘立柱建物3 同じくE調査区で検出された掘立柱建物である。東西は2間だが、南北については調査区北側外に延びていくもようである。東西の柱間は等間隔ではなく西側は1.6mと長く、東側では1.1mほどと短くなっている。建物の軸線はわずかに1°だけ東に振っている。この建物についても出土遺物は確認していないが、中世のものである可能性が高い。

溝1-2 E調査区の東寄りで検出した溝である。ほぼ南北方向で、幅は7mと広いが、深さは30~50cmほどである。埋土は上層が灰色シルト、下層は灰色シルトと黄褐色の鉄分が混ざったものであった。出土遺物としては土師器皿・備前の播鉢などが出土している。なお、この溝については、自然流路であった可能性も考えている。

溝36 C区で検出された北西から南東に延びる溝である。延長26mを検出した。溝の幅は約1.2~1.5mで深さは35cmほどであった。溝の北側にはほぼ60cm間隔で杭が打設され、横板を通してある。またさらにその内側は石積みとなっており、10~30cm大の礫が積まれていた。石積は1段でやや雑な積み方である。埋土は、暗緑灰色のシルトで、この中からは土師器皿や中国製の青磁碗、瓦質土器など概ね室町時代後半の土器が出土しているが、これらに混じって少量ではあるが近世の土器も確実に出土しており、このことからこの溝については、近世段階で埋まったも



第36図 山口3次掘立柱建物1~3 (S=1/80)

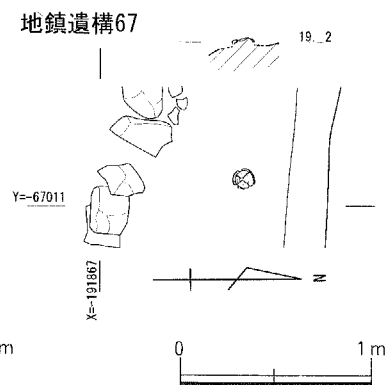


のと判断している。

溝37 前述の溝36の南側をほぼ同じ方向に流れる溝である。途中で二股に分岐するなど溝幅は一定していない。深さは深いところでも20cmほどと比較的浅い溝と言えよう。この溝も近世のものである。

溝38 溝37・38と交錯するように南北方向に流れる溝で、幅は約80cm、深さ20cmを測る。出土遺物がなく、時期は決め難いが溝37・38によって切られていることから、これらの溝より古いことは確実であり、中世のものになる可能性もある。

土坑32 E調査区西端で検出した土坑である。長径4m、短径3m以上の不整形な形状を成している。深さは75cmほどで、底面は比較的平らとなっていた。埋土は大きく3層に分かれ、上層は褐灰色シルトと黄褐色シルトの

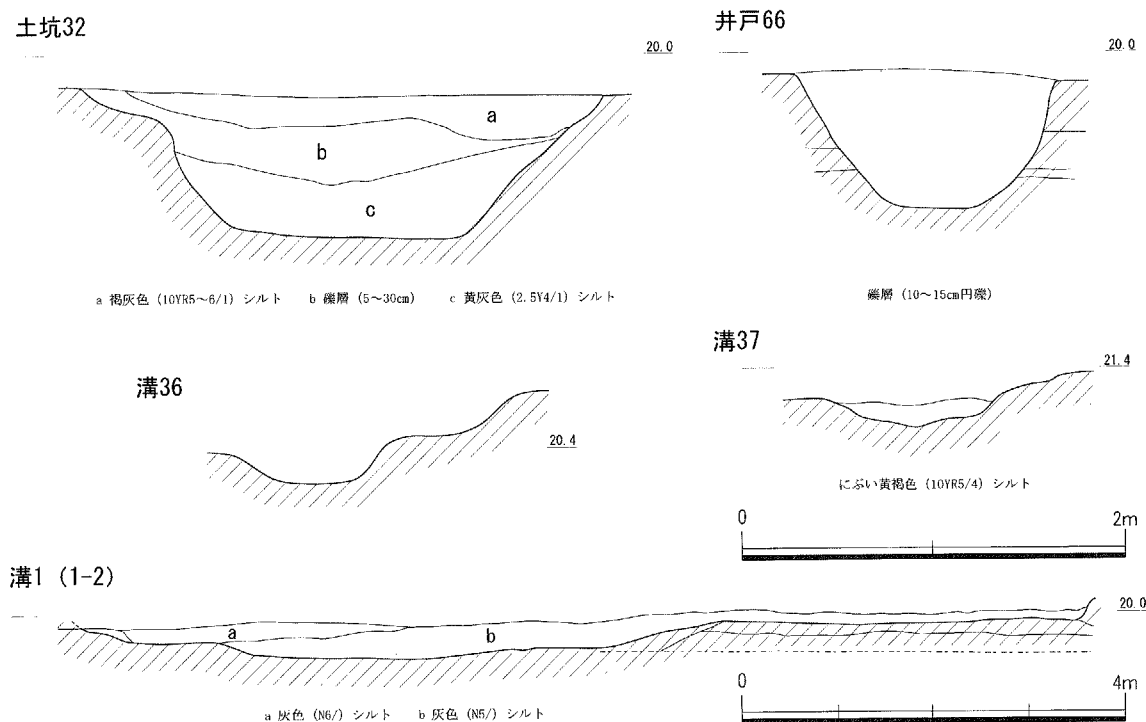


第37図 山口3次溝36石列図 (S=1/80) および地鎮遺構67 (S=1/40)

混じった土、中層は黄灰色シルトに5～30cm大の礫が混じる。下層は黄灰色シルトであった。この中からは主に土師器皿・備前の播鉢・中国製の青磁など中世のものが出土しているが、少量近世の遺物も入っており、完全に埋まったのは近世になってからと考えている。なお、この土坑については、形状・大きさから井戸であった可能性も考えられよう。

井戸66 D調査区で検出した直径1mほどの石組みの井戸である。深さは、70cmほどと浅い。石積みは5段ないし6段で、10～20cm大の砂岩が用いられている。意識的かつ一気に埋められたようで、10～20cm大の石がぎっしりとした状態で投げ込まれていた。出土遺物には東播須恵器鉢・土師器皿などがある。鎌倉時代末か室町時代でもはじめの頃と考えている。

地鎮遺構67 前述のC調査区溝36の肩口を掘り切った面で検出したものである。直径13cmの土師質皿を上向きに置き、それに重ねるように直径10cmの皿を下向きに置いている。重ね合わさった内部からは何も検出できなかった。おそらく意図的に置かれたものと考え、ここでは一応地鎮遺構として取り扱ったが、積極的に地鎮とするに足る証拠があるわけではない。また、この溝(溝36)との関係も不明である。なお、この用いられた土師器皿について言えば、概ね14世紀のものと考えている。



第38図 山口3次上面遺構断面図 (S=1/40および1/80)

b. 下面遺構

下面遺構について言えば、前述したように古代、具体的には飛鳥時代のものが大半であった。とりわけ、E調査区の西側で掘立柱建物の柱穴と思われるものを数多く検出している。これらは、94年度の山口遺跡の調査および山口遺跡1次調査で確認されている一連の建物群の拡がりとして捉えられるものと思っている。以下、これらの建物を中心に下面で検出した遺構について概述しておく。

掘立柱建物 4 C調査区東側で検出した建物である。確認規模で東西2間、南北1間以上の規模であるが、おそらく調査区外の南側に延びてゆくものと思われる。柱の掘形の形状は、やや歪な円形で直径30cm前後である。深さは10ないし15cmと比較的浅い。おそらく後世に削平を受けたものと思われる。柱間は東西が1.2m前後、南北はやや広く1.5mほどとなっている。柱穴のひとつから土師器皿が出土している。皿の底部は糸切りとなっており、おそらく中世でも前半、鎌倉時代はじめの可能性が高いものと考えている。

掘立柱建物 5 C調査区東側で検出した建物である。確認規模で東西2間、南北1間以上の規模である。おそらくこの建物についても南側へとさらに延びていくものと思われる。柱の掘形は直径30cm前後、深さは15cmほどである。柱間は0.9mである。柱穴より瓦器塊が出土していることから、この建物についても中世のものと考えている。

掘立柱建物 6 C調査区中央付近で検出した建物である。東西に整然と並ぶ3間分の柱穴を確認したため建物として復元したが、対応する南北の柱穴については確定できなかった。柱の掘形は直径35cmほどで、深さはいずれも15cm前後である。この建物に関連する柱穴からの出土遺物は

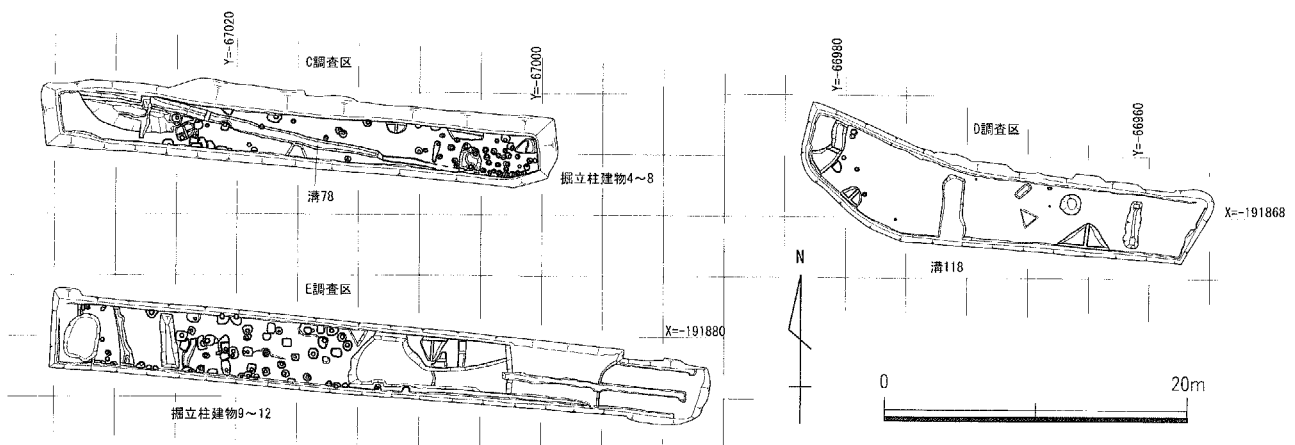
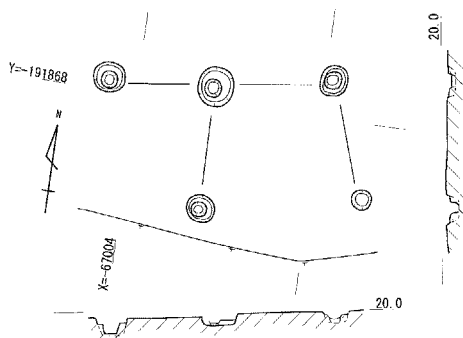
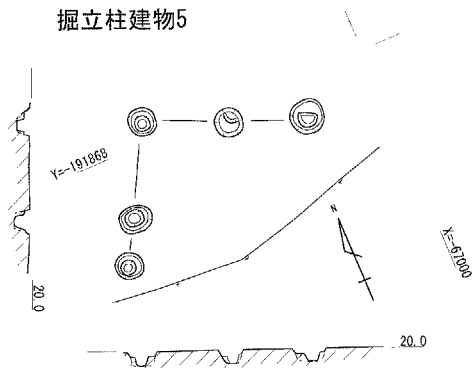


図39図 山口3次下面遺構概略図 (S=1/500)

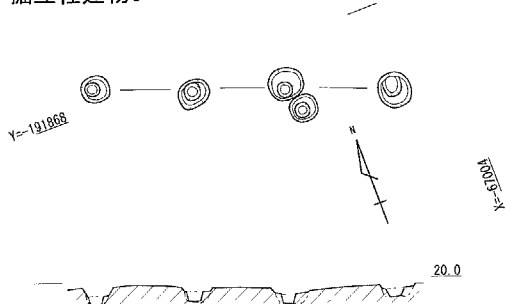
掘立柱建物4



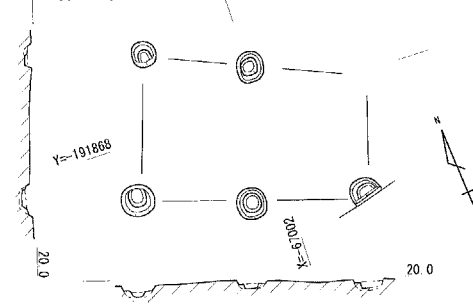
掘立柱建物5



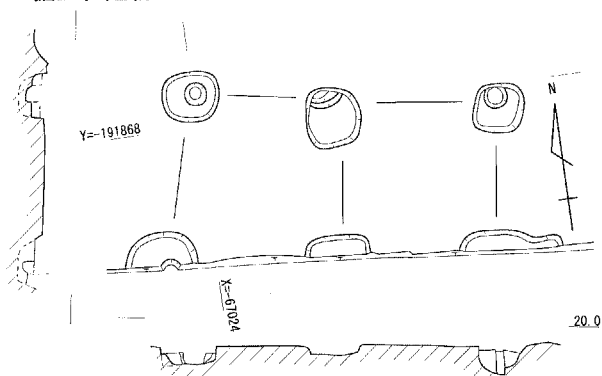
掘立柱建物6



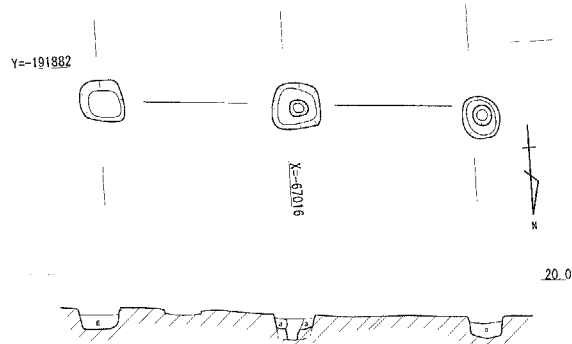
掘立柱建物7



掘立柱建物8



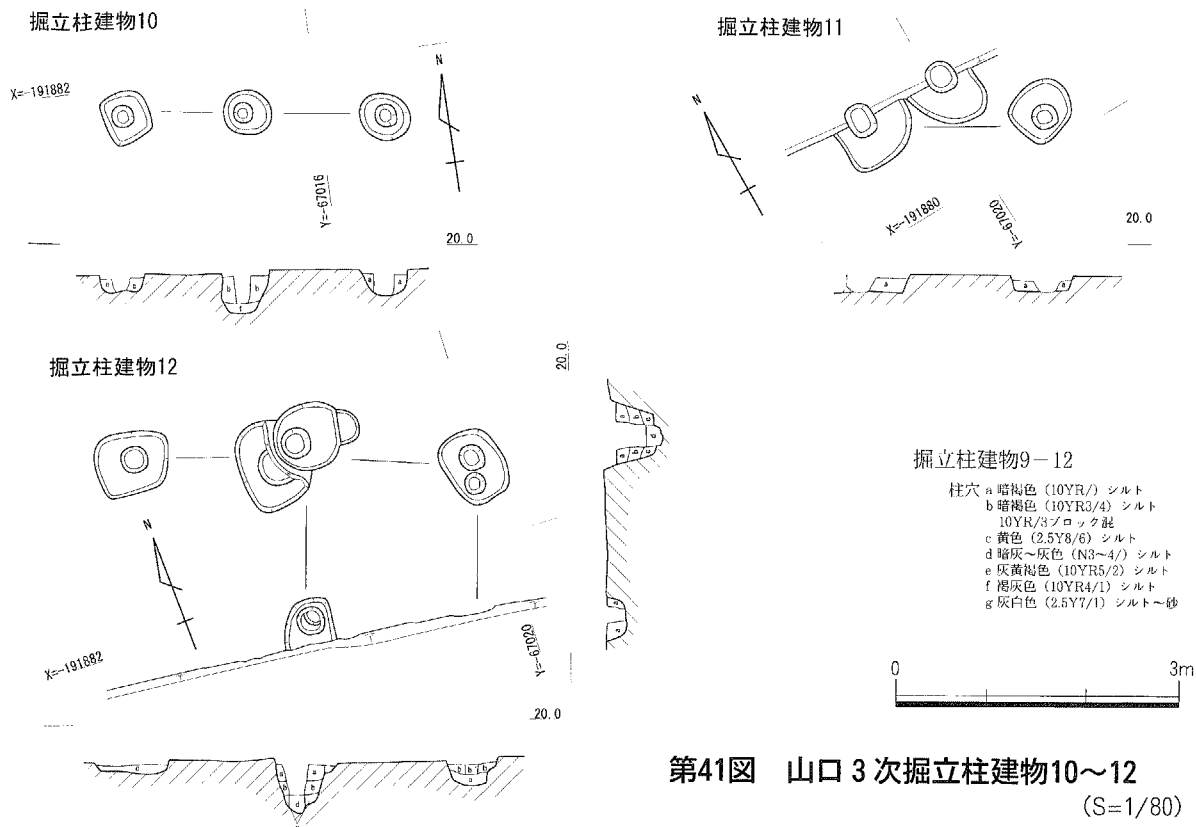
掘立柱建物9



第40図 山口3次掘立柱建物4～9 (S=1/80)

まったくなく時期を確定することは困難であるが、柱穴の形状などから考えて中世のものである可能性が高いと思っている。

掘立柱建物7 前述の建物4・5などと重複して検出した建物で、東西2間、南北1間以上の規模になる。柱の掘形は直径30cm前後、深さは15cm前後である。柱間は最も整然と並ぶところで、東西1.2m、南北1.5mを測る。建物の軸線は建物5とほぼ同じで、東へ20°振っている。出土遺



第41図 山口 3次掘立柱建物10～12
(S=1/80)

物はないが、この建物についても中世の可能性が高い。

掘立柱建物 8 C調査区の西寄りのところで検出した建物である。東西2間、南北については1間分を確認しただけであるが、調査区南外へとさらに何間か延びていくものと思われる。掘形の形状は一辺50～60cmの方形を呈し、深さは浅いもので15cm、深いもので30cmほどであった。建物の軸線は5°ほど東へ振っている。出土遺物がなく時期については断定できないが、これまで述べてきた建物（建物4～7）に較べて柱掘形の形状・規模が異なっており、この建物については飛鳥時代のものになる可能性を考えている。

掘立柱建物 9 E調査区中央付近で検出した建物である。東西の3間分のみの確認であり、南北方向の柱穴については確定できなかった。柱の掘形は一辺50～60cmの方形を呈し、深さは20cmほどであった。この建物についても遺物は出土していない。

掘立柱建物10 前述の建物9の南側で検出したもので、東西2間の並びを確認したが、南北の柱については、調査区南外へと延びていくと思われる検出できなかった。掘形の形状は丸みを帯びた方形状のものと円形のものがあるが、どちらも径50cmほどであった。柱間は2.5mとやや広い。深さは浅いもので15cm、深いものでは40cmほどであった。この建物から遺物は出土していない。

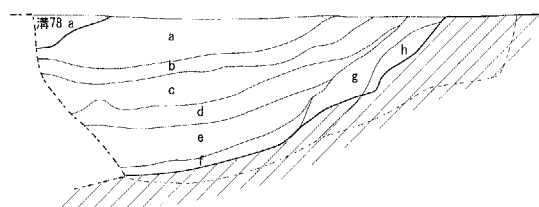
掘立柱建物11 E調査区の北端に引っかかるような形で東西の1間分のみ検出したものである。このため復元規模については不明と言わざるを得ない。柱の掘形は一辺60～70cmの方形を呈し、深さは20cmほどである。柱穴から遺物は出土していないが、掘形の形状・規模からすれば飛鳥時代の可能性が高いものと考えている。

掘立柱建物12 東西2間、南北1間以上の建物である。柱の掘形は隅丸の方形で、一辺70cmほどと大きく、深さはばらつきが見られ、浅いもので15cm、深いもので60cmほどであった。柱間は東西・南北とも1.8mを測る。出土遺物としては、飛鳥時代の須恵器の坏・土師器の高坏などが出土している。

溝79 C調査区の東端で検出されたもので、片側のみのため、幅は不明である。時期についても明瞭にし難いが、建物8よりは古いものと言えよう。大きな土坑となる可能性も考えられる。

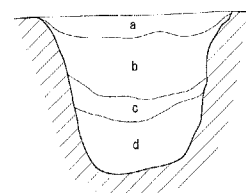
溝118 前述したE調査区の建物群の西側を南北に流れる溝である。幅は約1.0mほどで、深さ80cm、断面の形状はU字状を呈している。図示したように埋土は4層に分かれている。上層から土師器の皿・甕、須恵器の坏、韃羽口、下層からは土師器の甕・高坏、須恵器の壺・坏などが出土している。出土遺物から掘立柱建物群よりもやや新しい時期の溝と考えている。

溝78・79

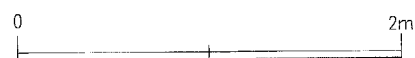


溝78 a 淡黄色 (5Y8/3) シルト
溝79 a 明黄褐色 (10YR7/6～8) シルト
b 浅黄色 (2.5Y7/3) シルト
c 黄色 (2.5Y8/6) シルト
d 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト
e 黒褐～黄灰色 (2.5Y3～4/1) シルト
f 黄灰色 (2.5Y4～5/1) シルト
g 黄灰色 (2.5Y5～6/1) シルト
h 浅黄色 (2.5Y7/4) シルト

溝118



a 濃い黄褐色 (10YR5/4) シルト c 灰色 (N5/) シルト炭化物含
b 褐色 (10YR4/6) シルト d 灰色 (N4/) シルト炭化物混



第42図 山口3次溝78・79・118断面図 (S=1/40)

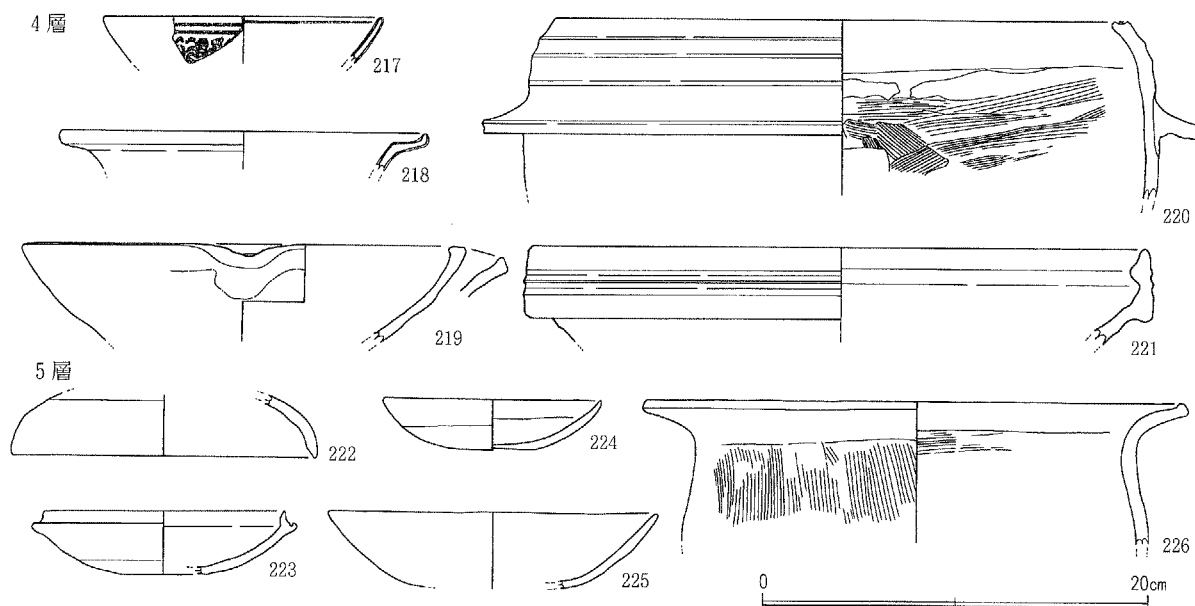
B. 遺物

3次調査は、山口1～4次の調査区中最も出土量が多い地区である。217～226は包含層出土遺物で、217～221が4層、222～226が5層にそれぞれ帰属する。

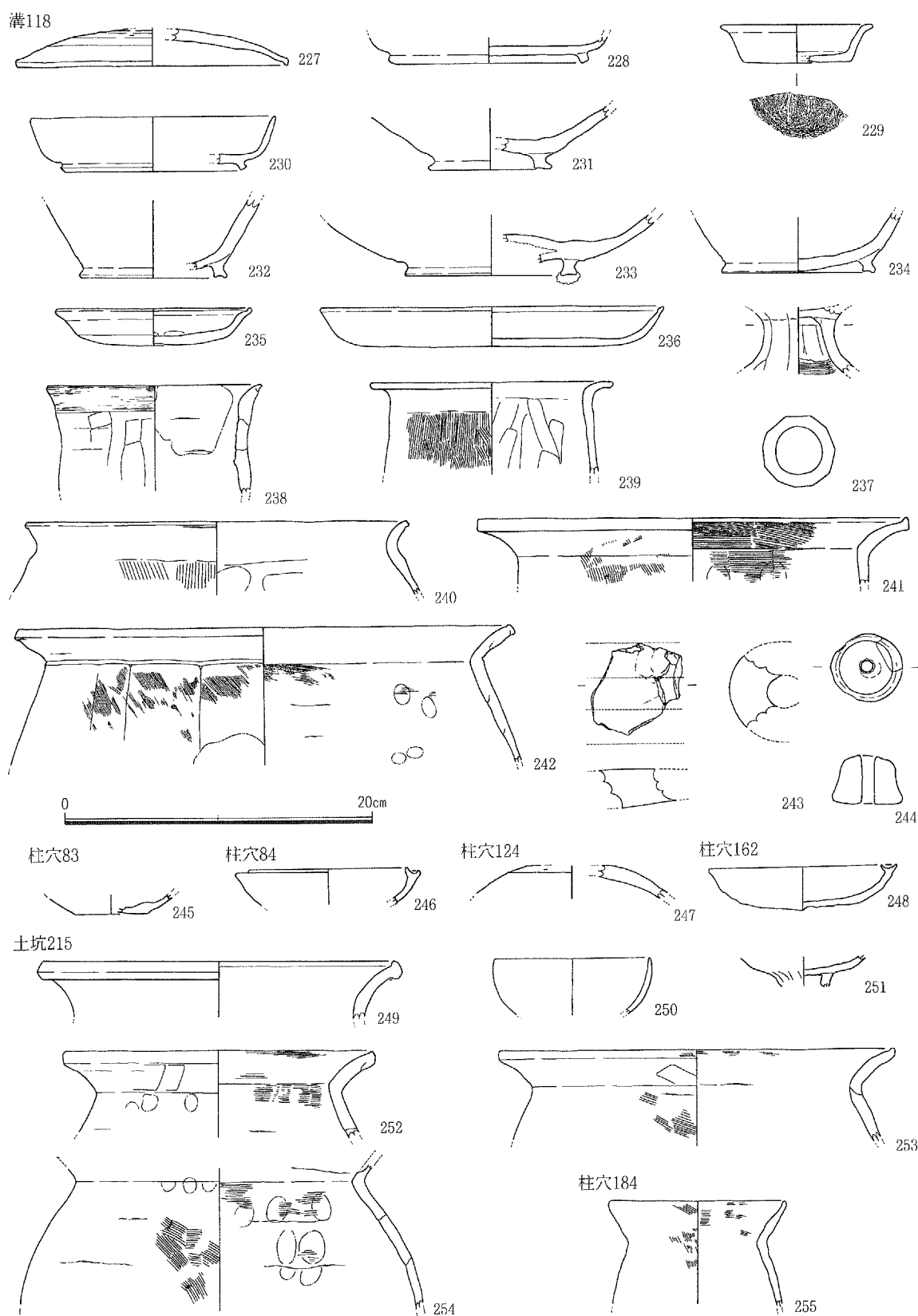
217は輸入磁器染付で、蓮子碗と呼称される形態と考えられる。口縁部には外面に2条、内面に1条の界線をひき、体部外面には芭蕉葉文により充填する。218は青磁盤口縁部で、口縁端部が上方へ屈曲させられる。219は東播系須恵器鉢口縁部で、片口が残存する。口縁部は内面に肥厚するのみとなり、上下の拡張は認められない。外面口縁部のみ暗灰色（N3/0）を呈し、倒位での重焼痕跡と考えられる。220は瓦質土器羽釜口縁部で、直立する体部に内傾する口縁部を備える。口縁部はヨコナデにより内外ともに凹凸を有し、鰐はやや下方へ短く付す。221は備前播鉢は口縁帯が上下に拡張し、口縁端部は摘むようにナデられて尖細化し、内面に稜が形成される。外面には凹線も明確に施される。

222・223は須恵器坏H蓋・身で、いずれも天井・底部は回転ヘラケズリ行われる。223の受部立ち上がりは内傾しないが、短い。224は丸い底部に内湾する口縁部を備える土師器皿である。底面は不調整で、口縁部のみヨコナデされる。225は、内面黒色処理された黒色土器A類の口縁部である。226は土師器甕口縁部で、なだらかな体部から頸部で屈曲して、口縁部が大きく広がる形態を呈す。口縁端部は、上方へ摘みあげられて拡張する。外面にタテハケ、内面にヨコハケが残存し、体部は長胴形態に復原され、飛鳥～奈良時代の所産と考えられる。

以上が、包含層4・5層の出土遺物である。4層には15～16世紀を中心とする中世後半の、5層には7～10世紀前後の飛鳥時代～平安時代までの遺物をそれぞれ包含する。



第43図 山口3次出土遺物1 (S = 1/4)



第44図 山口3次出土遺物2 (S = 1/4)

227～244は溝118出土遺物である。227は須恵器坏 B 蓋で、口径17.6cmを測る。天井部は、回転ヘラケズリにより整形され、平坦な天井部に屈曲する口縁部が付加される。228・230は須恵器坏 B 身で、短くハの字形に高台が貼付される。230の口縁部は外上方へ直線的に伸びる形態を呈し、口径は15.9cm、器高3.6cmを測る。229は平らな底部に短く外上方に開く口縁部を付す小形皿で、皿 E に該当する。底面には数条のヘラ状工具によるとみられる擦痕が認められる。231～234は須恵器壺類底部とみられ、いずれも球形の体部をもち、高台は底面に凹む。233は、底部の一部が器壁の中央で2つに分離し、器壁断面の一部に胎土中に気泡が認められる。これらは、焼成前の胎土中の空気抜きが甘く、胎土中に残った空気が焼成に際して発泡した結果とみられる。235は、外反する口縁部に内側に肥厚する端部を備える土師器坏 A である。口径12.8cm、器高2.4cmを測る。236は、直線的な口縁部に内側が肥厚する端部を備える土師器皿 A である。口径22.4cm、器高2.6cmを測る。237は、土師器高坏脚柱部である。平らな坏部に短い中空の円柱状脚柱部を付す。脚柱部外面は刀子により面取りされており、11面が確認される。脚柱部内面はナデ、脚裾部内面はヨコ方向のハケにより調整される。238は口径13.8cmを測る口縁部である。体部は内外面とも乱雑なタテナデにより、口縁部のみヨコナデにより調整される。2次の焼成により器壁の一部が赤褐色(10R5/4)を呈す。これらの特徴から、全体の器形が砲弾形の製塩土器口縁部と考えられる。239～242は土師器甕口縁部で、外面がハケにより調整されるもので、残存しないが体部は最大径が大きい長胴形を呈すと考えられる。口縁部形態には、頸部で大きく広がる239、屈曲して短い口縁部の240、大きく広がり端部が上方に拡張される241、頸部で屈曲しくの字状になる242などが認められる。後2者は普遍的に認められるが、前2者の口縁部形態は周辺ではあまり確認されない形態である。243は韃羽口の一部で、色調は灰白色だが熱変化により外面の一部は黒色を呈す。復原される外径は6.5cm、内径は2.1cmを測る。244は土製紡錘車で、径8mm程度の棒状工具に粘土塊を巻き付けて成形したとみられる。上辺径3.5cm、下辺径4.6cm、長3.2cmを測り、下辺以外の面は直線的でなく、凹凸を伴う。

以上が、溝118出土遺物である。須恵器坏 B 蓋・身の形態、坏 E の存在、土師器坏 A・皿 A・高坏の形態などの特徴を鑑みれば、平城宮Ⅱに帰属すると考えられ、製塩土器の特徴もこれに矛盾するものでない。

245は柱穴83出土の須恵器坏底部で、底面は回転ヘラ切り不調整である。平らな底面から内湾気味の体部が伸びる。坏 H または G 底部の可能性が高い。

246は柱穴84出土の須恵器坏 H 身で、口径は10.2cmを測る。底部でのヘラケズリの有無は確認されない。受部立ち上がりは、著しく短く内傾する。

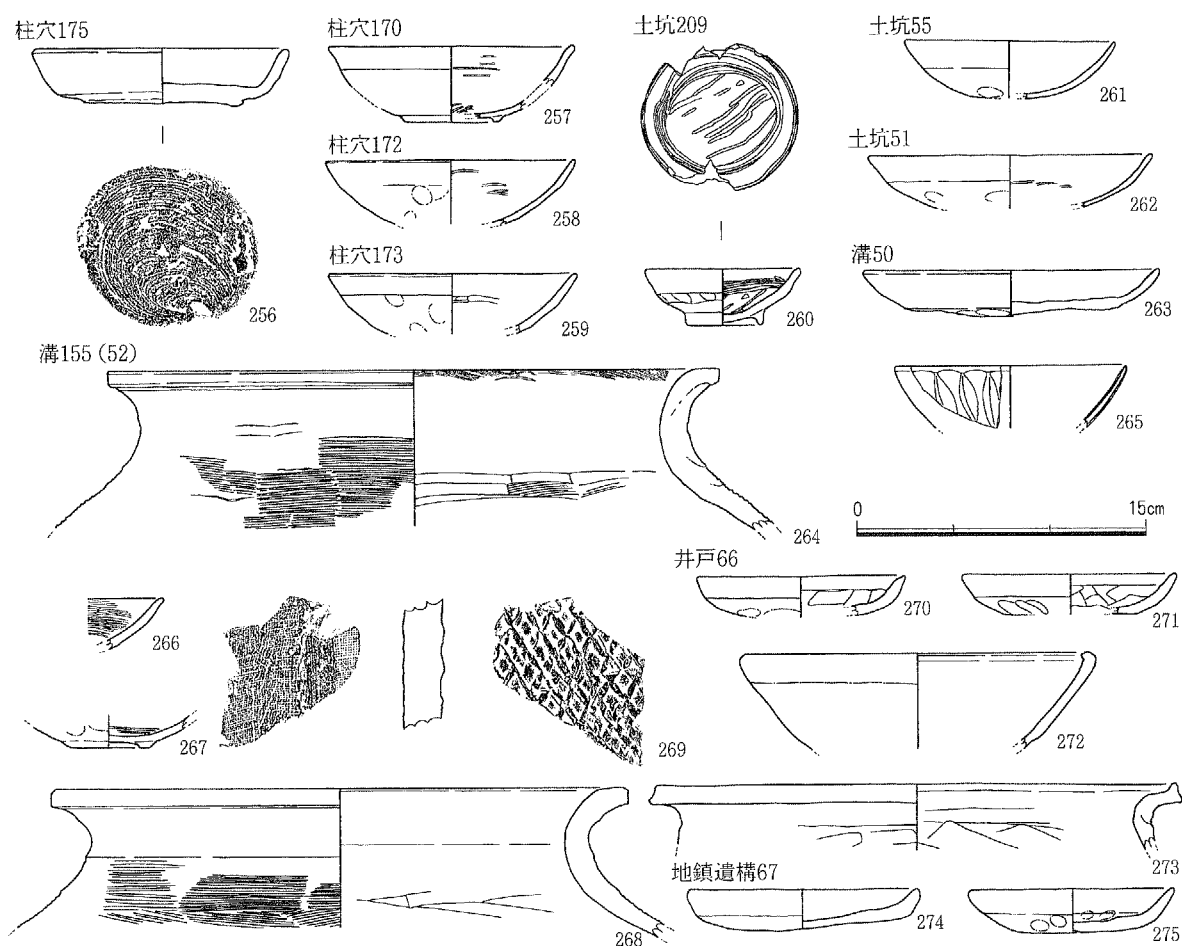
247は掘立柱建物12を構成する柱穴124出土の須恵器坏 H とみられる。蓋・身の判別は困難だが、今回は蓋として図示した。図上の天井部には回転ヘラケズリが行われる。

248も掘立柱建物12を構成する柱穴162出土の須恵器坏H身で、口径10.3cmを測る。受部立ち上がりは、内傾し短いため立ち上がりもほとんどない。底部は回転ヘラ切り不調整である。

以上が柱穴出土の須恵器であるが、須恵器坏Hの最終形態、またはそれに近いものと考えられることから、飛鳥Ⅰ～Ⅲに該当する。掘立柱建物12や柱穴83・84近くの掘立柱建物8などがこの時期に帰属すると理解される。

249～254は土坑215出土土器である。249は須恵器甕口縁部で、外反する口縁部に端部を上方に拡張する口縁端部を備える。250は土師器碗で、口径10.1cmを測る。内湾する口縁部に先細りの端部を付す。内外面の調整は磨滅のため観察されない。251は高坏坏底部から脚柱部にかけての部分である。脚柱部は中空で、外面はナデによる調整とみられ、面取りは行われない。252～254は土師器甕口縁部で、長胴の体部を有すと復原される。内外面の調整は、体部・口縁部ともにハケ・ナデ、その両者の使用と一致をみない。土坑215出土の土器には、時期を鋭敏に反映する器種が認められないものの、土師器高坏脚柱部の形態をみる限り飛鳥Ⅴまで下る可能性は低く、飛鳥Ⅳ以前に位置付けられることから、柱穴群と同様の時期の可能性が高い。

255は、掘立柱建物4を構成する柱穴184出土の土師器甕口縁部である。頸部の屈曲は緩やかで、



第45図 山口3次出土遺物3 (S = 1/4)

比較的長い口縁部を付す。口縁端部は、直立気味に折り曲げられる。内外面ともハケによる調整である。

以上が、遺構出土の古代土器群であるが、溝118を除く遺物は、山口1・2次でも出土した飛鳥時代、その中でも主として飛鳥Ⅰ～Ⅲの範疇に入る事が多かったのと同様に、その幅の中で理解される。これに対し、溝118出土遺物は平城宮土器Ⅱを遡ることはなく、他の遺構群との時間差が認められ、山口遺跡溝35やSX31～33などの最終埋没の時期と一致する。

256は、掘立柱建物4を構成する柱穴175出土の土師器皿である。平らな底部に短く直線的な口縁部が付加される。全体的に器壁が厚く、鈍重な印象を受けるもので、底面は回転糸切り痕が残存する。灯明皿の使用痕が認められる。

257は、柱穴170出土の瓦器碗である。堅緻な焼成で、後述する川辺遺跡出土の瓦器碗と異なる。口縁部と底部は接合しないが、同一個体として図示した。底部に断面三角形の高台を貼付し、見込には同心円状のミガキが認められる。

258は、柱穴172出土の瓦器碗である。底部は残存しないが、堅緻な焼成は257と同様である。体部下半外面には指頭圧痕が、内面には疎らなミガキが確認される。

259は、掘立柱建物5を構成する柱穴173出土の瓦器碗である。258と同様の特徴である。

263は、C調査区の掘立柱建物群付近に位置する土坑209出土の瓦器小碗である。瓦器碗同様、非常に堅緻な焼成で、須恵質を呈す。外面は口縁部と高台のみヨコナデ、その間には指頭圧痕が残存する。内面では見込には平行に、口縁部には同心円状に疎らなミガキが行われる。高台は直立する短いものである。口径や器高に比して高台が大きい以外は、他の瓦器碗と特徴は一致する。

C調査区東端の掘立柱建物4・5やその他の柱穴、土坑の出土遺物から、これらの柱穴群は13世紀前半までに帰属すると考えられる。

261～263は、D調査区検出の遺構群出土の土師器皿と瓦器碗である。262の瓦器碗は焼成がやや軟質である点以外は、C調査区の柱穴群出土瓦器碗と同様だが、底部を欠損するため高台の有無は不明である。土師器皿はいずれも底部不調整のため、指頭圧痕が残存するが、丸みを帯びる261と平らな263が認められる。

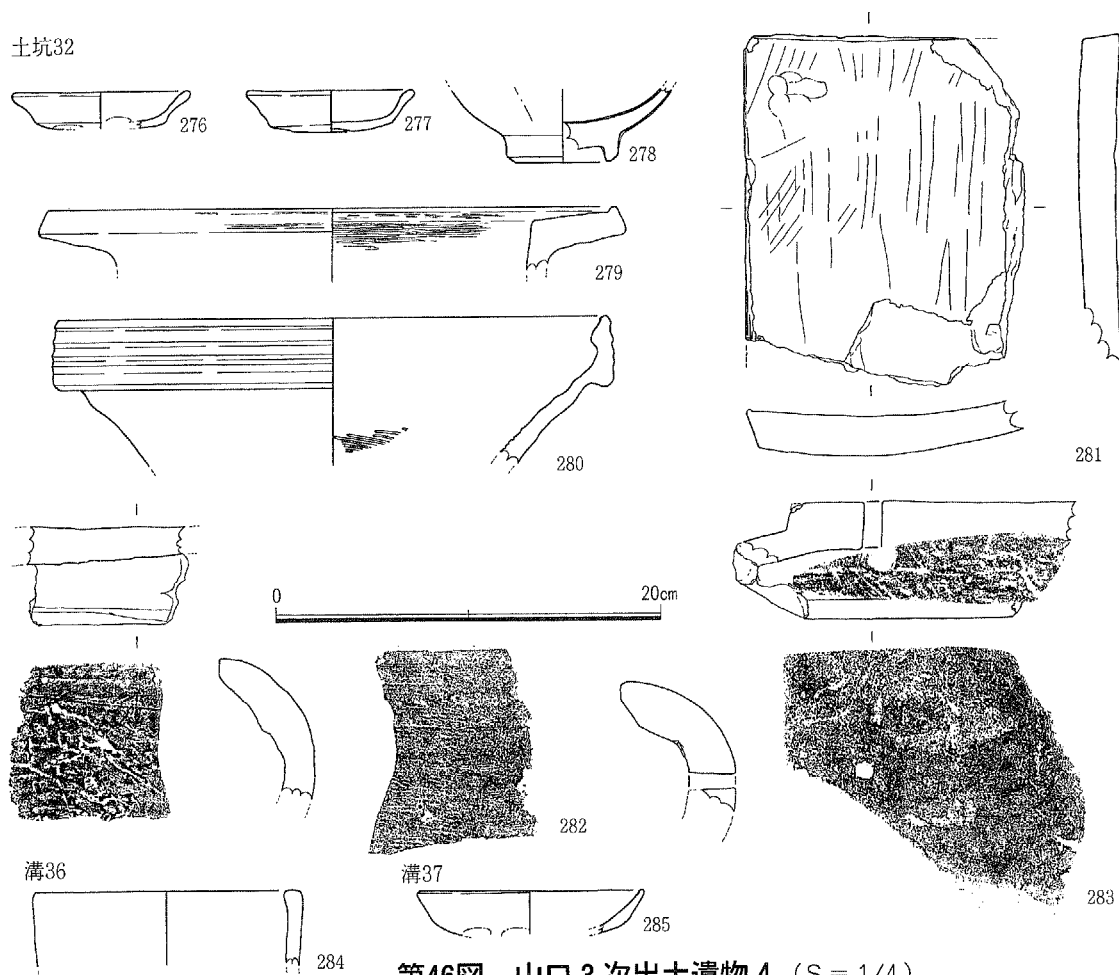
264～269は、溝155(52)出土遺物である。取り上げは、264・265が溝155、それ以外が溝52で行っているため、層位的なものでないが絶対高としては、前者が溝下側、後者が溝上側である。264は瓦質土器甕口縁部で、頸部が僅かに直立して口縁部が外反し、口縁端部に面を有す。265は青磁碗口縁部で、外面には蓮弁文が片切彫りされる。ただし、釉が厚いため鎬は明確でなく、色調はくすんだ草緑色を呈す。266は瓦器碗口縁部で、内面に密にミガキを行う。267は瓦器碗底部で、断面半円形の高台を付す。この2点は、柱穴群出土瓦器碗と比較して焼成が軟質である。268は瓦質土器甕口縁部で、264とほぼ同形態を示す。269は山口廃寺に帰属するであろう平瓦で、

凸面に斜格子タタキ、凹面に布目が観察される。凸面はタタキ後にケズリ、ナデの処理が行われない。以上、溝155（52）出土遺物で、瓦器埴は13世紀前半の特徴を有し先行するが、その他の瓦質土器、青磁碗の特徴から埋没は13世紀末～14世紀初頭まで下と考えられる。

270～273は井戸66出土の遺物である。270・271は土師器皿で、平らな底部に短く内湾する口縁部を付す。底部は内外面とも掌文、指頭圧痕が明瞭に残存し、口縁部のみ1周ヨコナデされる。272は東播系須恵器鉢口縁部で、端部は内面に肥厚する。273は、土師器甕口縁部で、大きく開く口縁部から、口縁端部が上方に拡張される。以上が井戸66出土の土器群で、おおむね14世紀後半に帰属すると理解している。

274・275は地鎮遺構67で設置されていた土師器皿である。指頭圧痕が内外面に残存する直線的な底部に、短い口縁を付す形態で、井戸66出土270・271と類似する。同じく14世紀後半に帰属すると考えている。

276～283は、土坑32出土遺物である。276・277は土師器皿で、底面不調整の底部に外反する短い口縁を備える。278は青磁碗底部で、高台下半外側の面取りが行われる。釉は高台内面まで及

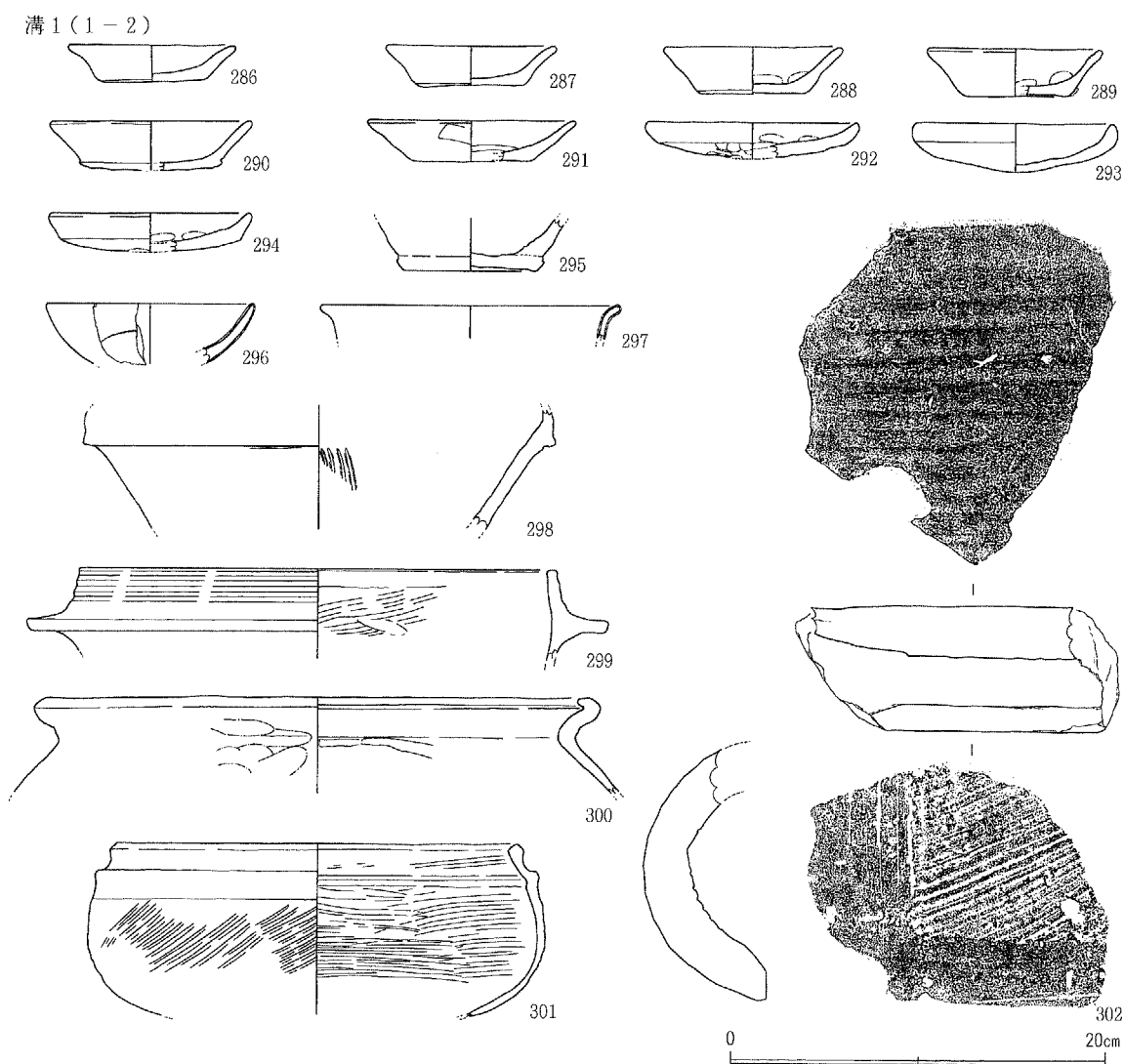


第46図 山口 3 次出土遺物 4 (S = 1/4)

び、露胎の高台内は赤褐色に発色する。279は直線的な体部から屈曲し大きく口縁部が開く瓦質土器火鉢口縁部である。口縁端部は、内側が端部を上方へ拡張する。内面は密にミガキが行われる。280は備前播鉢口縁部で、口縁帯は上下に拡張される。口縁端部は先細りで、内面に稜が形成される。残存部下端にナナメのスリメが確認される。281～283は瓦類である。平瓦は凸面に離れ砂、凹面にミガキが確認される。丸瓦は、凸面にミガキ、凹面には布目痕とコビキ A 類が残存する。凹面側縁および端縁部の面取りは幅広である。283の凹面には内タタキ痕が1箇所確認できる。以上、土坑32の土器群は16世紀後半を中心とする時期に属すと理解される。

284は溝36、285は溝37出土遺物である。284は、直立する体部に内側にやや肥厚する口縁部をもつ陶器口縁部で、器形は不詳である。色調が赤褐色を呈し、近世段階まで下ると考えている。285は土師器皿で、底面不調整の丸みを帯びた底部に短い口縁部を付す。

286～302は、溝1（1－2）出土遺物である。286～294は土師器皿である。286～289は色調が

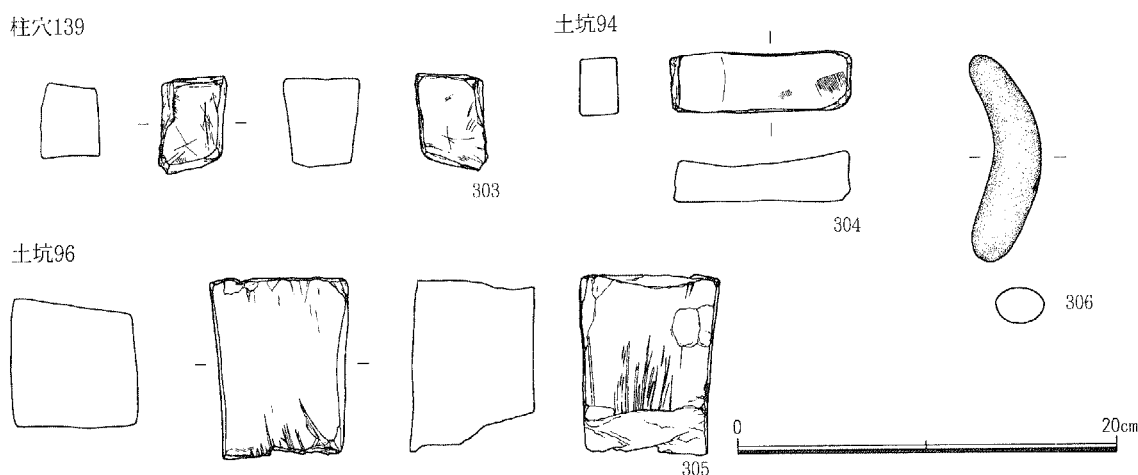


第47図 山口3次出土遺物5（S = 1/4）

白色系で、平らな底面に外反する口縁部を付す。290・291も同様の形態だが一回り大きく、色調は褐色系である。292～294は平らな底面に短い口縁部を付し、形態が異なる。295は底面回転糸切り痕が残存する須恵器底部である。296は肥前系磁器碗の口縁部で、外面には草花文の一部が確認される。297は青磁盤口縁部、298は備前播鉢体部上半から口縁部である。口縁帯の拡張は未発達である。299は瓦質土器羽釜口縁部で、体部に直立する口縁部を付す。口縁外面の段は浅く、鏝は水平に貼付される。300は土師器甕口縁部で、口縁端部が内側へ折り曲げられ、内面への肥厚が著しい。301は土師器塼で、底部から体部に丸みを帯びる形態で、最大径は体部下半に位置する。口縁端部は外上方にやや捻り出され、口縁部外面には断面三角形の突帯が貼付される。体部外面にはタタキ、内面にはヨコハケが行われる。302は丸瓦で、側縁1辺が残存するが、凹面の状況から端面付近の部位と推測される。凹面の側辺・端面の面取り範囲は広い。また、コビキA類が明瞭に残存する。凸面は1.5cm前後の単位で、密にミガキが行われる。以上が溝1（1－2）出土遺物で、主体とする時期は15世紀後半から16世紀前半だが、肥前系磁器（296）の存在から完全に埋没するのはやや遅れて近世の段階に下る考えられる。

303は柱穴139、304は土坑94、305は土坑96出土の細粒凝灰岩製砥石である。303・304は2面の使用面、305は3面の使用面が確認される。305の使用面には細筋の溝が確認され、玉磨砥石とみられる。306は砂岩製の石製品である。断面形態は径1.8×2.5cmの楕円形で、平面形態はやや曲線を描く。表面には使用痕等は残存せず、使用目的・時期などは不詳である。

山口3次では、飛鳥時代の掘立柱建物だけでなく奈良時代に帰属する遺構・遺物が検出され、一定期間の遺構の存続が確認された。このことは、山口廃寺との関係性のなかで、今後検討していく必要がある。その後、平安時代の間は遺構・遺物とも不在だが、中世の13世紀前半に再び掘立柱建物が出現し、16世紀にいたるまで断続的に土地利用が継続することが判明した。



第48図 山口3次出土遺物6（S = 1/4）

4. 山口4次(00-01・142)の調査成果

A. 遺構

4次調査区は、3次調査区の東側に相当する地区である。県道粉河加太線を挟んで北側の調査区をF調査区、南側の西をG調査区、東のほうをH調査区としている。調査面積は都合約420㎡である。なお現況は水田および雑種地で、この付近の標高は約20mほどである。全体として遺構密度は少ない状況であった。検出した遺構には中世と飛鳥時代のものがある。以下、各区ごとにその概要を記す。

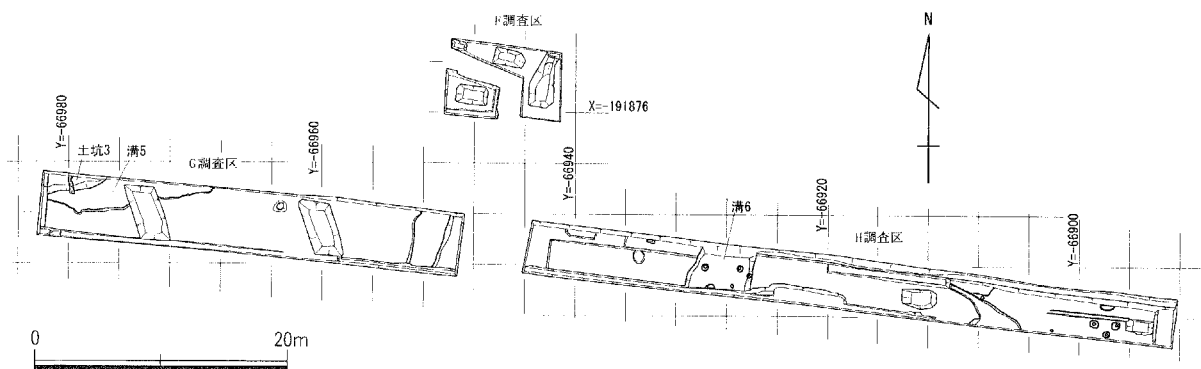
a. F調査区

調査区は狭小のうえ民家の花壇となっており、さらに中央を分断するように家庭用排水路が巡っていた。このため調査区を設定したものの、実際にはトレンチによる調査にならざるを得なかった。その結果、本調査区の土層の堆積状況は3次調査におけるD調査区(本調査区の西隣)と酷似しており、上層はいずれも礫層であった。この礫層からは近世の陶磁器片が少量出土している。下層は、軟弱な砂層と礫層の堆積であった。下層からの出土遺物は皆無であった。また、遺構については全く検出できなかった。

b. G調査区

耕作土・床土を除去した3層上面において遺構を検出した。この面では、調査区のほぼ全域に渡って自然流路(遺構5)と思われる礫層が認められた。おそらくこの自然流路は、3次E調査区で検出された溝1-2につながっていくものと考えられる。瓦器塊、土師器の甕など少量の遺物が出土している。層序からみても中世もしくはそれより古い時期のものであろう。

溝1・2 いずれも幅20~30cm、深さ15~20cmほどを測り、東西方向に流れるものである。中世の土師質皿が少量出土している。前述の自然流路の上につくられたものである。



第49図 山口4次遺構概略図 (S=1/600)

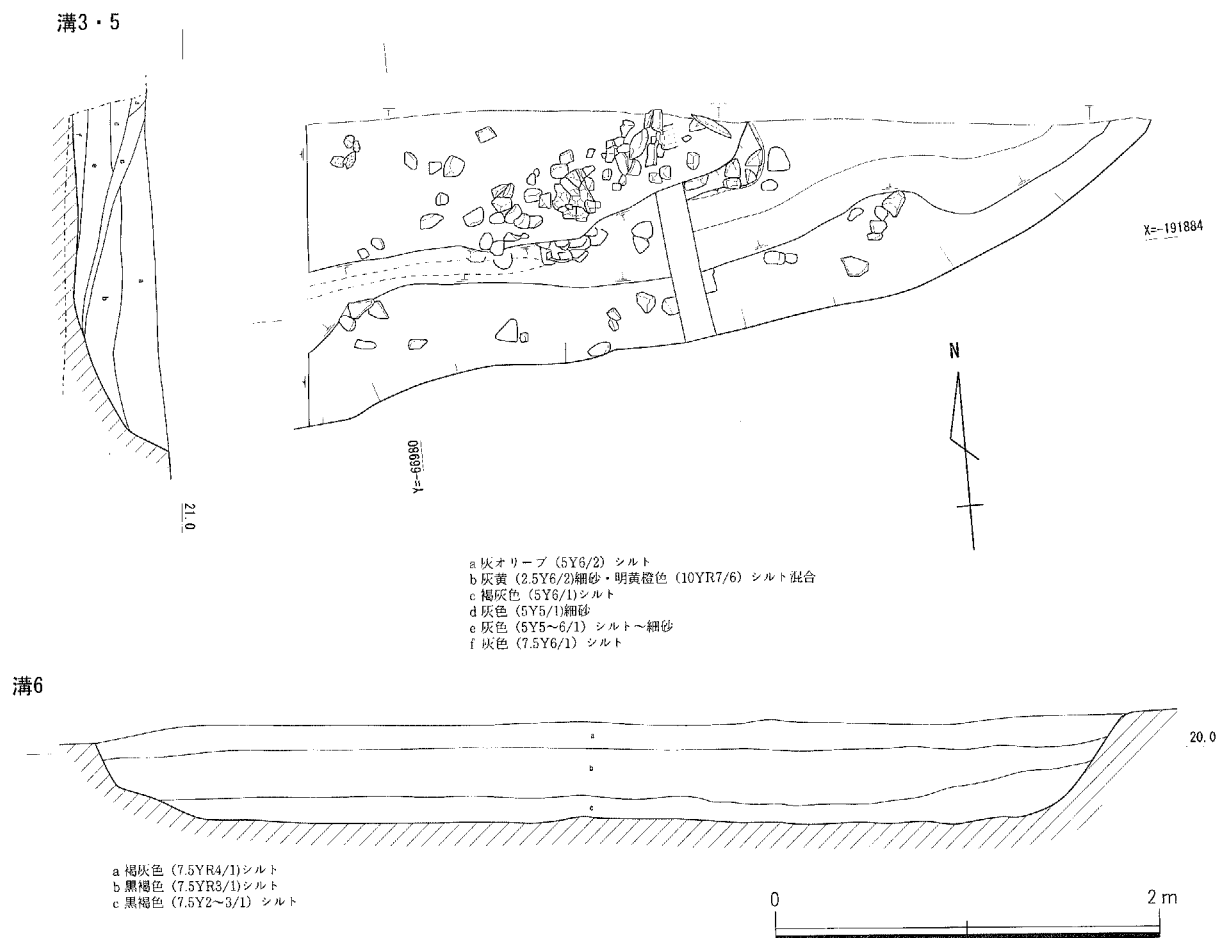
土坑3 調査区の西北隅で検出されたもので、南側の肩5 m分のみを検出であり、その全容については不明である。深さは30～40cmであった。ここからは土師器羽釜、須恵器鉢、轆羽口など中世の遺物が出土している。

c. H調査区

F・G調査区とは異なり、現水田層・中世包含層・飛鳥時代包含層と整然とした堆積状況が認められた。ただし、中世の遺構面と考えられる面で遺構検出を試みたが、まったく検出されなかった。遺構が確認されたのは、飛鳥時代の包含層である第5層を除去した第6層上面である。

溝6 幅5 m前後、深さ30cmほどで南北に流れる溝である。埋土は3層に分層できるが、いずれも褐色系のシルトであった。これらの層中からは、飛鳥時代の遺物が出土している。

溝11 北側では幅30cmであるが南側では3 mを越えるほどに広がる溝で、深さは10cm前後と浅い。出土遺物はないが、この溝についても飛鳥時代の可能性が高いものと考えている。



第50図 山口4次溝3・5・6 (S=1/40)

B. 遺物

山口4次では遺構の検出も少なかったため、遺物の出土量も限られる。

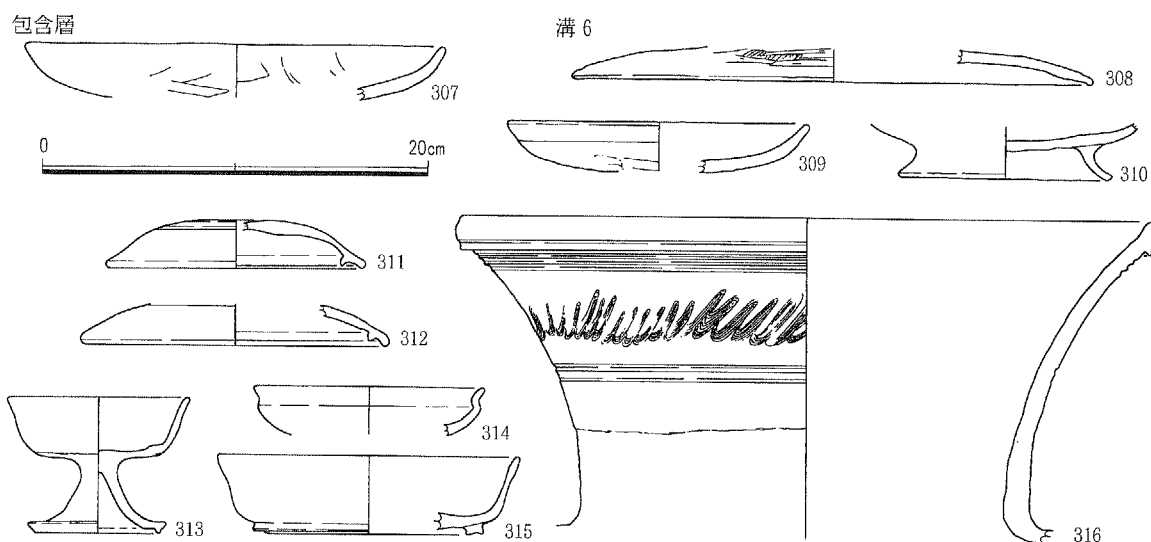
307は包含層4層出土の土師器皿である。内外面とも体部～底部はナデにより仕上げられる。

308～316は、溝6出土遺物である。308～310は土師器、311～316は須恵器である。308は土師器坏B蓋で、平らな天井部からそのまま口縁部にいたり、口縁端部が僅かに屈曲する。天井部外面にはケズリが使用される。309は土師器皿で4層出土の307同様の形態、調整である。310は土師器または皿の底部で、長く外反する高台が付す。口縁部は外上方に広がり、短く終わる形態になると推測される。

311・312は坏B蓋で、天井部は回転ヘラケズリで、口縁内面にかえりを付す。313は高坏で、直線的な坏部に低い脚部を付す。脚裾端部は内傾する端面をもち、端面は中央が凹む。314は底部は欠損するが、丸い体部から屈曲して口縁部が「く」の字状を呈すもので、小形鉢口縁部と考えられる。315は坏B身で、口縁部は底部からあまり外へ開かず直線的に上方へのびる。底部は回転糸切り不調整の底面に幅広で低い高台を貼付する。316は須恵器甕口縁部で、頸部には突線による区画および波状文による施文が認められる。

以上が、溝6出土土器群である。須恵器甕は古相の様相を呈し、坏B蓋もかえりを付さない点から飛鳥IV以前に帰属する。低脚高坏や坏B身も大過ない時期と判断されるのに対し、308の土師器坏B蓋は奈良時代に、310は9世紀中頃の平安時代まで下る可能性が高い。以上のように、溝6出土遺物には、2世紀間に渡る遺物を包含しており、長期間機能した可能性もある。

317～324は土坑3出土遺物である。317・318は土師器甕口縁部で、体部から屈曲する口縁部口縁端部が上方へ拡張する。319は中世陶器甕口縁部で、口縁端部は上下に拡張される。外面では体部に綾杉文調のタタキ、頸部に平行文タタキののちヨコナデ、内面では体部にケズリが行われ

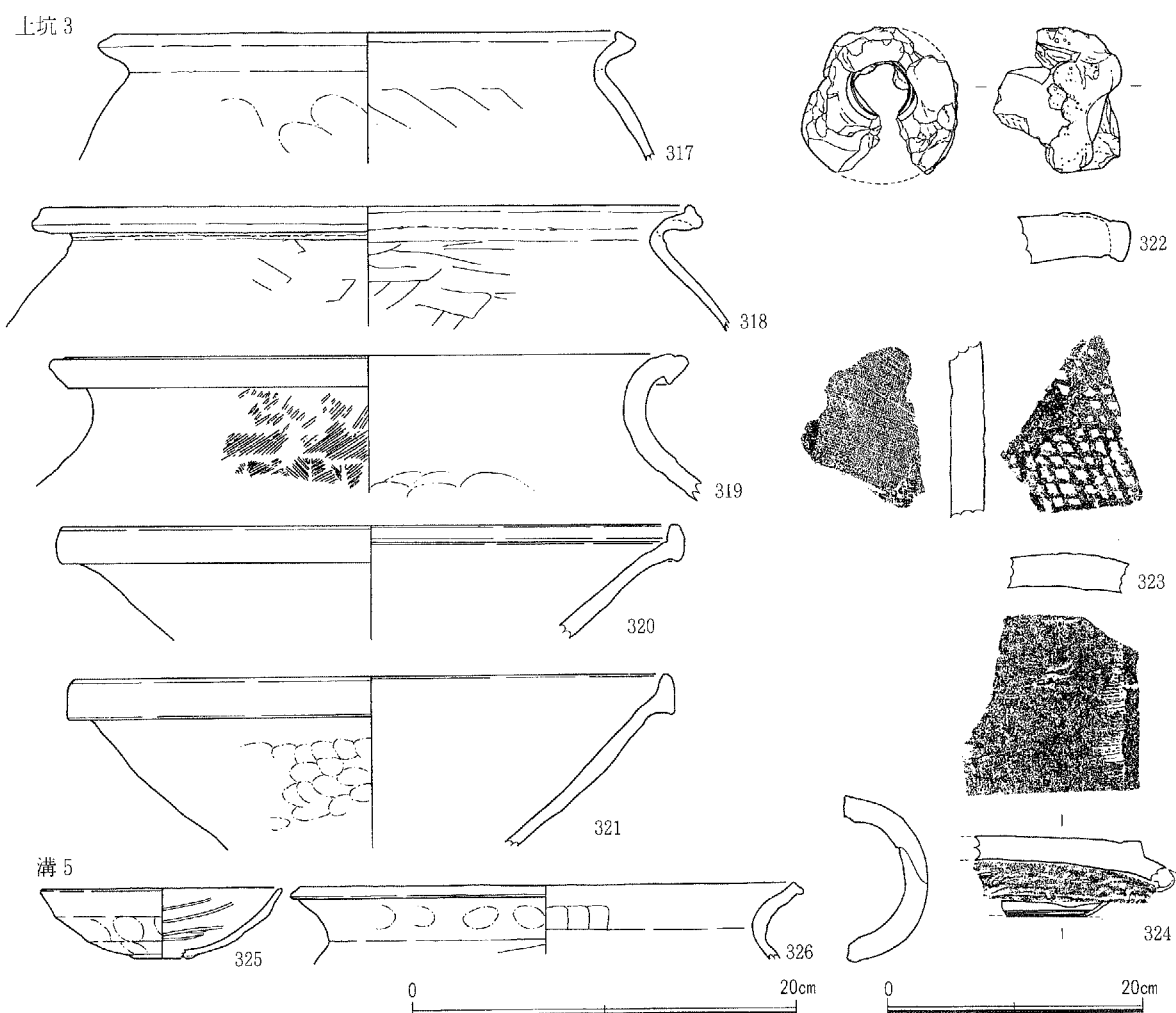


第51図 山口4次出土遺物1 (S = 1/4)

る。色調は灰褐色（7.5YR4/1）を呈す。320・321は東播系須恵器鉢口縁部で、上方への拡張が大きい321と、上下に拡張する320とが認められる。320の口縁部外面には自然釉が釉着し、重ね焼による焼成の痕跡である。322は轆羽口で、土製の羽口外周にはスラッグが厚く融着する。323は山口廃寺に帰属するとみられる平瓦で、凸面に斜格子タタキのあと粗いナデ、凹面に布目が残存する。324は丸瓦で、凸面はミガキが行われるものの狭端縁付近にはタタキが残存する。凹面には布目および合せ目が残存し、上器群と同時期の瓦と判断される。以上、土坑3の出土遺物は、土師器甕や東播系須恵器鉢の口縁形態から、14世紀前半の帰属と理解している。

325・326は溝5出土の遺物である。325は瓦器塼で、底部に断面半円形の高台を付す。外面体部下半には指頭圧痕が残存し、内面ミガキは疎らである。326は土師器甕口縁部で、外傾する端面が認められる。

以上のように、4次調査では従前調査で出土していない時期の遺物を含む飛鳥・奈良・平安・中世の遺物が採取され、山口遺跡やその周辺に長期間に渡る痕跡が残されていることが判明した。



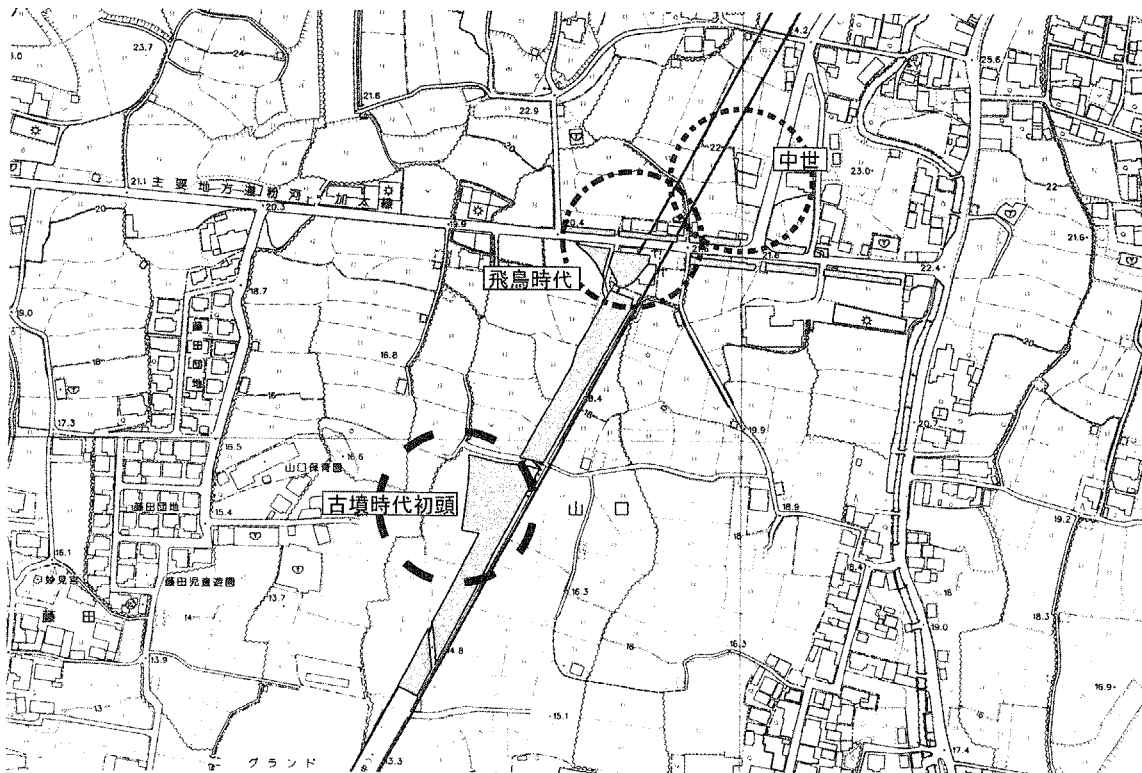
第52図 山口4次出土遺物2 (S = 1/4、ただし323・324はS = 1/6)

第4節 山口遺跡小結

これまで概述してきたように山口遺跡については、94年度の調査以来5年次にわたって延べ約7,500㎡におよぶ調査を実施してきた。もとより周知されている山口遺跡は東西600m、南北600mという広大なものであり、調査はその一端をなぞったにすぎない。したがって、その全容を解明するには程遠い状況ではあったが、いくつかの成果を得ることができた。ここでは、これらの調査成果と和歌山市により先行して実施されていた調査の成果を援用しつつ、まとめを記しておきたい。

1. 時代別の分布および推移

山口遺跡においては、現在確認されている最も古い時期の遺構としては和歌山市が第5次調査において確認している弥生時代後期段階のものである。この場所は山口小学校の校庭であり遺跡の南東部に当たっている。またここでは、古墳時代後期の遺構も確認されている。これに対して、遺跡の西側縁辺部に相当する今回の一連の調査区では、この時期の遺構・遺物とも確認されていない。確認した最も古い時期のものとしては、古墳時代初頭のものであり、これらの遺構は山口調査A区に集中し、それより北側には広がっていない。また、古墳時代中・後期のものもなく、再度活況を呈するのは飛鳥時代になってからである。この飛鳥時代の遺構が集中して見られるのは、山口調査B区の北端からその北側に位置する山口1次・2次、さらに3次調査区の東半部にかけてである。ただしこれらは奈良・平安時代へと続いていかず、再び活況を呈するのは中世になってからのようで、これら中世の遺構は3次調査の西半部からさらに北側へと広がって行く



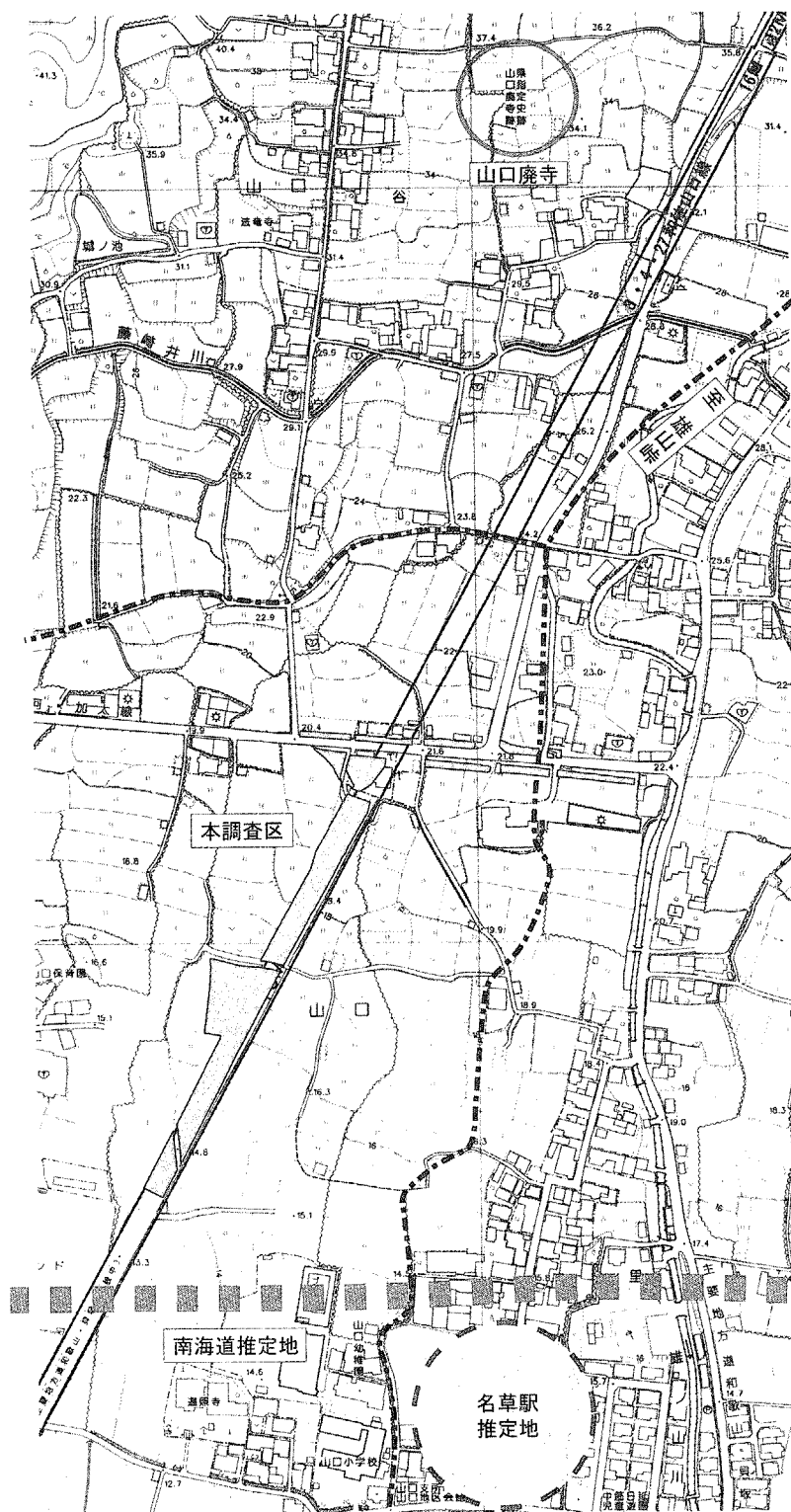
第53図 山口遺跡の遺構分布状況 (S=1/5000)

様相が見られた。

以上のことをまとめるとすれば、図示したように古墳時代初めの遺構は調査区の南側に偏するに対して、飛鳥時代の遺構は北側に偏するという顕著な傾向が認められ、さらに中世の遺構については、飛鳥時代の遺構が集中する地区よりも東側および北側に展開している可能性が高いと言えよう。また、遺跡全体で見れば、弥生時代後期が東南部にあり、つづく古墳時代初めには西縁辺部移ってきている。また古墳時代後期が東南部にあり、それにつづく飛鳥時代になるとやはり西北部に場所を変えていることがわかる。もちろんその間の遺跡中心部が未調査であり、これを以って遺跡内での時期的な移動云々を言えるものではないが、二つの調査成果を関連させて見る限り上記のようなことが看取できる

2. 交通の要衝としての山口遺跡

当該地のすぐ南側を古代の官道である南海道が通り、官道に付随する施設である駅舎（名草駅）が遺跡の東側に隣接する里集落あたりに置かれていたとされる。また、都が平城京から平安京に移ったことを契機にルートの変更が行われ、従来奈良から紀川沿いを通っていたものが、大阪から山越えで和歌山へと入ってくるコース、すなわち山口遺跡のすぐ北側に出てくる雄山峠を越えるルートとなった。これ



第54図 調査区と推定古道 (S=1/2500)

に伴い名草駅は廃止されるが、あらたに山口遺跡の北側、山口廃寺の東側周辺に萩原駅が設置されたとも言われている。さらに遺跡の東側を南進するルートは熊野街道にもあたっている。以上のように、当該地付近は古代から交通の要衝であったということができよう。しかしながら今回の発掘調査においては、こうした状況を具体的に示唆するような成果を得ることができなかった。南海道はじめ古代の道については図示したようにその推定ルートはいずれも調査区の範囲からはずれている。このことからこの推定ルートが直ちに正しいものとは言えないが、少なくとも今回の調査においては古道に結びつくような路面およびそれに付随する側溝などの遺構はまったく確認していない。もちろん後世に削平されてしまった可能性も考えられるが、状況的に見れば当該調査区外にルートを求めることが妥当と思われる。

また、時期的に見ても古南海道が活況を呈したであろう奈良時代の遺構・遺物は3次調査区の一部を除けば皆無であるし、改変後の、雄山峠越えが利用される時期、さらに熊野詣が盛んとなった平安時代についても、遺構・遺物は極めて少ない状況であった。むしろこれらの時期以外が活況を呈しているわけで、再三述べるように、今回の調査が交通の要衝であったことを示すような状況ではなかった。ただし、このことは当該地までその影響が及んでいなかったことを示すものであり、おそらく遺跡の東側においてはこれらを傍証するような結果が得られる可能性が高いと考えている。

3. 山口廃寺との関連

当該調査区の北東およそ500m、和歌山市谷集落の西北の段丘上に山口廃寺が所在する。山口廃寺については7世紀後半の創建と考えられているが、巨大な塔心礎を遺すのみで発掘調査は実施されておらず、伽藍配置など不明な点が多い。今回の調査では、自然流路から数点の斜格子タタキ痕の残る平瓦が、土坑（S X-31）からは軒丸瓦が出土しているが、これらはこの山口廃寺のものである可能性が高いものと考えている。この自然流路が最終的に埋没するのは他の遺物からみて平城宮Ⅱ期、8世紀前半と考えており整合性を欠くものではない。

一方、調査で確認されている数多くの掘立柱建物と山口廃寺との関連はどうであろうか。当初これらの建物群は、その位置関係から山口廃寺の造営主体者と何らかの関連がある施設の可能性も考えた。しかしながら、建物跡から出土する遺物を詳細に検討した結果、これらの建物の存続期間は飛鳥Ⅱ～Ⅲの時期、7世紀の第1四半期から第3四半期にかけてであり、山口廃寺の創建時期と考えている第4四半期にはすでに廃絶していたものと考えられる。したがって山口廃寺と並存していたものではなく、先に述べた遺跡内での移動という観点からみれば、山口廃寺の創建に伴いこれらの建物群もそのすぐ近く、一段上の北側段丘へと移っていった可能性が高い。

以上、三点について今回の調査成果との関連の中で述べたが、山口遺跡についてはまだまだ不明の点が多い。今後の調査、特に遺跡中心部の調査をまって再度検討を重ねたい。

第Ⅲ章 川辺遺跡の調査成果

第1節 基本層序

調査区は標高11～12mの前後に位置し、現在の地目は水田ないしは果樹園、畑地である。そのため、すべての調査区で最上層として耕作土、床土などが確認された。基本的な層序は、Ⅰ：耕作土・床土、Ⅱ：旧耕作土・床土、Ⅲ：中世包含層、Ⅳ：庄内併行期～飛鳥時代包含層、Ⅴ：地山に大別されるが、その有無や細部においてはやや異なる。遺構面は、上面遺構面がⅣ対応層上面で、下面遺構面がⅤ対応層上面で検出される範囲とⅣが確認されず上・下遺構面がⅤ上面で検出される範囲とが大半を占める。なお、上面遺構面では中世、下面遺構面では庄内併行期～飛鳥時代の遺構がそれぞれ検出された。以下、調査区西側から順次概観したい。

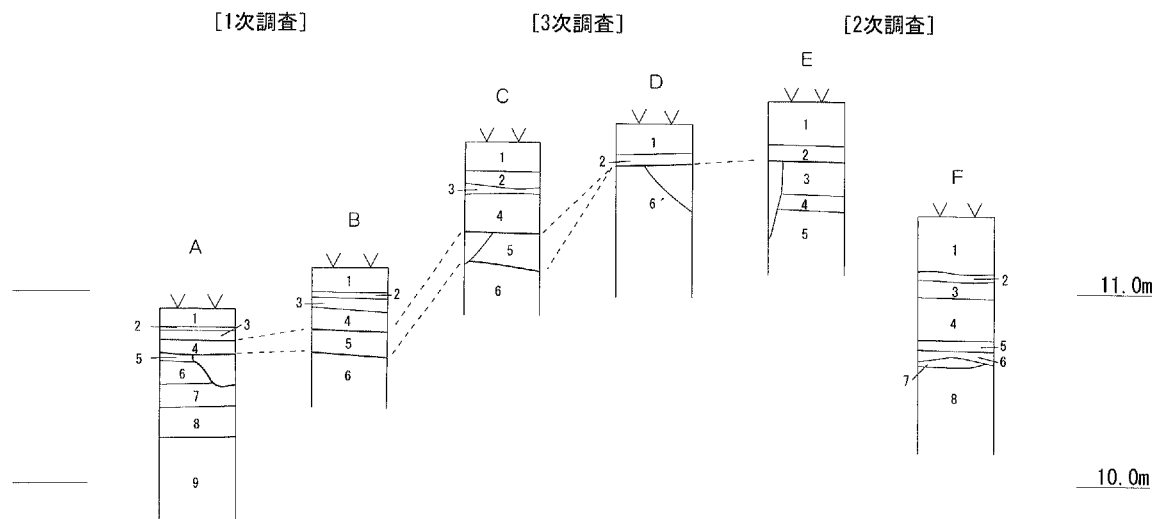
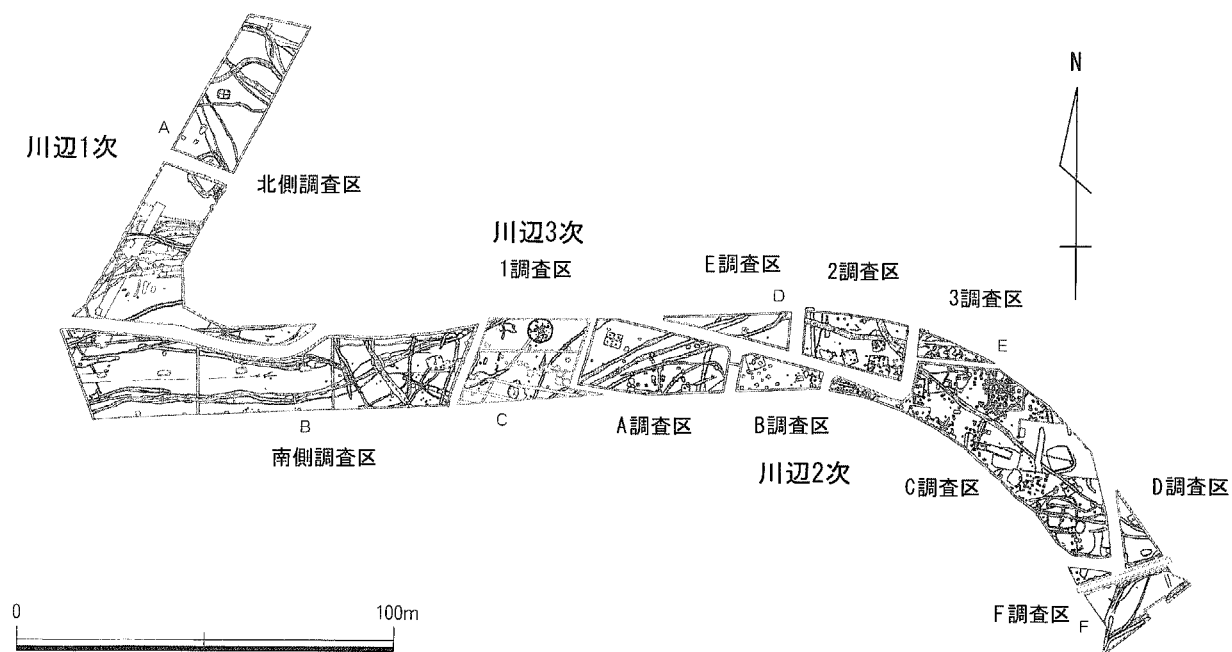
1次調査では、北側・南側調査区ともに上・下の遺構面2面が確認された。標高は、上面遺構面が10.75～11.2m、下面遺構面が10.65～11.1mを測り、西から東へ傾斜して若干比高差が存在する。なお、Ⅴ対応層上面は基本的にはシルト質土である。

1次調査南側調査区東隣に位置する3次調査1調査区では、後述するように調査区内にⅤ対応層＝地山の変化ラインが斜行し、そのライン以西では1次調査同様上・下遺構面が2面確認されるのに対し、以東ではⅣ対応層が存在せず上・下面の遺構がⅤ対応層上面で検出される。この地山変化ライン以西では地山が1次調査同様シルト質土であるのに対し、以東では砂礫層ないし砂礫層とシルト質土の互層に変化する。

次にF調査区を除く2次調査地および3次調査2・3調査区は、基本的に3次調査1調査区東側同様、遺構検出面は1面でⅤ対応層は砂礫層ないしはシルトと砂礫の互層である。遺構検出面の標高は、2次調査A～C調査区北半や3次調査2・3調査区周辺が最も高く11.7mを測り、南東側へ傾斜し低くなる。この遺構検出面1面の範囲では、Ⅳ対応層だけでなくⅢ対応層も明確でなく、Ⅰ・Ⅱ対応層直下で遺構が検出されたことから、遺構が設けられた当時の生活面は検出面よりも高く、削平されていると予想される。このことは、遺構の残存状況からも推測される。

2次調査F調査区はやや特徴が異なり、基本的に1次調査の範囲同様に下面遺構面が検出され、その遺物包含層のⅣ対応層も検出されたが、上面遺構面の時期の遺構が不在である。

なお、Ⅴ対応層は先述のとおり遺構検出面2面の範囲では地山はシルト質土、1面の範囲では砂礫層を基本とする。この変化地点の3次調査1調査区でその地山の堆積状況を確認したところ、砂礫層→（粗粒砂→中粒砂～細粒砂）→シルトがやや互層になりつつ堆積することが確認された。すなわち、まず遺構検出面1面の範囲に砂礫層の堆積により微高地状の地形を形成し、次に高まりの周囲にシルト～砂が堆積したという景観の形成が推測される。そして、この地山の差異は水田と果樹園ないしは畑地という現在の地目とほぼ対応していることから、自然堆積の最終的な堆積土壌の差異は、現在の土地利用方法を規定していると理解される。



【土層注記】

A

- 1.耕作土〈I〉
- 2.床土〈I〉
- 3.にぶい黄褐色
(10Y R6~7/4) シルト〈Ⅱ〉
- 4.にぶい黄褐色
(10Y R6/4) シルト〈Ⅳ〉
- 5.にぶい黄褐色～黄褐色
(10Y R5~6/4) シルト〈Ⅴ〉
- 6.にぶい黄褐色
(10Y R5/3) シルト〈Ⅴ〉
- 7.にぶい黄褐色～黄褐色
(10Y R5~6/3) シルト〈Ⅴ〉
- 8.にぶい黄褐色
(10Y R6/4) シルト〈Ⅴ〉
- 9.にぶい黄褐色
(10Y R6~7/4) シルト〈Ⅴ〉

B

- 1.耕作土〈I〉
- 2.床土〈I〉
- 3.にぶい黄褐色
(10Y R6~7/4) シルト〈Ⅱ〉
- 4.にぶい黄褐色
(10Y R6/4) シルト〈Ⅲ〉
- 5.にぶい黄褐色
(10Y R5/3) シルト〈Ⅳ〉
- 6.灰オリーブ
(5Y 5/3) シルト～細砂〈Ⅴ〉

C・D

- 1.黒褐色 (10Y R2/2)
砂質土〈I〉
- 2.灰色 (5Y 5/2)
砂質土〈I〉
- 3.明黄褐色 (10Y R6/8)
砂質土〈Ⅱ〉
- 4.黄褐色 (10Y R5/6)
砂質土〈Ⅲ〉
- 5.オリーフ褐色
(2.5Y 4/6) 砂質土〈Ⅳ〉
- 6.黄褐色 (10Y R5/8)
シルト～細砂〈Ⅴ〉
- 6' 黄灰色 (2.5Y 4/1)
シルト～亜円～円礫〈Ⅴ〉

E

- 1.耕作土〈I〉
- 2.にぶい黄褐色
(10Y R4/3) シルト〈Ⅱ〉
- 3.にぶい黄褐色
(10Y R5/4)
シルト～粗砂〈Ⅴ〉
- 4.褐色 (7.5Y R4/3)
シルト～粗砂〈Ⅴ〉
- 5.腰層〈Ⅴ〉

F

- 1.耕作土〈I〉
- 2.床土〈I〉
- 3.黄灰色 (2.5Y 6/1)
シルト〈Ⅱ〉
- 4.灰黄色 (2.5Y 6/2)
シルト〈Ⅱ〉
- 5.にぶい黄褐色
(10Y R5/4) シルト〈Ⅴ〉
- 6.黄褐色 (7.5Y R6~7/8)
シルト〈Ⅴ〉
- 7.にぶい黄褐色
(10Y R5~6/4) シルト〈Ⅴ〉

第55図 川辺遺跡土層柱状図 (S=1/40)

(土層注記末尾の〈I～Ⅴ〉は対応層名)

第2節 1次調査（97-01・145）の成果

1. 遺構

調査地は鋭角の「L」字状を呈する新設道路敷の部分である。調査の便宜上北側調査区と南側調査区に分けて調査を実施した。地形的には西方向に下がっており、検出した溝の殆どがこの方向に延びていた。遺構面は二面確認した。

A. 上面遺構

上面検出の遺構は、出土遺物から中世（13～15世紀）と考えられる掘立柱建物、溝、土坑、土壙墓などを検出した。

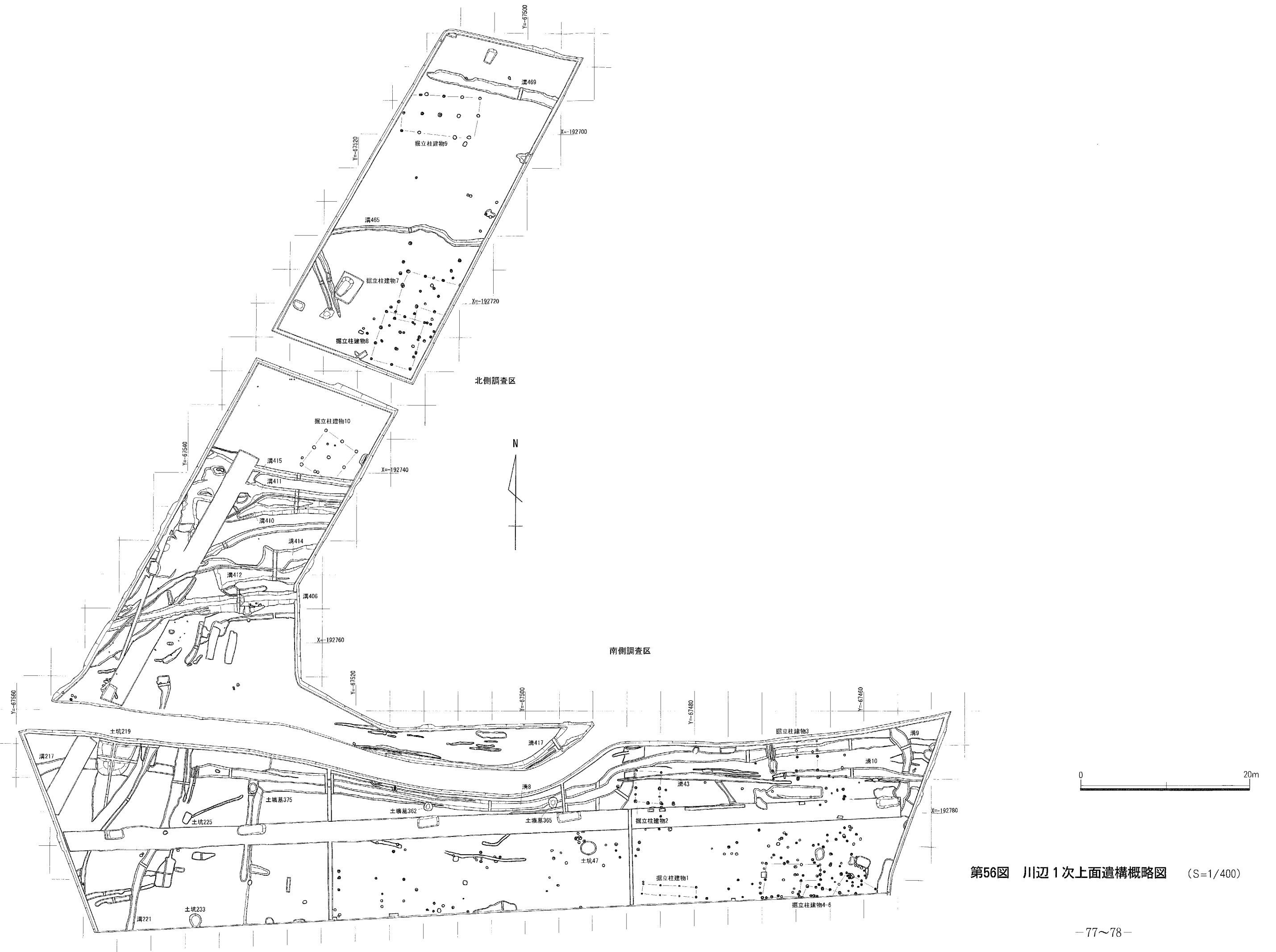
北側調査区の北側と南側調査区の東側において掘立柱建物を検出した。北側では掘立柱建物1～6、東側では掘立柱建物7～10を検出した。先述したが、調査地の「L」字状の頂点方向である南西方向は低いいため、この範囲では掘立柱建物の痕跡は無く、溝状遺構が密集して南西方向に延びているのが確認された。

掘立柱建物1 調査地の東側で検出した。この辺りは元々今より生活面が高かったと考えられ、南へ延びる微高地の北側の縁辺部と思われる。この建物の検出状況は地山直上で検出し、後世にかなりの削平をうけ、掘形も浅いものであった。規模は3間×1間以上で調査区外の南に延びる。東西棟の建物と思われる。主軸はN-2°-Eである。なお、この辺りの座標北は真北から24°西にずれる。桁行の間尺は東から1.95m-2.23m-2.02m、梁行の1間分は1.15mを測る。桁行方向の柱穴（344, 345, 346）は検出面が地山（玉砂利層）のため、柱径は15～20cm、残存の深さは10cmと非常に浅い。梁行方向の柱穴（133, 134）についての柱径は35～40cm、残存の深さは35cmを測る。埋土はいずれの柱穴も黄褐色のシルトであった。

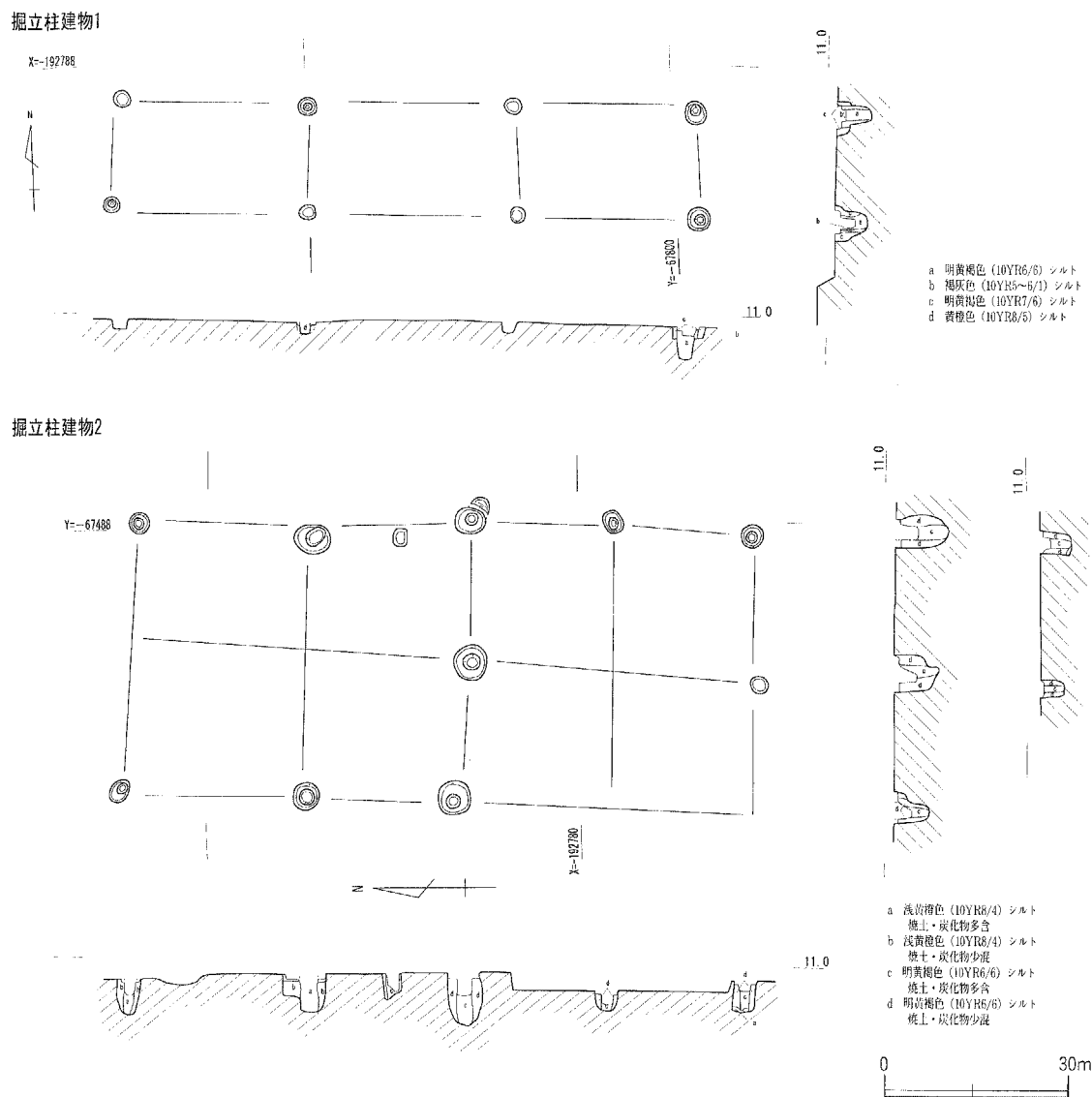
掘立柱建物2 建物1の北側で検出した南北棟の建物である。主軸はN-2°-Eである。柱穴の一部、特に西側はこれより新しい遺構により掘削されて不明であった。なお、この建物は焼失家屋と考えられ、柱穴の埋土には焼土および炭が混入し、特に柱当り部分は多量に混入していた。規模は桁行5間、梁行3間で、桁行方向の間尺は北から1.95m-0.93m-0.77m-1.51m-1.51m、梁行方向は東から1.59m-1.54m-（2.1m）を測る。柱径は20～45cm、残存の深さは25～60cmを測り、双方ともにバラつきが見られる。

掘立柱建物3 南北棟の建物で、北は調査区外のため不明である。主軸はN-2°-Wである。規模は桁行4間以上、梁行2間である。桁行方向の間尺は北から1.05m-0.78m-1.60m-0.87m、梁行は東から2.40m-2.87mを測る。この建物も建物2と同様に火災をうけていたと思われる柱穴の埋土は建物2と同様である。柱径は25～30cm、残存の深さは23～30cmと双方に大きなバラつきはない。

掘立柱建物4 この建物の南は調査区外のため不明であるが、規模としては梁行方向の北側の間



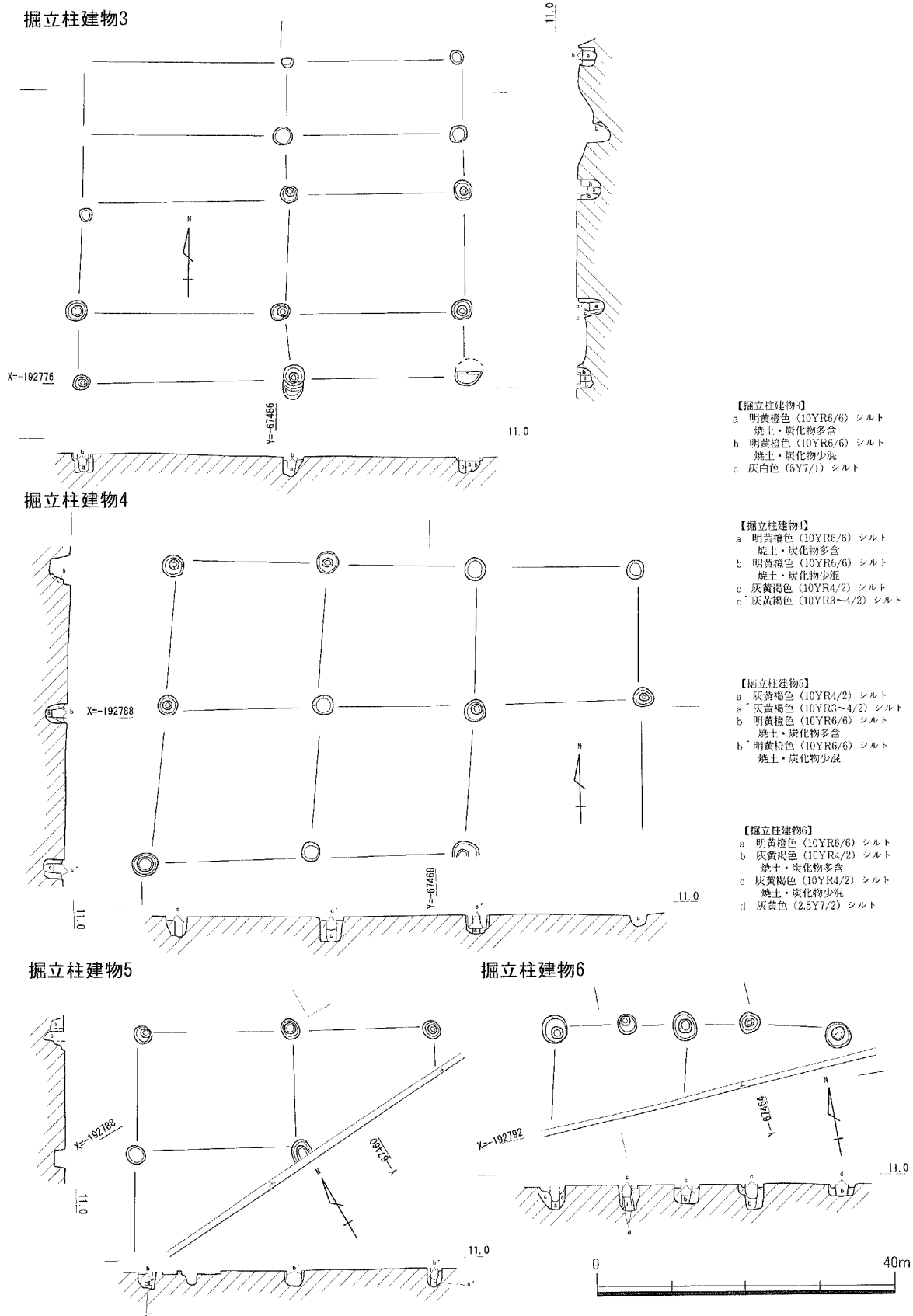
第56図 川辺1次上面遺構概略図 (S=1/400)



第57図 川辺 1次掘立柱建物 1・2 (S=1/80)

尺が他の間尺より短いため、東西棟の建物で桁行3間、梁行2間と考えられる。主軸は $N-2^{\circ}-E$ である。桁行方向の間尺は東から2.25m—2.00m—2.08m、梁行方向の間尺は北から1.91m—2.13mを測る。柱径は25~40cm、残存の深さは15~32cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、柱当りの部分はこれより若干濃い褐色味の強いシルトである。柱穴94と122からは瓦器碗片、土師器羽釜が出土している。このことから13世紀前半の廃絶家屋と思われる。

掘立柱建物5 調査区南東隅で検出したが、南と東は調査区外のため建物の規模は不明である。東西2間以上、南北1間以上である。主軸は $N-34^{\circ}-E$ である。東西方向の間尺は東から1.97m—2.00m、南北方向の間尺は1.67mを測る。柱径は20~25cm、残存の深さは15~25cmを測る。柱穴の埋土は灰黄褐色シルトに褐色シルトが混ざる。柱穴97と103の埋土には焼土と炭が混在する。この建物も焼失の可能性があると考えられる。



第58図 川辺1次掘立柱建物3・4・5・6 (S=1/80)

掘立柱建物 6 調査区南東隅で建物の北側の柱列 4 間分を検出した。まだ東に延びる可能性も考えられる。南は調査区外のため不明である。主軸方向は建物 1 と酷似する。東西方向の間尺は東から 1.23m—0.87m—0.95m—0.95m である。柱穴 80 と 85 は束柱であろうか。とすると間尺は 2.10m—1.90m の 2 間となる。柱径は 30～38cm、残存の深さは 15～33cm を測る。柱穴の埋土は灰黄褐色に褐色が混ざるシルトで、柱当りの部分は暗褐色である。また柱穴 85 の埋土だけ焼土が認められ、柱当りの部分は焼土の密度が高い。

掘立柱建物 7 地山（玉砂利層及び橙色シルト）と考えられる層上で検出した。東は調査区外のため不明である。東西棟の建物で、桁行 3 間以上、梁行 2 間の規模である。主軸は N—18°—E である。桁行の間尺は東から 2.10m—2.17m—2.18m、梁行の間尺は北から 1.84m—1.97m を測る。柱径は 25～40cm、残存の深さは 15～30cm を測る。埋土は灰白色シルトを主とする。

掘立柱建物 8 掘立柱建物 7 の南に隣接する南北棟の建物である。主軸は N—18°—E である。ベース土は建物 7 と同じである。規模は桁行 3 間、梁行 2 間で、桁行方向の間尺は北から 1.90m—1.94m—1.96m、梁行方向は東から 2.46m—2.25m を測る。柱径は 25～38cm、残存の深さは 7～20cm と浅く後世にかなり削平されたものと考えられる。掘形の埋土は灰黄色シルトで、柱当りの部分は褐灰色シルトである。

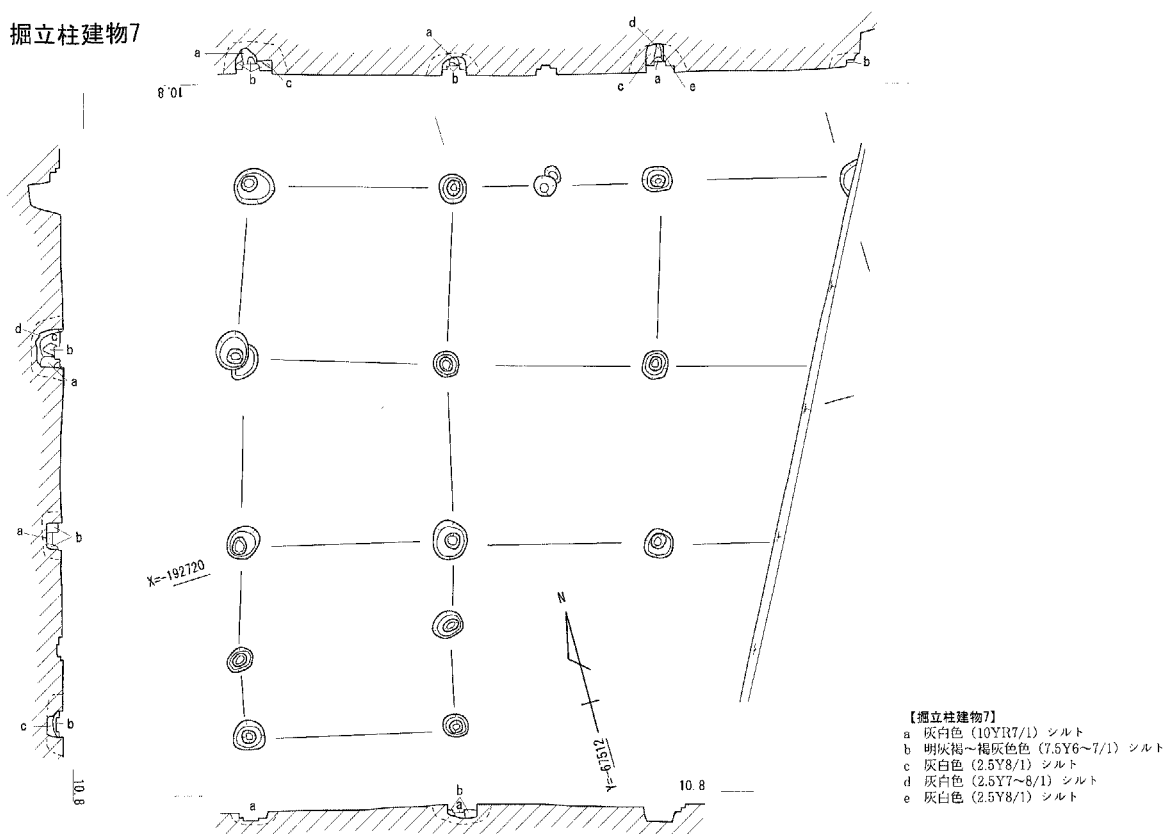
掘立柱建物 9 調査区の北端で検出した東西棟の建物である。西側は調査区外で不明のため、この建物の規模は桁行 4 間以上、梁行 2 間となる。また欠損している柱穴もあり、残存の深さも浅いことから削平されたものと考えられる。主軸は N—7°—E である。桁行方向の間尺は中の柱列で、東から 2.33m—2.17m—2.08m—2.22m、梁行方向の間尺は北から 2.30m—2.25m を測る。柱穴の埋土の状況は建物 8 と同じ様相を呈する。残存の深さは 4～12cm と非常に遺存状況が悪い。

掘立柱建物 10 調査区の中世溝の密集する北側で検出した。東側は調査区外のため全容は不明である。この建物は東西棟で規模は桁行 2 間以上、梁行 2 間である。桁行方向の間尺は東から 2.06m—2.27m、梁行方向の間尺は 2.38m—2.46m を測る。主軸は N—34°—E である。また、南東の柱穴が遺構 415（溝）の埋土上の位置に当たり検出できなかった。柱径は 30～40cm、残存の深さは 4～7cm を測る。埋土の状況は建物 8・9 と同様である。

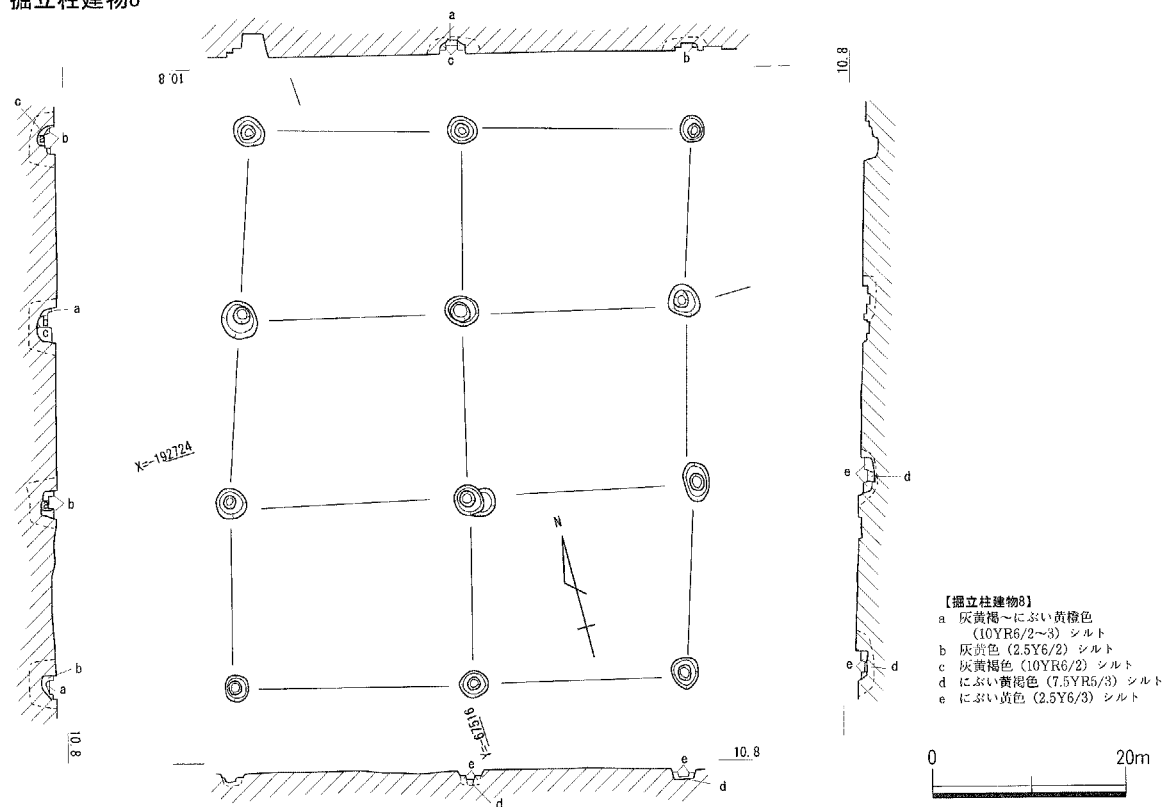
次に上面から検出した溝状遺構について記す。時期的には全て中世の範疇にある。先に南側調査区で検出した溝について記述する。

溝 8 は、北側の現有水路に沿って検出した。調査区の東端から西端まで延びる。調査中、これの西側の検出に難を来し、当初は別遺構と考えていた溝 217 は結果的には方向性や底のレベルにおいても齟齬をきたさないで同一の溝と判断した。時期は出土遺物から 15 世紀と考えられ、北側の現有水路は、この溝の微妙なカーブも近似しているため、この溝を踏襲して現在に至ったのではないだろうか。幅は 0.5～2.5m とバラつき、残存の深さは 12～30cm と西側に向かって流れ

掘立柱建物7



掘立柱建物8



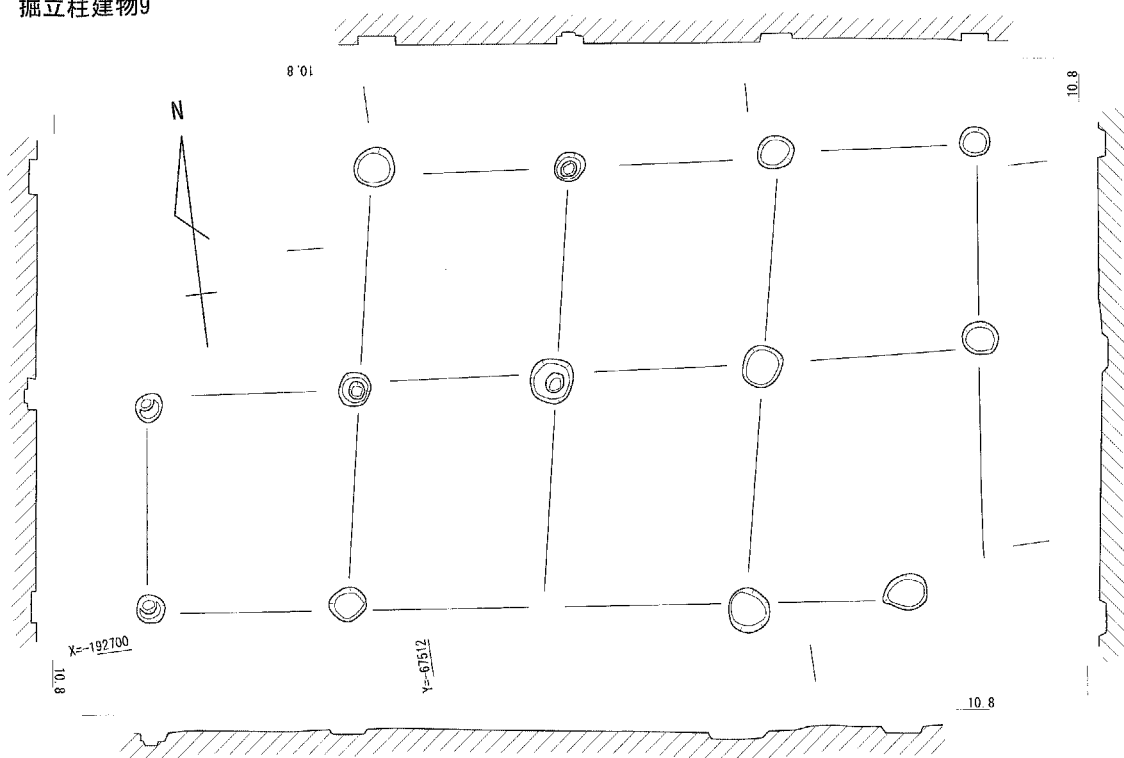
第59図 川辺1次掘立柱建物7・8 (S=1/80)

る。調査区の中程で一時期古い溝45と交差する。この溝は北側では検出できたが途中からは不明で、南側にラッパ状に広がる。土層図作成地点では幅約2m、残存の深さは12～25cmを測る。溝9は調査区の東端で検出し、南北に延び途中で消滅する。検出長約9.5m、幅は0.7～1.5m、残存の深さは約20cmを測る。溝10は重複関係から溝9より新しく、溝9と直行する。この溝も調査区の東から西に延び、検出長17.5mで消滅する。幅は0.5～1.2m、残存の深さは15cmを測る。溝18は溝としたが、不定形の土坑である。規模は約2m×8mである。残存の深さは35cmを測る。北側の肩はほぼ垂直に立ち上がるが、南側は緩やかである。埋土は2層に分層され、下層の埋土はブロック状に混在し、意図的に埋められたような状況が窺える。上層は自然堆積であろう。溝221と溝222は南側調査区の西で検出した南北方向の溝状遺構である。溝221の方が新しい。この地点では溝8（溝217）と交差するはずであるが、溝8のプランが不明であったため前後関係もはっきりしなかった。溝221は幅0.9～1.4m、残存の深さ6～15cmを測る。また、北と南の底のレベルは10m隔たって、約20cmの比高差が認められ南流する。溝222の検出長は約7mを測るものの、残存の深さは僅か4cmと浅い。以上が南側調査区で検出した中世の溝である。

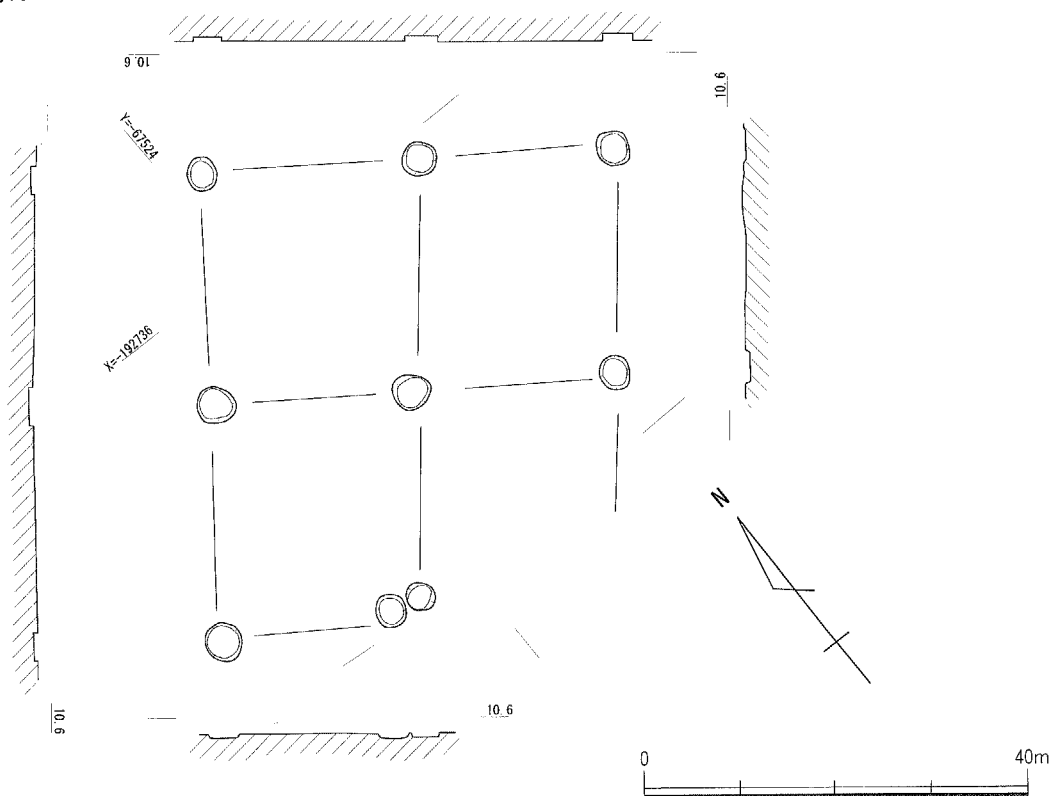
次に北側調査区で検出した溝について記す。この調査区の南は同一方向の溝が密集する。そのため、遺構検出には難を来とし、検出されるべき面からかなり下で検出している。本来の検出面は調査区の東壁で確認した。

溝406は調査区幅の東端から西端にかけて検出した。調査区の東壁における幅は2.5m、残存の深さは約60cmを測る。土層図の地点では溝状遺構528を僅かに切っている。埋土の堆積は東壁では2層に分層でき、上層は灰黄色シルト、下層は灰色シルトであった。溝の断面は分層される地点で形状が変化し、上部は椀状、下部は逆台形状を呈する。溝414は溝412と重複し、溝412より後出する。幅は最も広い地点で2.3m、狭い地点で約1.0mを測る。残存の深さは東壁では約30cmを測る。底は平らで両肩は緩く立ち上がる。埋土は基本的には2層に分層され、主として灰白色シルトである。底には厚み5mm程度に微砂が溜まる。溝412は検出長約13mを測る。幅は溝414に切られているため1.4m以上である。残存の深さは26cmを測る。埋土はレンズ状の堆積を呈し、主となるものは上層から明赤灰色シルト→黄橙色シルト→明褐色シルト（2cm大の礫を少量含む）であった。溝417は南側調査区でも記した現有水路の北側で検出した。この溝の南側は現有水路域となっているため、その前身と考えられる。幅は東側で1.4～2.0m、残存の深さは27cmを測る。埋土はレンズ状の堆積を呈し、主となる埋土は上層が灰白色シルト、下層は緑掛かった灰白色シルトであった。底は平らで厚み5mm程度の鉄分が付着していた。なお、北側の肩には杭の痕跡が確認された。溝411は西側でラッパ状になり、溝410より後出する。調査区の東壁では検出幅1.6m、残存の深さは32cmを測る。底の形状は椀形を呈し、埋土はレンズ状の堆積を示し、灰白色シルトが基調となる。溝410も東壁の土層図によれば検出幅2.0m残存の深さ32cmを測り、溝411

掘立柱建物9



掘立柱建物10



第60図 川辺1次掘立柱建物 9・10 (S=1/80)

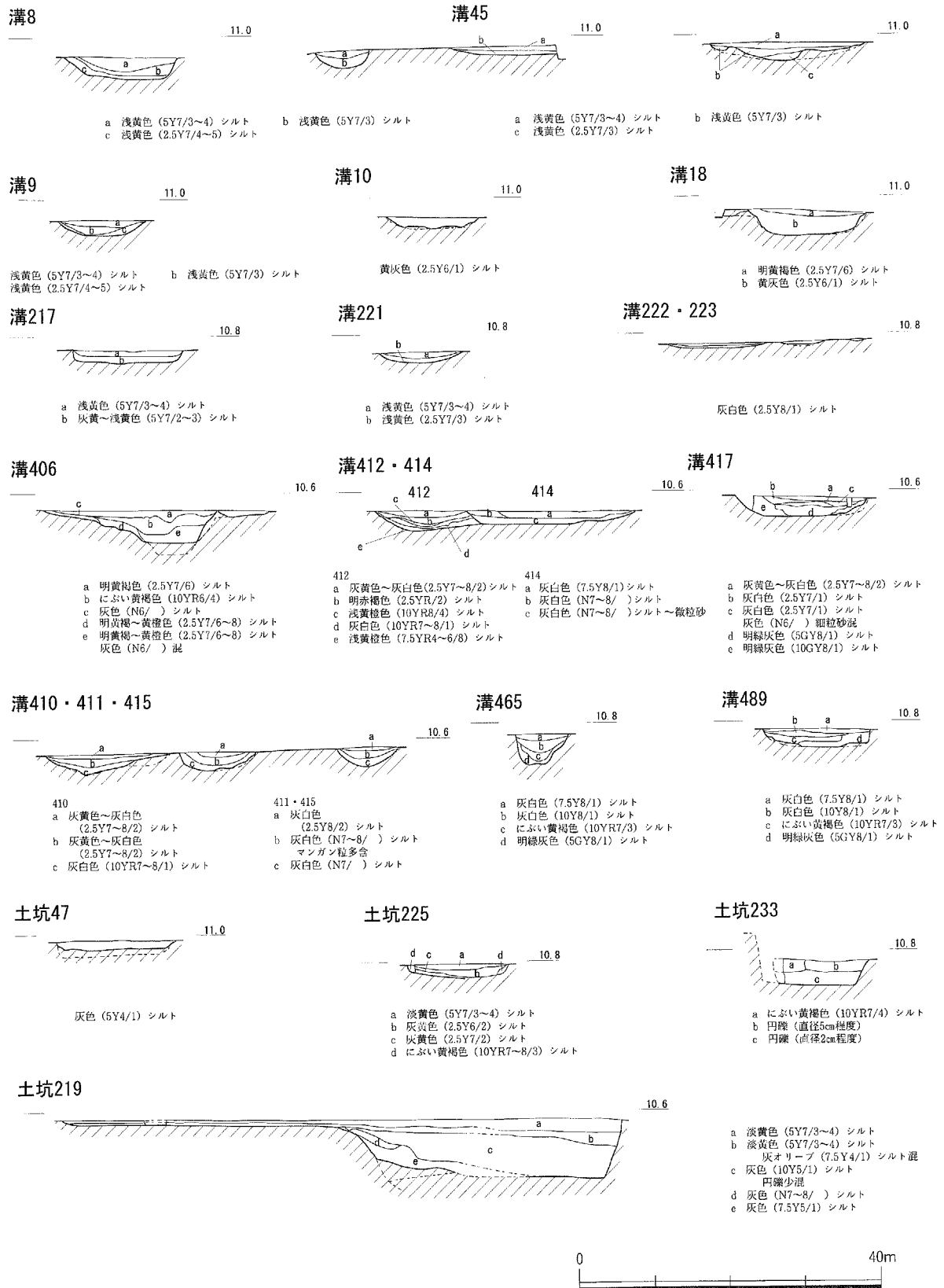
と同じ様相を呈する。この溝の堆積もレンズ状を呈し2層に分層できる。両肩には埋没過程の状況を示す土が堆積する。埋土は灰白色シルトを基調とする。溝415は東壁土層で幅1.55m、残存の深さは33cmを測る。これの埋土の堆積状況や色調および土質は溝411とまったく同様である。溝465の検出幅は約0.7mを測り、残存の深さ40cmを測る。埋土の堆積はレンズ状を呈し、主には灰褐色系のシルトで、微妙に色調が異なったため4層に分層できた。北の肩部はほぼ垂直であることから人工的に掘られた溝と考えられる。溝489は北端で検出した。幅は約1.4mを測り調査区西壁手前で消滅する。上層は灰白色シルト、下層は緑掛かった白色である。北側の肩は垂直に立ち上がるが、南側のそれは緩やかである。

記述する土坑と土墳墓は全て南側調査区で検出した。以下にこれらの遺構について記す。

土坑47の形状はほぼ円形を呈し、直径約1.6m、残存の深さは約12cmを測る。埋土は単一層で灰色シルトである。肩は緩やかに立ち上がる。土坑225は溝221の東側に隣接して検出した。平面形状は長方形を呈し、長軸1.35m、短軸0.8m、残存の深さは約17cmを測る。埋土は概ね2層に大別でき上層は浅黄色シルト、下層は灰白色シルトであった。また、土坑縁の埋土は幅5～10cmの範囲で黄橙色シルトの箇所もあった。下層からは微量の骨片と、鉄釘（棺釘）1本、瓦器2片が出土した。故に、平面形状や出土遺物から判断して土墳墓と考えられる。後世にかなりの削平をうけている。

土坑233は調査区の西側南端で検出した。平面形状は円形で、直径約1.25mを測る。残存の深さは約30cmを測り、埋土は玉砂利であった。この玉砂利は粒の大きさに2層に分層できる。上層は径5cm内外、下層は径2cm内外であった。土坑219は溝217（溝8）を切る形で検出した不定形土坑である。このため時期は15世紀中頃より後と考えられる。これの北側は現有水路であるため不明である。上層の埋土は南と東に流れ込み、この範囲までを入れた規模は長軸7.6m、短軸4.75mを測る。しかし、この上層を排除した元の掘り込み規模は南北3.8m以上、東西3.6mである。残存の深さは約80cmを測る。埋土の堆積は概ね浅黄色シルトー玉砂利層に灰色シルトの混層ー灰色シルトに玉砂利層の混層であった。

土墳墓375の平面形状は長楕円を呈し、軸を南北にする。規模は長軸1.15m、短軸0.85mを測る。これの北側上部は溝8により壊されている。残存の深さは約30cmを測る。断面の形状は丸みを帯びた逆台形で、底は平らであった。検出面から約5cm下（b層）で土壌化した骨を確認した。なお、骨と思しきものはこれだけであった。他は土と化したと思われる。また北西隅で土師器皿が押し潰された様な状況で出土した。それ故、この状況から土墳墓と判断した。埋土はレンズ状に堆積し4層に分層できた。南端ではこれらの層を上から切るように、幅4cmの浅黄色のシルトが縦にはいる。棺材の痕跡であろうか。出土した土師器皿は供物皿と考えるのが自然で、ただ棺の外か内かは不明である。

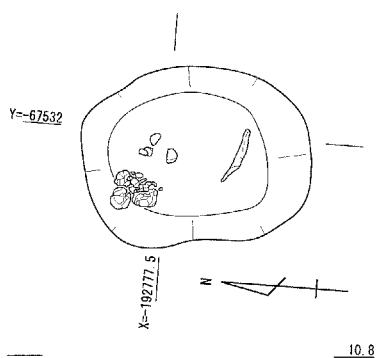


第61図 川辺1次上面遺構断面図 (S=1/80)

土壙墓362の北は溝217により後世に削られている。遺構の平面プランは溝217の底で検出したラインである。この土坑が掘削された当初は、もう少し北側に大きかったものと推測される。この遺構も土壙墓375と同様に主軸を北にする。検出できた規模は南北方向0.85m、東西方向0.85mを測り、平面形状は隅丸方形となる。残存の深さは中央で27cmを測り、南端の底は5cm程度窪む。埋土は基本的に灰黄色シルトである。底で数片の骨と棺釘が出土した。この遺構は土壙墓375と検出レベルが同数値（H=10.48m）で、尚且つ、検出幅も等しいことから軸長も土壙墓375と近似値であったと思われる。

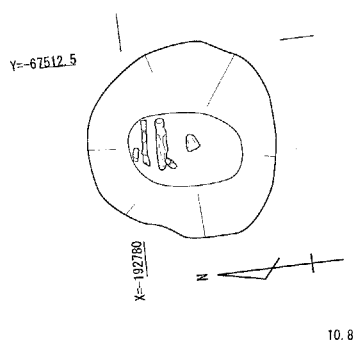
土壙墓365も南北方向を主軸とする。この遺構の北は溝217、南は溝361で削られている。検出できた規模は南北方向1.10m、東西方向0.85mを測る。残存の深さは中央底で43cmを測り、断面の形状は碗形を呈する。埋土はレンズ状に堆積し、3層に分層できた。埋土の質と色調は基本的には黄褐色シルトであった。溝361を掘りすぎたことにより、この底で骨片が出土した。断面形状から判断して、先の土壙墓362・375と様相が異なるが、骨片の出土により土壙墓と断定した。

土壙墓375



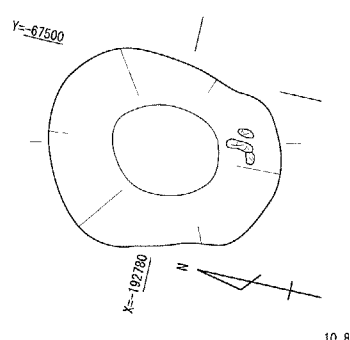
- a 浅黄～淡黄色 (2.5Y7～8/4) シルト
- b にぶい黄～浅黄色 (2.5Y6～7/4) シルト
- c にぶい黄褐色 (10YR6/4) シルト
- d にぶい黄褐～にぶい黄棕色 (10YR5～6/4) シルト
- e 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト

土壙墓362



- a にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト
- b 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
- c 灰色 (5Y4/1) シルト混
- d 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト

土壙墓365



- a にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト
- b 黄褐～明黄褐色 (2.5Y5～6/3) シルト
- c 明黄褐色 (2.5Y6/6) シルト



第62図 川辺1次土壙墓362・365・375 (S=1/40)

B. 下面遺構

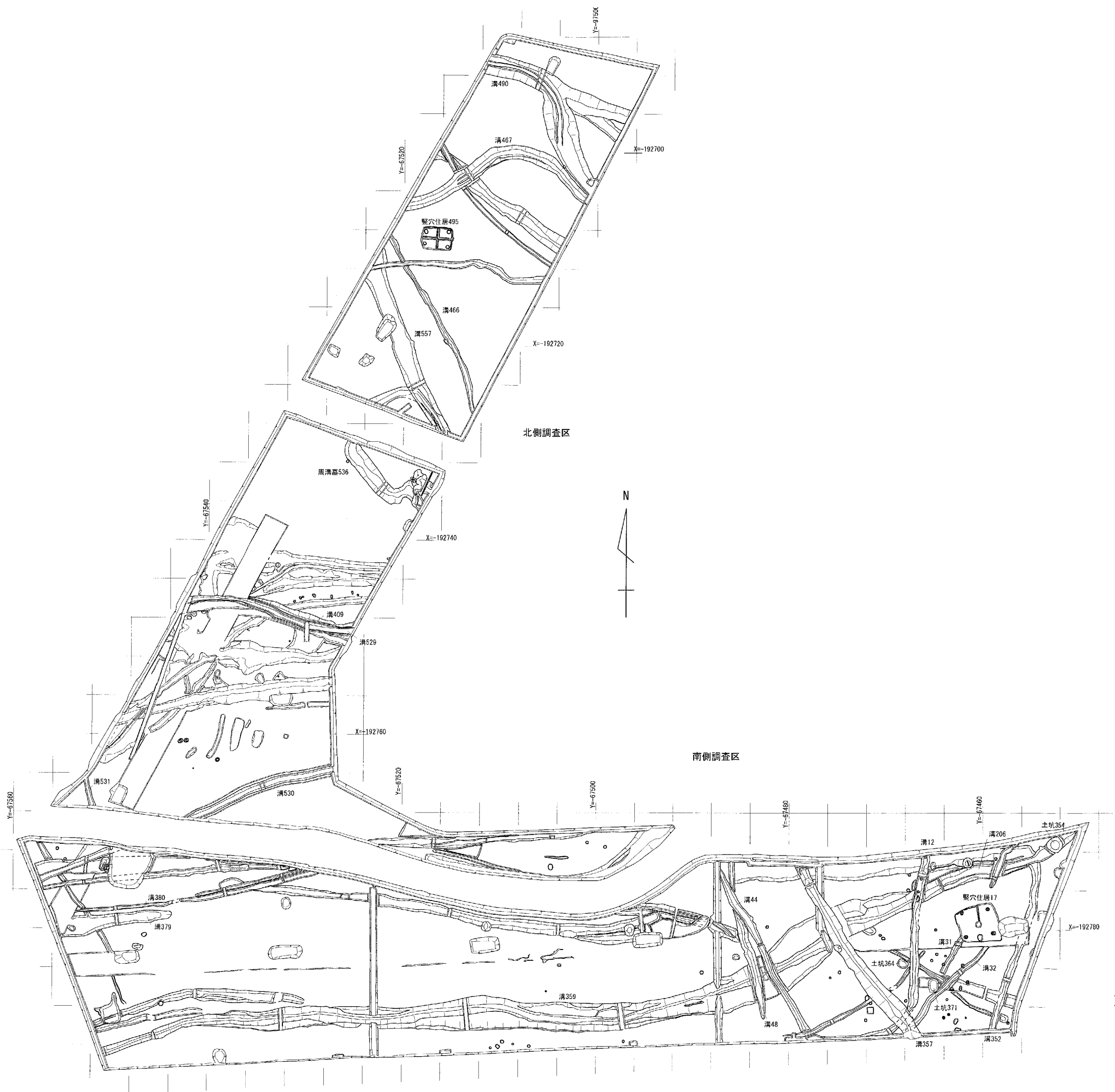
この面で検出した遺構は庄内併行期の竪穴住居、周溝墓、溝状遺構、飛鳥時代の溝、平安時代の溝などがある。遺構密度は北側調査区では北に、南側調査区では東側に集中する。特に南側調査区の東は溝状遺構、土坑などが錯綜しているため、出土遺物の皆無な遺構については、遺物が出土している遺構との重複関係に頼らざるを得ない。

a. 北側調査区

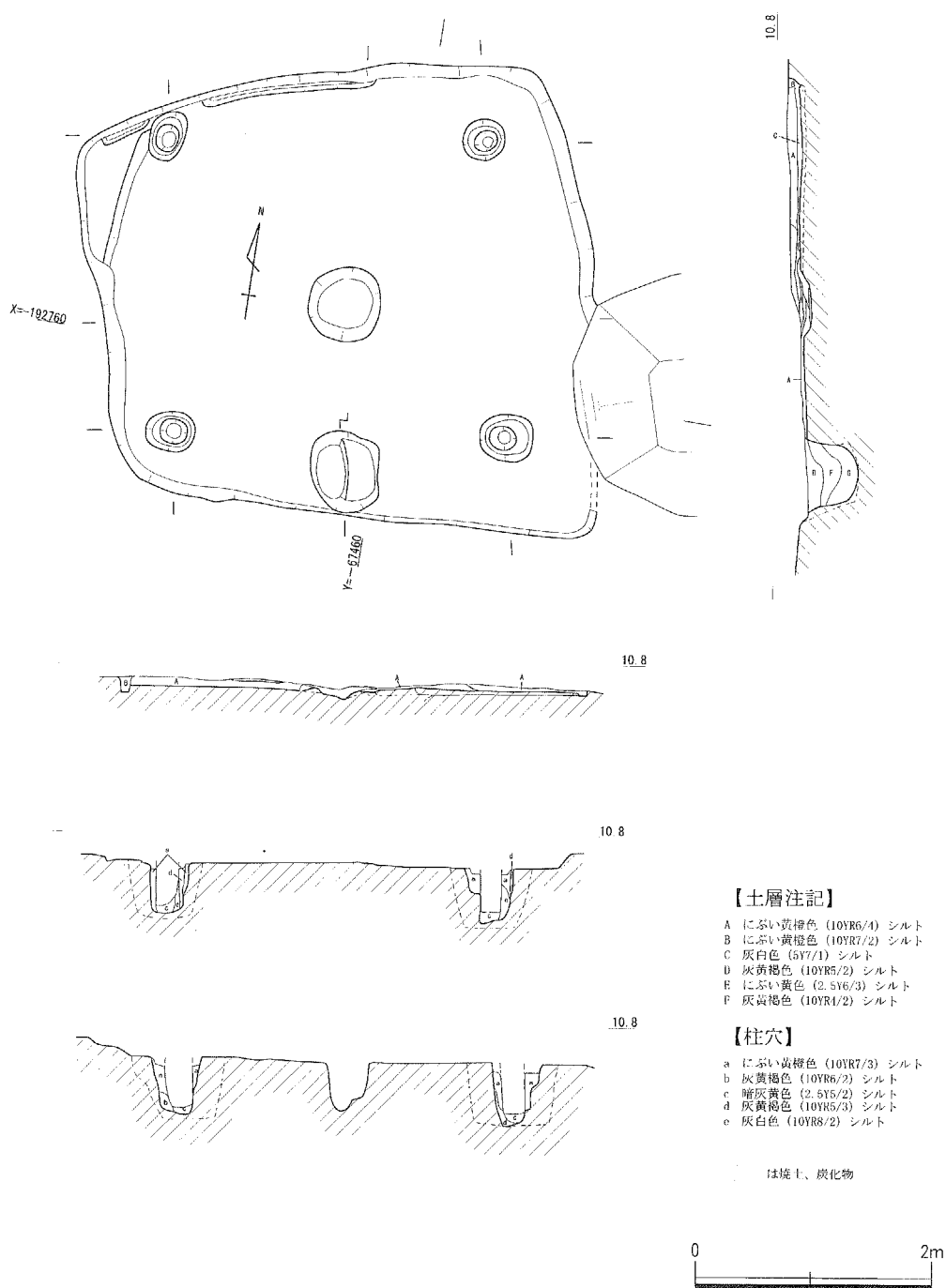
竪穴住居址495の平面形状は隅丸長方形である。規模は長軸約3.3m、短軸約2.3mと小さい。残存の深さは15cmを測る。この住居に伴う炉や貯蔵穴は検出できなかった。主柱穴らしき直径30～40cmの浅い穴を床面四隅に確認したが、どれも4～6cmの浅いものであった。埋土は2層に分層でき、水平堆積であった。壁の内側には壁溝状のものが巡る。この遺構は小規模なことや付随施設がないことなどから竪穴住居でない可能性もある。

周溝墓536は北側調査区の中央部で検出した。周溝墓の中央部には里道があり、東側の水田地帯に行くための必要不可欠な道となっているため、この部分の調査はできなかった。そのため必然的に墳丘部の調査には至らなかった。なお、里道の北側において土層図を作成したが、墳丘および主体部の土層と確認できるものはなかった。主軸は、N-40°-Wである。墳丘部の平面形は正方形を呈し、その規模は検出した標高で7m×7mと推測できる。周溝は、幅1.55m、残存の深さは37～80cmとかなり深さに幅があり、断面の形状は地点によって様々で、二段落ち、船底状、最も深い箇所では「V」字状を呈する。埋土は全ての地点で3層に分層でき、上層と中層は黄橙色系のシルト、下層は黄褐色系シルトであった。検出状況では、南西方向は細くなり途切れる兆しが見受けられた。また、新しい段階の遺構と重複関係にあるため確定し得なかったが、反対側の南東辺では周溝が屈曲することから、突出部を備える可能性が高い。周溝がこの突出部を廻るのか否かは不明であるため、突出部でなく陸橋部の可能性も否定できない。ただし、周溝の屈曲は方形隅から2mの位置で始まり、これを主軸で折り返して復原すれば、主墳丘と突出部の接合部は幅3mと主墳丘の一边の大部分を占めており、充分発達が進んでいることが予測され、周溝底から出土した底部穿孔された二重口縁壺が庄内併行期であり、時代的にも突出部として位置付けることに矛盾しないと考えられる。

溝490は西側で2本の溝が合流する。調査区北端を東西に貫くものと、南東から北西方向に延びるものである。調査時はこの2本の溝が同一のもので、分岐しているものと思い同じ遺構番号を付した。実はこれは誤りで別々の溝である。そのため、ここでは直線的に延びている溝を溝490-1、南西から北西方向に延びる溝を溝490-2として扱う。溝490-1の調査区東壁での幅は約5.0m、調査区西壁では溝489に南肩を削られているため幅は3.0m以上となり、東から西に向かって細くなる。残存の深さは東も西も37cmであった。また底の標高も同数値(H=10.43m)であった。

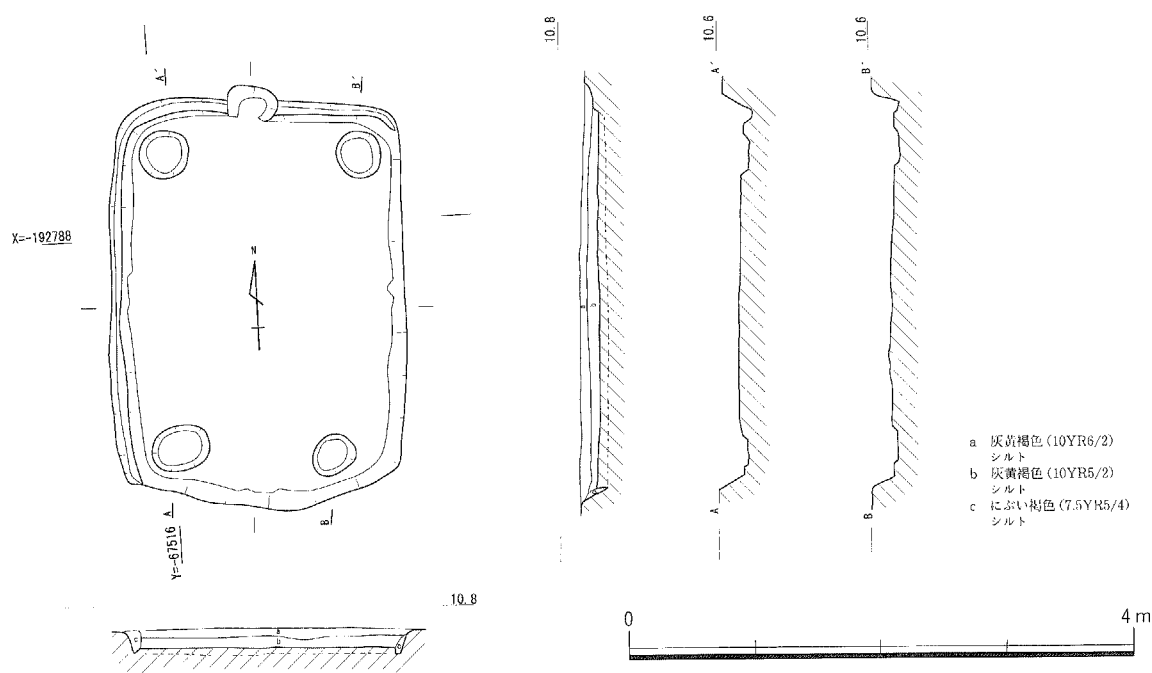


第63図 川辺1次下面遺構概略図 (S=1/400)



第64図 川辺1次竪穴住居17 (S=1/60)

溝490-2の幅は調査区東壁では北肩が攪乱により欠損し、2.7m以上、調査区西壁では3.3mを測る。また、中央の観察用ベルトでは2.25mと最も狭い。残存の深さは53～70cmを測る。底の標高は最も低い地点で、上記の3箇所ともにH=10.05mを測る。断面は特異な形状を呈し、底の中央に25～35cm幅の平滑な高まりがあり、その両側が6～10cm程度凹み、底は2条となる。埋土はレンズ状の堆積を呈し、底は中央の高まりから両側の底に掛けて鉄分がこびり付きカチカチとな



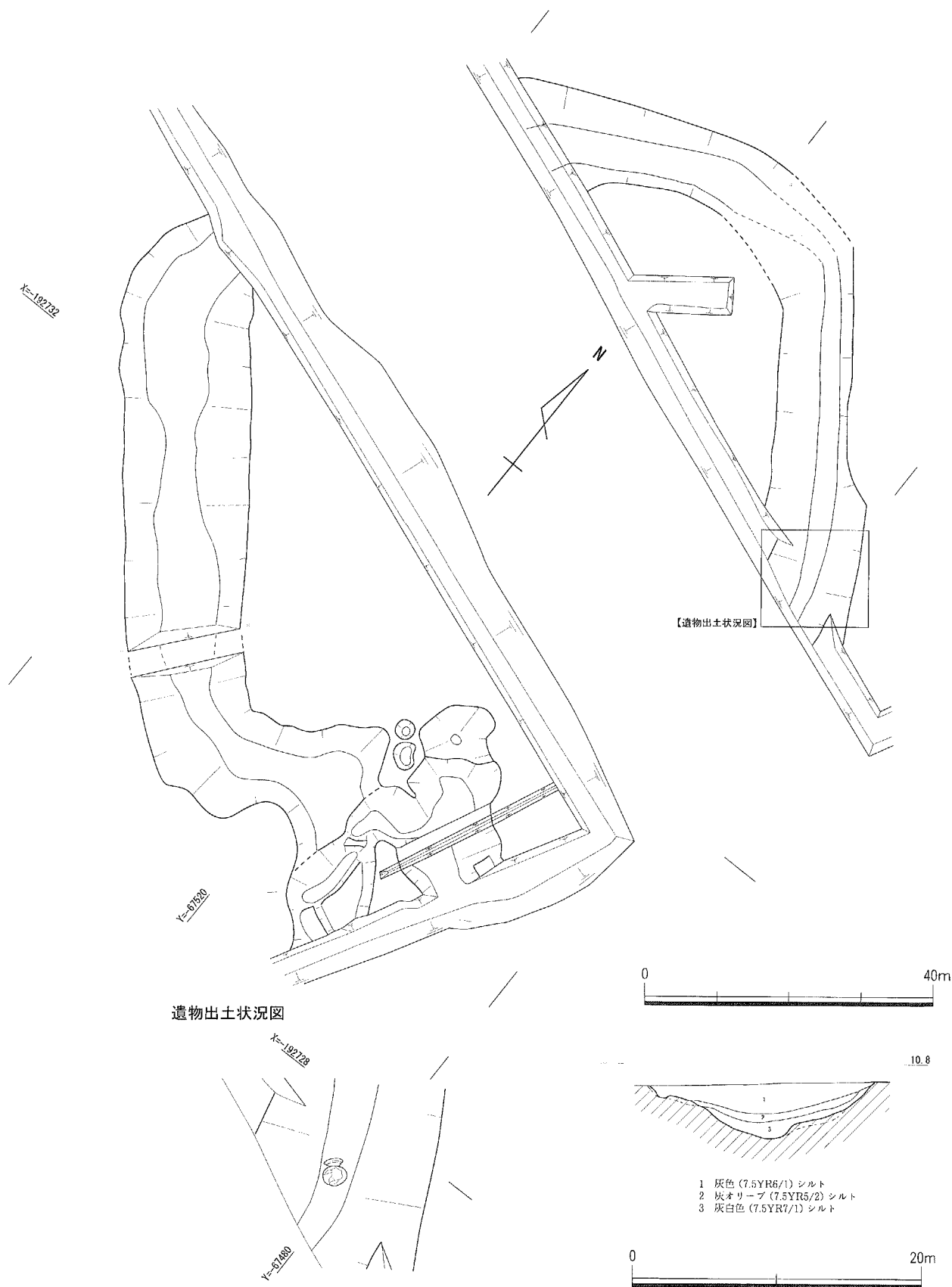
第65図 川辺1次竪穴住居495 (S=1/60)

る。溝467は蛇行しながら調査区を横切る。調査区東壁の土層では溝490-2の土層の中にすっぽり入る。このことより溝490-2より新しい。幅は1.40m~1.75mを測る。残存の深さは45cmを測る。底の標高は調査区の東と西では、西のほうが約10cm低いいため西流していたと考えられる。溝557、溝466は調査区中央北寄りで並行して検出した。

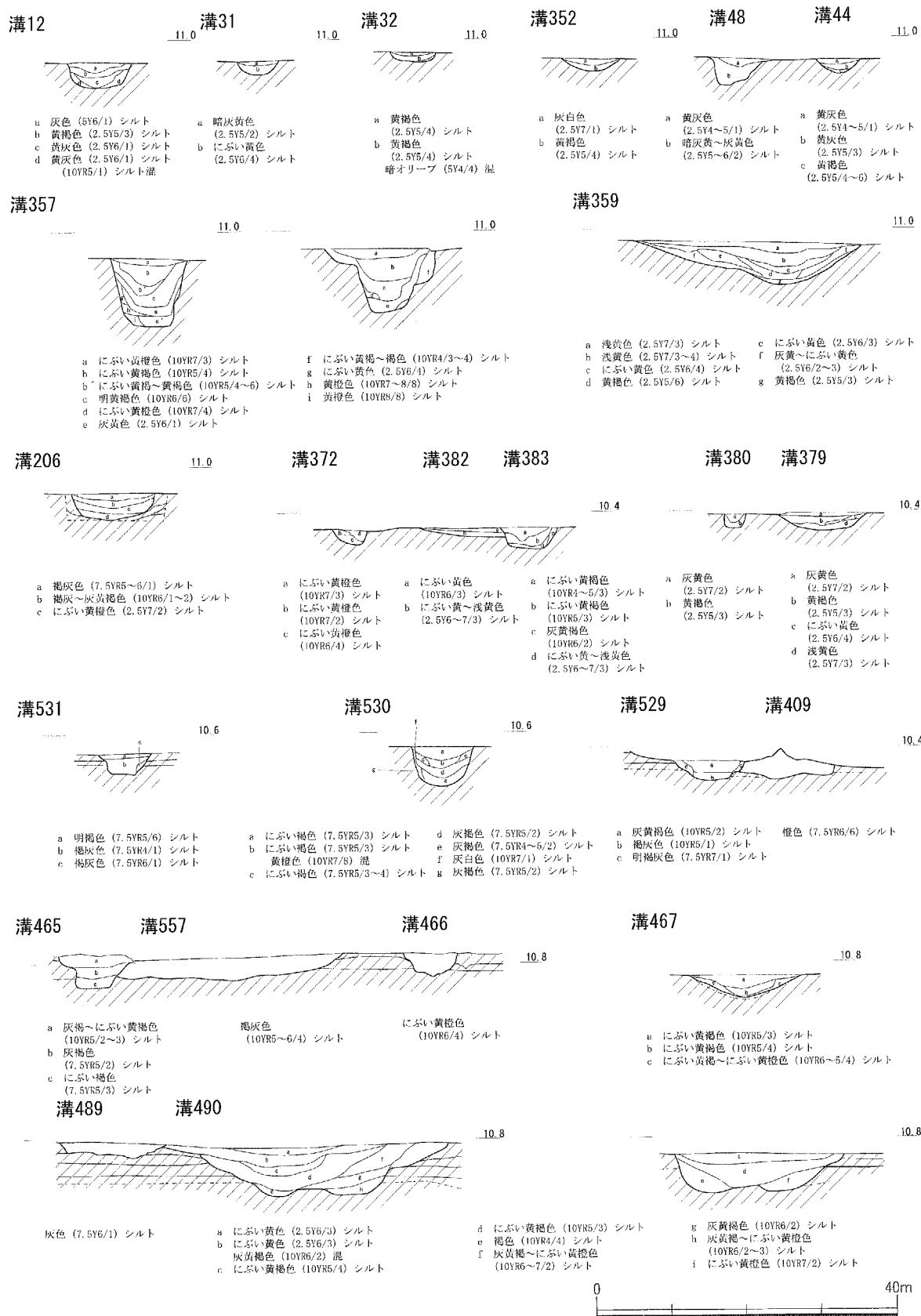
溝557の南は周溝墓536により破壊されており、先行している。幅は3.5~4.0mを測り、残存の深さは25~30cmを測る。埋土は単層で黄褐色シルトである。溝466の幅は35~70cmを測り、残存の深さは中央の最も深いところで30cmを測る。底は凸凹である。

調査区南側で検出した溝529と溝409は重複しながら西流する。溝529は上面で検出した溝414により上部はかなり掘削されているものと思われる。検出し得た幅は約1.0m、残存の深さは26cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。溝409も同じく上面検出の溝414と溝412により上部は掘削されている。調査区東壁では溝529に北肩を掘削されているため、幅は1.2m以上である。残存の深さは40cmである。

溝409は庄内併行期であるため溝529は同時期、或いはこれより新しい時期である。溝531は調査区の南西隅で検出した。しかしながらこれに繋がる溝を南調査区では検出できなかった。この溝の幅は70cm、残存の深さは26cmを測る。底は平滑で両肩も斜め上方にしっかりと立ち上がる。人為的に掘削された溝であろうか。



第66図 川辺 1 次周溝墓536 (S=1/80・S=1/40)



第67図 川辺1次下面遺構断面図 (S=1/80)

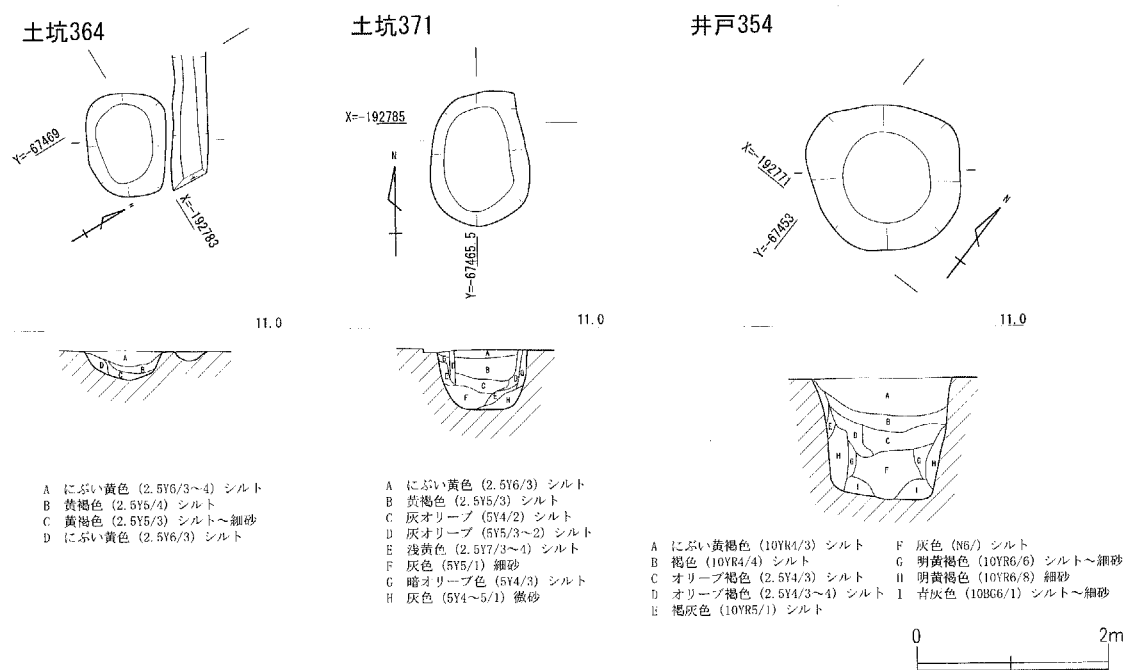
b. 南側調査区の検出遺構

竪穴住居址17は南側調査区の東端で検出した。この竪穴住居はすでに試掘調査の段階で南側の一部が確認されていた。本調査では機械掘削による表土除去直後に住居中央部において、焼土および炭が1.5m×2.2mで多量に露出していたので焼失家屋と判断した。平面形状はやや歪な隅丸方形を呈し、規模は長軸4.15m、短軸3.8mを測る。住居のほぼ中央に円形の炉が設置され、南壁の中央で壁に取り付くように貯蔵穴、四隅の頂点約30～70cm内側に支柱穴を4本検出した。また、壁の内には壁溝が全周する。壁溝の幅については削平深度の違いにより2～12cmと大きく開きがある。住居の埋土は地山と考えられる層まで2層分を確認したが、これの上層が埋土で、下層は貼床と判断した。貼床と考えられる層は炉より北側で確認した。この住居の残存の深さは約5～8cmと非常に浅く、埋土は単層でにぶい黄色シルトであるが、炉を覆う範囲の周辺だけは焼土層であった。また、貼床の厚みは3～6cm程度で炉に近づくにつれて厚くなる。炉の検出規模は55cm×60cmの円形で、深さは11cmである。埋土は焼土と炭が互層をなし、最下層の焼土・炭混じりのにぶい黄色シルトの上に厚さ5mmの灰が帯状に堆積する。その底は平らで両壁は緩やかに立ち上がる。貯蔵穴の平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸62cm、短軸55cm、深さは45cmを測る。底は碗形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がり、上方でやや外方に開く。埋土は3層に分層できシルトであった。支柱穴の掘形は4本ともに直径42cmを測り、柱当りは16～22cmを測る。深さは45～47cmを測り、ほぼ4本ともに近似値である。また、底のレベルも7cmまでの開きであった。柱間は北東隅から時計回りに2.55m—2.80m—2.50m—2.70mであった。このように支柱穴の立上げ要素は、数値に余り大差の無い安定したものであった。

溝206は溝359を踏襲していると思われる。南側調査区の北東隅から南東隅に延びている。溝359は本調査で検出した溝の中では最も古いと考えられる。その両端は不明で、溝206となっている。それ故に遺物の取り上げも混ざっている可能性が無いとは言えない。溝359の幅は最も広い箇所では5.0m、残存の深さは約55cmを測る。埋土はレンズ状の堆積で、北側が深くなる。溝206もまた両端では確実に確認したが、中程ではその存在が不明な箇所が何箇所かあった。幅は1.1～1.5mを測り、残存の深さは35cmを測る。この溝の断面形状は「U」字状を呈し、人為的な掘削によるものと思われる。この溝からは石包丁片が出土している。南側調査区の北から南に延びる溝12は溝359・206と交差し、重複関係からこれらの溝より新しい。幅は約85cm、残存の深さは約40cmを測る。この溝の断面形状も溝206と酷似し、人為的な掘削と考えられる。埋土の堆積はレンズ状である。溝31は試掘調査の段階から竪穴住居17より新しいことが判明していた。この溝は北側の調査区外から竪穴住居17上を斜めに横切り、それより南は不明であった。幅は55cm、残存の深さは18cmを測る。断面の形状は「U」字状を呈する。溝32も試掘調査時において竪穴住居17と重複し、これより新しいということが判明していた。幅は約60cm、残存の深さは12cmと浅いため北側

では不明であった。溝357は前述してきた溝とは違い、地形的な制約をうけずに北西から南東に延びる溝である。この溝の幅は北側では1.0m、南側では肩崩れを起こし1.5mと拡くなる。残存の深さは85～90cmを測り、断面の形状は逆台形となる。埋土はレンズ状の堆積を呈する。この溝の肩の張りや方向から判断して、人為的に掘削された灌漑施設的な用水路と考えるのが妥当ではないだろうか。溝352は調査区東端で検出した南北方向に延びる溝である。これの北側では西に曲がるが、これより先は不明である。検出幅は80cmを測るが、残存の深さは15cmと浅い。溝44と溝48は調査区中央やや東寄り検出した南北方向の溝である。これらは北側で交差し、溝44の方が新しい。溝48は北側の調査区外から南に延び、消滅する。幅は60～80cmを測り、残存の深さは37cmを測る。溝44は溝357と西に約7m離れて並行する。検出幅は0.6～1.0m、残存の深さは20cmを測る。埋土は黄褐色シルトがレンズ状に堆積する。

調査区西端の北側で細い溝を数条（溝372・379・380・381・382・383）検出した。西端の状況は、地形的に考えておそらく西流していたと思われる溝372・379・380・382・383が、北西から延びる溝381を切っている。溝381は検出長約19mを測る。検出幅は北側で70cm南側で50cmと徐々に細くなり消滅する。溝372は方向性から判断して、北側調査区の溝550と繋がると考えられる。幅は45～80cm、残存の深さは20cmを測る。溝382と溝383は重複し、溝383の方が新しい。溝382の検出幅は1.2～1.4mであるが残存の深さは12～14cmと非常に浅い。溝383は方向性および底の標高から判断して、南側調査区の溝530に繋がるものと考えられる。検出幅は75～80cmと、比較的その数値に差は無く、断面の形状は「U」字状を呈する。これらの状況から溝383（溝530）は人為的に掘



第68図 川辺1次土坑364・371・井戸354 (S=1/80)

削されたものと考えられる。埋土の堆積は溝383と溝530双方ともにシルト質のレンズ状の堆積を呈すが、色調に差異があった。溝379は検出長12mで、東側は不明である。検出幅は1.2m、残存の深さは24cmを測る。溝380は溝379の北側に接して西流する。幅は30～35cmの細い溝ではあるが、両肩は垂直に立ち上がり、断面の形状は「U」字状を呈する。この溝も人為的に掘削された溝と考えられる。

土坑364は溝12の西に隣接して検出した。平面形状は楕円形を呈する。長軸1.05m、短軸0.85mを測る。残存の深さは30cmを測り、埋土は黄褐色系シルトを基調としてレンズ状に堆積する。ただ、底の埋土には微砂が混ざっていた。

土坑371は溝32と溝39が交差する地点で検出した。この土坑は溝39により北東隅が欠損している。平面形状は長楕円形を呈する。規模は長軸1.4m、短軸0.95mを測る。残存の深さは60cmを測る。断面の形状は「U」字状を呈する。埋土は、両側に幅5cm程度の縦筋がはいる。これは木枠などの痕跡であろうか。底は灰色微砂層が堆積する。

井戸354は調査区北東隅の溝206上で検出した素掘り井戸である。平面形状はほぼ円形を呈す。掘形の規模は直径約1.5mを測り、残存の深さは1.25mを測る。埋土は褐色系シルトを基調となす。掘形の内側には細砂混じりのシルトと細砂が貼り付く。

2. 遺物

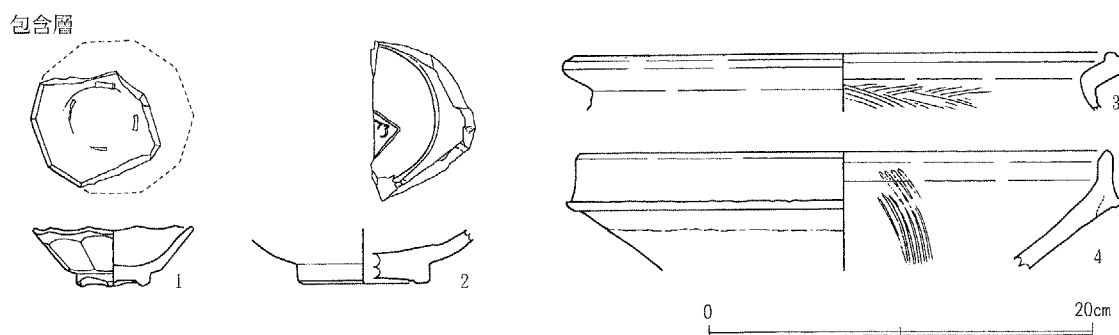
1～4は、包含層出土遺物である。1が白磁多角形坏で、灰白色を呈す。高台には4箇所の抉りこみが認められ、見込には同数の重ね焼き目跡が確認される。白磁D群に該当し、15世紀前半に帰属する。2は青磁碗底部で、高台置付、見込は露胎である。高台は削り出しによるが、高台見込は削り込みが浅い。見込には意匠は不明のスタンプ文が押捺される。これらの特徴から龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類に該当し、体部外面に蓮弁文様が施されると推測され、13世紀中葉から14世紀初頭に帰属する。3は土師器甕口縁部で、口径27.6cmを測る。口縁端部を内側へ折り曲げて肥厚させ、体部内面にはハケが行われる。15世紀代と考えている。4は備前播鉢口縁部で、口径27.4cmを測る。口縁部は上方への拡張も認められ、下稜もやや作出される。口縁形態は中世4期に該当し、15世紀中葉に帰属する。

第69図で図示した遺物は、2を除いては最も新しい時期に帰属する土器群で、時期は15世紀代中葉に帰属する。これらの土器群の年代が、上面検出の遺構群の下限年代と考えられる。

5は周溝墓536の周溝底面付近から出土した口径12.8cm、器は17.6cmを測る小形の二重口縁壺である。底部には、径4cmの焼成前穿孔が確認される。体部最大径は体部中位に位置し、球形を示す。体部と頸部の境界には1条の突帯が貼付され、頸部はわずかに直立したのち、外上方へほぼ直線的に広がり、1次口縁での屈曲もわずかで口縁部に至る。1次口縁部はやや垂下し、外面には竹管円形浮文が密に貼付される。調整は、外面は体部および頸部にタテ方向を基調とするミガキ、口縁部にヨコ方向ミガキが認められ、内面は底部・肩部にはナデ、体部に板ナデにより調整される。

以上のように、5は底部穿孔の仮器化した二重口縁壺で、葬送用の土器として製作されたと考えられる。周溝内で共伴する土器が不在であるため、詳細な時期は詳らかにできない。ただし、5の頸部から口縁部にかけて直線的な部位が認められず、体部のミガキもタテ方向を基調にする点など、布留式段階まで下げる要因はなく、庄内併行期の範疇で理解できる。

6～10は、溝359出土遺物である。6は口径11.5cmを測る直口壺口縁部で、調整は磨滅のため



第69図 川辺1次出土遺物1 (S = 1/4)

不明である。色調がにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、他の土器と胎土の様相が異なり、搬入品の可能性も考えられる。7・8は甕口縁部で、7は口縁部が丸く収められるのに対し、8は受口状の口縁形態を示す。9は甕底部～体部で、底面はナデ調整により平らに仕上げられる。8・9は、体部外面ではタテ方向のハケ→タタキ、内面ではハケ→ランダムなナデという調整順序が確認され、同一個体の可能性も考えられる。10は小形鉢である。上げ底状の底部から直線的な体部がのびて口縁部に至る。調整はやや不明瞭だが、ナデ調整により平滑に仕上げられる。以上が溝359出土遺物である。8・9の個体が弥生時代後期末まで遡る可能性が考えられるものの、6の直口壺の存在から、埋没は庄内併行期になると捉えられる。

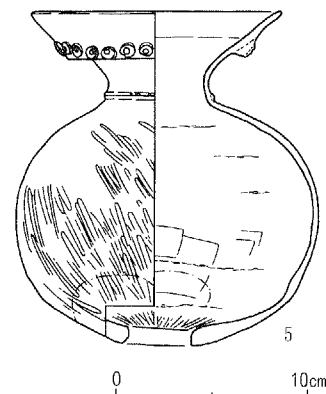
11～14は、竪穴住居17の出土遺物である。11は広口壺口縁部で、頸部が短く直立に立ち上がり、そこから外反しながら口縁部に至る。口縁端部は、内面がやや立ち上がる傾向を示し、外傾する端面が認められる。頸部外面には一部にハケの残存が認められる。12・13は甕・鉢の底部とみられ、いずれも底面は平坦面である。13は体部外面が平滑に仕上げられ、鉢底面と考えられる。14は形高坏脚部で、裾部径10.5cmを測る。脚柱部は中空で、内面ケズリにより整形される。裾部にはスカシ孔が4方向に穿孔される。以上が、竪穴住居17出土遺物である。埴形高坏（14）の形態的特徴から、庄内併行期でも古相に属すと考えられる。

15～18は溝206出土の壺または甕の底部で、いずれも底面は平坦である。15・16は球形の体部に突出する底部が付す形態で、17・18は底部から直線的に体部が外上方に伸びる形態である。このことから、前者が壺、後者が甕の可能性が高い。

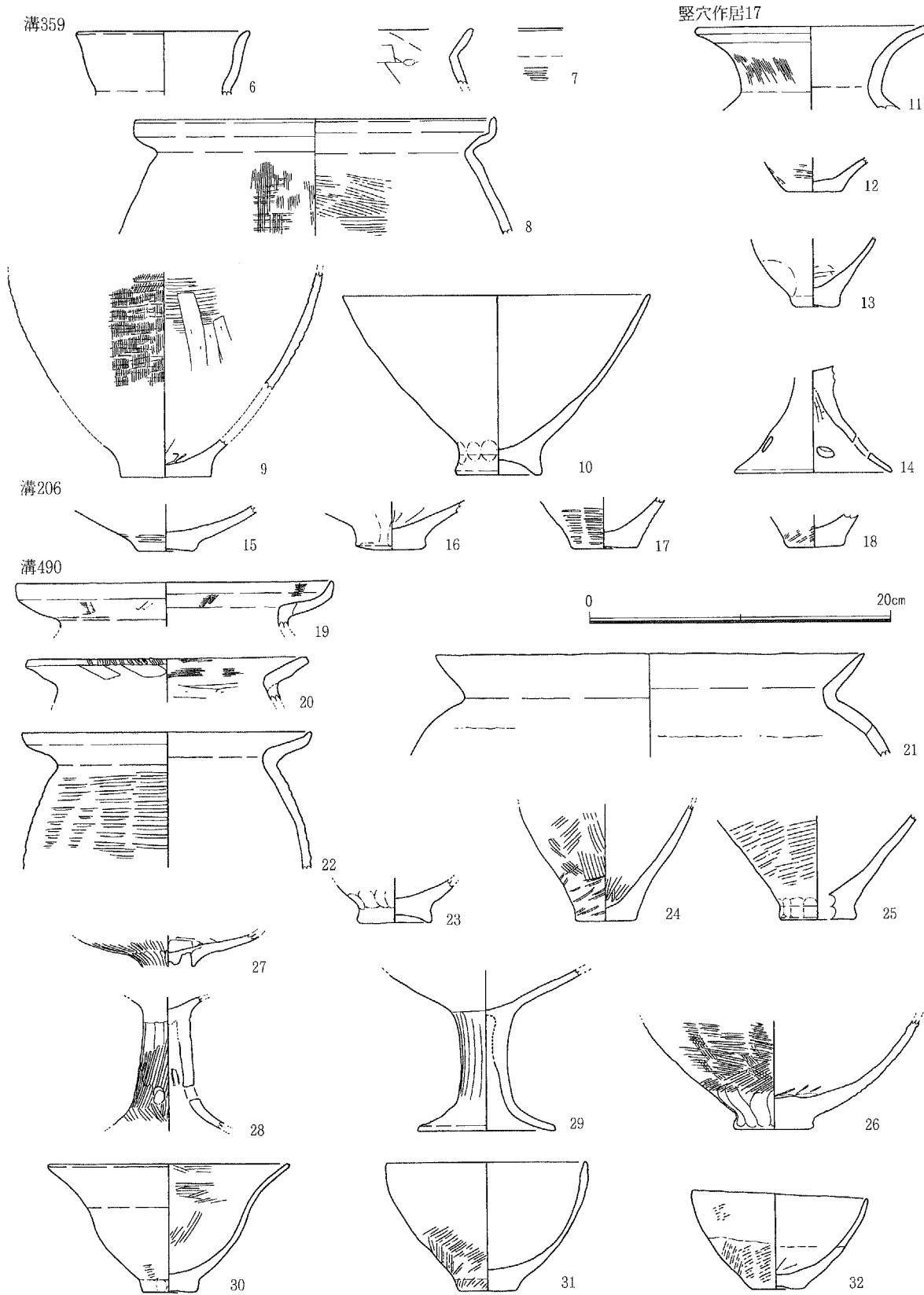
19～31は溝490出土遺物である。19～22は、甕口縁部である。19・22は頸部から屈曲して直立する受口状口縁部、20は頸部から直線的に外反し、端面に刻目をもつ口縁、21は頸部内面が直立する面をもち、口縁部が直線的に開き、端部を丸く収めるなど、いくつかの口縁部形態が認められる。磨滅が著しく明瞭でないが、体部外面は基本的にヨコ方向のタタキ、内面はナデ調整とみられる。23～26は、壺・甕・鉢の底部で、23のみ上げ底状だが、他は底面平坦である。このうち25・26は、突出する底部形態を示す。24は体部が直線的に外

周溝墓536

上方にのび、外面が板ナデにより平滑に仕上げられるため、鉢と考えている。27は高坏坏部で、脚柱部との接合痕で剥離する。それによると脚柱部製作後、脚柱部上部から平らな坏底部を粘土紐積み上げて成形し、坏底部には円板充填技法が使用される。坏底部外面にはタテ方向のミガキが認められる。28・29は高坏脚部で、いずれも直線的な脚柱部からなだらかに裾部へ繋がる形態を示すことから、埴形高坏の脚部と考えられる。脚柱部は中空で、脚柱部外面はいずれもタテ方向の



第70図 川辺1次出土遺物2 (S=1/4)

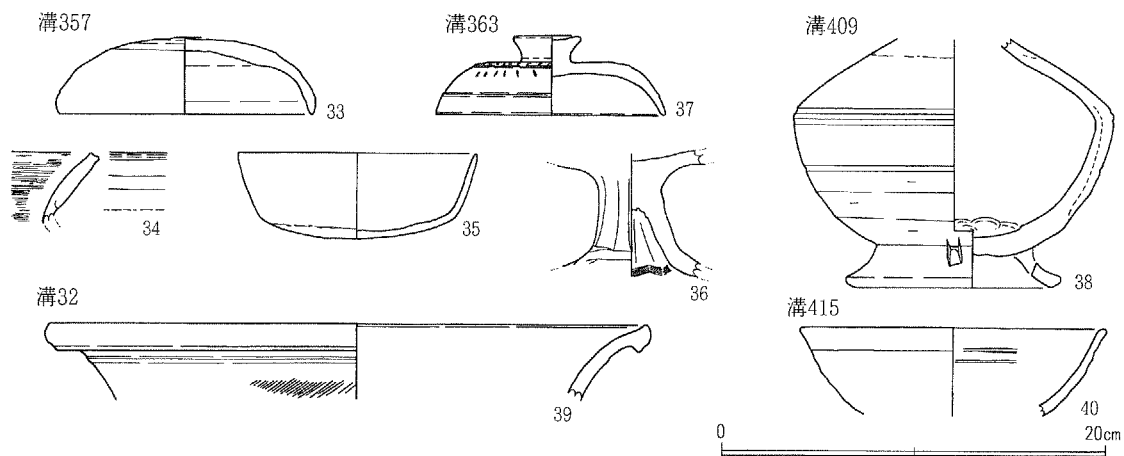


第71図 川辺1次出土遺物3 (S = 1/4)

ミガキが確認される。ただし、ミガキの単位にが28は幅4mm程度の幅狭なのに対して、29は幅1cm程度と幅広と異なり、さらに28には裾部にスカシ孔が3方向に穿孔されるが、29には穿孔されないなど差異が認められる。30～32は鉢である。30は、平底で半球形の体部から、口縁部がやや屈曲して短く広がる形態を示す。外面は観察されないが、内面は体部がタテ方向、口縁部がヨコ方向のミガキが確認される。31・32は碗形の体部で、口縁部が丸く収められる形態である。体部外面にはタタキが確認され、甕底～体部と同一の工程により製作される。底面は31が平坦なタイプ、32が底部輪台技法の使用されるタイプである。以上が、溝490出土遺物である。受口状口縁の甕の存在や碗形高坏の脚柱部が長く、中空である点などから弥生時代後期末葉～庄内併行期でも古相を中心に機能したと考えられる。

以上が、本調査区の遺構から出土した庄内併行期前後の遺物である。いくつかの遺物の特徴が弥生時代後期の段階まで遡る特徴を有していたものの、大半が庄内併行期の範疇、とりわけ古段階に属すと理解できる。また、布留式段階まで下る特徴は積極的には確認できず、これらの遺構群はその時期幅の中で理解される。

33～35は溝357の出土遺物である。33は坏H蓋で、口径13.1cm、器高4cmを測る。天井部から口縁部へは緩やかに屈曲し、稜を形成しない。天井部は回転ヘラケズリである。34は土師器甕口縁部で、口縁部内面はハケが行われる。長胴の体部が付す形態の口縁部と推測される。35は口径12.2cm、器高4.5cmを測る坏で、色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈し、軟質で土師質である。ただし、底面は回転ヘラケズリが認められ、形態はやや丸み帯び、そこから直線的な口縁部が伸びる形態を呈す。口縁部はヨコナデにより丸く収められる。また、器面の磨滅が著しいため、確定できないがミガキ等は確認されず、形態的特徴や使用される技法などから、土師質焼成だが須恵器坏Aと理解される。36は土師器高坏脚柱部である。脚柱部外面は、幅2cm単位で面を為し、内面はヘラケズリが行われる。脚裾部は外面がヨコ方向のミガキ、内面がハケ調整が行われ

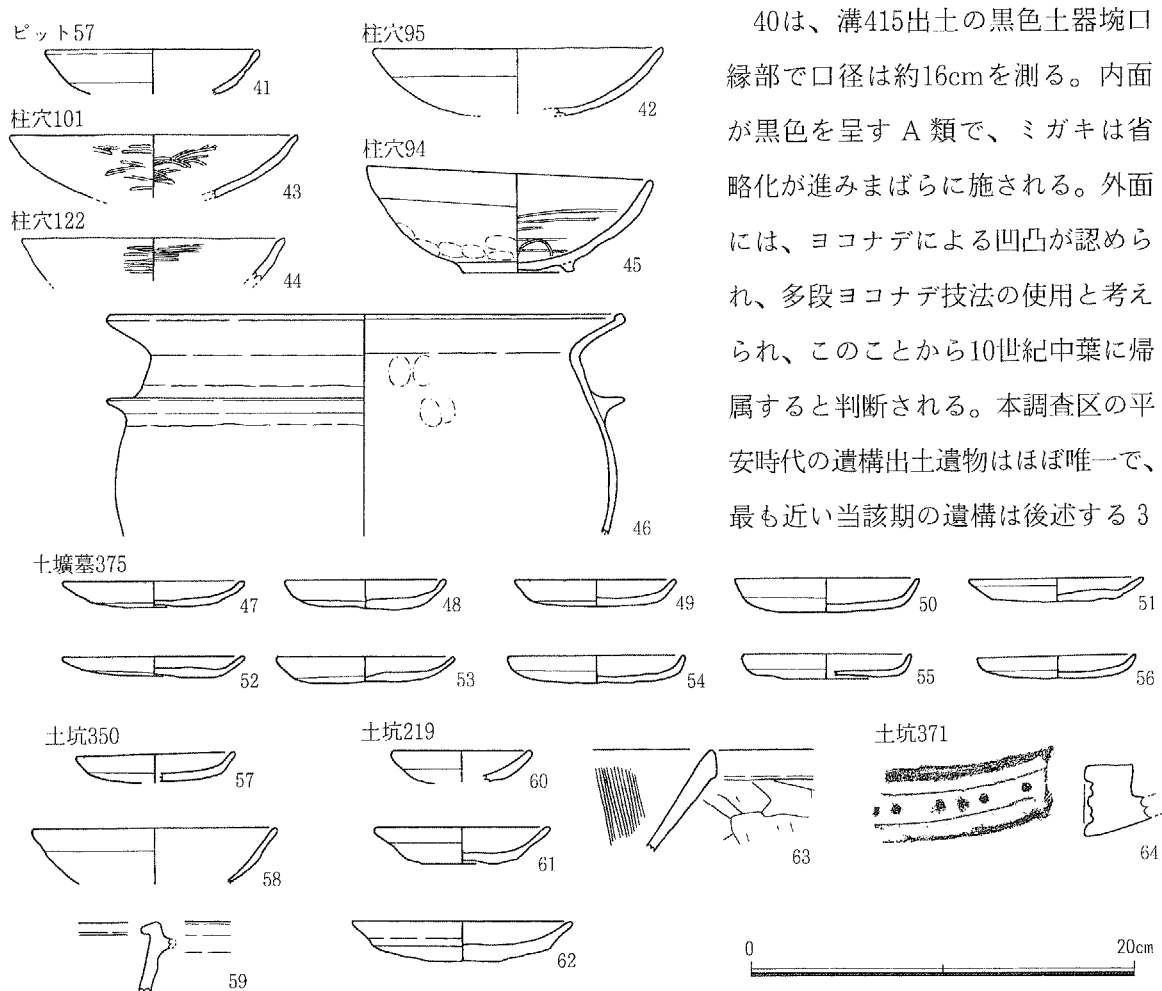


第72図 川辺1次出土遺物4 (S = 1/4)

る。以上が、溝357の出土遺物だが、概ね飛鳥Ⅲ前後の段階と考えている。

37は溝363出土の坏蓋である。口径は11.9cmを測り、天井につまみが付す。形態的には天井部と口縁部の境界に稜は創出されず、飛鳥時代に帰属すると考えられる。外面には天井部に突線、口縁付近に凹線が各1条確認され、突線を基軸にして、綾杉文調の列点文による加飾が認められる。坏Hまたは有蓋高坏の蓋か。38は、溝409出土の須恵器長頸瓶の底部である。高台はハの字形開き、端面が外方に形成される。また、高台の体部との境界付近に3方向へ長方形スカシが穿孔される。底部内面には、棒状工具による垂直方向からの圧痕が確認される。外面は、底面から肩部まで回転ヘラケズリが、それ以上の部位は回転ナデが行われる。肩部に2条、体部中位に1条の凹線が認められる。飛鳥Ⅲに、類似した器形が認められる。39は、溝32出土の須恵器甕口縁部で、口径31cmを測る。口縁端部はやや上方へ立ち上がり、頸部には列点文による加飾も認められる。他の須恵器群よりもやや古相を呈す。

以上が、本調査区の遺構から出土した飛鳥時代を中心とする遺物である。遺物が少ないものの、飛鳥Ⅲを中心に帰属する遺物が主体的と理解している。



第73図 川辺1次出土遺物5 (S = 1/4)

次調査土墳墓123である。川辺遺跡では、当該期の遺構は散在する傾向が認められる。

41は、ピット57から出土した土師器皿である。口径11.0cmを測る。底部と口縁部の境界は、明瞭でない。底面は指頭圧痕が顕著で、口縁部は幅広にヨコナデが行われる。42は、中世建物群4～6付近に位置する柱穴95出土の瓦器碗である。口径は約15cmを測る。体部から口縁部は直線的な形態を呈し、底部全面は残存していないが、高台は付さない形態とみられる。口縁部はヨコナデ調整で、体部外面には指頭圧痕が認められる。

43は、柱穴101出土の瓦器碗口縁部である。口径は約15cmを測る。体部は内外面ともミガキが認められる。高台の状況は不明だが、13世紀前半を下らないと判断される。

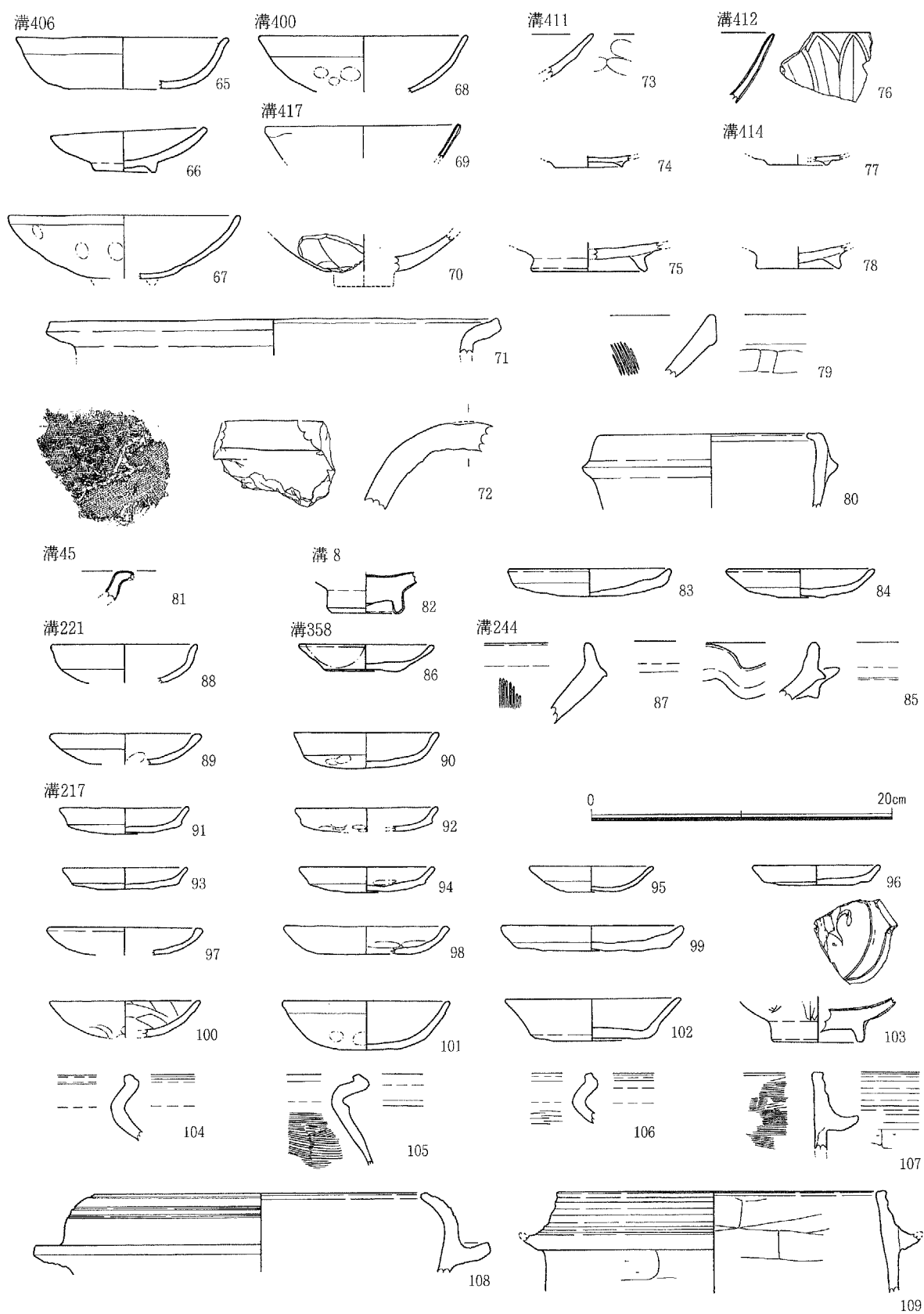
44は、掘立柱建物4を構成する柱穴122出土の瓦器碗口縁部である。口縁端部のみの出土のため、詳細はしれないが、焼成は堅緻である。

45も、同じく掘立柱建物4を構成する柱穴94出土の瓦器碗である。口径14.6cm、器高5.7cmを測る。体部は緩やかに内湾しながら口縁部にいたる。体部外面は指頭圧痕が顕著で、内面は見込から体部にかけて螺旋状にミガキが行われるようである。高台は断面逆台形のものが付される。46も同じく柱穴94からの出土の土師器羽釜口縁部である。口径は26.7cmを測る。体部から屈曲して口縁部が外方にひらき、口縁端部は上方へ摘み上げられる。鐳部は、断面三角形を呈し突出度も低い。44の柱穴122および45・46の柱穴94出土遺物の特徴から、掘立柱建物4の廃絶は13世紀前半を上限と考えている。

以上が、南側調査区西端の掘立柱建物に集中する範囲の柱穴からの出土遺物である。掘立柱建物建物4の柱穴以外から直接の遺物の出土がなく詳細な時期は判明しないが、掘立柱建物4の廃絶時期の上限が13世紀前半で、その他の柱穴からも13世紀後半を下る遺物は認められないことから、この掘立柱建物群はおおむね13世紀代に帰属すると考えられる。ただしピット57出土の瓦器碗は14世紀代に下る可能性が高いため、時期幅がある可能性も残る。

47～56は、土墳墓375出土の土師器皿である。口径は8.2～9.4cm、器高1.0～1.8cmを測る。平坦な底部から直線的に外上方へ伸びる47～53と底部から短く直立気味の口縁部が付く54～56の2形態が確認できる。底面は、前者の形態には指頭圧痕の残存するものと静止ナデが、後者の形態は静止ナデが観察される。口縁部は、前者は1段のヨコナデがしっかり行われるのに対し、後者は口縁端部を摘むようにナデ調整される。両者は、形態や調整の状況から異なる系譜に属すと推測される。土師器皿のみの出土のため時期の限定は困難だが、他の中世帰属の遺構と同様に13世紀代の範疇と捉えている。

57～59は、土坑350出土遺物である。57は土師器皿で、口径8.2cmを測る。底面は静止ナデにより調整される。58は瓦器碗口縁部で、口径は12.6cmを測る。器面の磨滅が著しく、詳細は不明だが、体部外面は指頭圧痕が確認される。59は、土師器鍋口縁部である。口縁端部は内側に折り曲



第74図 川辺 1次出土遺物 6 (S = 1/4)

げられ、外面には断面三角形状の突帯が付される。

60～63は、土坑219出土遺物である。60～62は土師器皿で、口径が7.2、8.8、11.4cmをそれぞれ測る。60は底面が丸く、口縁部との境界も曖昧な形態を呈す。また、内外面とも指頭圧痕の残存が明瞭で、手捏ねにより製作されたとみられる。これに対し、61・62は平らな底部から屈曲し、外上方へやや外反する口縁部が付く形態を呈す。口縁部はヨコナデにより調整され、60とは異なる。61と62は同様の特徴を有すが、口径に2.6cmの差があり、土師器皿に規格差の存在が認識できる。63は、瓦質土器擂鉢口縁部である。口縁部形態は端面下端を少し摘み上げる形態を示す。体部外面には、タテ方向のケズリが確認される。スリメは1単位14条を数える。

以上が、土坑219の出土遺物であるが、瓦質土器擂鉢の特徴から14世紀末から15世紀初頭に該当すると判断している。

64は土坑371出土の軒平瓦である。瓦当は連珠文で、3点を1単位とする。界線は上下にのみに認められ、13～14世紀のものと考えられる。

65～67は、溝406出土遺物である。65は土師器坏で平坦な底面から屈曲して外反する口縁部に至る。飛鳥時代の混入品とみられ、当該期の須恵器坏Bなども多量に同溝から出土したのが確認される。66は、底部と口縁部の境界のない浅い半円形の体部に断面三角形の高台が貼付される形態を示す。高台の貼付位置が体部底面中央に位置しないため、口縁部が水平でない異様な様相を呈す。体部外面は指頭圧痕が確認され、明瞭な調整痕は認められない。67は瓦器塀口縁部で、体部外面には指頭圧痕、底面には高台の剥離痕が確認され、13世紀中葉に帰属すると考えられる。

68は、溝400出土の瓦器塀口縁部で、67とほぼ同様の特徴を有し、13世紀中葉とみられる。

69～72は溝417出土遺物である。69は白磁碗口縁部、70は青磁碗体部である。70には細蓮弁文が片切彫りで描かれる。71は土師器塀口縁部で、口径29.1cmを測る。口縁端部は上方へ突出させる。72は丸瓦で、凸面は丁寧なナデ調整、凹面は布目が確認される。凹面には布筒を縫い合わせた痕跡が確認される。おおむね14世紀代と考えられる。

73～75は、溝411出土遺物である。73・74は瓦器塀の口縁部と底部である。体部外面の指頭圧痕や断面三角形の高台の存在から、13世紀中葉と考えられる。75は、黒色土器A類の底部で、高台はハの字形に広がる形態を示す。10世紀代に帰属するとみられるが、溝の帰属時期を反映するものでない。

76は、溝412出土の青磁碗口縁部で、外面には細蓮弁文が確認できる。蓮弁の先端が剣頭状を呈し、片切彫りにより描かれており、14世紀代と考えられる。

77～80は、溝414出土遺物である。77は他の瓦器塀底部で、断面三角形の高台を付す。78は土師器塀底部で、ハの字形の高台を付す。溝411出土の黒色土器塀（75）と同時期の可能性があり、近隣に当該期の遺構の存在が推測される。80は、土師器で口縁部が内側に折り曲げられ、体部外

面には断面三角形の突帯が貼付され鰐状を呈す。内面は鰐の位置まで凹むような形態で、紀ノ川流域を中心に分布する紀伊型の土師器埴とみられ、15世紀中葉～後葉と考えられる。

81は、溝45の青磁鉢または盤の口縁部とみられる。体部から屈曲して口縁部が広がる。14世紀代と考えられる。

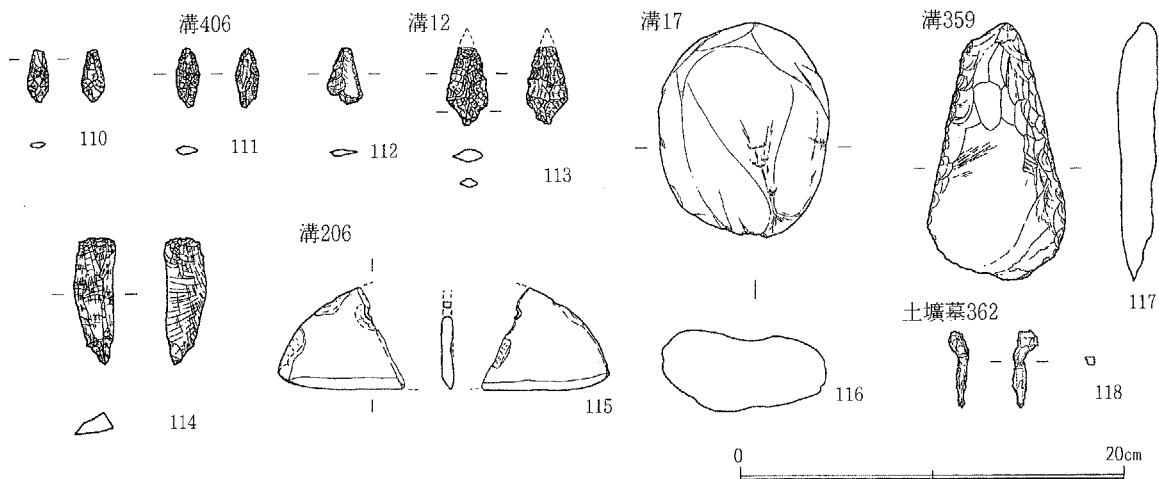
82～85は溝8出土遺物である。82は青磁碗底部である。高台は外面下端がナナメに幅広に面取りされ、高台内面まで施釉される。露胎部分は赤褐色に発色する。83・84は土師器皿で、それぞれ口径9.6cm、10.8cmを測り、大きい規格の土師器皿である。83は平坦な底面に短く直立気味の口縁部が付す形態なのに対し、84は丸みを帯びる底面不調整の底部から、外上方へ口縁部が伸びる形態である。85は備前播鉢口縁部で、口縁帯は上方への拡張、下端の突出が認められる。中世4・5期に該当すると考えられる。溝8の出土遺物は82・85の特徴から15世紀中葉を前後する時期と考えられる。

86は、溝358出土の土師器皿である。口径は9.0cmを測る。底面には回転糸切りの痕跡が認められ、平坦な底面から直線的な口縁部が広がる形態を示す。

87は、溝244出土の備前播鉢口縁部である。口縁帯の断面形態が85と類似し、中世4・5期に該当し、15世紀中葉に帰属する。

88～90は、溝221出土の土師器皿である。口径9.5～10cmを測り、ほぼ同じ規格である。底面が不調整であるため、器高に差異が表出するものの基本的には同じタイプとみられる。

91～109は溝217出土遺物である。91～102は土師器皿で、口径が10cm未満の小さいタイプ（91～96）と口径10cm以上の大きいタイプ（97～102）が認められる。前者はいずれも底面不調整の底部から短い口縁部が外上方へ伸びる形態で共通する。口縁部のヨコナデがきつく、底部との境界に段が付く点も共通し、15世紀代には一般的な特徴を有す。口径の大きいタイプには、器高が



第75図 川辺1次出土遺物7 (S = 1/4)

2 cm未満の浅身の（97～99）と2 cm以上の深身の（100～102）とが認められる。浅身のタイプには、底部と口縁部の境界が不明瞭な（97・98）と屈曲し短い口縁部（99）が認められる。深身のタイプにも同様に境界が不明瞭な（100・101）と99の口縁部が長くなったような形態の102とが認められる。103は青磁碗底部である。高台は内面中位まで施釉され、畳付の釉を掻きとらない。見込にはへう描きによる文様が彫られる。体部外面には細蓮弁文が描かれるとみられ、15世紀代の帰属か。104～106は土師器埴口縁部である。105には体部内面にハケ調整が認められる。107～109は瓦質土器羽釜で、口径は22cm前後を測る。107・109は口縁部が直立し、108は口縁部が内傾し、端部がやや上方へ折り曲げられる。以上が溝217出土遺物であるが、103や107～109などの特徴から15世紀中葉に帰属すると考えている。

以上が、本調査区の遺構出土の中世土器群である。掘立柱建物群は13世紀を中心とする時期に集中する可能性が高く、土坑・溝群は13世紀から15世紀中葉または後半までの時期幅が存在するとみられる。この年代は、包含層出土遺物から推測した上面遺構面の下限年代と矛盾しない。

110～117は、本調査区出土の石製品である。110～114はサヌカイト製の剥片または有茎石鏃である。113が溝12出土、111が溝406出土である以外は、包含層出土である。115は溝206出土の緑色片岩製磨製石包丁である。両刃の直線刃と半円形の背部により半月形を呈す。背部には、穿孔が認められ、位置関係から双孔であったとみられる。116は溝17出土の砂岩製の凹石である。凹みは片面のみに、縦長にナナメ方向に確認できる。117は溝359出土の片刃の打製石斧で、長13.5 cm、幅7 cmを測る。蛇紋岩製か。石製品は、115の石包丁が弥生時代に帰属するのを除くと他の石器類は縄文時代の範疇で理解される。

118は長4.0cmの鉄釘で、土墳墓362から出土した。断面形態はほぼ正方形を呈し、一辺約3 mmを測る。瓦器と共伴しており、13世紀代に帰属すると考えられる。断面観察では確認されなかったが、土墳墓362が木棺墓で、その結束に使用した可能性も考えられる。

以上が、川辺1次調査調査区の出土遺物である。以下で簡単に総括すると、遺物のみとしては、縄文時代、弥生時代の石器類が存在する。ただし、遺構としては庄内併行期に溝・竪穴住居が確認され、調査区内で最古相の遺構群となる。また断定しえないが、この遺構群は積極的に布留式段階に下る様相を確認できず庄内併行期の範疇でも古相に属すと理解される。

その後の古墳時代の遺構・遺物は不在で、飛鳥時代の後半を中心に溝群が認められるものの、遺構群はそれほど展開しない。平安時代の遺構も確認されたが、本格的な土地利用は中世を待たなければならず、13世紀中葉～15世紀中葉の約200年間には掘立柱建物、溝群などが認められ、集落の形成を認めることができる。

第3節 2次調査(00-01・145)の成果

調査地は、第1次調査地の東側の畑地一枚を隔てた延長部分から国道24号バイパスまでの新設道路敷の範囲である。ただし、この間には用地買収に至っていない箇所もあり、これらの箇所については3次調査に委ねることとなった。また、調査対象地の現況は畑地の真只中であるため、調査対象外の畑地に行くための農業用道路を確保した。この結果、調査地が分断されることとなり、便宜上、調査区をA～F調査区と呼称した。以下、遺構説明にはこの地区名を使用する。

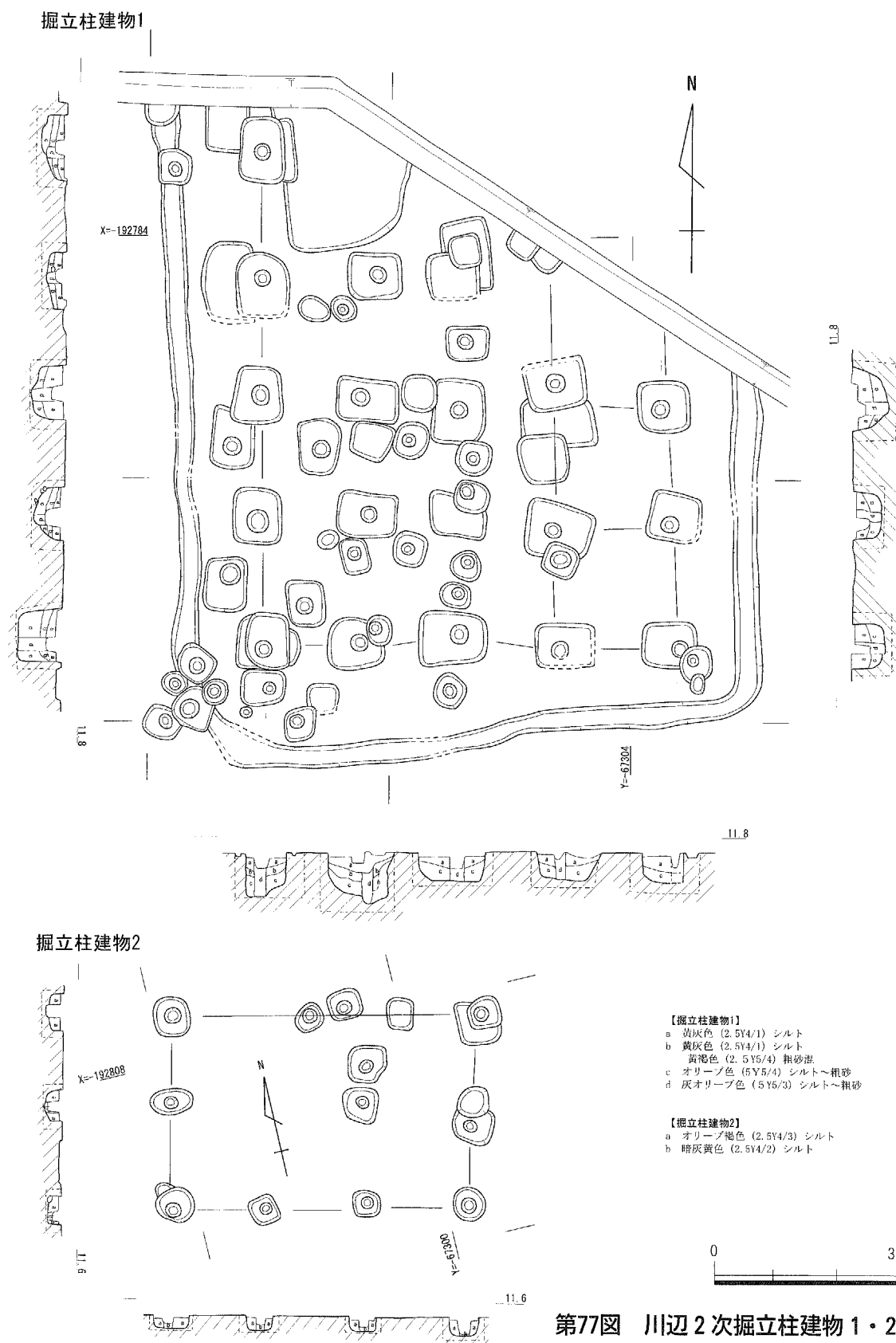
1. 遺 構

検出した遺構には弥生時代後期後半の土坑、庄内併行期の竪穴住居、溝、飛鳥時代の竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑、中世の土墳墓、柵列、柱穴群などがある。ただし、遺構検出面は一面であった。第3次調査より以東は中世以降に削平をうけたと思われる。以下に掘立柱建物、竪穴住居、土坑、溝の順に記す。

掘立柱建物1は北端で検出したが、北側の一部は調査区外のため全容は不明である。この建物は総柱の南北棟の建物である。主軸は座標北を基準に $N-2^{\circ}-E$ とする。規模は桁行4間以上、梁行4間である。桁行方向の間尺は芯一芯で、南から2.05m—2.05m—1.93m—2.05m—、梁行方向は東から1.92m—1.70m—1.48m—1.75mを測る。これから床面積は約55.3㎡以上となる。柱の掘形の平面形状は長方形を呈し、その規模は長辺1.10m、短辺0.85mに収まる。残存の深さは32～85cmと大きな幅が見られる。柱穴を検出した標高はすべて同数値であるため、必然的に底の標高に違いがでる。このことから、柱の高さは柱穴の深さの調整によって合わせたものと考えられる。なお、柱穴の底には礎板や根石は確認されなかった。掘形の埋土は上層に黄色味を帯びたシルトが、下層にはオリーブ色のシルトがレンズ状に堆積する。柱当りは灰オリーブシルトと粗砂の混層である。いずれの柱穴にも根腐れした痕跡はなく、抜き取られたものと推測される。なお、この建物の周りには幅30cm、残存の深さ10～15cm程度の溝が巡る。この溝は側柱列の約80cm外にあり、内内での東西の距離は8.8mとなる。雨落ち溝となるものであろうか。この建物は出土遺物から飛鳥時代に帰属すると考えられ、これに類似する建物群をこの北側に想定できる。なお、この建物の周りには、類似する柱穴が多数検出されたが建物として組合わなかった。

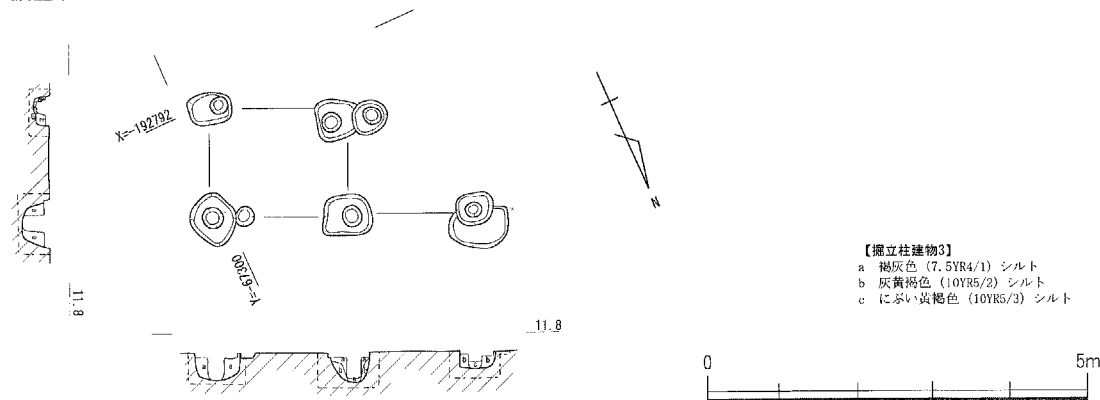
掘立柱建物2は東西棟建物で、規模は桁行3間、梁行2間である。主軸方向は $N-15^{\circ}-E$ である。桁行方向の間尺は東から1.65m—1.67m—1.50m、梁行方向の間尺は南から1.50m—1.80mを測る。柱穴の平面形状は長方形ないし正方形を呈する。柱穴の規模は45～60cmを測り、残存の深さは20～30cmを測る。埋土は単純で、掘形はオリーブ褐色シルトの単層で、柱当りの埋土も暗灰黄色シルトの単層であった。底には礎板、根石のたぐいはなかった。

掘立柱建物3は掘立柱建物1の東に隣接して検出したが全容は不明であった。主軸方向は $N-28^{\circ}-E$ である。規模は東西2間以上、南北1間以上である。柱穴の平面形状はほぼ正方形で、

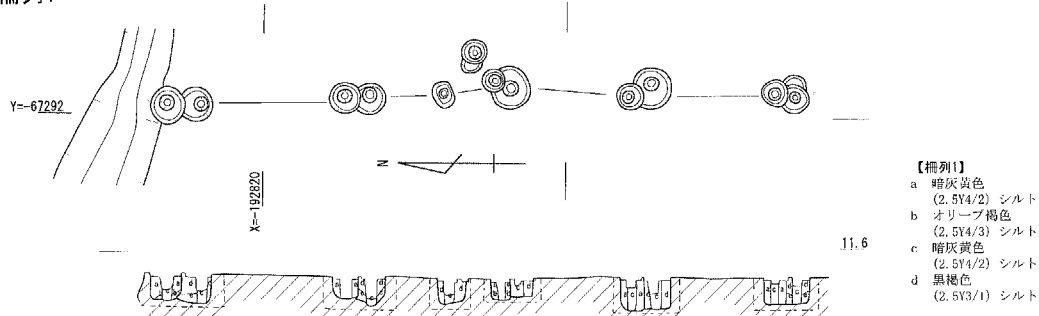


第77図 川辺2次掘立柱建物1・2 (S=1/100)

掘立柱建物3



柵列1



第78図 川辺 2 次掘立柱建物 3・柵列 1 (S=1/100)

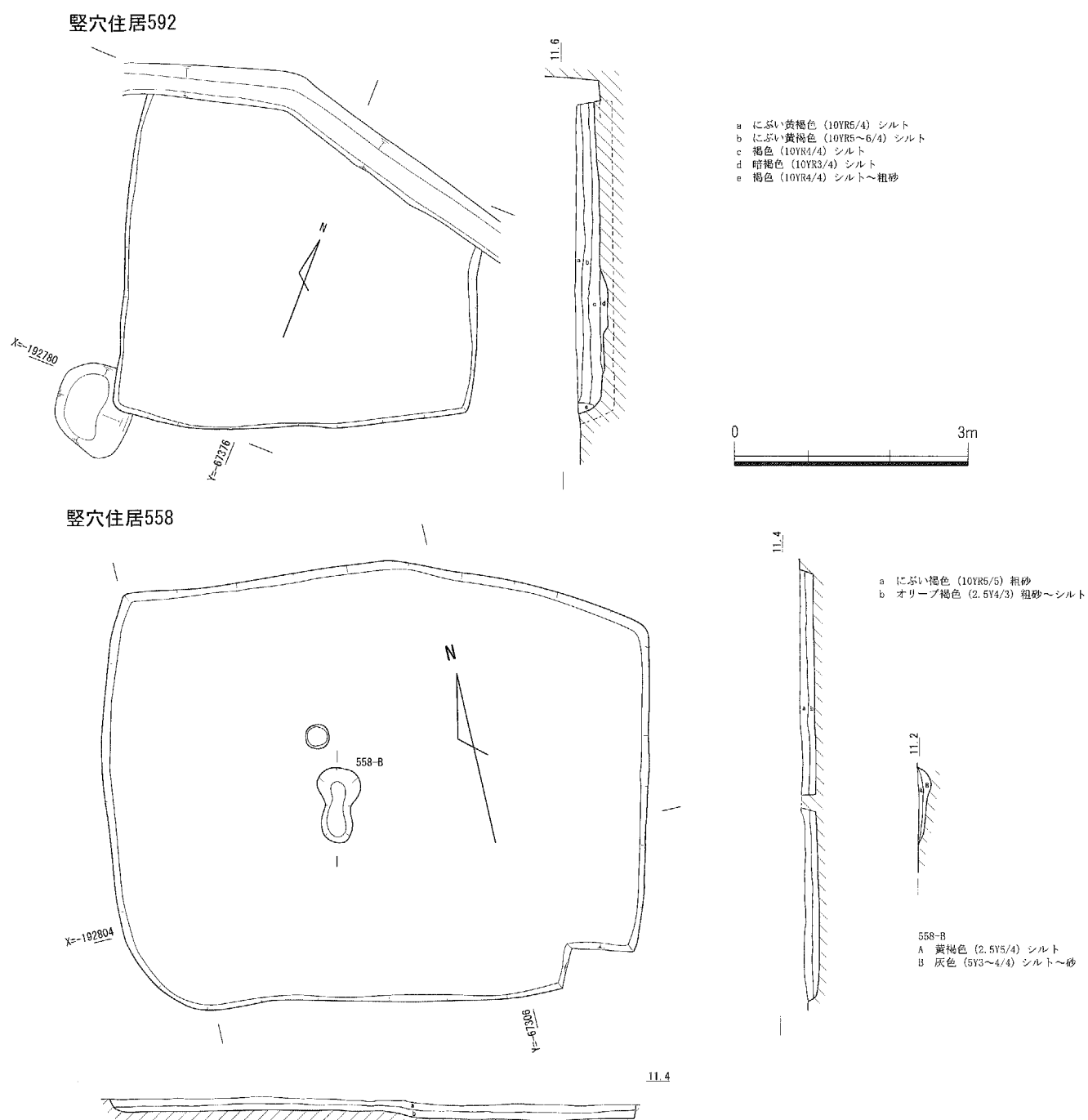
一辺長40～60cmを測る。残存の深さは20～37cmを測る。埋土は褐色系のシルトであった。この建物は柱穴の規模から判断して掘立柱建物 2 と類似し、また時期についても、この辺りの柱穴から飛鳥時代の須恵器が出土していることから、掘立柱建物 1 と近似するものと思われる。

柵列 1 は C 区の南端で検出した。時期は出土遺物から鎌倉時代と考えられる。この建物を柵列としたが、西側には組合いそうな柱穴があるため、掘立柱建物の可能性が十分ある。ここでは一応柵列として扱う。建替が認められる柵列である。柱間は 4 間検出した。古い方の間尺は南から1.86m—1.85m—1.91m—2.20m、新しい方は1.90m—1.73m—2.10m—2.22mであった。柱穴の規模は新しい方で30～40cmの円形である。残存の深さは新旧大差なく 25～40cmを測る。新しい方の埋土は暗灰黄シルト、古い方は新しい方に比してやや黄色味が強いシルトであった。

竪穴住居は庄内併行期のものを B・C 調査区で、飛鳥時代のものを A・C 調査区で検出した。

竪穴住居592は B 調査区西端で検出した。北側は調査区外に掛かり不明であるが、平面形状は方形を呈すると思われる。主軸方向は N-23°-Wである。規模は南北4.2m以上×4.5mで、残存高は約20cmを測る。埋土はレンズ状の堆積を呈し、にぶい黄褐色を基調にする。なお、この竪穴住居に伴う付属施設（炉・貯蔵穴・支柱穴等）は検出されなかった。

竪穴住居558の平面形状は隅丸方形を呈し、東西方向にやや長い。主軸の方向は N-9°-Eである。規模は6.85m×5.55mである。残存高は17～20cmを測る。埋土は水平堆積で、壁溝は確



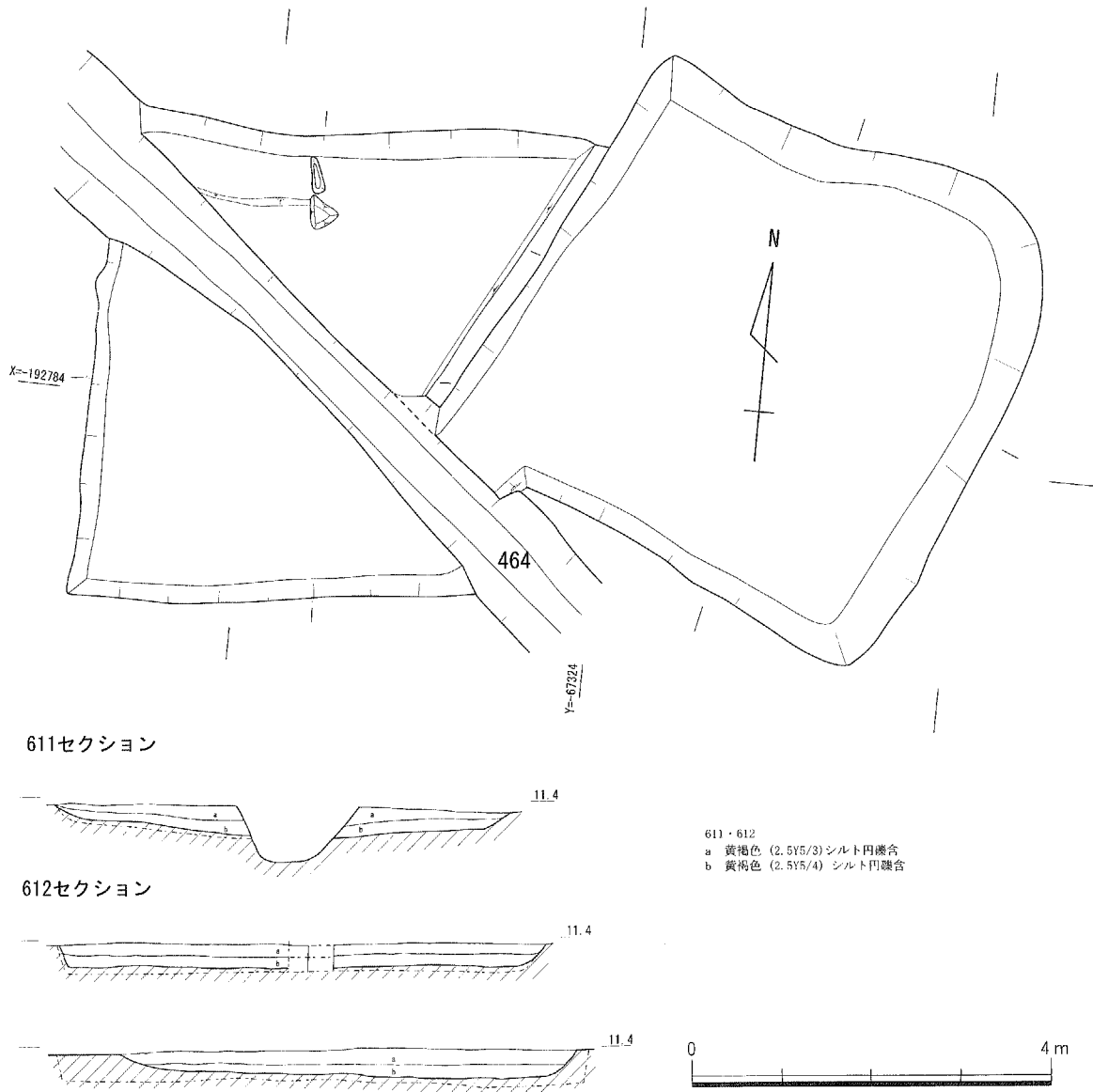
第79図 川辺 2次竪穴住居592・558 (S=1/80)

認できなかった。床面から付属施設として確認できたのは炉だけであった。炉は瓢箪形を呈し、ほぼ中央部に設置され、深さは8～15cmと南側に浅くなる。この状況から南側に掻き出し、使用したと思われる。底には炭や灰混じりのシルトと微砂が2～5cmの厚みで堆積していた。

竪穴住居611、612はC区の西側で重複して検出した。双方の住居は溝464に切られている。竪穴住居611はN-4°-W、竪穴住居612はN-25°-Eに主軸をもつ。竪穴住居611の形状は隅

竪穴住居611

竪穴住居612

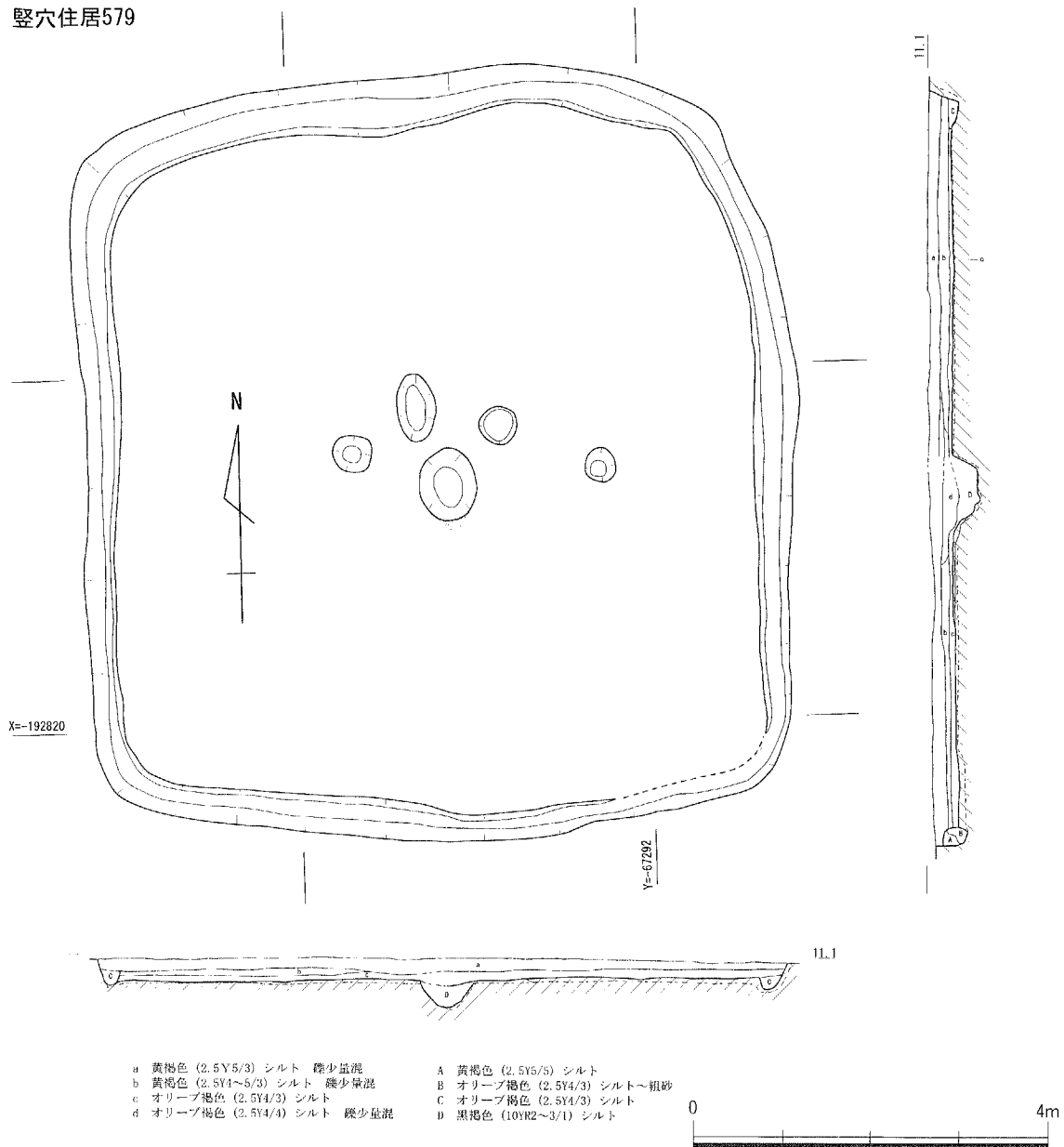


第80図 川辺2次竪穴住居611・612 (S=1/80)

丸というよりは方形を呈し、規模は南北5.25m、東西は不明であるが、南北と近似値を測るものと思われる。残存高は32～40cmを測り、埋土は黄褐色シルトを基調とし、レンズ状に堆積する。竪穴住居612は隅丸方形を呈する。規模は4.45m×5.10mを測り東西長がやや長い。残存高は28～32cmを測り、埋土の堆積は竪穴住居611と同じ様相を呈する。この2棟は支柱穴や炉などの付属施設を検出できず、住居断面の形状も竪穴住居のニュアンスと掛離れているため土坑状遺構の可能性も多々ある。なお、土器の出土状況は床面に張付いて出土したものではなく、あたかも投込まれたかの状態で出土した。

竪穴住居579はC調査区東端で検出した。形状は南北に長い隅丸長方形を呈する。主軸は座標北とはほぼ合致する。規模は7.3m×8.5m、残存高は25～30cmを測る。埋土は2～5cm大の礫混じ

竪穴住居579

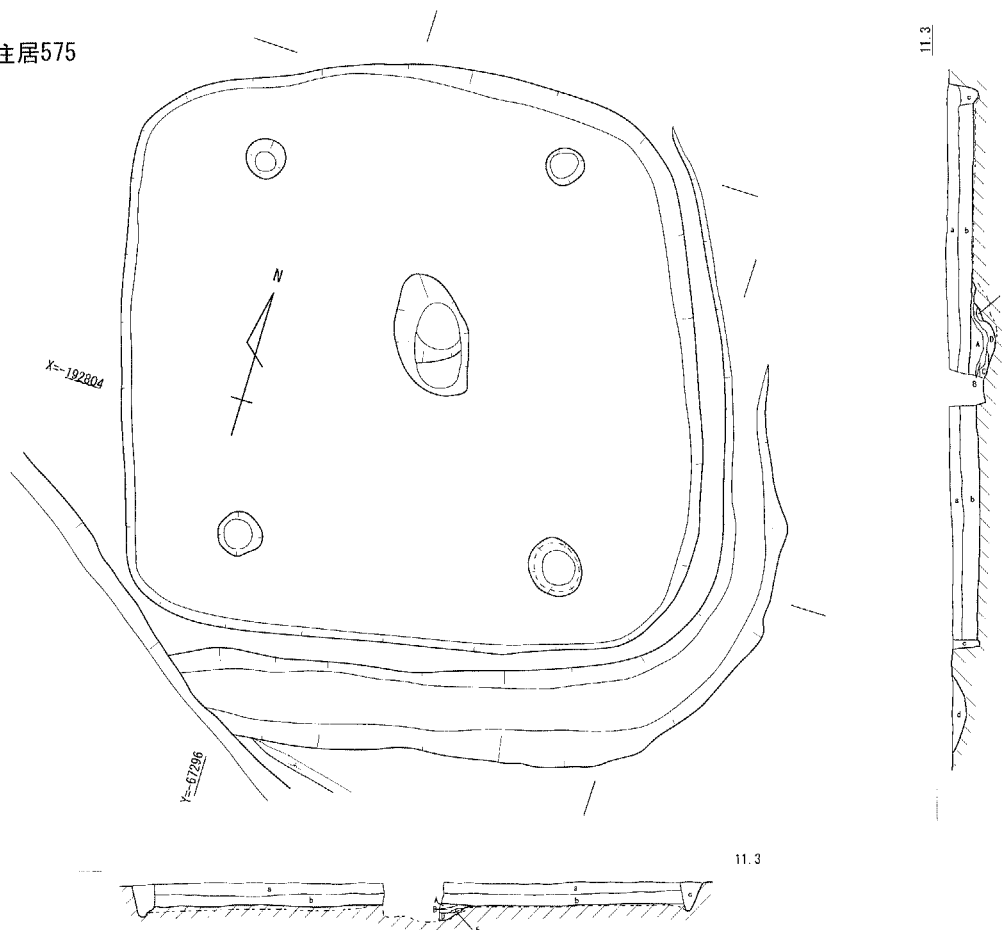


第81図 川辺2次竪穴住居579 (S=1/80)

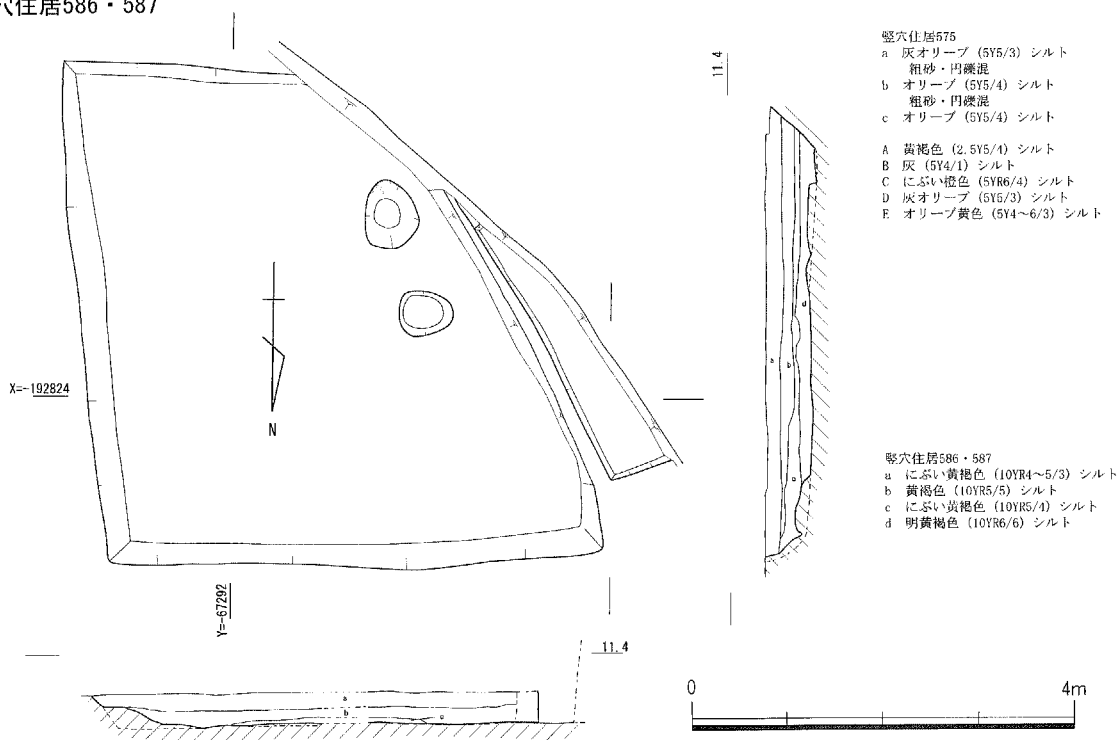
りの褐色シルトを基調とする。床面中央やや南寄りで楕円形の炉を検出した。この炉は南北に長く、65cm×80cmを測り、深さは約30cmを測る。炉の埋土は黒褐色シルトに2～5cm程度の焼土塊が混ざる。また南側の炉壁の外は焼面が確認された。炉の北側では径35～45cm、深さ15～20cmのピット状の穴を4個検出した。この内の2個の埋土は黄褐シルトに混ざり焼土と炭片が出土した。壁溝は25～40cmまでの幅で全周する。なお主柱穴は確認できなかった。

竪穴住居575を検出したのは、長方形に広い範囲で一段低く攪乱されていた箇所である。この住居の平面形状は隅丸方形を呈し、規模は6.0m×6.0mである。主軸はN-16°-Wである。床面中央で炉、壁から70～90cm内側の四隅で直径40～50cmの主柱穴4本を検出した。壁溝は15～30

竪穴住居575



竪穴住居586・587



第82図 川辺 2次竪穴住居575・586・587 (S=1/80)

cmの幅で全周する。住居の残存高は25～30cmを測り、埋土は水平堆積である。炉は攪乱土観察のためのトレンチで南側の上部を欠く。形状は南北軸の長楕円形を呈し、規模は1.3m×0.7m、深さは25cmを測る。埋土の堆積は、焼土層、灰・炭層がレンズ状を呈する。南側の底は赤く焼けていた。なお、南方向に緩やかに床面となることから、南に炭化物を掻き出したと推測できる。また、この住居は壁から約30cm外に幅80cm、残存の深さ12～15cmの溝が巡る。溝は先述の攪乱のため南辺と東辺を検出したに留まったが、この状況から推し量るに元々は全周していたものと考えられる。また、この溝の底の標高は、住居の床面よりも約12cm程度は高いため湿気防止とも考えがたく、用途については不明である。

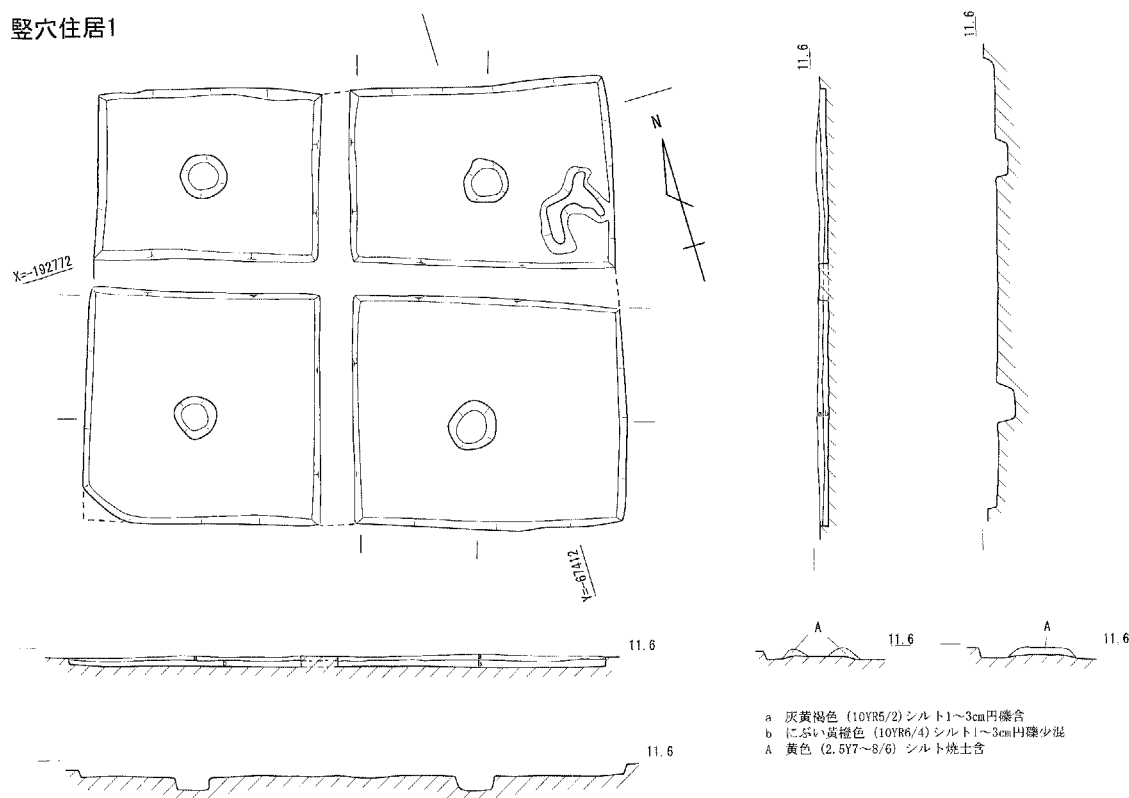
竪穴住居586、587はC調査区の南端で重複して検出した。住居586の南西は調査区外と住居587に掘削され不明である。また、住居587の殆どは調査区外で、東壁の一部を確認しただけである。住居586は5.20m×5.15mの方形で、主軸はほぼ座標北である。主柱穴の確認には至らなかった。このため床面を断割ったが、既検出の床面下は粗砂と礫層であった。残存高は32～40cmを測る。床面の中央から南西寄りで炉と思われる被熱した浅い窪みを検出した。住居587の残存高は壁の土層図から44cmを測る。以上の竪穴住居は出土遺物から判断して庄内併行期と考えられるものである。検出した住居の平面形状が方形を示すものについては、遺構確認が困難であったため隅丸方形の可能性が大である。次に飛鳥時代の竪穴住居について記す。

竪穴住居1、2はA調査区の西端で検出した。この辺りのベースとなるものは黄褐シルトに50%以上の玉砂利を含む層（地山）である。竪穴住居1の規模は3.5m×4.2mと東西方向にやや長い。主軸はN-16°-Eである。残存高は7～10cmと浅い。東壁の北側で竈と思われる高さ10～13cmの赤く焼けた粘土塊を検出した。その範囲は50～60cmであった。竈としての形状を保っておらず、わずかに袖部であろうかと思われるところもあった。主柱穴も壁から約80cm内側で検出したが10～15cm程度の浅いものであり、北西は不明であった。壁溝の検出には至らなかった。

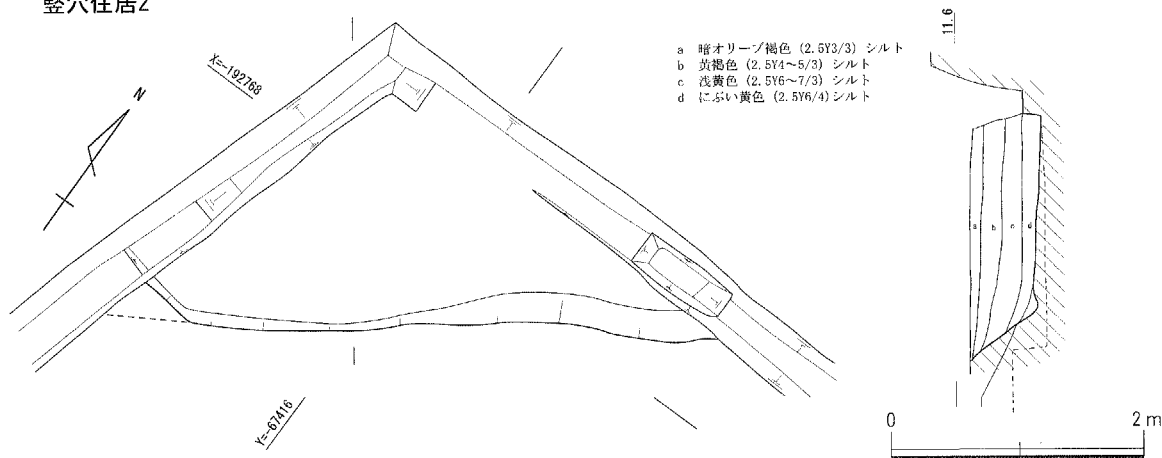
竪穴住居2の殆どは調査区外のため不明である。壁の直線的なラインと落ち方から判断して竪穴住居と考えられる。残存の深さは55cmを測る。埋土はレンズ状の堆積で、暗灰黄色シルトを基調とする。壁の内側には壁溝と考えられる幅20cm、深さ4cmの凹みを確認した。

竪穴住居4はA調査区南西の耕作土直下で検出し、南半部は調査区外のため不明で、北壁中央は土坑12で掘削されている。規模は3.95m×1.9m以上となる。主軸をN-2°-Wとする。残存の深さは25cmを測る。壁から約1.0m内側で北側の主柱穴を2本検出した。おそらく4本柱の竪穴住居と考えられる。主柱穴の掘形の直径は65～70cmである。また、北東隅で竈と思われる70cm四方の焼けた面を検出し、その南側には赤く変色した25cm×65cmの高さ約10cmの堤状の粘土塊を検出した。これに接した北側で須恵器の杯が伏せられた状態で出土した。また、須恵器の中の土は焼土が混じっていた。竈はその体をなしてはいないが須恵器は支脚となるものであろうか。

竪穴住居1

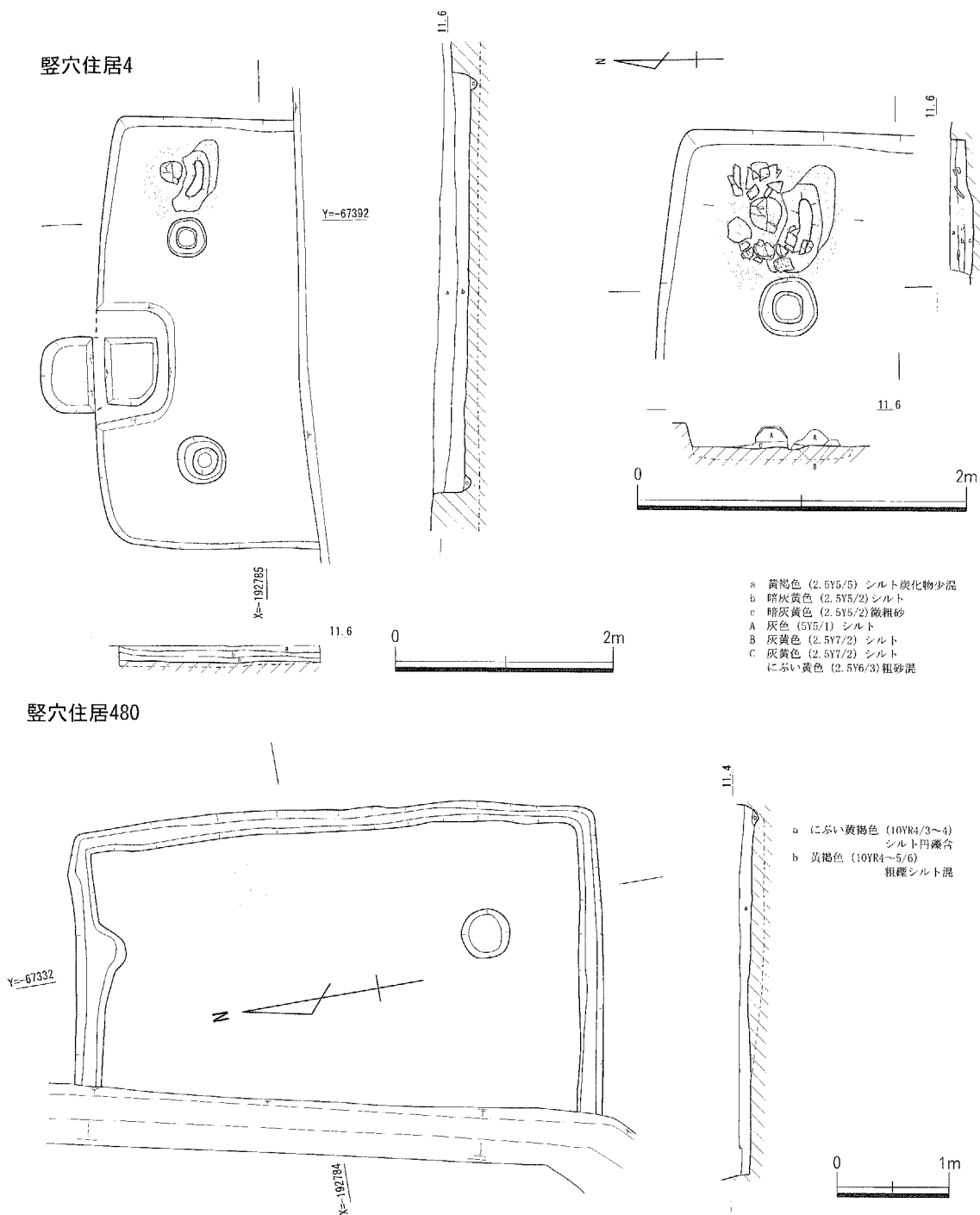


竪穴住居2



第83図 川辺2次竪穴住居1・2 (S=1/60)

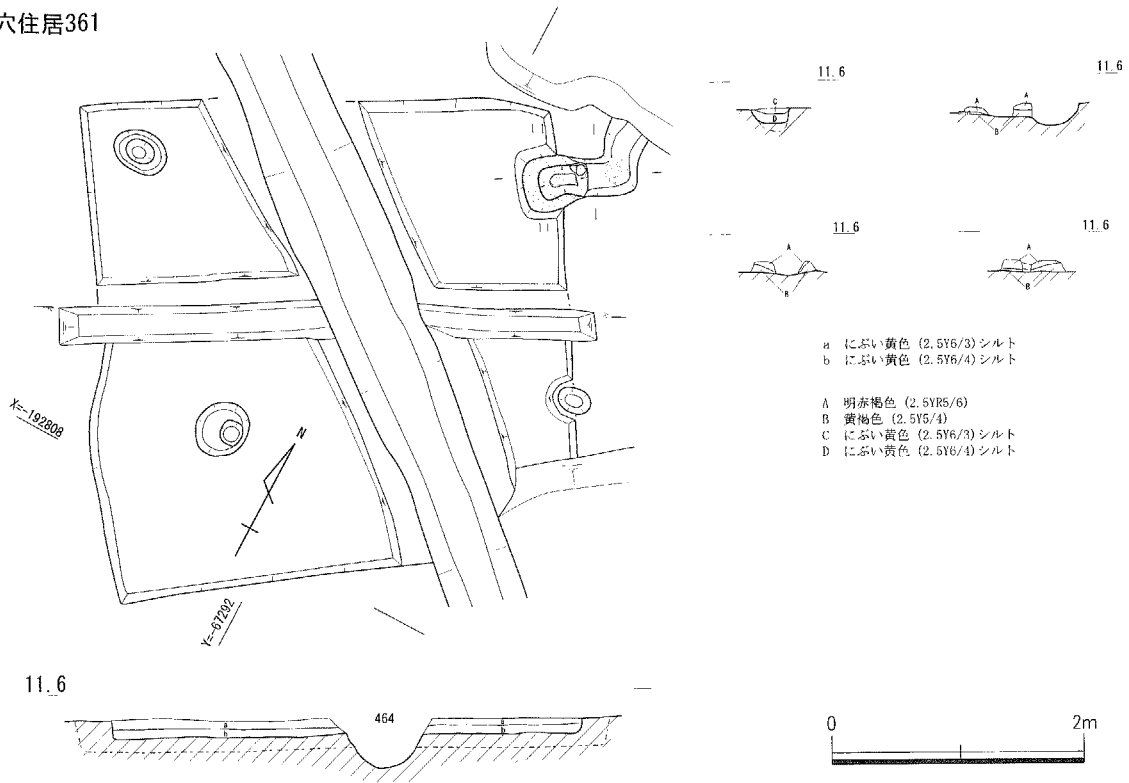
竪穴住居480はC調査区の西端で検出し、西側半部は調査区外のため不明である。主軸はN-9°-Eである。規模は4.7m×3.7m以上となる。残存の深さは調査区西壁では約40cmを測るが、遺構検出に難をきたし、かなり下で検出したため7~10cmと浅いものとなった。壁溝は壁に接し10~20cmの幅で全周するものとおもわれ、深さは6cmと浅く黄褐色シルトを含む。主柱穴は南側の2本を検出したが、深さ25cmと浅い。北側の2本は不明であった。また、床面東側中央部で50cm×65cmの焼面を検出した。竈の位置は調査区外であろうか。床面南西で鉄斧が出土した。



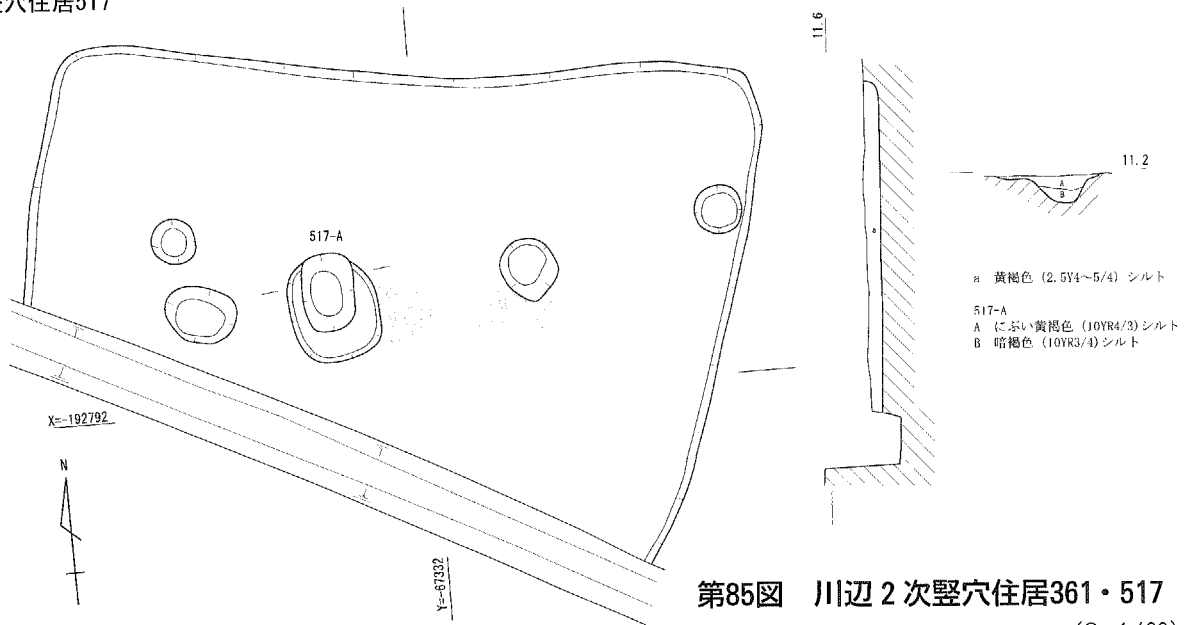
第84図 川辺2次竪穴住居4・480 (S=1/60 炉のみ1/40)

竪穴住居517は竪穴住居480の南側で検出した。この住居も南半部は調査区外のため不明であった。主軸はN-2°-Eである。規模は5.6m×4.0m以上となる。残存の深さは調査区の南壁で30cmである。埋土は黄褐色シルトを基調にする。床面上で深さ15~20cmの凹みを検出したが、位置的にも柱穴とは考えがたい。焼面も2箇所検出したが凹みの方が新しく、直接の因果関係は無いと思われる。竈は不明である。

竪穴住居361

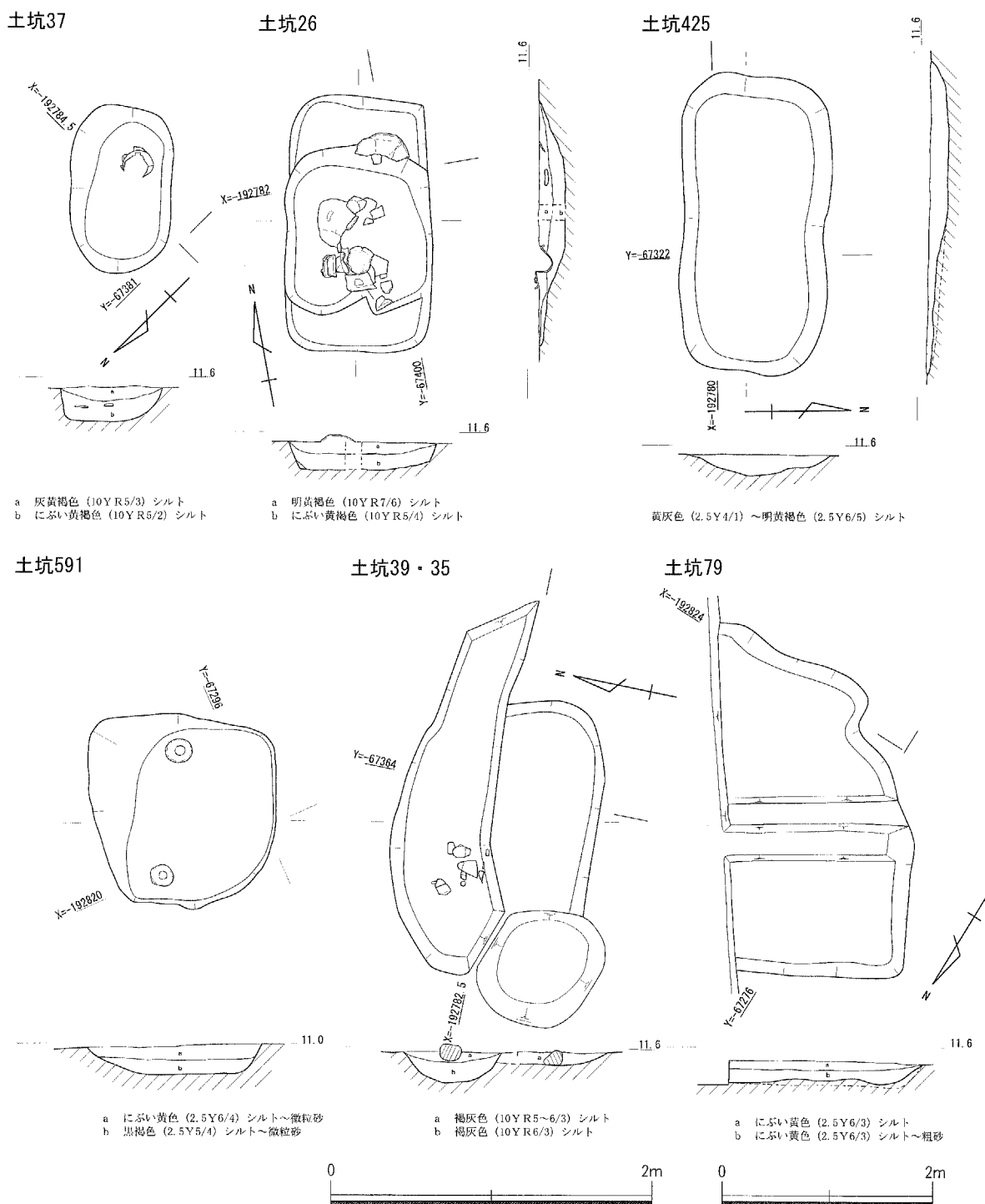


竪穴住居517



第85図 川辺2次竪穴住居361・517
(S=1/60)

竪穴住居361の主軸はN-30°-Wである。この住居は溝464に中央を切られている。規模は3.7m×3.95mと南北にやや長い。残存の深さは12~15cmである。床面の西側で支柱穴と思われる径40cmのピットを2基検出したが13cmと浅い。壁溝は検出されなかった。竈は東壁の北側に取付いて検出した。状況は、高さ8cm程度の赤く焼けた粘土塊が押し潰され、袖部が残る。この先から

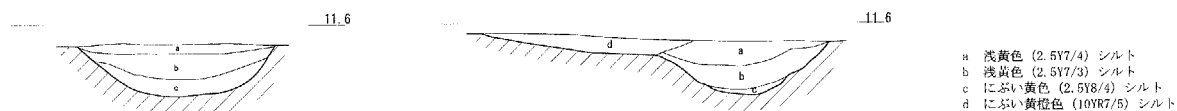


第86図 川辺2次土坑群 (S=1/40 ただし79のみ1/60)

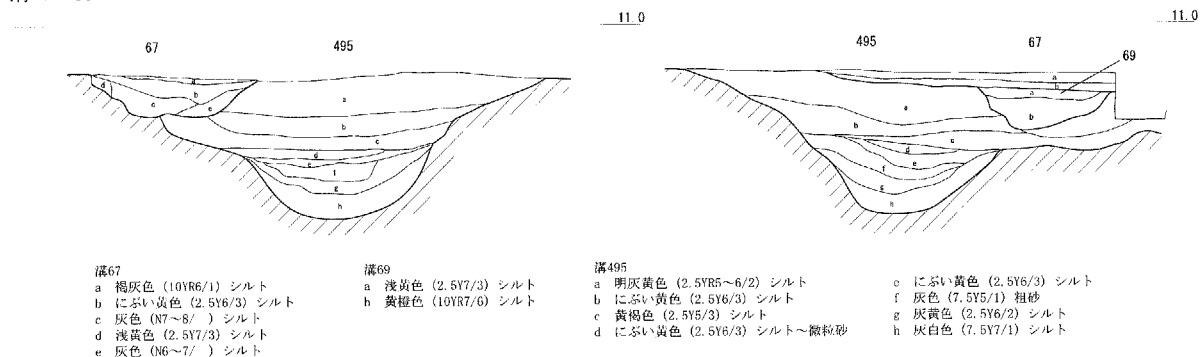
北方向に屈曲して住居外に幅30cmの煙道が延びる。煙道の底の一部は被熱して赤い。なお、この煙道は、先述した一段低い箇所の攪乱のため行き先は不明であった。

不整形土坑613はC調査区西端の狭い部分で検出し、南北の規模は調査区外のため不明である。東西長6.8m、南北長1.7m以上を測る。残存の深さは65～70cmを測る。底は割合に平らで、両肩

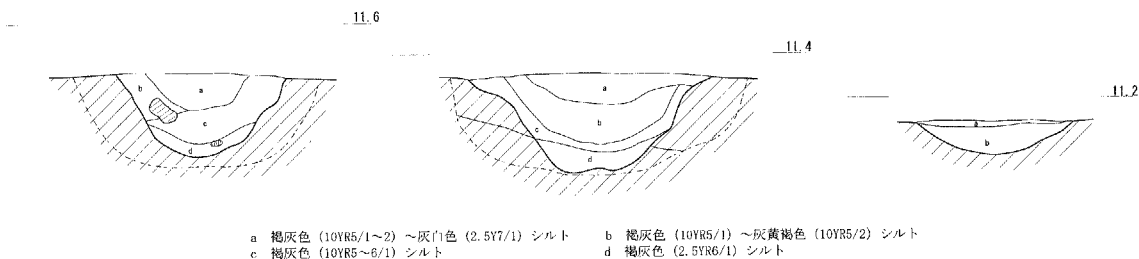
溝501 (7)



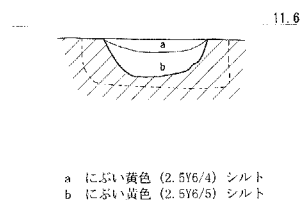
溝67・69・495



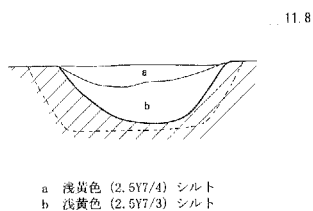
溝464 (359・78)



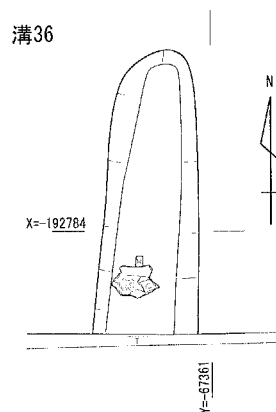
溝5



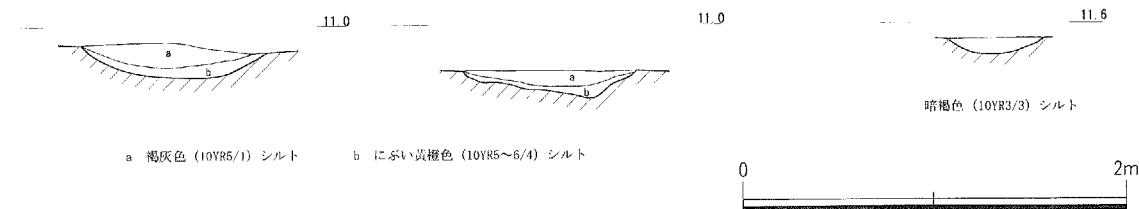
溝6



溝36



溝598/68



第87図 川辺2次溝群断面図 (S=1/40)

は緩やかに立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色を呈する。ここからは多量の土器片が出土した。

土坑37はB調査区の東端で検出した。平面形状は隅丸の長方形で、規模は1.0m×0.62mを測る。残存の深さは約20cmを測り、底では土師器壺が倒位で出土した。

土坑35、土坑39は重複して検出した。土坑39の方が新しく、双方ともに西側は攪乱されている。土坑35は1.40m以上×0.65m以上の規模の方形を想定させる。残存の深さは8cmである。土坑39の形状はやや弓なりになり、規模は0.6m×2.2mを測る。残存の深さは18cmを測り、断面の形状は舟底状を呈する。西側底には土器片が散在する。

土坑425の平面形状は隅丸の長方形を呈する。規模は長軸2.0m、短軸0.9mを測る。残存の深さは13cmを測り、埋土は黄灰色シルトを基調にする。形状と規模から土壌墓の可能性はある。

土坑26はその土器の出土状況、規模、形状から飛鳥時代の土壌墓と判断した。主軸はN-7°-Eである。残存の深さは18cmを測り、埋土は黄褐色シルトを基調にし、レンズ状に堆積する。土器はすべて上層から出土しているところから、上部に置かれていたものと推測できる。なお土層断面で棺の痕跡は検出されず、鉄釘、骨片なども出土しなかった。

土坑591の時期は鎌倉時代で、底には2個の瓦器碗を65cm隔て正位に据えていた。規模は1.1m×1.2mで、残存の深さは17cmを測る。埋土の下層と底には炭片が多量に入る。また、底は50cm×70cmの範囲が熱をうけて赤く変色している。これらの状況から火葬墓と考えている。

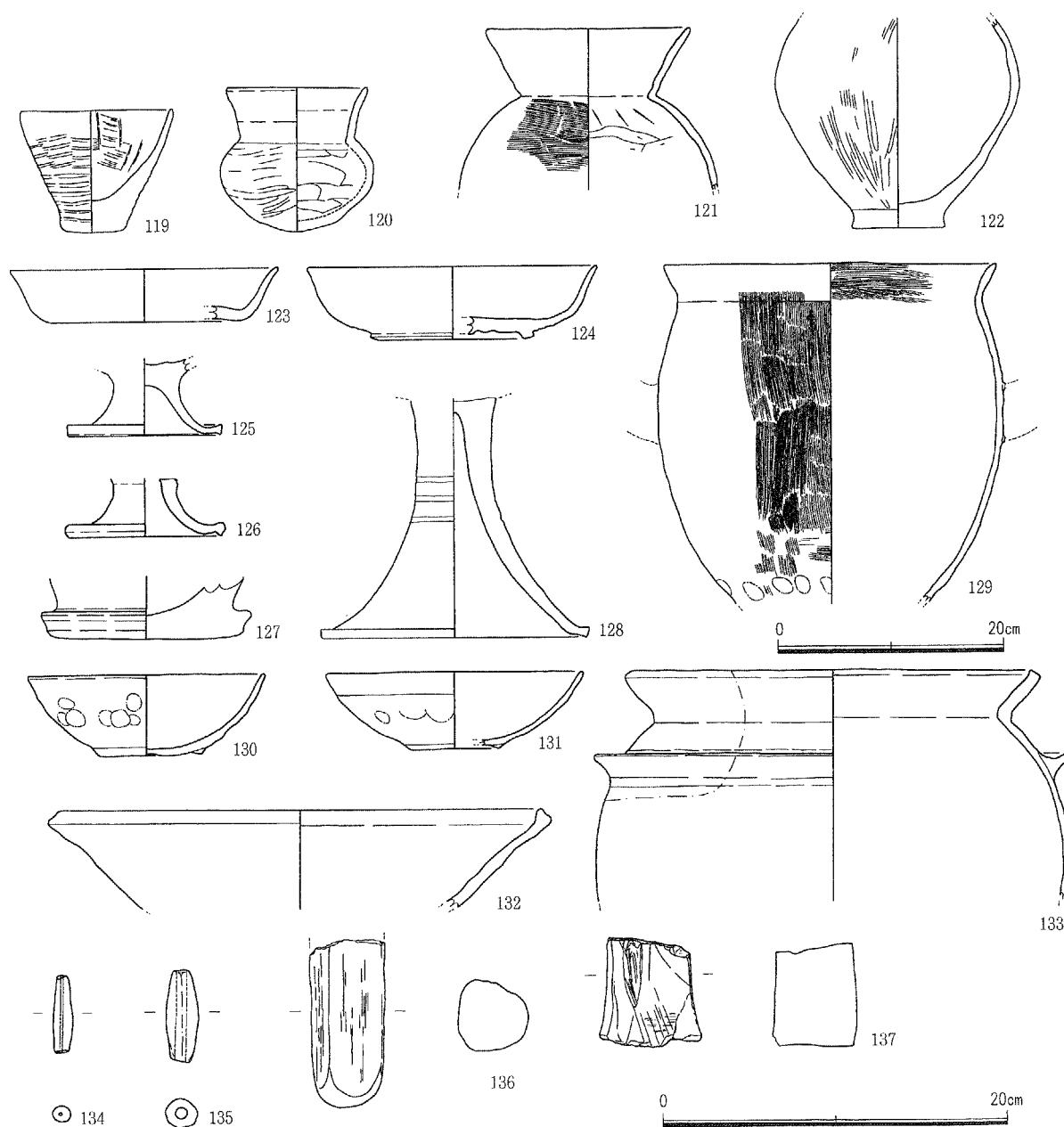
土坑79の埋土は土坑591と同様の黄褐色微砂混じりのシルトである。これの下層も炭と焼土が混じる。このような状況から、この土坑も火葬墓と思われる。ただ、規模はかなり大きい。

溝501と溝495の時期は庄内併行期である。溝501はEからA調査区にかけて、北東から南西に延びる溝である。検出長約35m、幅はE調査区では2.2m、A調査区では0.85~1.8mを測る。残存の深さは26cmを測る。溝495はF調査区の南端で検出した。この溝は溝67~69（飛鳥時代）のものと重複し、土層で確認した結果では、古い順に溝68→溝67→溝69である。溝68はD-1区では溝596として確認している。溝495の検出長は27.5m、幅は東側では不明であるが西側では2.4~1.4mと徐々に細くなる。残存の深さは76cmを測り、北側の肩は緩やかに立ち上がるが、南側は中程で段がつく。埋土はレンズ状に薄く堆積する。

溝6は飛鳥時代の溝で溝501の東側で並行するように検出した。この溝の北側は3次調査で検出している。溝5は溝6に隣接して検出した。幅は0.6~1.3m、残存の深さ20cmを測る。溝464も飛鳥時代の溝でC調査区の調査区を北から南に延びる。D-1調査区では溝78として確認した。検出長約90m、幅は0.9~1.0mを測る。残存の深さは西壁の検出面では1.0mを測る。その標高は西方向に低いため南東から北西に流れていたものと考えられる。埋土の堆積は「V」字状のレンズ堆積を呈し、人為的に掘削されたものと思われる。溝36はB調査区の南東で3mだけ検出し、幅は約1.0mを測る。底から須恵器甕が出土した。

2. 遺物

119～137は包含層出土遺物である。119は平坦な底部から直線的に口縁部が伸びる小形鉢で、外面タタキ、内面板ナデが観察される。120は小形丸底土器で、扁球形の体部から屈曲し体部長1/2を超える口縁部を備える。121は直口壺で、口径は11.9cmを測る。体部内面はにケズリが行われるが、頸部まで及ばない。122は壺体部で、外面はタテ方向のミガキが確認される。体部最大径は、体部中位からやや上半に位置し、古相を呈す。以上が包含層の庄内併行期から布留式期の土器群である。120および121は、形態的特徴から布留式古相の段階まで下ると考えられる。



第88図 川辺2次出土遺物1 (S = 1/4、ただし129はS = 1/6)

123は須恵器坏 A、124は須恵器坏 B である。口径、器高はそれぞれ15.6cm、3.1cmと16.8cm、4.3cmを測る。124の高台は底面内方に貼付され、断面は短い台形状を呈す。125・126・128は須恵器高坏脚部で、前2個体が短脚、後者が長脚である。127は、円盤状底部から外上方へ体部を備える鉢底部である。129は土師器甕で、口径28.9cmを測る。長胴の体部に屈曲して外反する口縁部を備える。口縁部内面にはハケが、体部外面中位には把手の剥離面が確認される。

以上は包含層出土の飛鳥時代に帰属する土器群である。このほかに天井・底部不調整、同回転ヘラケズリの坏 H、短頸壺、長頸瓶体部などが確認された。器種や高坏の形態などから、飛鳥Ⅱ～Ⅲが主体的と理解している。

130・131は瓦器埴である。口径はそれぞれ13.8cm、14.7cmを測る。断面三角形の高台が痕跡的に貼付される。磨滅が著しいが体部下外面に指頭圧痕が認められる。132は東播系須恵器鉢口縁部である。口縁部形態が断面三角形を呈し、端部は上方へ拡張される。133は土師器羽釜である。頸部でくの字形に屈曲し、口縁端部がやや内方に屈曲する。鐸はナナメ上方に貼付され約1cmを測り、突出度は高い。

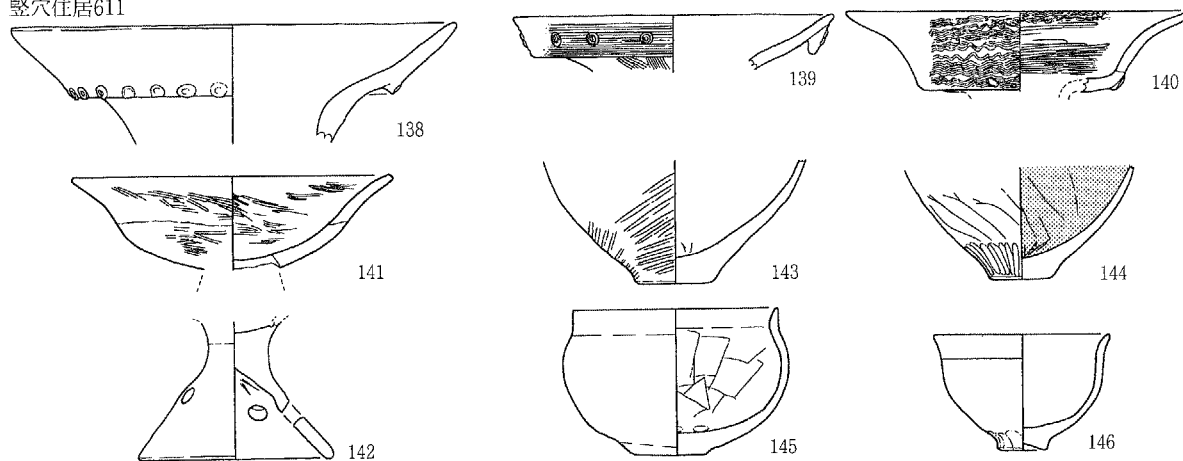
以上が包含層出土の中世に帰属する土器群である。12世紀代まで遡る資料も含まれるが、瓦器・土師器羽釜の特徴から13世紀前葉～中葉の遺物が中心を占める。これが遺構面の下限年代を示す土器群と判断している。

134・135は包含層出土の管状土錘である。136は直径4.1～4.2cmの円柱状の紅簾片岩製石製品で、残存長は10.0cmを測る。円柱部分には研磨痕等は確認されないが、端部は丸く、表面には光沢が観察され、研磨または使用痕とみられる。137は断面形態方柱形の砥石で、花崗岩とみられる。砥面のうちの一面には筋状の溝が走り、玉研磨用砥石とみられる。

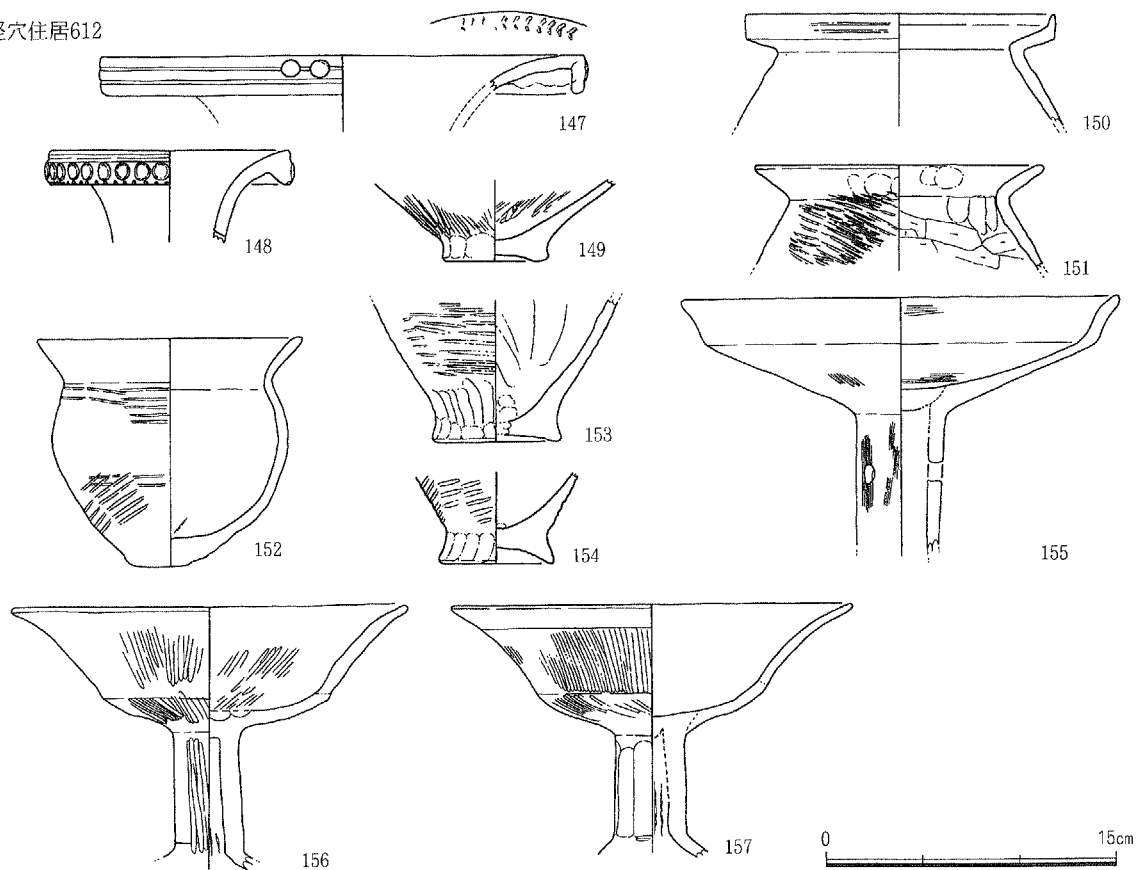
138～146は、竪穴住居611出土遺物である。138は二重口縁壺口縁部で、頸部、口縁部ともに緩やかに外反する形態を示す。1次口縁は下方に垂下し、竹管円形浮文により加飾する。139は広口壺口縁部である。口縁部が垂下し、その部分に擬凹線文を施し、その上に円形浮文を貼付する。140は非常に加飾性の高い土器で、口縁部外面全体に4周および内面端部付近には2週の波状文を廻らせ、内面にはヨコ方向のミガキを施す。また屈曲部外面は、僅かに下方へ粘土紐を貼付し垂下させて、円形浮文の加飾を行う。加飾性の高さや屈曲部を垂下させるなどから二重口縁壺口縁部と考えられるが、2次口縁としては外反度合いが高く大きく広がる形態のため有稜系高坏の可能性を残す。高坏の場合、類似する装飾性の高い有稜系高坏は、庄内式中段階古相に位置付けられる和泉市上町遺跡1次調査「井戸」状遺構(30)で確認される。141は有稜系高坏で、内外面ともヨコ方向のミガキによる調整が認められる。口縁部長と坏底部長の比率はほぼ1:1である。142は埴形高坏脚部で、中実の脚柱部が僅かに認められる。裾部径は9.8cmを測る。脚裾部の穿孔は5方向に認められる。143は底面平坦な甕底部である。144～146は小形鉢である。144は平

坦な底面から半球形の体部を備える器形で口縁形態は不明だが、外面にタテ方向ミガキが確認され、小形鉢と考えられる。鉢内面には丹が全面に付着するが、塗布されたのではなく内容物として丹が注がれた結果とみられる。なお、外面には煤が付着する。145・146は、球形の体部から屈曲して外反する口縁部に至る形態の小形鉢である。底部はいずれもやや突出する。有稜系高坏の坏部の形態（141）や加飾性の高い有稜系高坏（140）、垂下する広口壺口縁部（139）などの存在から、竪穴住居611の土器群は庄内式古段階～中段階古相に位置付けられる。

竪穴住居611



竪穴住居612



第89図 川辺 2次出土遺物 2 (S = 1/4)

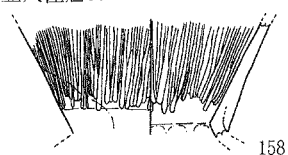
147～157は竪穴住居612出土遺物である。竪穴住居611とは重複関係が認められ、後出することが層位的に確認されている。147・148は広口壺口縁部で、口縁端部が垂下し、その部分に擬凹線文と円形浮文の加飾が行われる。147内面にはくの字形に列点文が廻らされ、加飾性が高い。149は底部輪台技法による底部で、内外面のミガキから壺の底部と判断した。150・151は甕口縁部で、口径は16cm、14.9cmを測る。150は、受口状口縁外面に擬凹線文が行われる。151は体部内面にはケズリが行われるが、頸部まで及ばない。152は、口径13.5cm、器高12cmを測る小形甕である。体部外面下半は右上がり、上半はヨコ方向のタタキ、内面はナデが認められ、形態・調整とも典型的なV様式系甕である。153・154は甕または鉢の底部で、いずれも上げ底状の底部に直線的な体部を備える。155～157は高坏坏部から脚柱部で、脚裾部はいずれも欠損する。155は皿形高坏で、坏底部に対し口縁部は短く、やや外反する。中空の脚柱部は直立する形態で、スカシ孔が2方向に穿孔される。外面にはタテ方向、内面にはヨコ方向を基調とするミガキが確認される。156・157は、有稜系高坏である。口縁部長と坏底部長の比率は1.2：1前後で、口縁部が長くなる。坏部稜線は明瞭で、口縁部は外反しながら、外上方へ伸びる。脚柱部は柱状を呈し、屈曲して裾部に至る。脚柱部外面・坏部内外面ともタテ方向のミガキが確認される。

受口状口縁の甕（150）や皿形高坏（155）などは、弥生時代後期中葉～後葉まで遡るが、有稜系高坏（156・157）などの存在から竪穴住居612の埋没は庄内併行期中段階古相に帰属する。なお、有稜系高坏の141と156・157の口縁部長と底部長の比率を比較すると竪穴住居611の方が古相を示すと理解され、遺構の重複関係と齟齬をきたさない。

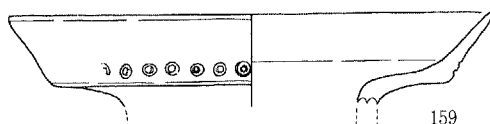
158～163は、竪穴住居592出土遺物である。158は直口壺頸部～口縁部で、内外面ともにタテ方向の幅狭のミガキが行われる。159は二重口縁壺口縁部で、1次口縁が大きく開くものの、2次口縁部は発達しない。頸部は残存しないが、1次口縁からの屈曲は著しいため、直立すると推測される。口縁部外面は竹管文により加飾される。160・161は甕または鉢底部と考えら、底面中央が凹む160と平坦な161とが認められる。162は、球形の体部に外上方に短い口縁部を備える小形鉢である。底部は突出する平底の形状を呈す。体部下半はタタキの後疎らにナデられ、口縁部にはヨコナデが行われる。163は底部周辺が下方へ拡張し、底面が上げ底状を呈す。体部外面にはタテ方向のミガキが確認され、小形鉢底部と理解される。詳細な時期を検討できる器種の出土がなく、庄内併行期と理解するが前述の竪穴住居611・612よりも後出する可能性が高い。

164～167は竪穴住居558出土遺物である。164は広口壺口縁部で、直立気味の頸部から大きく外反する口縁部が広がり、口縁端部は端面を形成する。165は有稜系高坏坏部と脚柱部の接合部分である。坏部は外上方に広がり、脚柱部は中空である。坏部外面にはタテ方向のミガキが確認される。166は埴形高坏脚柱部で、脚柱部は中空で緩やかに外反して裾部に至る形態を呈す。167は底面外周が下方に拡張する形態で、底部外面に指頭圧痕が確認されることから、小形鉢底部とみ

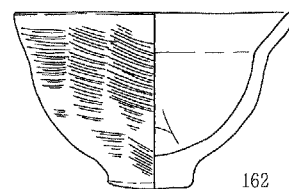
竪穴住居592



158



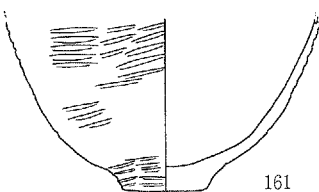
159



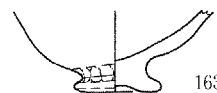
162



160

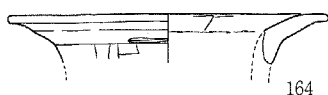


161

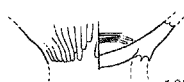


163

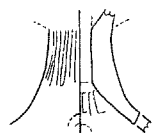
竪穴住居558



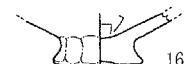
164



165



166

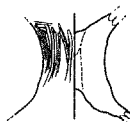


167

竪穴住居575



168



169

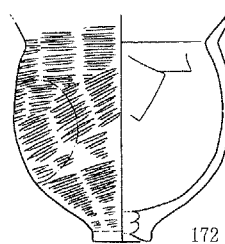
竪穴住居579



170



171



172

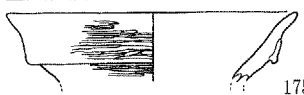


173

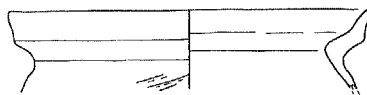


174

竪穴住居586



175



176

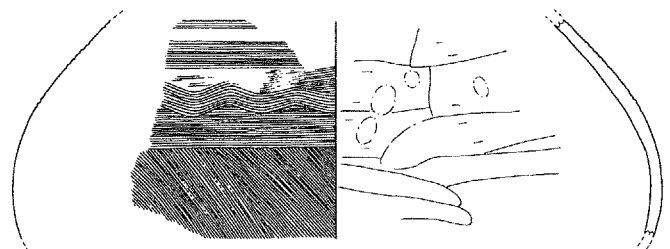


177

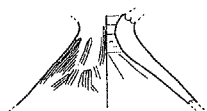
不整形土坑613



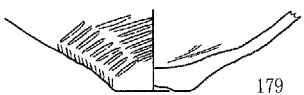
178



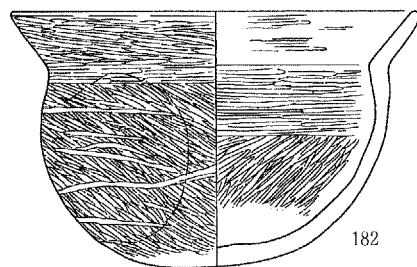
179



180



181



182

0 20cm

第90図 川辺2次出土遺物3 (S = 1/4)

られる。有稜系高坏（165）の推測される全体の形状が、坏底部が外上方に伸び、口縁部が短い形態のため、弥生時代後期後半まで遡る可能性が高い。さらに、埴形高坏の脚柱部（166）の形態も同様と思われるが、広口壺の特徴は庄内併行期と理解する方が妥当と考えられる。竪穴住居612同様古相の土器を包含するが、埋没は庄内併行期の段階まで下ると理解される。

168・169は竪穴住居575出土遺物である。168は甕口縁部で、口縁端部は丸く収められる。169は埴形高坏脚柱部で、柱状の形態を呈し、中実である。

170～174は竪穴住居579出土遺物である。170は加飾されない二重口縁壺口縁部で、口径13.6cmを測る。頸部がわずかに直立気味に立ち上がり、外反する口縁部を備える。外面には、幅1cm程度のタテ方向のミガキが認められる。171・172は甕底部で、いずれも球形の体部を備える。172では体部最大径が体部中位より下に位置する。173は埴形高坏脚部で、中実の脚柱部は僅かに直立する。脚裾部は大きく広がり、内湾気味の形態を呈す。174は口径9.8cm、器高6.3cmを測る小形鉢である。突出する底部から丸みを帯びた体部がのび、屈曲してごく短い口縁部に至る。竪穴住居579の時期は、埴形高坏（173）の形態から庄内併行期でも新相に属すと考えている。

175～177は竪穴住居586出土遺物である。175は、170同様加飾されない二重口縁壺口縁部だが、1次口縁部外側に粘土紐を貼付して垂下させる点で異なる。176は受口状の形態を呈す甕口縁部である。177は、埴形高坏脚柱部である。脚柱部は柱状の形態を呈し、中空である。脚裾部にスカシ孔が3方向に穿孔される。

178～182は不整形土坑613出土遺物である。178は壺または甕体部上半部で、外面にナナメハケおよびヨコハケ、内面はヨコ方向のケズリによる調整が確認される。なお、肩部外面にはヨコ方向および波状の施文が行われる。色調が他の土器群は赤色系を呈すのに対して、にぶい橙色（7.5 YR6/4）で1mm以下の黒色礫を多量に包含し、他の庄内併行期前後の土器群とは胎土も異なり、後世の混入品の可能性も考えられる。179は甕底部で、底面は凹む。180は、中空の柱状部から裾部が広がる形態を呈すことから小形器台脚部と考えられる。脚裾部はやや内湾する形態を呈す。181は半球形の体部から屈曲して、内湾する口縁部を備える中形鉢である。182は、181同様球形の体部に屈曲してやや内湾気味の口縁部を備える形態を呈す鉢と考えられる。底部は突出しない平底状の部分形成するが、丸底化の進展も看取される。ただし、口縁部や体部の器壁は厚手で口縁端部も鈍重なもので、細部の形態は異なる。体部は、内外面とも密なミガキにより調整される。周辺では確認されないやや異形の形態・調整とみられる。180は中空の小形器台で庄内併行期に比定されるのに対し、182は丸底化の進展が認められ、布留式段階まで下る可能性が高く、不整形土坑613は庄内併行～布留式期の土器群が確認されると理解できる。

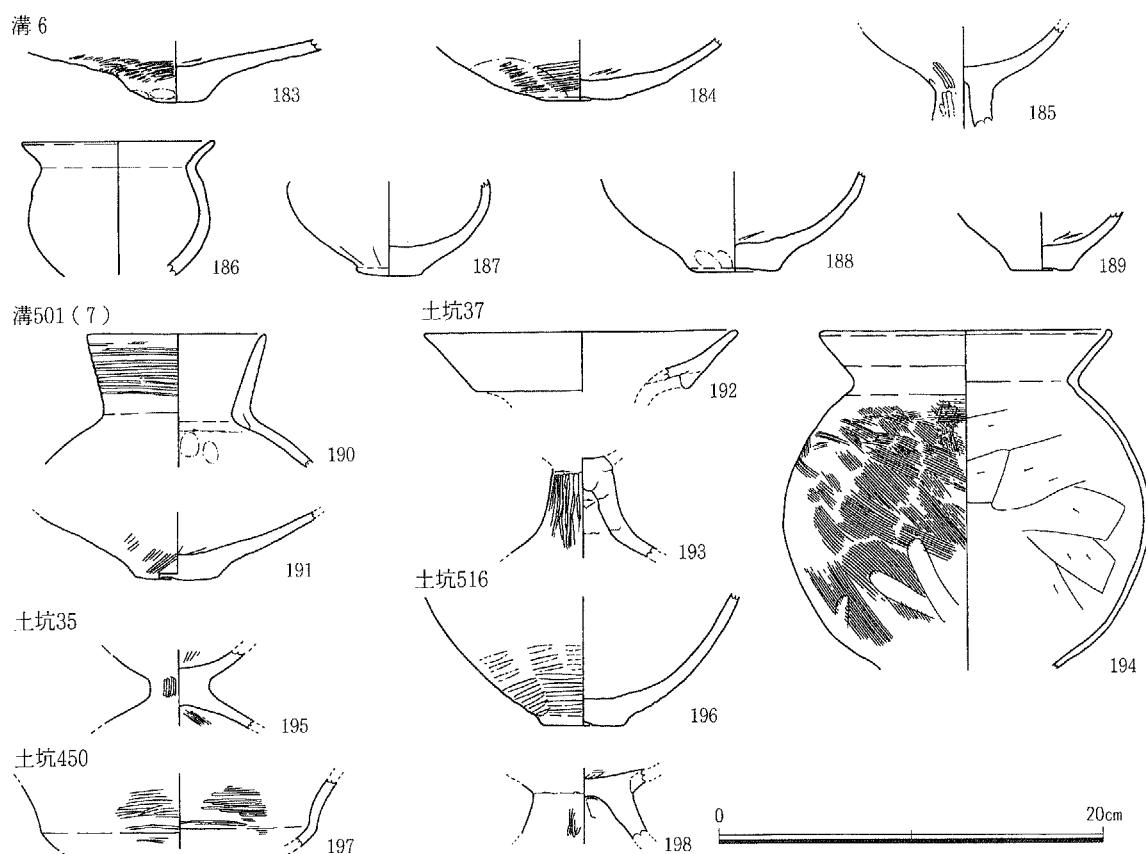
183～189は溝6出土遺物である。183・184は甕底部で、体部から突出する。185は口縁部を欠損する埴形高坏坏部で、球形の坏部形態に中空の直立する脚柱部を備える。186～189は小形鉢とみ

られ、いずれも内外面ともミガキまたはナデにより平滑に仕上げられる。186は底部の形態は不明だが、球形の体部から頸部で屈曲して短い口縁部が外上方に伸びる形態を呈す。187～189は鉢底部で、いずれもやや突出する底部を有する。

190・191は溝501（7）出土遺物である。190は口縁部外面に擬凹線文が認められる直口壺口縁部である。体部は外面がナデまたはミガキにより平滑に仕上げられる。擬凹線は3本単位で、3周以上施される。191は甕底部で底部輪台技法が用いられる。このほかに中実の埴形高坏脚柱部なども存在し、溝501は庄内併行期でもやや新相の様相を示す。

192～194は土坑37出土遺物である。192は二重口縁壺口縁部で、1次口縁を垂下するが、加飾しない。193は中央がやや膨らむ形態を呈す高坏脚柱部で、中空である。有稜系の高坏脚柱部か。194は球形の体部を持つ甕で、布留傾向甕、布留祖形甕などと呼称されるタイプの甕である。口縁端部は上方にやや拡張され、外傾する端面をもつ。体部外面には下半にナデ、上半にナナメハケ、内面は頸部付近までケズリが施される。なお、体部上半のナナメハケの後、一部に断続的に行われたヨコ方向のハケが確認される。以上の特徴から、土坑37の土器群は庄内式新段階～布留式初頭に位置付けられる。

195は土坑35出土の埴形高坏脚柱部である。脚柱部はやや柱状部分があり、中実である。外面



第91図 川辺2次出土遺物4 (S = 1/4)

にはタテ方向のミガキが確認される。196は土坑516出土の甕底部～体部下半である。

197・198は土坑450出土の有稜系高坏である。197は坏部口縁部で、未だ発達せず外反する形態である。198は坏部と脚部の接合部分で、脚柱部はハの字上に緩やかに広がる形態を呈し、中空である。これらはいずれも弥生時代後期後半の特徴を有し、土坑45はその段階まで遡ると考えられる。

199～213は溝495の出土遺物で、このうち199～207が上層、208～213が下層からの出土である。199は広口壺口縁部から肩部で、球形の体部に直立する頸部に外反する口縁部を備える。体部外面はタタキ後にミガキ・ナデが施される。200は二重口縁壺口縁部で、1次口縁は垂下する。口縁部外面には擬凹線文と2列の竹管円形浮文が行われ、内面にも口縁端部に沿って櫛描波状文、それに直行する方向にも櫛描による施文が行われる。201～203は高坏の一部で、201が埴形高坏坏部のほかは脚柱部である。201・203の脚柱部は中空だが、202は中実で、ほぼ直立する柱状の脚柱部から屈曲して裾部が広がる。また、202の坏底部は円盤充填技法により製作される。204・205は甕または鉢の底部で、球形の体部、平坦な底面、体部外面のタタキなどが共通する。206・207は有孔鉢底部で、底面の穿孔は長径1.5cm、短径1cmの楕円形を呈す。

208・209は広口壺口縁部で、それぞれ口径14.4cm、14.8cmを測る。口縁端部は、208が丸く収められ、209は外傾する端面に2条の擬凹線が施文される。210・211は甕で、210は体部最大径が体部中位から下半に、211は上半に位置する形態を呈す。口縁端部は、210は端面をもち刻目が認められる。212は有稜系高坏の中空の脚部で、緩く内湾するハの字形の脚柱部から屈曲して脚裾部が広がる形態を呈す。外面には幅1～2cm程度の面が認められ、板状工具により平滑に仕上げられる。213は底部輪台技法の鉢底部で、外面にはタテ方向のミガキが認められる。溝495出土遺物で、上層と下層の間に明瞭な型式差は認められず、むしろ下層出土の高坏脚部（212）は庄内併行期でも新相を呈しており、溝495が当該期に一気に埋没した可能性が高い。

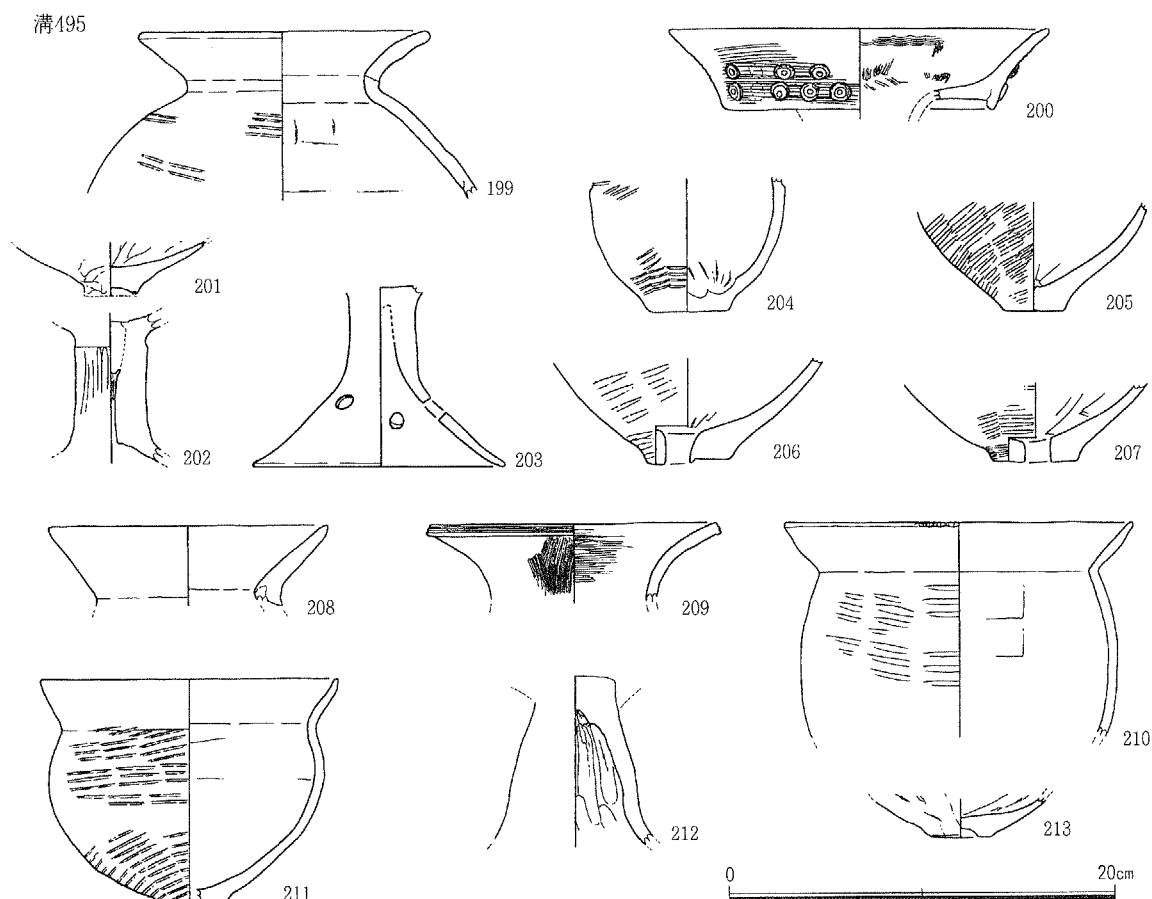
以上が、本調査区出土の庄内併行期前後の土器群である。弥生時代後期に遡る土坑45や竪穴住居の一部の出土遺物も散見されるが、庄内併行期でもやや古相に位置付けられる竪穴住居611・612・585と新相の竪穴住居579・592、土坑613ほか等が認められ、庄内併行期全体を通じて住居・溝・土坑の存在が確認される。

214～216は竪穴住居1出土遺物である。214は須恵器坏B蓋で、口径15.9cmを測る。つまみは扁平化が進み、平らな頂部から屈曲する口縁部へ至る形態を呈す。口縁内面にはかえりがない。215は土師器坏で、口径13.4cmを測る。平らな底部にやや内湾する口縁部を備える。口縁端部は丸く収められる。216は土師器甕口縁部で、長胴の体部から屈曲して口縁部にいたる。近年、かえりのない須恵器坏B蓋の出現は飛鳥Ⅲに遡るとされることから、竪穴住居1はそれ以降に位置付けられ、つまみの形態から飛鳥Ⅳ～Ⅴと理解される。

217～222は堅穴住居4出土遺物である。217は須恵器坏H蓋、218・219は須恵器坏H身で、口径はそれぞれ12.4、11.4、12.4cmを測る。天井・底部には回転ヘラケズリが行われる。なお219はにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈し、土師質焼成である。220は須恵器短頸壺で、底部に回転ヘラケズリ、体部中位に凹線が認められる。221は土師器甕で、長胴の体部に外上方に伸びる口縁部を備える。体部は外面にタテハケ、内面にはユビオサエの後疎らにヘラケズリが行われる。222は土師甕体部に貼付される把手である。須恵器坏Hは飛鳥Ⅱではば姿を消すが、217～219は各々天井・底部は不調整でなくヘラケズリが認められ、飛鳥Ⅰに遡る可能性が高い。

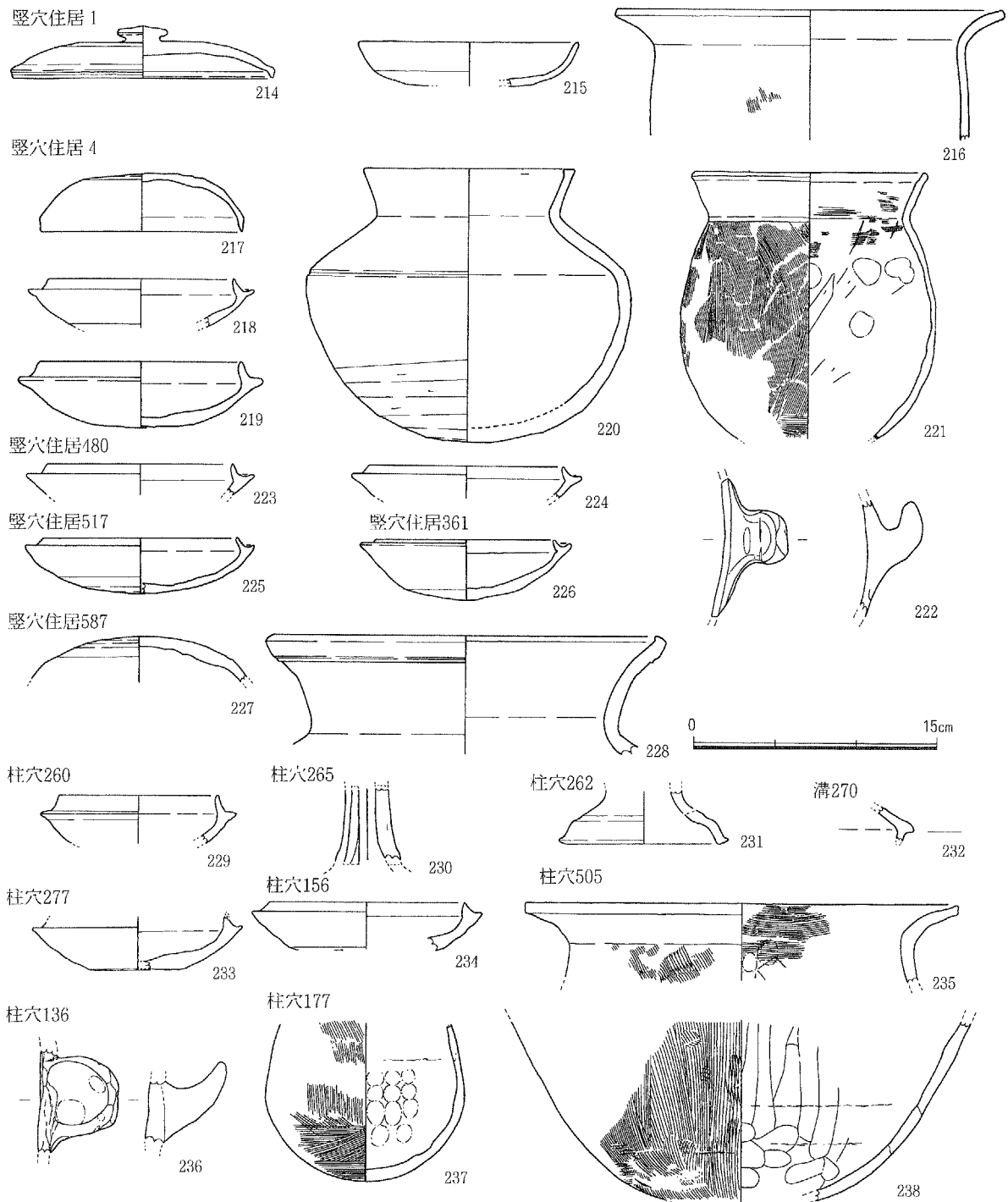
223・224は堅穴住居480出土須恵器坏H身である。口径は、それぞれ11.4、11.9cmを測る。底部のヘラケズリの有無は不明だが、受部立ち上がりはいずれも内傾し短い。225は堅穴住居517出土の須恵器坏H身である。口径は11.9cmを測り、底部は底面の2/3の広い範囲がヘラケズリされる。223などと同様の短く内傾する口縁部を備える。226は堅穴住居361出土の坏H身で、口径11.0cmを測る。底部はヘラ切り不調整で、受部は一層短く内傾する形態を示す。227・228は堅穴住居587出土須恵器である。227は坏H蓋で、天井部は回転ヘラケズリが認められる。

228は甕口縁部で、口縁端部は内上方に摘み上げられ、頸部には施文されない。



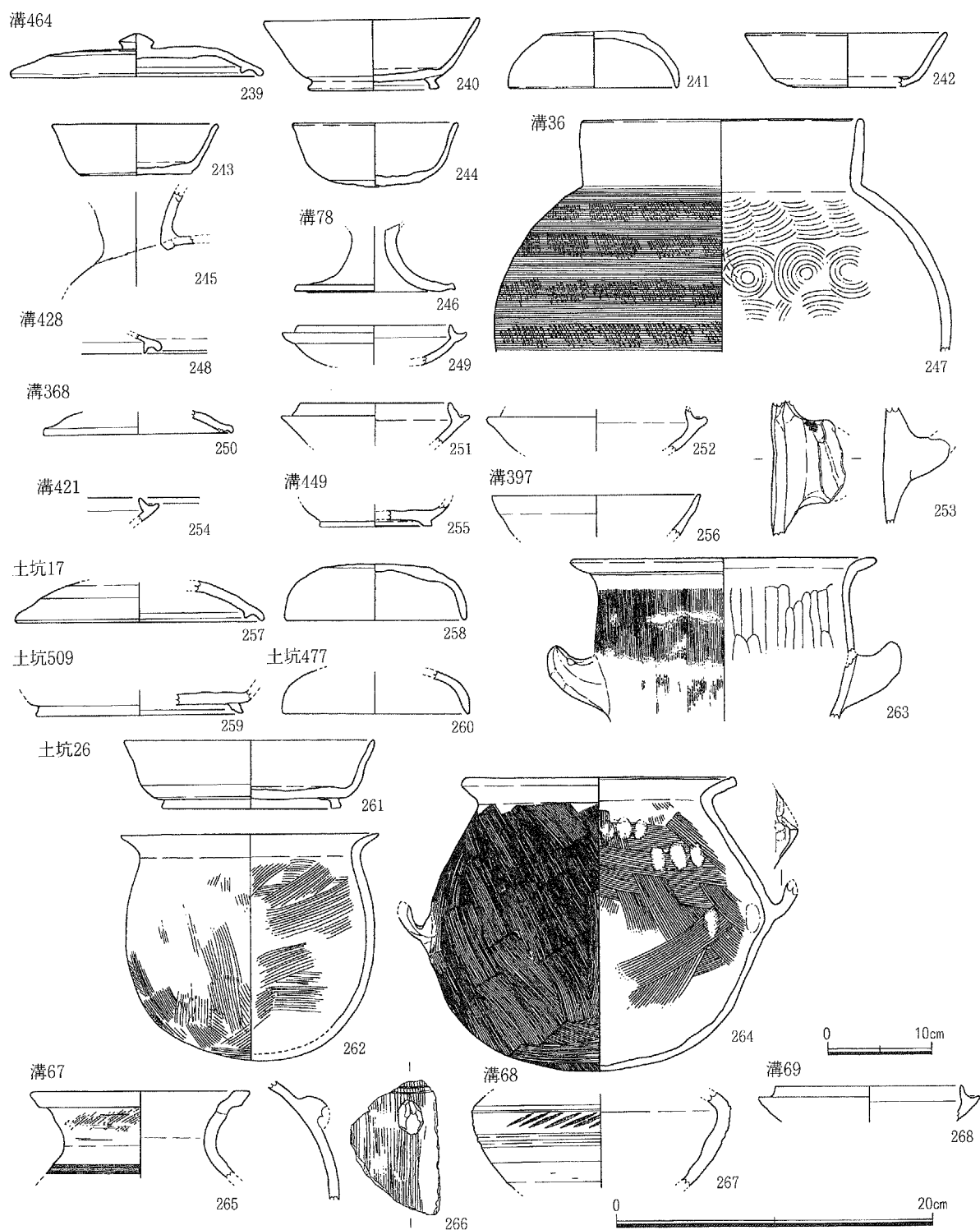
第92図 川辺2次出土遺物5 (S = 1/4)

以上が1・4以外の竪穴住居出土遺物である。いずれも須恵器坏Hを出土し、飛鳥Ⅲを遡る段階に比定される。このうち竪穴住居361出土坏(226)以外は、竪穴住居4と同様の口縁部形態か、底・天井部に回転ヘラケズリが認められるもので、飛鳥Ⅰ帰属と考えられる。これに対し、竪穴住居361は、底部ヘラ切り不調整や受部形態などからこれらよりやや後出すると推測される。



第93図 川辺2次出土遺物6 (S=1/4)

229～231は、掘立柱建物1を構成する柱穴出土で、232は掘立柱建物1を圍繞する溝270出土の須恵器である。229は坏H身で底部ヘラケズリの有無は不明だが、受部立ち上がりは、長くそれほど内傾しない。230は高坏脚部で、3方向にスカシ孔が穿孔される。長脚2段の高坏脚部の下



第94図 川辺2次出土遺物7 (S = 1/4、ただし263・264はS = 1/6)

段部分と判断されるのに対し、231は短脚の高坏脚部とみられる。溝270出土の232は破片資料なので、坏 H 身または坏 G または B 蓋の可能性が考えられたが、立ち上がりや受部の形態などから、坏 G・B 蓋と理解して図示した。いずれにせよ、掘立柱建物 1 の柱穴群出土遺物よりも鈍重な印象を受ける。資料的な制約はあるものの、229～231の器種が共伴し、このような形態の特徴が認められる段階としては、飛鳥 I のやや新相に該当し、掘立柱建物 1 上限は飛鳥 I と理解される。また、建物を圍繞する溝270の埋没はこれらよりもやや遅れるようである。

233は、掘立柱建物 1 付近の柱穴277出土の須恵器坏 H 身で、底面はヘラ切り不調整である。234は、掘立柱建物1北西の調査北端に位置する柱穴156出土の須恵器坏 H 身で、底面は回転ヘラケズリが認められる。235～238は柱穴出土の土師器群である。235のみ A 地区柱穴505出土で、他は C 地区掘立柱建物 1 周辺の柱穴出土である。いずれも甕の一部で、体部長胴で口縁部が大きく開く形態（235・238）、把手（236）、体部が球形に近い（237）などが確認される。

以上のように、掘立柱建物 1 以外の柱穴群の出土遺物もおおむね飛鳥 I ～ II の特徴を備えており、掘立柱建物 1 周辺の柱穴群もほぼ併行すると推測される。

239～245は溝464出土土器群である。239は須恵器坏 B 蓋で、口径は15.5cmを測る。天井部には回転ヘラケズリを行い、口縁内面にかえりを付す。240は、坏 B 身で、口径13.5cmを測る。高台は外下方に踏ん張る形態を呈す。241は坏 H 蓋で口径10.6cm を測る。天井部は、回転ヘラ切り不調整で、天井部と口縁部の境界は明瞭でない。242～244は坏 G で、口径は10.3～12.7cmを測る。底面は回転ヘラ切り痕が残存し、口縁部は外上方に直線的に伸びる。245は平瓶頸部付近である。以上のように、坏 G が主体を占め、坏 H・B、平瓶の存在が認められることから、溝464は飛鳥 III を中心とする時期と考えられる。246は、溝72出土の須恵器高坏である。短脚で、脚裾部端は外下方へ拡張されて、外傾する端面を形成する。247は、溝36出土の直口壺で、口径17.4cmを測る。248・249は溝428出土の須恵器坏である。248は坏 G または B 蓋で、かえりを付す。249は坏 H 身で、受部立ち上がりは短く内傾する。250～253は溝368出土遺物である。250は坏 G または H 蓋で、かえりを付す。251・252は坏 H 身で、それぞれ口径9.4、約12cmを測り、規格差を認めることができる。253は土師器甕の把手で、器壁との接合部位は厚い。254は溝421出土坏 H 身口縁部で、受部立ち上がりは内傾著しく、短い。255は溝449出土須恵器坏 B 底部で、高台はハの字状の形態を示すが低い。256は溝397出土で、甕または平瓶の口縁部と考えられる。

以上が、F 調査区を除く本調査検出の飛鳥時代に帰属する溝の土器群である。溝464は坏 G が主体的なため飛鳥 III と考えられるが、坏 B（240）の高台の形態から埋没はやや遅れ、溝449とともに飛鳥 IV・V になる可能性がある。これに対し他の溝群は坏 H を主体とし、飛鳥 III 以前と考えられ、掘立柱建物 1 や柱穴群と同時性が看取できる。

257・258は、土坑17出土須恵器坏蓋である。257はかえりを付す坏 G または B 蓋で、258は坏

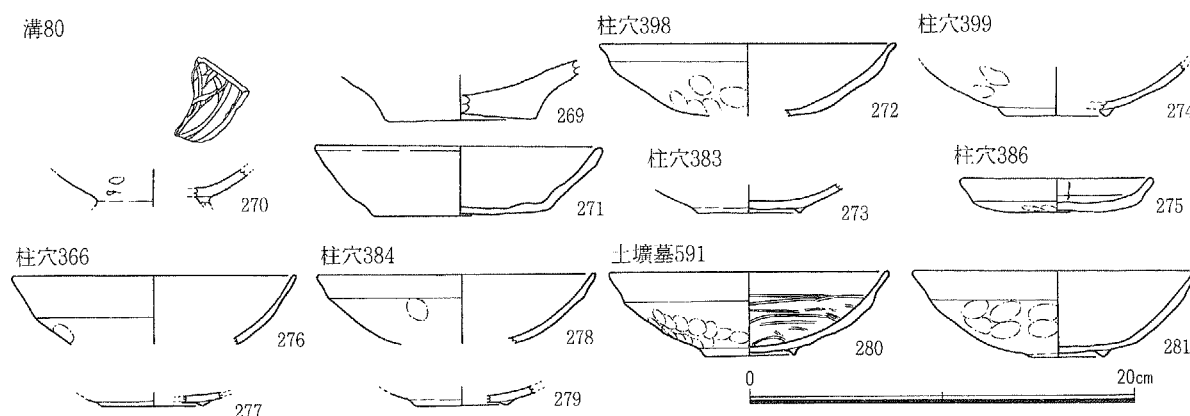
H 蓋である。258は口径11.3cmを測り、天井部は回転ヘラ切り不調整である。259は、土坑509出土須恵器坏 B 底部である。高台はハの字状に貼付されるものの短い。260は、土坑477出土坏 H 蓋である。261～264は、土壙墓26出土遺物である。261は須恵器坏 B で、口径15.8cmを測る。底面から口縁部下半までは回転ヘラケズリが行われる。262～264は土師器甕で、体部が球形で把手を備えない262、体部が長胴で口縁部が大きく広がり把手を備える263、体部が球形で把手を備える264などが存在する。

以上、飛鳥時代の土坑出土の土器群である。土坑17・477は坏 H を含み古相に、土壙墓26・土坑509は高台の低い坏 B を含み新相に分類される。資料的制約のため判断は困難だが、概ね古相が飛鳥Ⅱ、新相が飛鳥Ⅳに帰属すると予想される。

265～266は、溝67出土須恵器である。265は甕口縁部、266は提瓶側面肩部である。267は形骸化した半円形の耳が貼付される。266は、溝68出土の長頸瓶体部とみられる。体部下半は回転ヘラケズリにより成形され、体部には2条の突線で区画された範囲には、列点文が施文される。268は、溝69出土の坏 H 身で、口径11.8cmを測る。受部立ち上がりは比較的直立し、長い。以上が、F 調査区検出の飛鳥時代帰属の遺構群である。F 調査区以外の同時期の遺構群同様、およそ飛鳥Ⅱ～Ⅲに帰属すると考えられる。

269～271は、溝80出土遺物である。269は後述する3次土坑68-4、137と同様に弥生時代前期の壺底部で溝80の機能時期を反映しない。270は瓦器埴底部で、見込に疎らな螺旋状のミガキが施され、底面に断面三角形の高台を備える。271は回転糸切りの底面の土師器皿で、口径14.7cm、器高3.6cmを測る。平坦な底面に外上方へ伸びる口縁部を備える。270・271の特徴から、12世紀後半から13世紀前半とみられる。

273～275は、柵列1を構成する柱穴出土の瓦器埴である。断面三角形の高台を底面に備え、体部下半外面には指頭圧痕が残存し、口縁部は1段のみヨコナデが行われるという特徴を有す。内面のミガキ等は、磨滅により観察されない。13世紀中葉とみられる。



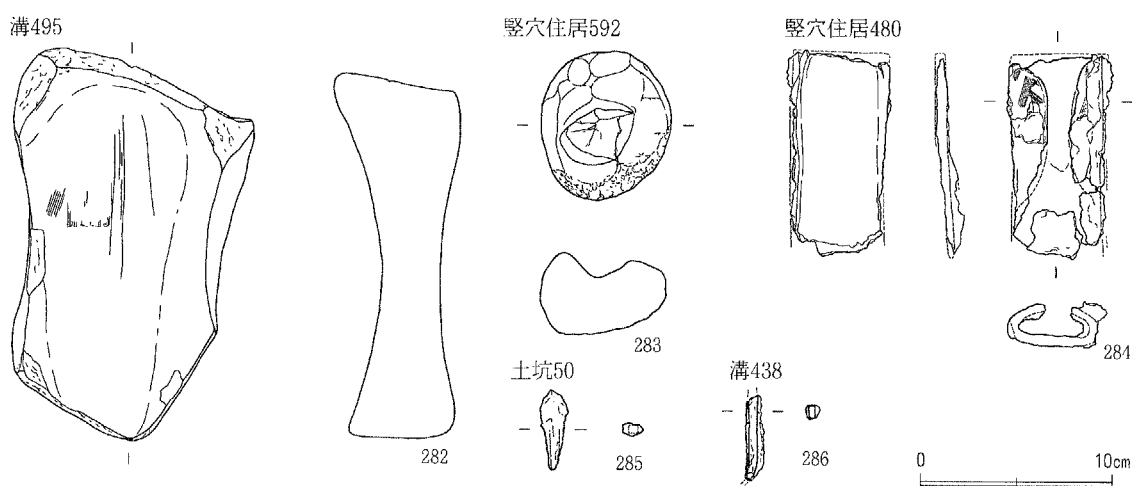
第95図 川辺2次出土遺物8 (S = 1/4)

276～279は柵列1付近に所在する柱穴出土の瓦器埴・皿である。これらも柵列1同様の特徴を備える瓦器埴だが、276は口縁部に2段のヨコナデを行う。280・281は土壌墓591出土の瓦器埴である。これらも他の瓦器埴同様の特徴を備え、280にはミガキが見込に同心円状の輪を描き、そのまま口縁部内面にも連続的に行う。以上が中世帰属の土器群で、溝80出土土器がやや古相を呈すものの、13世紀前～中葉を主体的な存在と理解される。

282は、庄内併行期の溝495出土の砥石である。砂岩製で、長20.5cm、幅12.5cmを測る。天地の短辺は自然面、長辺の4側面はいずれも使用される。283は、庄内併行期の竪穴住居592出土の礫岩製敲石である。長径7.7cm、短径6.7cmの楕円形を呈し、片面の中央が凹む。284は、飛鳥時代の竪穴住居480出土の鍛造鉄斧である。鉄板を折り曲げて作成する袋状鉄斧であることから、本来はその盛行期に近い庄内併行期の遺構に帰属していたものが混入した可能性が高いと考えられる。285・286はそれぞれ土坑510、溝438出土の鉄釘で、いずれも中世に帰属する。

以上が、2次調査出土の遺物群である。以下に簡単に概略をまとめる。

まず、弥生時代後期後半の土坑が出現しそれを皮切りに、竪穴住居が庄内併行期古段階～中段階に出現し、その他の遺構とともに庄内併行期新段階までの期間に営まれる。その後には、飛鳥Ⅰ～Ⅲを中心として掘立柱建物・竪穴住居などが出現するものの奈良時代まで継続するものでなく、その存続期間は短い。その後は13世紀前半を中心に調査区南東の一角に中世集落の形成が認められるに過ぎない。以上のような変遷が本調査区で確認されたが、この様相は1次調査とほぼ共通する。ただし周辺の地勢からも推察されていたとおり、2次調査地周辺は微高地状を呈しているため、庄内併行期、飛鳥時代の両時代ともに1次調査地よりも活発な土地利用の状況であったことは遺構の種類や頻度から明らかである。



第96図 川辺2次出土遺物9 (S = 1/4)

第4節 3次調査(01-01・145)の成果

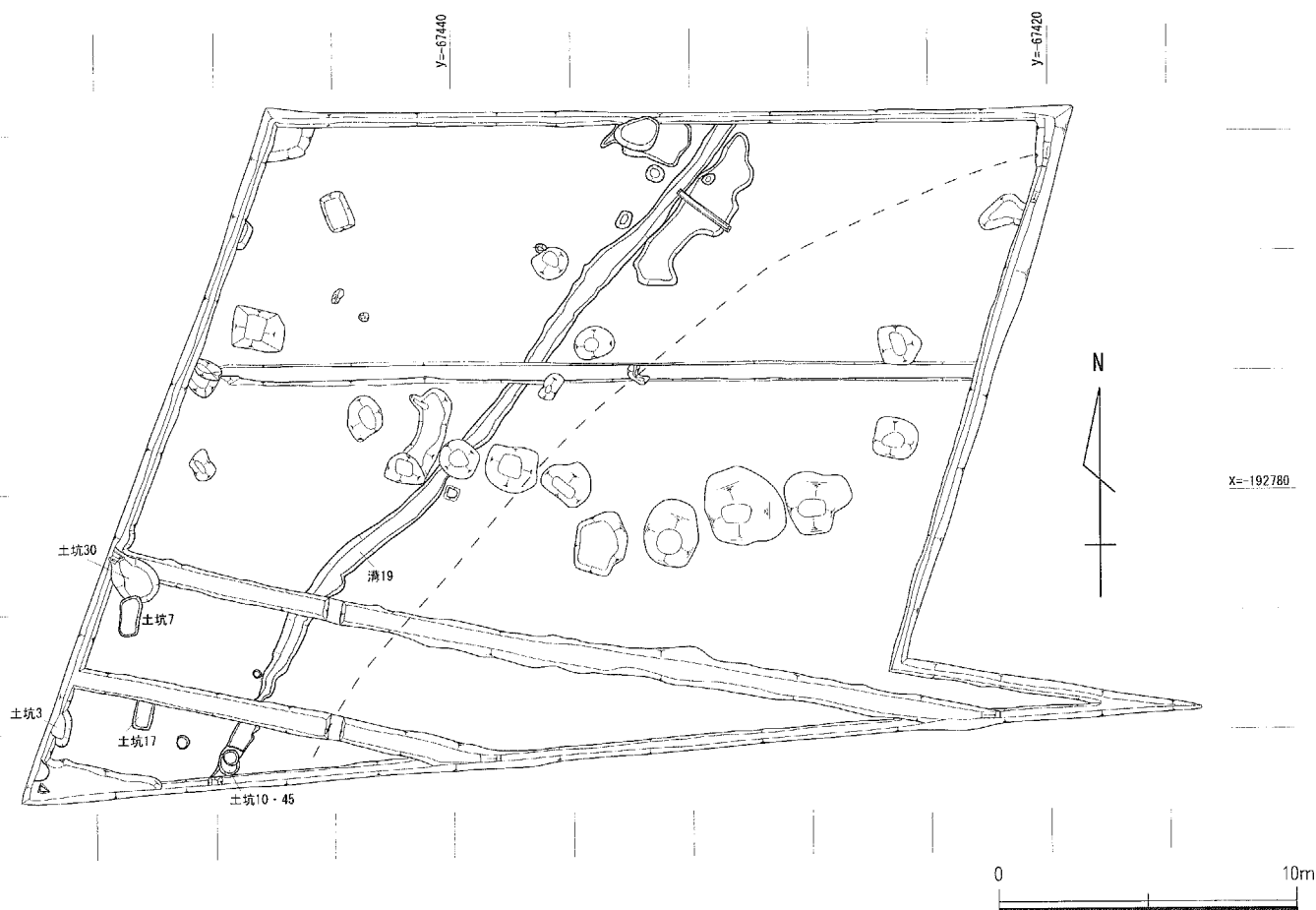
調査区は、第1節基本層序でも述べたとおり1次調査と2次調査の間の1調査区と2次調査C調査区の北側に位置する2・3調査区とで検出遺構面の状況が異なる。そのため、1調査区と2・3調査区は、別々に報告する。

1. 遺 構

1調査区 周囲の地勢は南東方向が高く、北西方向が低いのを反映し、調査区内で地山は南東方向へ緩やかに上がる。その過程で検出される地山がシルト質土から砂礫土に調査区内で変化していた。この地山変化ライン(第97図点線)以西では、1次調査と同様に遺構面が2面確認されたが、東側では2次調査と同様に遺構検出面は1面のみであった。そのため、この地山変化ライン以东については、すべて下面遺構として調査で扱っている。

上面遺構 溝及び土坑を中心に検出したものの、遺構密度は高くない。なお、遺構埋土と上面遺構ベース土(5層)と類似していたため下面で検出した遺構でも出土遺物やその接合関係から上面に帰属すると判断される遺構についても、ここで報告する。

溝19は幅90cm、深さ5~10cmを測る浅いもので、等高線や地山変化ラインと同様の方向性を示し、その地勢を利用しているのが分かる。出土遺物がなく、時期は不明である。



第97図 川辺 3次 1調査区上面遺構概略図 (S=1/250)

土坑3は調査区西壁で検出されたため、平面形態は不明である。規模は、幅1m、深さ40cmを測る。埋土は直径5cm程の小礫が充填されるが、出土遺物もなく用途は不明である。同様に調査区西壁で発見した土坑2は土坑30に破壊されていたものの、土坑3と同様に小礫が土坑内に充填されている。当初はいずれも礎石のための根石と考えたものの、礎石を配置した痕跡が認められない点や土坑の深さなどから、根石の可能性は低い。

土坑30も調査区西端で検出したもので、規模は直径140cm、残存高63cmを測る。遺構の北半は、果樹園の伐根による攪乱で破壊されていた。平面プランは円形を基調とするが、北西側には石組溝が取り付くため、北西方向へ伸び、遺構が調査区外まで及ぶ。

断面観察によると、検出された平面プランを掘形として、底面から10cmほど上の位置に、中央に直径85cmの桶状木製品が埋置されている。桶状木製品は、幅10cm、厚2cmの木板を組み合わせたものであることが確認された。当初は座棺（桶棺）の可能性が考えられたが、石組溝が取り付くため、北西に取り付く石組溝から桶状木製品の中に、液状物が流入する溜め枘状の用途が推定されるが、土層の堆積などから検証されるものではない。埋土からの出土遺物はほとんど認められないものの、銭貨（大観通寶）が1枚出土した。北西方向に取り付く石組溝は、50cm程度の掘形を設け、その中に緑色片岩の両側に側石を立てる構造である。底石は確認されず、溝幅は20cm程度を測る。

土坑17は長96cm、幅50cm、高20cmが残存する隅丸の長方形の平面形態を示す土坑である。北端が土坑30同様伐根による攪乱で破壊されていたため、全体の形状は知れない。埋土から、土師器皿4点、土師器杯1点、瓦器壺1点などが発見されたことから、土墳墓と考えられる。

土坑7は、長150cm、幅65cmを測り、長方形の平面形態を示す。土坑17のような土器の出土が認められないが平面形態が土坑17と一致することから、土墳墓と推測する。

土坑10は上面で検出し、掘削した遺構である。しかしながら、下面でも再度同一箇所です坑45として検出したところ、両遺構からの遺物に接合関係が認められたため、上面での調査が不十分であったと判明し、土坑10・45が同一遺構と判断できた遺構である。土坑45（10）は、溝19と重複関係にあり、後出する。平面形態は円形で、規模は直径60cm、復原される深さは35cmを測る。底面付近には瓦器壺2点、瓦器皿2点、土師器皿2点、東播系須恵器鉢1点などの設置が確認できた。地鎮関連遺構の可能性も考えられる。

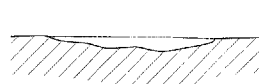
これらの遺構は出土遺物から中世に帰属し、上面ではこのほか円形・不整形な土坑を数基確認したにとどまる。1次上面遺構面では調査区東端で多数の柱穴・溝等の遺構群が発見され、活発な利用状況が窺われるのとは対照的に、本調査区上面遺構面帰属の中世の遺構はあまり検出されず、土墳墓と溝が設けられるにとどまった。1調査区周辺が、1次調査で検出された中世集落の東限であることを示すと考えられる。

土坑3



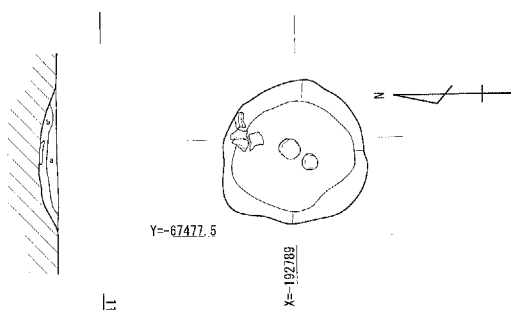
円礫 (直径3cm程度)

溝19



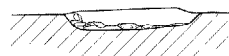
浅黄色 (2.5Y7/3) シルト

土坑45 (10)



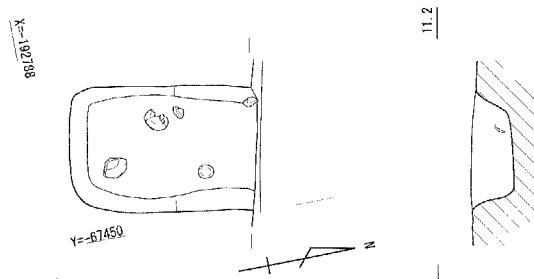
11.2

11.2



a 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト
b 黄灰色 (2.5YR6/1) シルト

土坑17



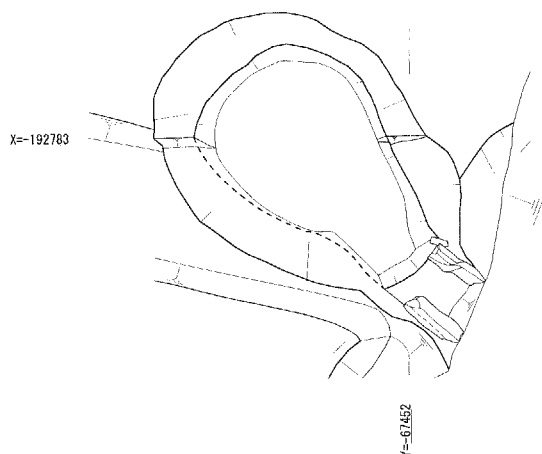
11.2

11.2

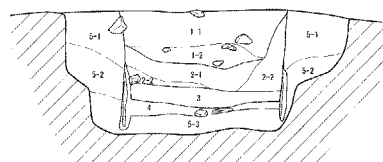


黄褐色 (2.5Y5/4) 砂礫土

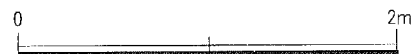
土坑30



11.2



- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1-1 灰黄褐色 (10YR8/2) シルト | 3 褐灰色 (10YR5/1) 粗砂 円礫少量含 |
| 1-2 灰黄褐色 (10YR8/2) シルト | 4 オリーブ灰色 (2.5GY5/1) シルト |
| 同色粗砂混 | 5-1 灰褐色 (7.5YR5/2) シルト |
| 2-1 褐色 (10YR4/4) 粗砂 | 5-2 暗褐色 (7.5YR3/3) シルト |
| 2-2 褐色 (10YR4/4) 粗砂 | 5-3 黒褐色 (10YR3/2) シルト |
| 灰黄褐色 (10YR6/2) 粗砂混 | |

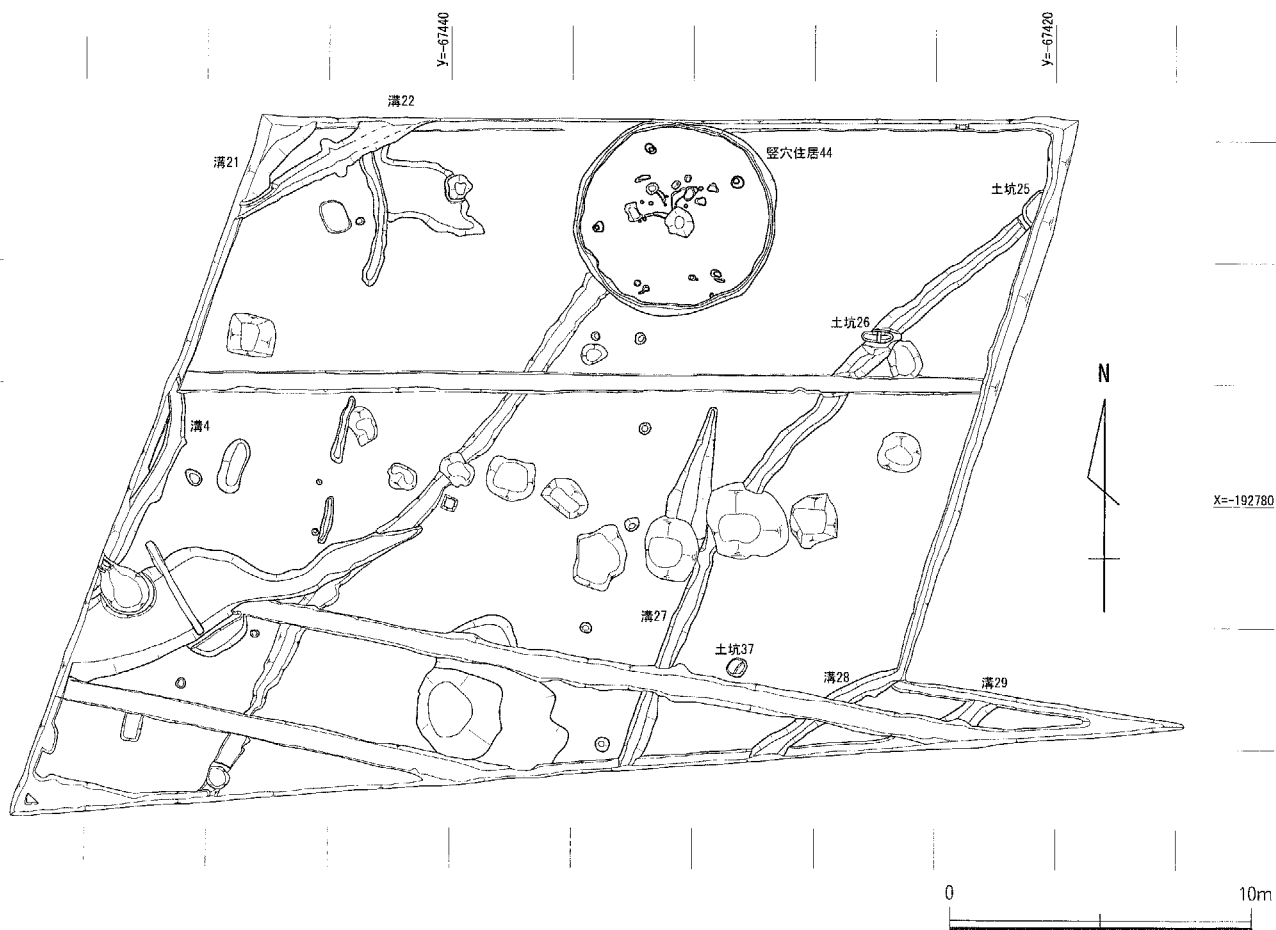


第98図 川辺3次1調査区上面遺構 (S=1/40)

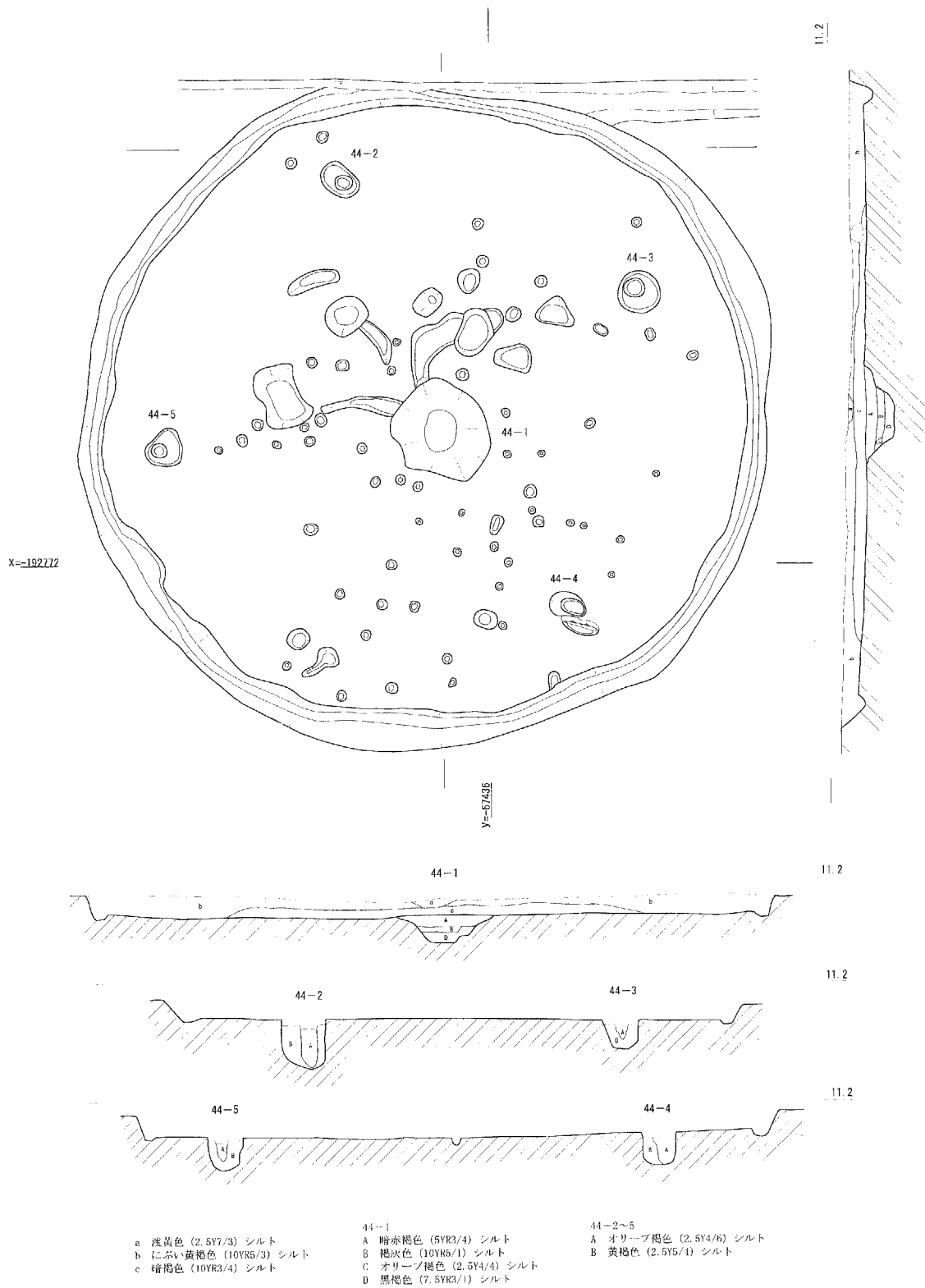
下面遺構 上面遺構面とは異なり比較的多くの遺構が検出され、竪穴住居1棟、土坑、溝、落ち込みなどが検出された。地山は南東から北西方向に緩く傾斜しており、下面遺構はすべてその地山面上で検出された遺構である。先述のとおり、地山変化ライン以東では遺構検出面は1面のため、その範囲で検出された上面遺構面と併行する時期の遺構もここで記述する。

竪穴住居44は、i18区を中心とする地区で発見された円形竪穴住居である。住居北端は、調査区境界にあたるが、ほぼ全容は把握される。規模は、長径6.8m、短径6.6m、深さ15cmのほぼ円形の平面プランで、壁溝が廻らされる。壁溝は上面幅10cm、深さ5cm程度を測る。床面は地山掘り込みによる成形で、貼床等の加工は行わない。床面積は18.6㎡に及ぶ。

主柱穴は4箇所が確認され、南西側底辺とする台形状に配置される。そのいびつな配置から当初44-19を主柱穴に含めた5箇所主柱穴を想定したものの、44-19は掘形も確認されない浅い土坑状を呈したため、主柱穴と判断せず、4箇所とした。主柱穴の柱間は2.9～4.3mで、柱掘形は径34～39cm、深さ27～43cm、柱痕跡は直径約20cmを測る。なお、南東の主柱穴44-4には、その南側に接するように1つの土坑が設けられている。土坑には直径5cm程度の棒状痕跡が2箇所確認された。その目的は不明だが、主柱穴44-4の柱に何らかの不具合が起きたため応急処置的に添木・支木などを行った姿が想像される。



第99図 川辺3次1調査区下面遺構概略図 (S=1/250)

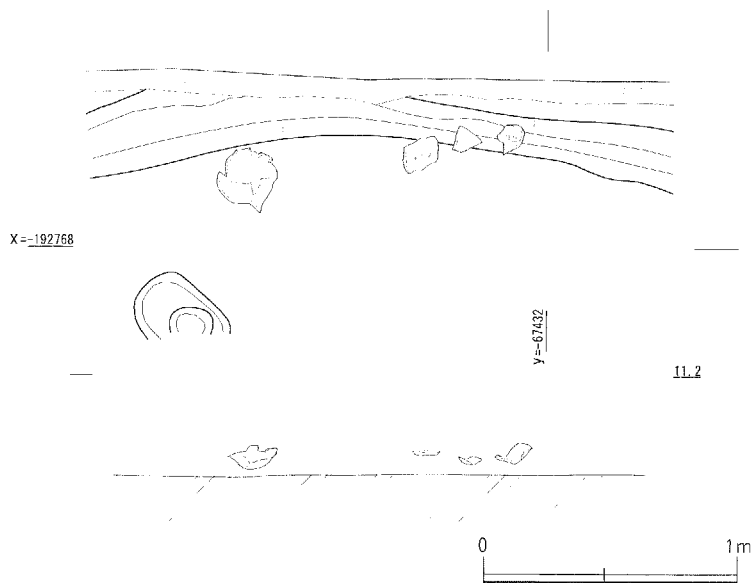


第100図 川辺3次竪穴住居44 (S=1/60)

炉（44-1）は、床面ほぼ中央に位置する。炉は、周辺が浅い土坑状で、中央に深い土坑が設けられ、テラス面が存在するような断面形態を示す。上端の平面プランは、やや不整形な楕円形を呈し、長径1.05m、短径0.9mを測る。中央土坑部分の上端は径50～60cm程度の、底面は径35～40cmの不整形円形を呈し、深さは25cmを測る。この中央土坑部分の主たる埋土であるc層は、炭化物以外の混入物が観察されない。これに対し、a・b層には土壤中に炭化物・土器片など多く認められる。炉使用時に、灰・炭化物等が炉内に堆積しても底面の地山までそれらを除去するのではなく、c層の大半は除去せずに使用していた姿が想定される。なお、炉の周辺には炉提等の施設は認められない。炉の東側約70cmの位置で、床面が被熱によるとみられる赤色変化を起こしていたが、要因は詳らかでない。このほか床面上では、断面逆三角形や炉と接合する溝や土坑、ピットなどが多数確認された。住居埋土には、炉を中心とした直径4mの円形の範囲で、炉上を頂上とするような山形に炭化物を多く包含する層位（c層）が床面上に広がっており、そのc層上面には長16cmの砂岩垂円礫が確認された。床面直上での土器の出土は認められず、本住居廃絶時には持ち去られたものと推測される。ただし、住居北端の調査区北壁付近では住居廃絶後埋没の過程の土器が確認されているものの、住居の機能時期を反映するものでないと考えられる。また、柱穴・壁溝などからの土器の出土もなく、埋土（b・c層）からの出土遺物から、時期は庄内併行期に該当する。

竪穴住居以外には、顕著な遺構はなく溝・土坑・落ち込みなどを検出したにとどまる。

竪穴住居44に近似する時期の溝としては、溝4が挙げられる。調査区西壁付近で検出した。規模は、幅60cm、深さ18cmを測る。埋土は暗褐色であり、土器が出土していないものの同様の埋土である溝22も同時期と推測される。溝4は西壁から調査区内に入ってきて、また西壁から調査区



外に溝が伸びており、周辺地形と一致しない方向へのカーブを描いて流れる。

溝21は、1次溝206の延長部分にあたる。調査区西北端で検出されたため、幅は不明だが深さは約50cmを測る。出土遺物は認められず、1次溝206を参照すると竪穴住居44や溝4と同様庄内併行期とみられる。ただし、溝21と重複関係にあり、後出する。

第101図 川辺3次竪穴住居44遺物出土状況 (S=1/30)

溝4

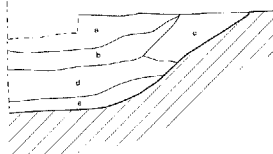
11.2



暗褐色 (10YR3/3) シルト

溝21

11.2



- a 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土
- b 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト
- c 灰オリーブ (5Y6/1) 砂
- d 褐灰色 (7.5Y6/1) シルト
- e 赤褐色 (5YR7/1) シルト

土坑25

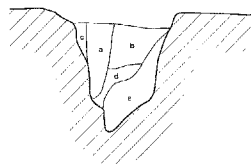
11.6



黄褐色 (2.5Y5/6) シルト

土坑37

11.6



- a 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂質土
- b にぶい赤褐色 (5YR4/4) シルト
- c 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト
- d にぶい褐色 (7.5YR5/4) 砂質土
- e にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土

溝27

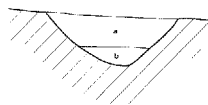
11.6



黄褐色 (2.5Y4/4) シルト

溝28

11.6



- a オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂礫土
- b 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) 砂質土

溝29

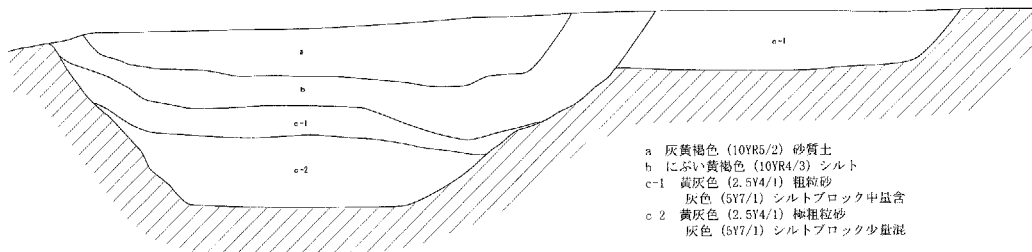
11.6



にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト

土坑41

11.6



- a 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土
- b にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト
- c-1 黄灰色 (2.5Y4/1) 粗粒砂
- c 2 灰色 (5Y7/1) シルトブロック中量含
- c 2 黄灰色 (2.5Y4/1) 極粗粒砂
- 灰色 (5Y7/1) シルトブロック少量混



土墳墓129

11.8

Y=67434



X=192789



第102図 川辺3次1調査区下面遺構 (S=1/60または30)

これらに対し、溝28・29は上面遺構の溝19と同様に等高線に沿った円弧を描きほぼ平行する溝群である。いずれも幅65～80cm、深さ25～30cmの規模である。溝28・29は、各々2次調査の溝2・500・501の延長部分とみられる。時期は、2次溝500・501は出土遺物から溝4同様の庄内併行期帰属すると考えられる。これに対し、溝27はやや異なる円弧を描き、出土遺物や土坑25との重複関係から飛鳥時代と考えられる。

土坑は、直径50cm以下のものが主に散見される。土坑25は溝27と重複関係にあり、それに後出する。調査区東端に位置し全容は判明しないが、規模は径45cm以上、深さ15cmを測る。埋土から須恵器坏が倒位で出土した。土坑37は、径50cm、深さ60cmを測る。出土遺物は認められず、時期は不詳である。断面観察を行ったところ、a～eの5層を認識することができた。いずれの層も被熱により赤色変化した土壌および炭化物を多量に含むものであった。他の土坑ではこのような状況は観察されず、用途等は不明である。

土坑41は、径4.75m以上の不整形土坑である。断面形態は北東側にテラス面があり、西南側が深くなり、径1.1mの底面に至る形態を示す。深さは、テラス面で約30cm、底面までで約1.1mを測る。埋土はレンズ状に堆積し、出土遺物はほとんど確認できず、自然堆積による埋没と推測される。用途等は不明である。時期は出土遺物から、上面遺構面に帰属すると推測される。

平面プランを検出できなかった遺構として、遺構123がある。遺構123は、竪穴住居44を上面から掘削していた過程で黒色土器塊および土師器塊あわせて6点が検出された段階で認識した遺構のため、平面プラン等は不明である。この6点の土器群は、土師器2＋黒色土器1と黒色土器2＋土師器1の3点ずつの二つの土器群を形成して出土した。いずれの土器群も3個体が平行に1個体ずつ並べられて配置されており、その方向軸は二つの群で直交する位置関係を示す。また、各個体はいずれも正位でも倒位でもなく、口縁部を上へ向け斜めに立掛けられていた状態で同一方向を向けて配置されていた。このように配置方法や位置関係から、この二つの土器群は同一の遺構を形成する可能性が高く、その遺構の種別としては土壌墓と考えられる。土器群を検出した段階で、周囲の土壌の除去が完了していたため詳細は明らかでないが、長215cm、幅50cm以上の長方形の平面プランで主軸はN-21°-Eに復原される。周囲に当該期の遺構は発見されておらず、土壌墓一基が単一で配置される。

この他には、いくつかの落ち込みを検出したのみである。それらからの出土遺物は確認されておらず、時期の詳細は不明である。以上のように、3次調査1調査区では、1・2次調査でも検出されていた庄内併行期・飛鳥・平安・中世の各時代の遺構を検出した。とりわけ、庄内併行期の竪穴住居44は、1・2次調査で検出された同時期の竪穴住居が方形であったのに対し、初めての円形住居であった点で注目される。また、平安時代の土壌墓を単体で検出したことは、周辺に同時期の遺構が確認されず、その出現契機が興味深い。

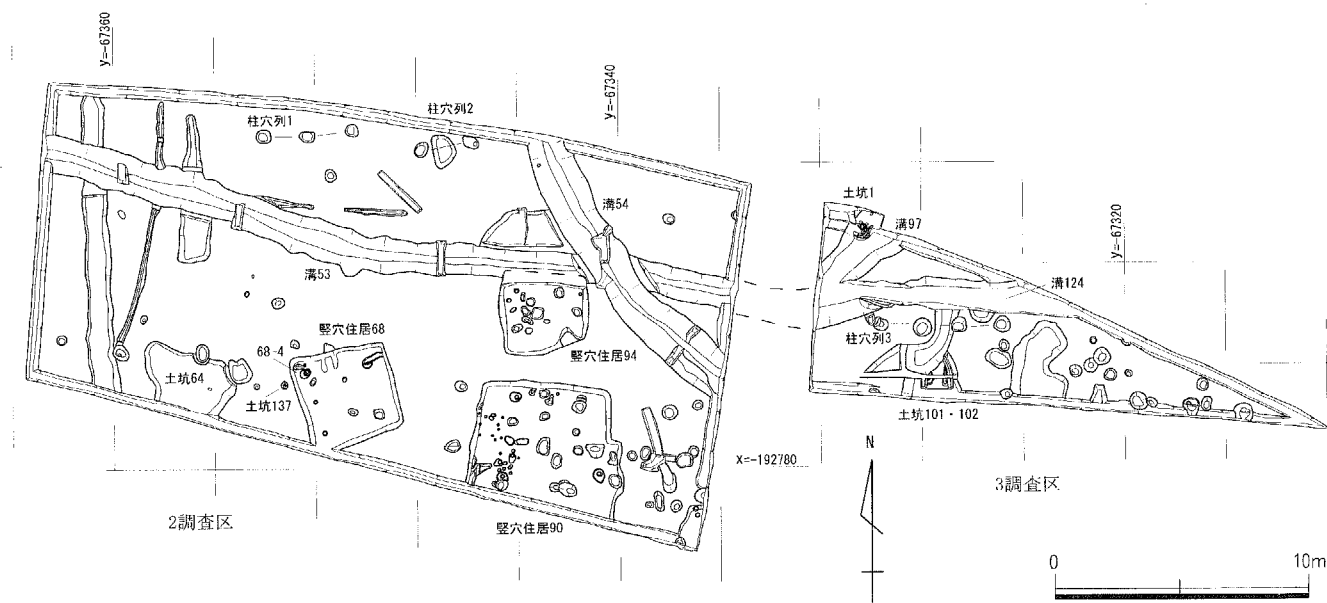
2・3調査区 両調査区は里道をはさんで隣接し、2次調査C調査区北側に位置する。遺構検出面は1面で、1調査区東半部同様の地山上で遺構を検出した。遺構としては、柱穴や竪穴住居3棟、溝、土坑、不明土坑などを検出した。

柱穴列1は、2調査区n18区を中心に認められた柱穴73～75の柱穴群である。柱穴はいずれも掘形が径50cm前後、深さ25～40cmを測る。柱痕跡が確認されたのは東端の柱穴75のみで、直径は15cm程度を測る。柱間は心々で1.7mを測り、柱穴列の主軸は $N-92^{\circ}-E$ とほぼ座標北と直交する。この柱穴列1に直交する方向の柱穴が調査区内に認められないことから、調査区北側へ展開する掘立柱建物の南端と推定される。

柱穴列2は、柱穴列1東隣で検出された柱穴78・79である。この柱穴列も柱痕跡は認められなかったものの、柱穴列1の柱穴と規模・埋土が類似したため、柱穴列とした。柱間は心々で2.0mを測り、主軸は $N-99^{\circ}-E$ を示し、柱穴列1とはやや異なる。

柱穴列3は、3調査区e20区を中心に検出した柱穴116～118と120の柱穴群である。掘形は55～75cm、深さは22～50cmを測る。柱間は116～117が1.6mである以外は、2.1mを測る。精査したものの柱痕跡が認められたのは柱穴118のみで、それによると柱径15cm程度である。主軸は $N-96^{\circ}-E$ で、柱穴列1・2の中間の方向性を示す。

いずれも柱痕跡が確認できない柱穴が多く、おそらくは廃棄の際に柱が抜き取られたものと推測される。また、柱間が1.6～2.1mと一定しないが、2次掘立柱建物1と同様の柱間を測り、主軸もほぼ座標北に一致する（ 10° 以内ズレに収まる）ことから、2次掘立柱建物1との相関性が想起される。出土遺物からも時期的に併行するようである。



第103図 川辺3次2・3調査区遺構概略図 (S=1/300)

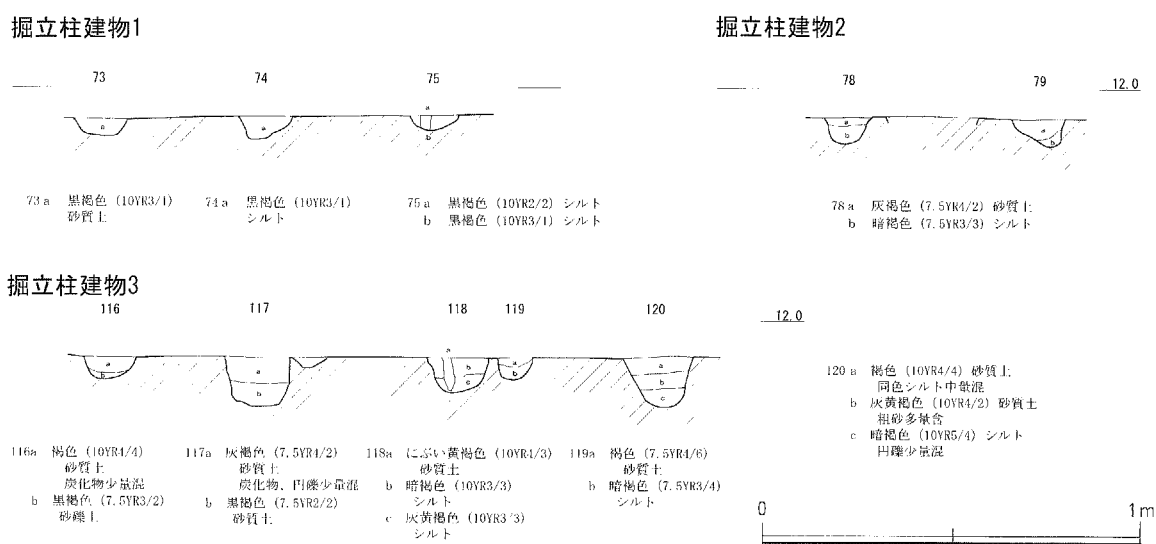
このほかにも多数の柱穴が検出されたものの、建物としてほとんどまとめることが出来なかった。柱穴は、2次調査側にあたる調査区の南側および3調査区に多く確認された。その大半が、柱穴列1～3同様飛鳥時代に帰属すると推測されるものの、2次調査南東端で検出した柱穴の一部は庄内併行期まで遡る。また、柱穴の分布から2・3調査区より北側への展開はあまり認められず、掘立柱建物は主として2・3調査区南側の2次C調査区北半部に展開すると推測される。

竪穴住居68は、2調査区m20区を中心として検出した。方形の竪穴住居で、南西端を排水溝により破壊したが全体の形状は把握できる。一辺長3.2～4.0m、深さ25cmを測り、主軸をN-8°-Eに示す。床面積は13.6㎡を測る。床面は地山掘削面をそのまま利用し、壁溝も明瞭に確認されなかった。支柱穴は4本確認され、柱間は2.1～2.3mを測る。掘形は40cm前後、深さは15cm前後を測る。柱痕跡は明瞭でない。これに対し、南西の支柱穴(68-6)では明瞭な堀形を検出できず、径・深さとも15cm前後の柱痕跡のみを検出したとみられる。

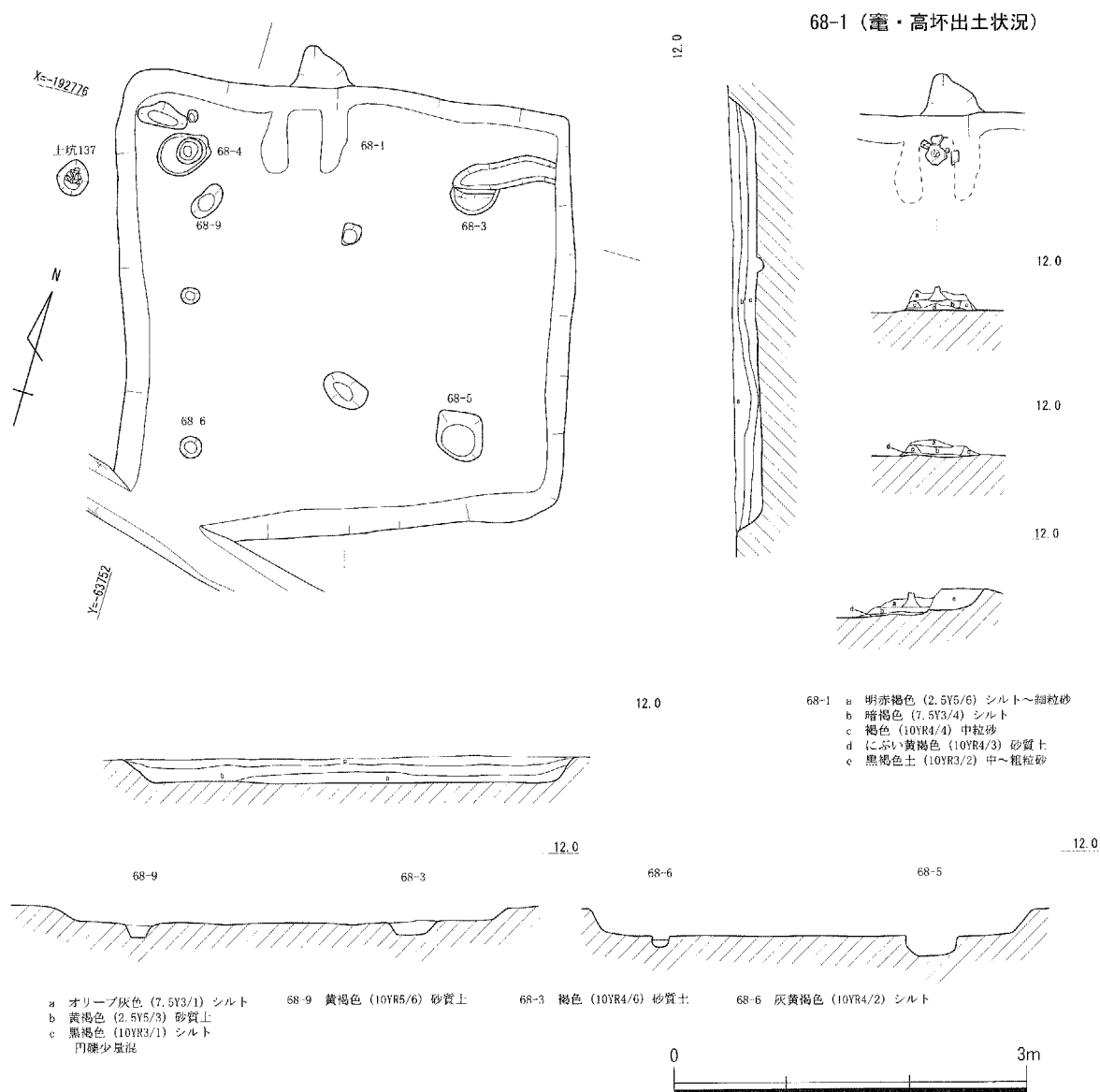
付帯施設としては、住居北壁に竈と北側に伸びる煙道が認められる。竈は、にぶい黄褐色中砂を厚さ1cm程度敷き、その上に住居北壁50cm内側まで幅20cm程度の袖部(c層)が張り出させて構築する。そして、暗褐色シルト～細砂を袖部の間に厚さ6cm程度に貼り、その上の中央部に土師器高坏脚部が支脚として用いられる。さらに、その周囲には補強用のためか、他の土師器片や緑色片岩も並べられる。

煙道は、竈の中心軸からやや東側へずれた位置に設けられる。規模は、長30cm、北壁接合部で幅約50cmを測る半不整円形の土坑状を呈す。底面などに被熱箇所等は確認されなかったが、竈との位置関係や埋土に炭化物・赤色の焼土を包含していたことから、煙道と判断した。

このほか、竪穴住居68の床面では小規模な土坑等を検出したが、具体的な用途等は不明である。



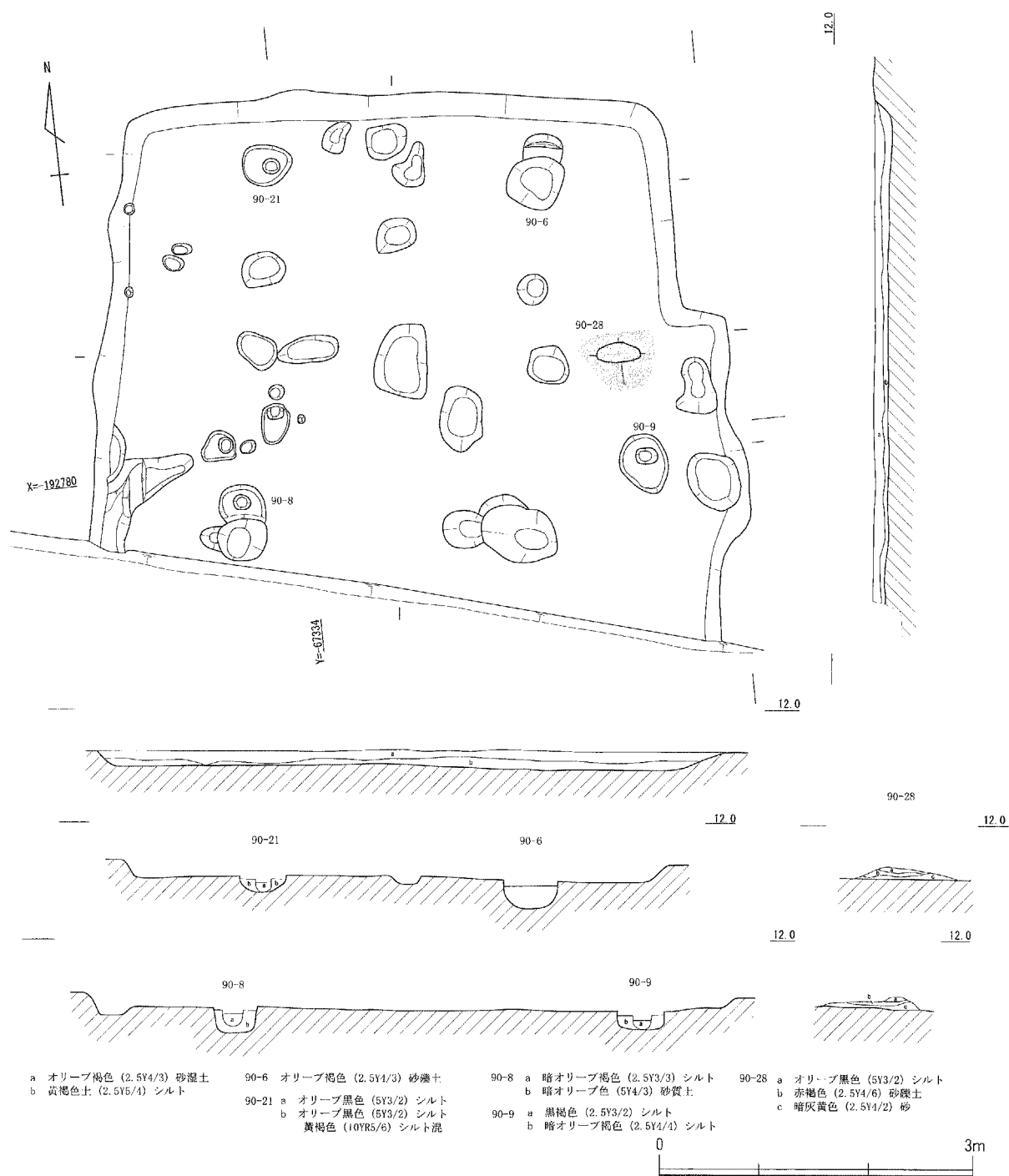
第104図 川辺3次 2・3調査区掘立柱建物断面図 (S=1/80)



第105図 川辺3次竪穴住居68 (S=1/60)

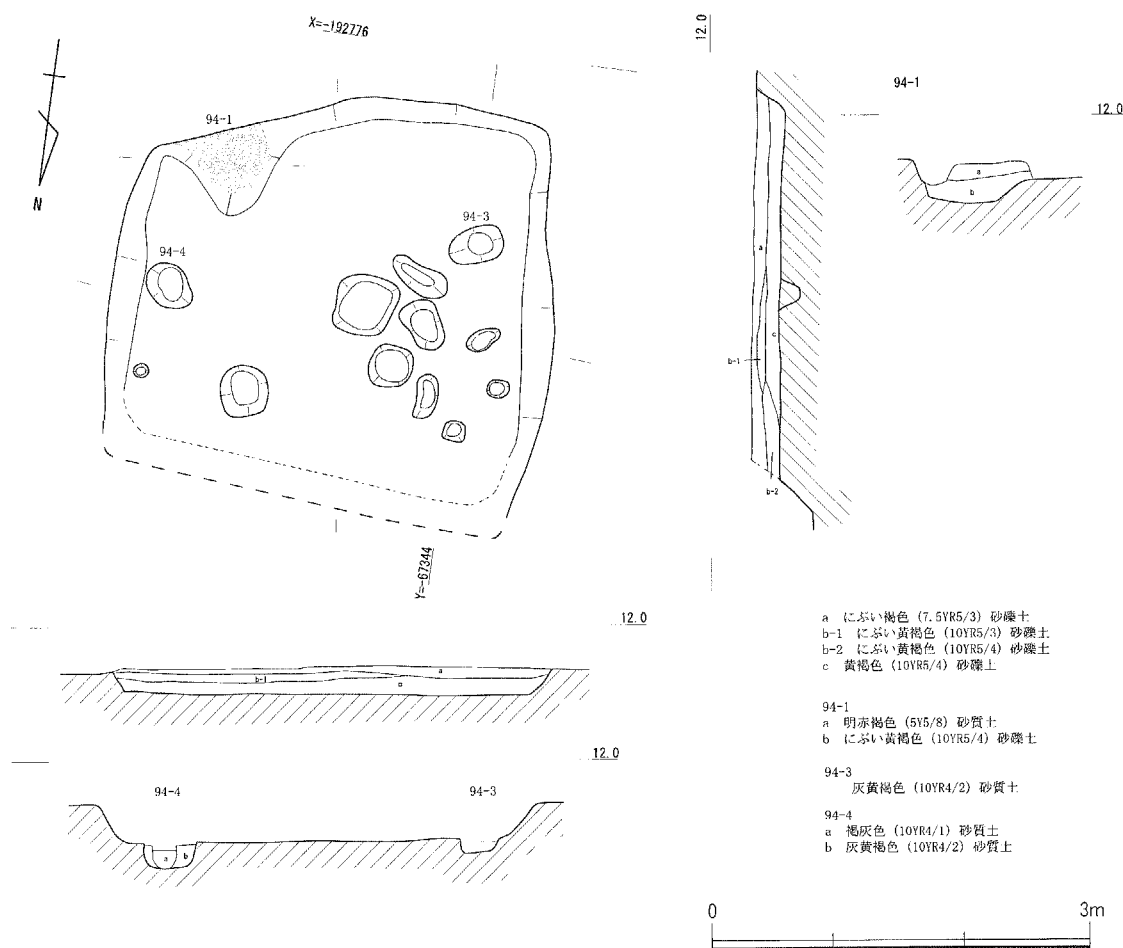
床面から土器の出土等は認められなかった。なお、竪穴住居68の床面で検出した68-4は後述のとおり本住居に直接関係のない時期的に先行する遺構である。

竪穴住居90は、竪穴住居68東側2調査区k20区を中心とする地区で検出した方形の竪穴住居である。住居南辺は調査区外に及んでおり、全体の規模は不明である。ただし、調査区内で支柱穴とみられる柱穴4本を検出していることから、ほぼ全体の形状を把握することが可能である。完存する一辺長は5m、深さは検出面から15～20cmを測り、主軸はN-5°-Eを示す。検出された範囲の床面積は22.5㎡で、それ以上の規模である。床面は地山掘込による成形で、壁溝は認められない。支柱穴は、掘形径40cm程度、深さ15～30cmを測る。柱痕跡は比較的明瞭に確認でき、いずれも径15cm程度である。柱間は2.4～3.8mを測り、一定しない。明瞭な竈は検出されなかつ



第106図 川辺3次竪穴住居90 (S=1/60)

たが、長軸75cm、短軸50cm、高さ15cmを測る赤色変化した土壌を包含する範囲(90-28)を、住居東壁付近で検出した。竈と推測されるが、明瞭な袖部を確認することが出来なかった。ただし、この範囲の最下層には、竪穴住居68の竈の範囲に敷かれていた暗褐色(7.5YR3/4)シルト～細砂が確認され、竈構築に際し同様の工程が経られたと推測される。なお、90-28の上部には須恵器片や片岩片が認められた。また、断面観察によっても認識できなかったものの竈とみられる90-



第107図 川辺3次竪穴住居94 (S=1/60)

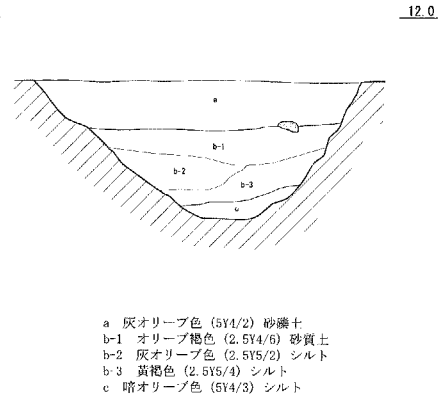
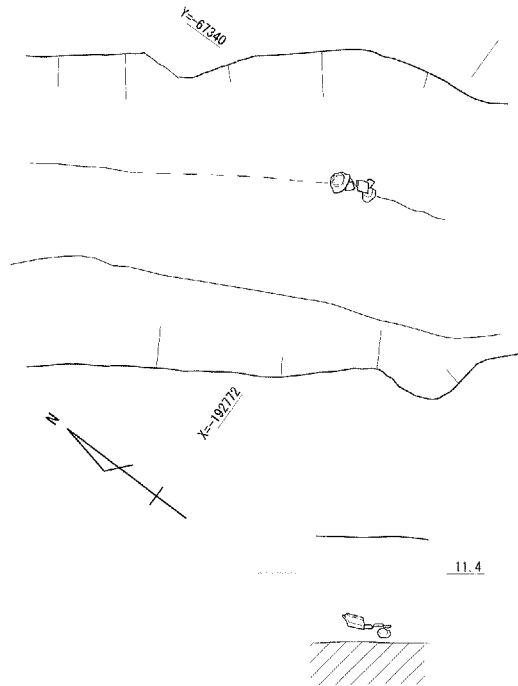
28の付近で、住居東壁が約30cm外方へ拡張することから、煙道が設けられていた可能性も考えられる。

この他にも、床面上で幾つかの土坑を検出した。また、床面西南側ではピットが集中する傾向が認められるが、その理由は不明である。今回発見された3棟の中では最大規模の住居跡である。

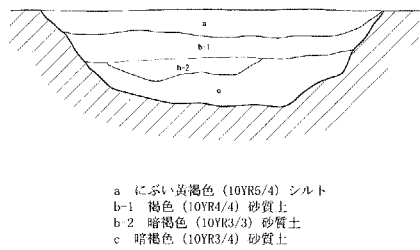
竪穴住居94は、竪穴住居90の北側2調査区k19区を中心とする地区で検出した方形の竪穴住居である。後述する溝53と重複するが、埋土の特徴が非常に近似しており、その重複関係を誤って調査を行ったため、住居北辺および規模は不明である。完存する南辺長は3.2mで、深さ22cmを測る。主軸はN-9°-Eを示す。主柱穴は2箇所を確認するにとどまり、それらは掘形32~40cm、深さ25cmを測る。そのうち一方の柱穴で柱痕跡を検出し、径20cmあまりを測る。床面は地山掘削面のまま使用され、壁溝は確認できない。住居南壁東端で竈とみられる径50cm程度の赤色変化した範囲を確認した。明瞭な袖部や、構築以前の処置は確認されなかった。

以上が、2・3調査区で検出された竪穴住居群である。規模・竈の位置などに共通点が看取されないが、いずれも2次調査で検出された飛鳥時代の住居跡とみられ時期的併行関係にある。

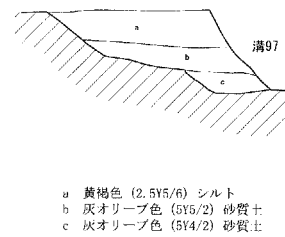
溝54



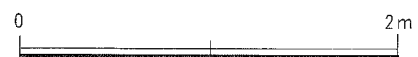
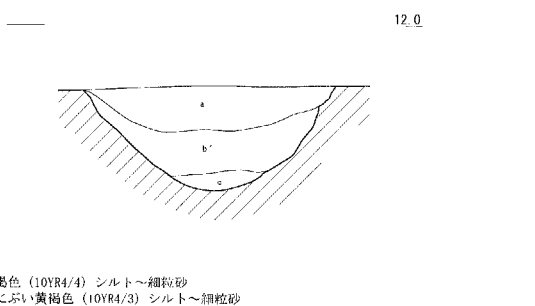
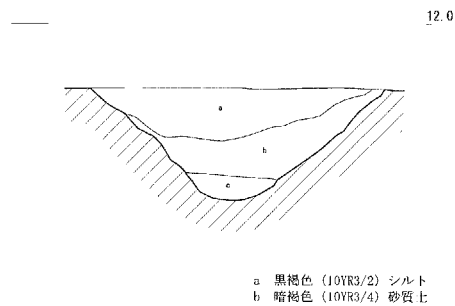
溝97



溝124



溝53



第108図 川辺3次2・3調査区溝断面図・遺物出土状況 (S=1/40)

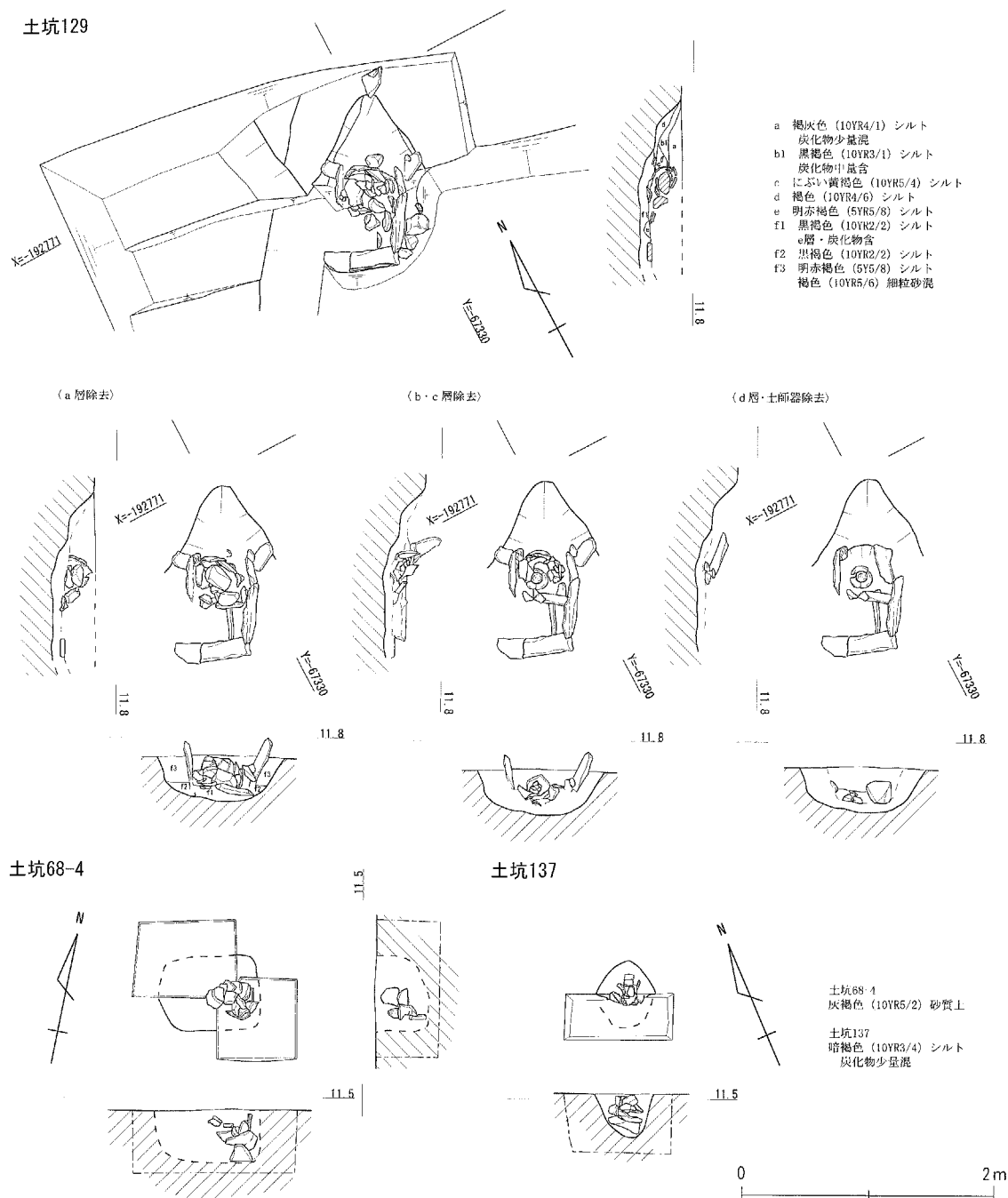
溝54は、2調査区北東部を縦断し、2次溝464の北側延長部分である。検出長12m、幅1.7m、深さ約80cmを測る大規模な溝である。2調査区内ではN-25°-W前後の方向性を示しつつ緩くカーブを描くものの、2次C調査区では南東へ直進する。2調査区北側ではよりカーブのアーがきつくなると推測される。溝53と重複し、その重複するk19区では、底部付近で須恵器坏Bが倒位で出土した。

Archaeological site plan of the 3rd Kofun at Kawabe, showing Kofun 100, 101, and 102. The plan includes a north arrow, a scale bar (0 to 2m), and a detailed cross-section of Kofun 101. The plan is labeled with coordinates X=-192776 and Y=-67328. A legend identifies the soil types for each kofun: Kofun 101 (a: light yellow silty, b: yellow silty, c: orange silty, d: orange silty with carbonaceous matter, e: light yellow silty, f: yellow silty, g: light yellow silty, h: light yellow silty) and Kofun 102 (a: light yellow silty, b: yellow silty, c: orange silty, d: orange silty with carbonaceous matter, e: light yellow silty, f: yellow silty, g: light yellow silty, h: light yellow silty).

第109図 川辺3次土坑101・102 (S=1/40)

E の方向性を示し、他の遺構は一致しない。遺構の重複関係から溝124に後出し、後述する土坑129に先行する。出土遺物からは溝54とほぼ併行する時期とみられ、溝54と同時に機能していた場合、2・3 調査区間の里道部分で溝54と接続する可能性が考えられる。

土坑101は、3 調査区 h20区を中心とする地区で検出した用途不明の土坑である。調査区南壁まで及んでいるため、全容は判明しない。検出された範囲では長径1.3m、短径1.1m、深さ26cmを測る。断面観察によると、①楕円形土坑掘削、②中心を凹ました状態で約10cm埋め戻す（d 層）



第110図 川辺3次土坑68-4・129・137 (S=1/30)

③d層上面の平坦箇所竈袖部のような施設を設ける(c層)この際には土師器壺などの破片が敷かれる。なお、中央部分の凹みを中心として被熱している状況が確認されたため、竈の可能性を考えたものの住居内に位置せず、住居の隣接もなく、周辺を大きく・深く掘削する土坑102との関係性などから、竈の可能性は低いものの、その可能性を完全否定することは出来ず、屋外竈のような施設の可能性も残存する。

土坑129は、溝97掘削時に3調査区北壁で土師器壺を検出したことにより発見した遺構である。そのため、遺構認識の時点で南側一部を失っていたが、北側は調査区外に及んできたため、敷地境界まで調査区を拡張し調査を実施した。残存状況から復原される平面プランは長径98cm以上、短径70cmを測る楕円形と推測される。この楕円形土坑内に、①焼土や炭化物を包含する土壌(f層)を敷き詰め、②f層上面に片岩を壁面に沿って配置し、③その中心に須恵器高坏(No.452)を倒位に設置する、④さらにその上に口縁部を南上方へ向けて土師器壺(No.453)を設置する、という配置順序が確認された。なお、④の土師器壺内には直径14cmの川原石が確認されたが、この川原石の下面にも上面にも土師器壺の大きな破片が確認されたことから、土師器壺設置前後に置かれた可能性は低く、当初より土師器壺内に置かれていたと考えられる。

土坑68-4は、当初竪穴住居68の支柱穴の一つとして検出、調査した。しかし掘削の進展とともに、埋土から竪穴住居の帰属する飛鳥時代と異なる土器群が出土したため、竪穴住居と関連性のない先行する土坑と認識した。規模は、長径44cm、短径35cm、深さ25cmを測る。土坑の東側で、折り重なるように集中して弥生時代前期の土器群が出土した。土坑137は、竪穴住居68西側で発見された土坑である。土坑68-4とは直線で1.0mのところ位置する。規模は、径50cm、深さ45cmを測り、68-4に比してやや小規模である。ただし土坑内には、68-4同様に折り重なって弥生時代前期の土器群が出土した。

この二つの土坑は、弥生時代前期の土器が密集して出土したのみならず、その埋土が地山と著しく類似し、検出面で土器の包含により認識できたという共通性が認められる。調査時点では、いずれの土坑から出土した土器群も、完形やそれ近いの土器が埋設された遺構と考えていた。しかしながら、整理の結果ほとんど接合関係がなく、壺複数個体の口縁部から頸部を中心とする土器の一部であることが判明した。そのため土器埋置の想定は困難で、両土坑の用途・目的は不明である。

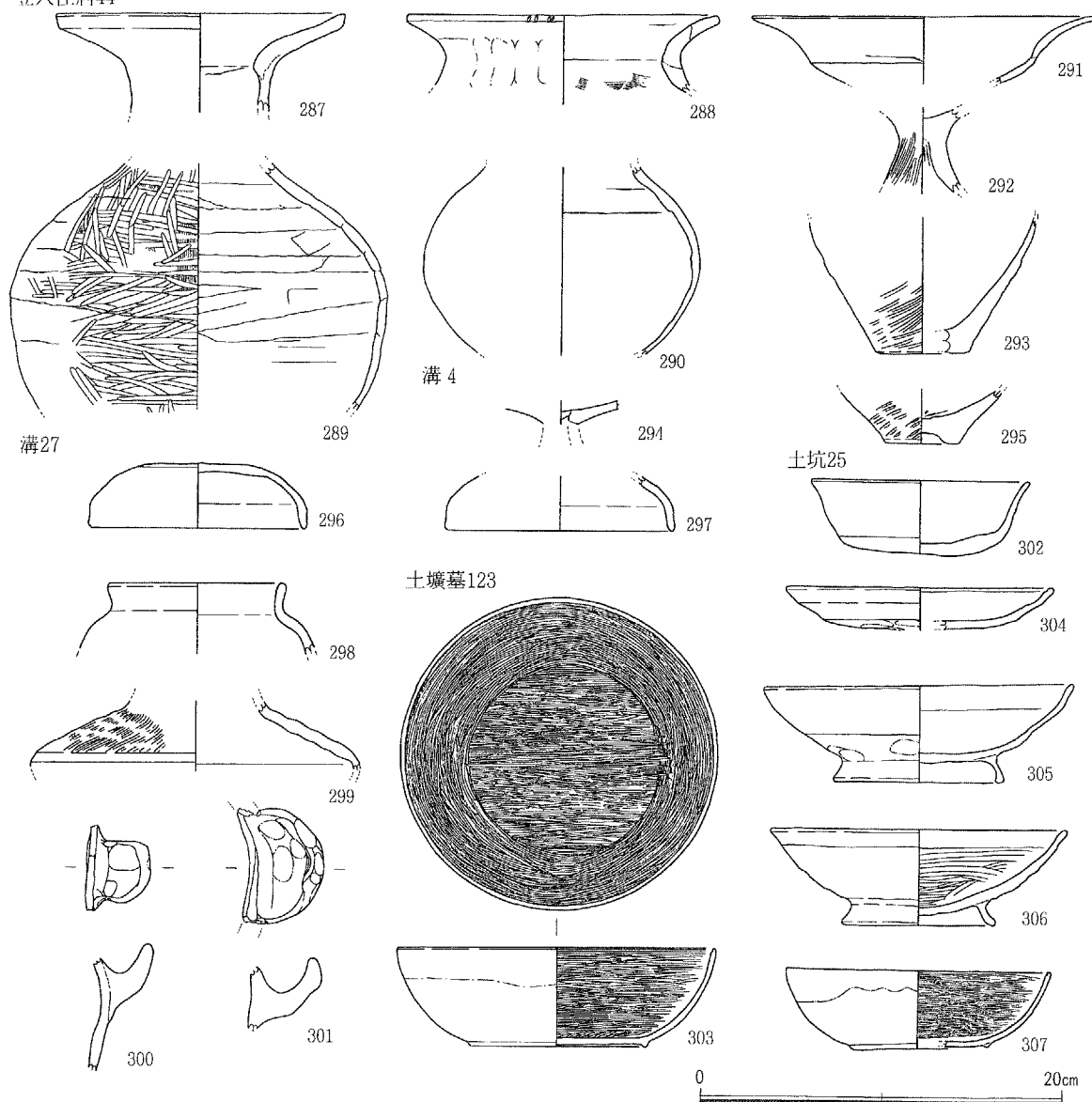
以上のように2・3調査区では、2次調査で検出されていた庄内併行期の溝、飛鳥時代の溝、竪穴住居、柱穴などの遺構群を同様に検出した。ただし、庄内併行期の住居は不在で、飛鳥時代の掘立柱建物同様、調査区南側を中心に展開するとみられる。また、1・2次調査では検出されていなかった弥生時代前期の用途不明の土器が折り重なって出土する土坑を検出した。紀ノ川右岸の沖積平野部での当該期の土器の出土は非常に珍しく、注目される。

2. 遺物

前項の遺構と同様に、まず1調査区、その次に2・3調査区の順序で地区別に概観する。

287～293は、竪穴住居44出土遺物である。287・288は広口壺口縁部である。287は直立する頸部に内湾する口縁部を備えるのに対し、288は頸部から口縁部にかけて外反しながら連続する形態を呈す。288の頸部外面には、タテ方向に幅1 cm程度の単位で板ナデ状の調整が行われる。口縁端部は、287が上方に摘まれ直立する端部を形成するが、288は丸く収められて刻目が施される。289・290は壺体部で、体部最大径は中位かやや上に位置する。290は磨滅が著しく観察されないが、289は外面の体部中位にはヨコ方向、肩部付近はタテ方向のミガキが行われ、緻密に調整される。これに対し内面は粗雑なナデのみのため、幅約2 cmの粘土紐の単位が観察される。291は

竪穴住居44



第111図 川辺3次出土遺物1 (S = 1/4)

有稜系高坏口縁部で、底部と口縁部の境界の屈曲部は明瞭で、口縁部は大きく外反する。292は埴形高坏脚柱部で、やや直立する中空の脚柱部からなだらかに広がり裾部にいたる。293は、鉢または甕底部で、平坦な底面の底部から外上方へ直線的な体部を備える。

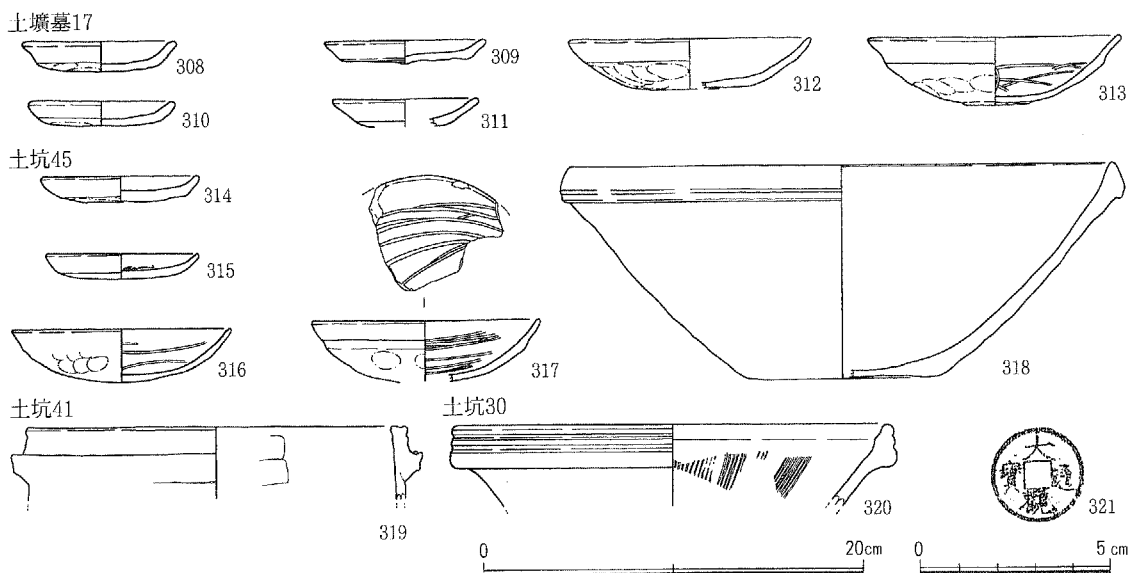
以上が竪穴住居44出土遺物であるが、資料的限界はあるものの有稜系高坏口縁部、埴形高坏脚柱部の形態や壺体部最大径の位置などを積極的に評価すれば、これらの土器群は庄内併行期でも古段階または中段階古相の特徴が認められる。ただし、いずれも床面直上からの出土でなく、住居の機能時期を反映するものではない。

294・295は溝4出土の高坏脚柱部と甕類底部である。295は底面が凹み、底部輪台技法使用が確認できる。庄内併行期の範疇で捉えられるか。

296～301は、溝27出土遺物である。296・297は須恵器坏 H 蓋で、口径はそれぞれ11.7cm、12.4cmを測る。296の天井部は回転ヘラ切り不調整であることが確認される。298は小形短頸壺口縁部で、口径は9.3cmを測る。299は、細頸壺または長頸壺の肩部のような形態を示す。ただし、肩部上には回転ヨコナデにより一部消されるか、または希薄になるが、中心部に向かう細い条線が確認される。300は須恵器の把手で、一般には同時期の土師器甕（301）に貼付されるものと同様の形態である。302は、溝27と重複関係が認められた土坑25出土の須恵器坏 G 身である。口径11.9cm、器高4.3cmを測り、底面は回転ヘラ切り不調整である。

溝27出土の須恵器は坏 H 蓋、土坑25は坏 G 身が出土したことから、飛鳥Ⅱではほぼ併行関係にある、または遺構の重複関係を評価し、前者を飛鳥Ⅰ～Ⅱ、後者を飛鳥Ⅱ～Ⅲ、と理解するかのいずれかと考えられるが、いずれにせよ両遺構に大きな時間差は認められない。

303～307は、土墳墓123出土土器群である。303・306・307は黒色土器埴、304は土師器皿、305



第112図 川辺 3 次出土遺物 2 (S = 1/4、ただし321は S = 1/2)

は土師器塀である。304は底面不調整の平らな底部にやや内湾する口縁部を備える。口縁端部内面には浅い凹線が廻る。黒色土器塀はいずれも内面のみ黒色処理された A 類であるが、器形から二分される。303・307は、口縁端部内面に沈線を施し、高台は断面半円形状を呈す。形態は平らな底部に内湾する口縁部を備え、深形態を呈す。内面のミガキは、幅狭の単位で同心円状に口縁部へ施した後、見込に平行に行われる。なお、両者は外面口縁部上半もやや黒色化する。これに対し、306は「多段ヨコナデ技法」により製作され、口縁部に凹凸が認められる。高台も外反する高いものが採用される。内面のミガキは303と同様の手順で施されるものの、幅広の単位でやや粗雑に行われ、外面は全く黒色化しない。土師器の305もほぼ同じ形態を呈す。

以上のとおり、黒色土器塀の両タイプは、器形のみならず、ミガキ・黒色処理の範囲も異なる。すでに指摘されているように306の「多段ヨコナデ技法」は在地的技法で、土師器も含めて在地産とみられる。これに対し、303・307は胎土も異なり、搬入品とみられる。以上の特徴から、土壙墓123の時期は10世紀中葉と考えられる。

308～313は、土壙墓17出土遺物である。308～310は土師器皿で、平らな底部に短く外反する口縁部を備える。311は瓦器皿で、土師器皿よりも口縁部がやや長い。312は土師器で、やや丸みを帯びた底部から内湾気味に口縁が伸びる形態で、底面に指頭圧痕が残存する。313は瓦器塀で、断面半円形の高台が痕跡的に貼付される。外面には口縁部に1段ヨコナデし、下半は指頭圧痕が残存する。内面のミガキは、同心円状に見込と口縁部とに連続的に疎らに行われる。

314～318は土坑45出土遺物である。314は土師器皿、315は瓦器皿だが、規格・形態ともほぼ共通する。316・317は高台が付されない瓦器塀である。外面は313と同様だが、内面のミガキは見込には施されず、口縁部もより一層疎らになる。318は東播系須恵器鉢で、口径28.5cmを測る。口縁部はやや内傾し、下稜が創出される。

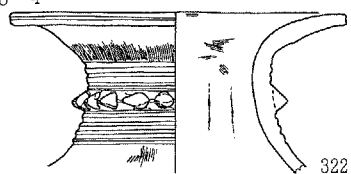
319は土坑41出土の土師器羽釜の口縁部である。口縁端部は上面に平坦な端部を形成し、外面には断面台形の突帯が廻る。15世紀代の所産と考えられる。

320は土坑30出土の備前播鉢口縁部で、口縁帯外面に凹線が認められる。321も土坑30出土で、北宋銭の「大観通寶」である。「大観通寶」の初鋳年代は1107年である。

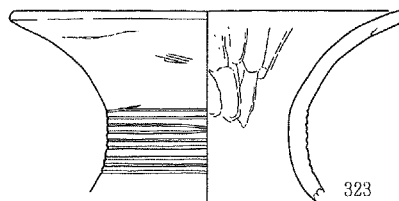
瓦器塀の形態から土壙墓17は13世紀中葉に帰属すると考えられ、土坑45はそれよりもやや後出し、14世紀代と考えられる。他の2遺構は、15世紀代とみられる。

以上が1調査区出土遺物の土器群である。遺構の密度は低いものの、庄内併行期古段階～中段階古相、飛鳥Ⅱを中心とする時期、平安時代後半、中世というように各時期の遺構・遺物がそれぞれ短期間ではあるが、断続的に存在すると理解することができる。出土遺物のなかでは、土壙墓123の黒色土器・土師器の塀は搬入品と在地産の土器が一括性の高い状態で発見され、10世紀中葉の良好な資料と評価されよう。

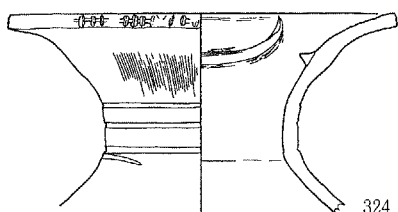
上坑68-4



322



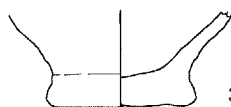
323



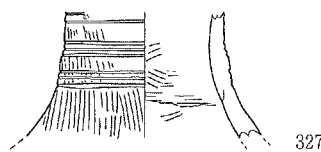
324



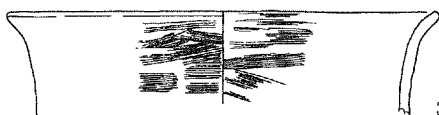
325



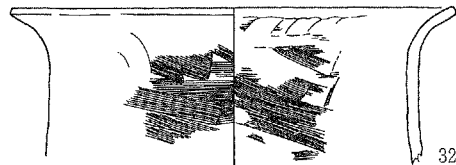
326



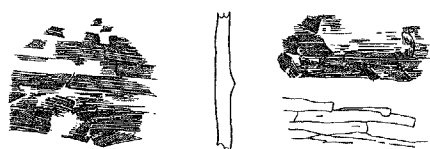
327



328

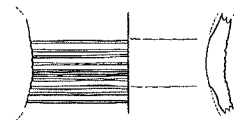


329



330

土坑64

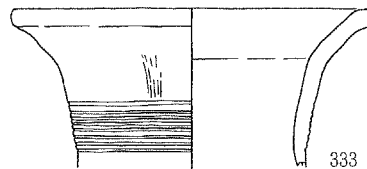


331

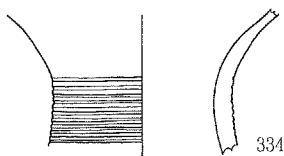
土坑137



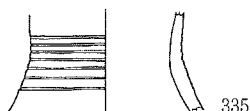
332



333



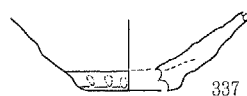
334



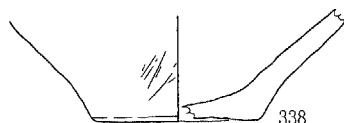
335



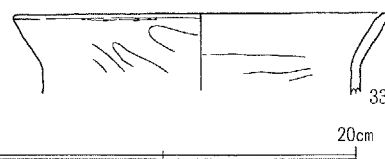
336



337



338



339

0 20cm

第113図 川辺 3 次出土遺物 3 (S = 1/4)

次に 2・3 調査区の出土遺物群について概観する。

322～330は土坑68-4出土遺物で、前項で述べたとおり折り重なるように出土した土器群である。322～325は、壺頸部～口縁部である。いずれも太い頸部から外反しながら口縁部が大きく広がる。頸部にはいずれも多条のヘラ描き沈線が施文されるが、324のみは各沈線の間隔が広く、3条しか施文されない。また、324内面には口縁端部に沿って浅い凹線が行われ、断面三角形の突帯が口縁端部側から口縁部中位まで曲線を描き、その位置で水平に貼付される。また、322の頸部には多条に配される沈線間に布巻状圧痕の付す突帯が1条貼付される。口縁端部はいずれも外側に直立する端面をもち、そのうち322には凹線が1条、324には3つを1単位とする刻目が施される。327は壺頸部で、3条1単位として3単位以上のヘラ描き沈線が行われる。326は壺底部で、体部から突出する平底の底部を備える。

以上が、壺口縁部から頸部にかけて部位である。調整は外面が口縁部～頸部までタテハケ、内面が頸部下半まではヨコハケ、口縁部～頸部はタテナデが行われる。いずれも紅簾片岩を主体とする混和剤が胎土に認められ、色調は橙色を呈すが、324は色調が黄褐色で、混和剤の含量も壺類よりも多量で、様相が異なる。

328～330は紀伊型甕口縁部および頸部である。直線的な頸部から外反する口縁を経て、口縁端部を丸く収める。肩部には断面三角形の突帯が認められ、上下面を摘むようにヨコナデされ、整形される。口縁部～頸部外面及び内面はヨコまたはナナメナデを行い、細かい条線が残存する。肩部の突帯以下には、ヨコ方向に断続的なケズリが施される。なお、総じて壺よりも混和剤を多く包含する胎土が使用される。

331は土坑64出土の壺頸部で、土坑68-4出土の323と同様に多条のヘラ描き沈線が密に施され、土坑68-4の出土遺物と同時期の所産とみられる。

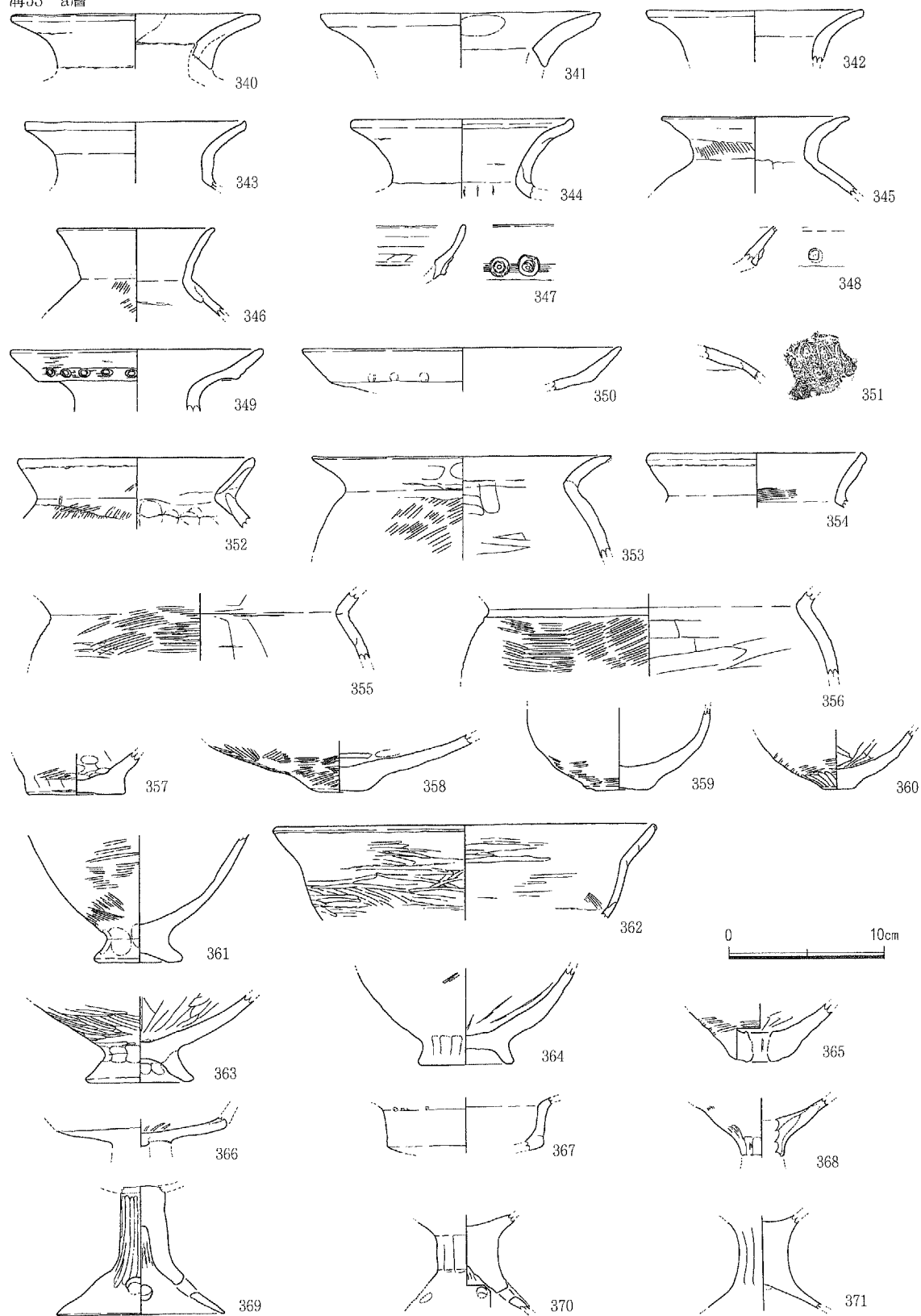
332～339は、土坑137出土遺物である。332～336は壺口縁部～頸部で、基本的な特徴は土坑68-4出土の壺群と共通するが、333の口縁部は大きく開かず、あまり外反しない点や336は体部内面がナデ調整である点などは異なる。337・338は壺底部とみられるが、326のような突出度は認められず、底部から外上方へのびる体部が認められる。

339は紀伊型甕口縁部で、外反する形態を示す。外面にはナナメナデが行われ、328同様細かい条線が観察される。

これらの土器群は、壺の形態や頸部に施文される布巻状圧痕付突帯や多条のヘラ描き沈線、紀伊型甕肩部の突帯などの特徴から、弥生土器Ⅰ様式の新相に位置付けられると考えられる。324は、この土器群の中でもやや古相に位置付けられる可能性はあるものの、68-4および137出土遺物は土坑からの一括遺物であるため、廃棄段階の共時性は高いと認識している。

340～371は溝53a 層出土土器群である。340～350は壺類の口縁部である。壺口縁部は、346が

溝53 a層



第114図 川辺3次出土遺物4 (S = 1/4)

広口直口壺以外はすべて広口壺口縁部である。わずかに直立する頸部に外反する口縁部を備える345と全体が緩やかに外反する343・344の形態差が認められる。口縁端部も、丸く収める342・345、外側に内傾する端面をもつ341、内側が上方に拡張する343・344などが認められる。これらは内外面ともにヨコナデにより調整されるが、345の頸部外面にはヨコナデ以前にタテハケが残存し、ハケの単位を表すように頸部には幅2cm前後の面が残存する。346は広口直口壺口縁部で、緩く外反する口縁部が外上方へのびる形態を呈す。体部から頸部へは、340・341にみられた接合痕の状況から体部上端の内側に三角形の粘土紐をあらかじめ準備しておき、頸部の粘土紐を積み上げるための基台とし、その基台部分の外側の体部上面から内傾接合による粘土紐積み上げを行い、頸部から口縁部を成形するという製作手順を観察することができる。

347～350は、二重口縁壺の口縁部である。いずれも口縁部外面は、竹管文（349）、円形浮文（348・350）、竹管円形浮文（347）により加飾される。いずれも1次口縁と2次口縁の境界での屈曲は明瞭でなく頸部から連続的な形態を呈し、1次口縁外面の垂下もほとんど行われぬ。2次口縁には、直線的な349・350とやや内湾する347・348が存在する。351は、屈曲度合いから壺類の体部と考えられる。外面には櫛描きによる波状文が認められる。類例には庄内式古段階に位置付けられる下田SD1305出土二重口縁壺（333）が確認されることから、351も二重口縁壺の体部上半と推測される。

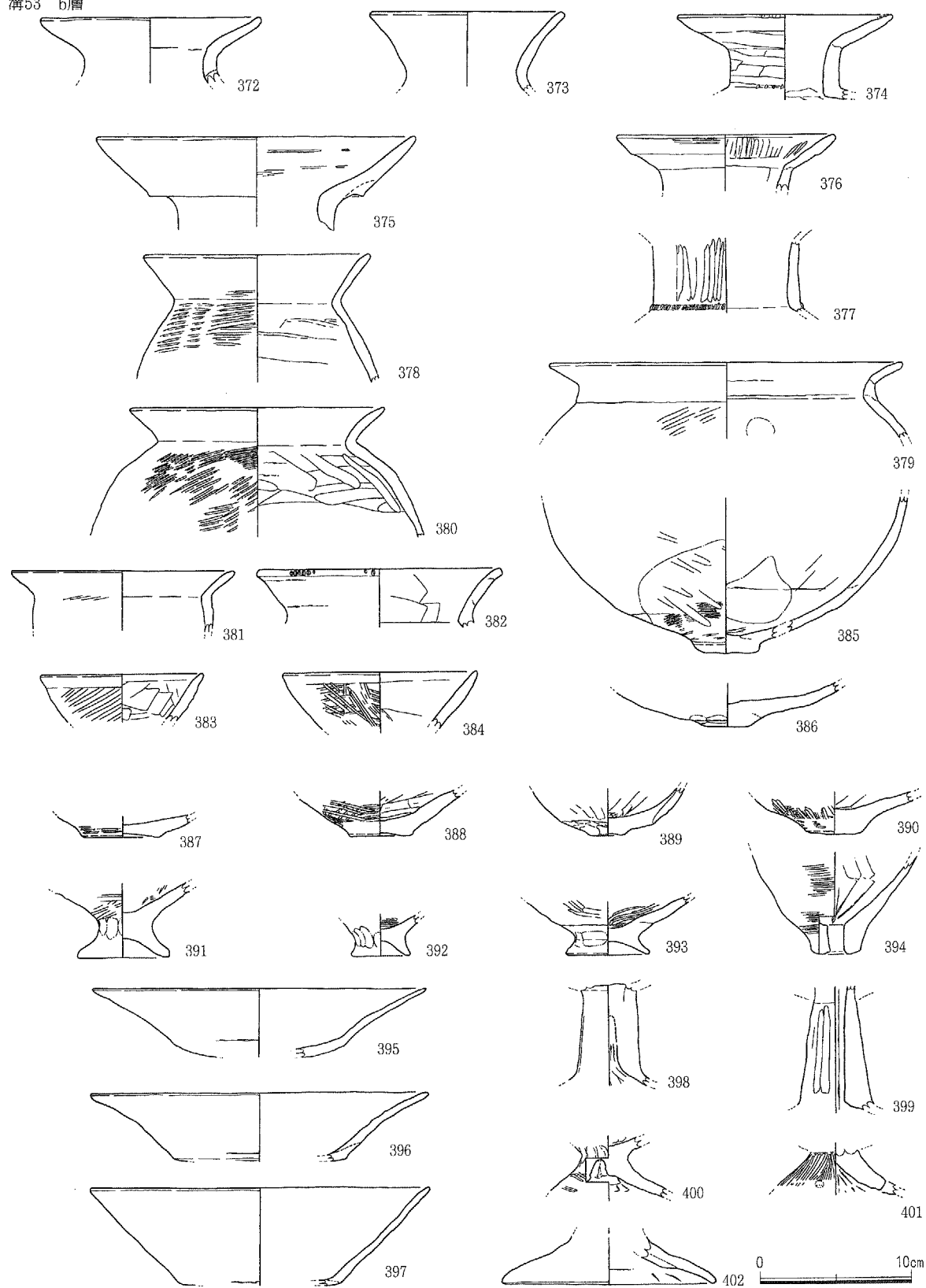
352～354は甕口縁部、355・356は甕頸部である。甕の口縁部も、直線的で端部を丸く収める352、直線的だが端部が外側に外傾する端面をもつ354、外反して端部を収める353などが認められる。体部内面の調整は、ナデ（352・353・356）と板ナデ（355）でケズリは認められず、頸部内面の屈曲は354を除いて鈍い。

357～361は、甕・壺・鉢などの底部とおもわれる。357は重厚な平底から外上方に直線的に体部が伸びる形態を呈し、体部の球形化が始まる以前の甕・鉢の底部と考えられる。内面の底部には棒状工具による圧痕が認められる。これに対し、358は球形化した体部から底部が突出した形態を呈す。外面はタタキののち部分的にナデが行われ357より後出する壺底部と推測される。359・360も球形体部から底部が突出するが、体部が小さく小形壺または鉢底部と考えられる。361は底部外周が外下方に拡張する上げ底状の底部で、鉢底部に多い形態であるが、体部外面にタタキが明瞭に残存するため、甕底部とも考えられる。

362は鉢口縁部で、口径24.3cmを測る。半球形の体部から屈曲して短い口縁部が伸び、口縁端は外傾する端面を備える。口縁端部には外面に粘土が押し出された痕跡が観察されるが、これは刀子等による切断で整形されたのち、ナデられた結果とみられる。

363は、361の上げ底状底部にさらに下方に粘土紐を継足した底部で、ハの字状に広がる退化した脚台が付加される。規格からも362の中形鉢の底部に該当すると考えられる。外面はタタキの

溝53 b層



第115図 川辺3次出土遺物5 (S = 1/4)

のちミガキ、内面はナデにより平滑に仕上げられる。364も底部に粘土を付加し、脚台を意識した底部だが、脚台部は短く直立し、363より退化が進行する。外面にはミガキが観察され、363同様中形鉢底部と考えられる。365は有孔鉢底部で、やや内湾気味の体部を備えるとみられる。

366～371は高坏の一部とみられ、366～368は坏部、369～371は脚部で、いずれも種類が異なる。366は有稜系高坏の坏底部で、剥離面の状況から脚柱部は、中空とみられる。368は有段高坏の段部とみられる。368は埴形高坏坏部で、坏底部は内湾する形というよりもやや直線的な形態を呈す。369は有稜系高坏の脚部で、脚柱部は半中実である。脚柱部から裾部へはなだらかに外反して広がる形態を呈し、裾部にはスカシ孔が4方向に穿孔される。370・371は埴形高坏脚柱部で、いずれも脚柱部は僅かに中実で直立する柱状を呈す。

372～402は溝53b層出土土器群である。372～374は広口壺口縁部で、頸部から内湾する口縁部が広がる372、頸部から直線的に広がる373、直立する頸部に内湾する口縁部を備える374などの口縁部形態を認められる。375・376は二重口縁壺口縁部で、1次・2次口縁の境界が不明瞭で頸部からやや内湾する口縁部が広がる形態を呈す。1次口縁外面は、断面三角形の粘土紐貼付により稜を形成する。ただし、376はその貼付された粘土紐は完全に剥離していたため、口縁部への加飾の有無は不明だが、375には加飾は施されていない。377は二重口縁壺頸部で、ほぼ直立する頸部を有す。体部との境界の外面には、粘土紐貼付し刻目を施す装飾が認められる。

378～382は甕口縁部で、直線的な378以外は外反する口縁部である。口縁端部はいずれも丸く収められるが、382は端面に刻目が施される。また、頸部には屈曲が鋭い378・380と鈍い379が認められる。383・384は小形鉢口縁部で、外面にタタキを備える体部からそのまま口縁端部に至る形態を示す。内面はいずれも板ナデだが、外面はタタキのみ383とタタキののち部分的にミガキを行う384が認められる。

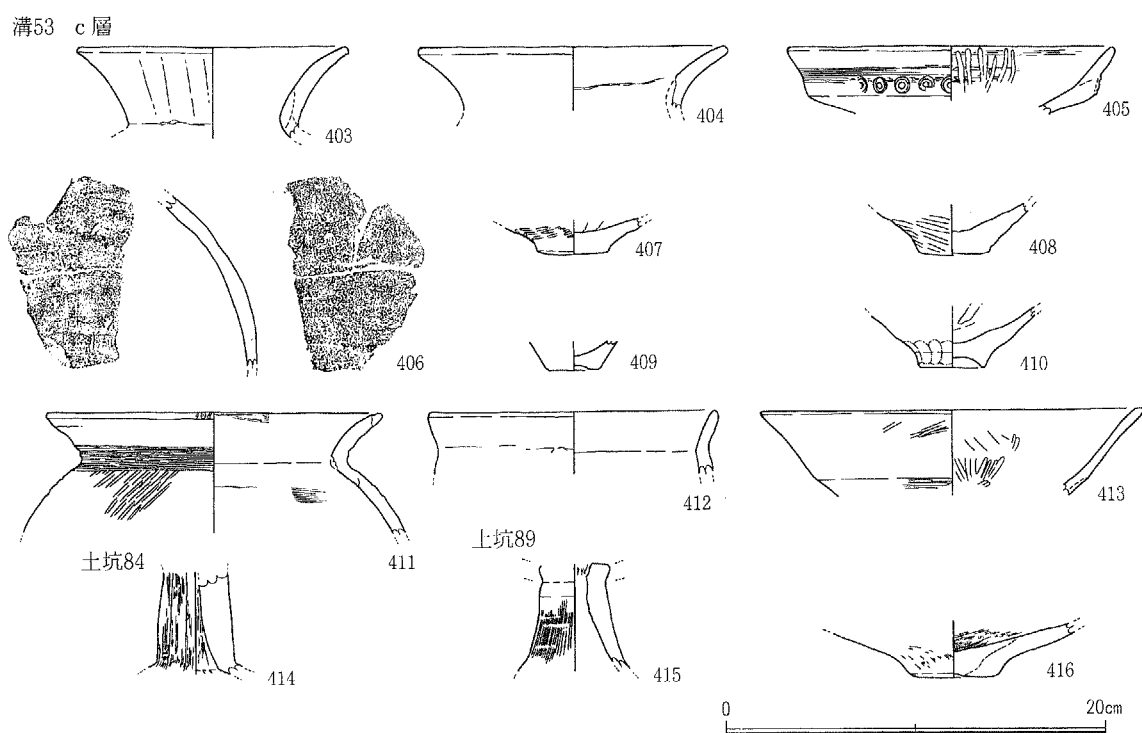
385～394は壺・甕・鉢底部である。385・386は球形の体部に突出する底部を備え、体部外面のタタキは一部ナデ消され、壺底部とみられる。387は体部から底部は突出せず、底面全体が内湾する。388は底面中央がやや凹む底部輪台技法とみられ、体部下半内面はケズリが行われる。389は底部が突出せず小さい窪みを作るもので、堺市下田遺跡では細頸直口壺の一部に認められるようである。390は突出する底部に外面タタキののちミガキが認められ、小形鉢底部とみられる。392はa層出土363・364同様退化した脚台を伴うもので、中形鉢底部とみられる。392・393は底部外周を外下方へ拡張する上げ底状の形態を呈す。394は底部が下方へ突出し、底径の小さい底部に穿孔される有孔鉢底部である。体部は直線的にのび、深い形態を呈すと考えられる。

395～397は高坏坏部で、いずれも有稜系高坏の口縁部とみられる。口縁部が外反する395・396と直線的でやや長い397とが認められ、型式学的には後者が後出するとみられる。398～402は高坏脚部で、398・399の有稜系高坏と400～402の埴形高坏とが認められる。有稜系高坏脚部は、脚

柱部がいずれも中空ないしは半中実の柱状を呈し、比較的明瞭に屈曲して裾部へと広がる。400・401は埴形高坏の坏底部～脚柱部にかけてで、401は柱状部分がなく坏底部から直接脚裾部へ広がるのに対し、400は柱状部を形成したのち裾部が広がり、坏底部には棒状工具での刺突が観察される。402は埴形高坏の脚裾部で、内湾する裾部が大きく広がる。

403～413は溝53c層出土土器群である。403・404は広口壺口縁部で、頸部から外反する口縁部である。403はタテ方向の板状工具での調整ののちヨコナデされるため、幅2cm程度の面を形成する。405は二重口縁壺口縁部で、口縁部長は短い。外面には擬凹線を施した上に竹管円形浮文により加飾される。406は壺類体部で、外面がミガキ、内面が板ナデにより調整される。407～410は壺・甕・鉢類の底部で、底面平坦な407・408、中央が凹む409、断面三角形の高台状に粘土紐が付加され径の小さい底部が形成される410などが認められる。410はb層出土の389同様細頸直口壺底部と考えられる。411は甕口縁部、412は小形鉢口縁部とみられる。甕体部内面はナデ調整である。413は有稜系高坏口縁部で、やや外反する口縁部である。

以上が、溝53出土遺物である。各層出土の土器群を簡単に振り返ると、a層には時期を鋭敏に反映する高坏口縁部が認められないものの、中形鉢の退化した脚台の付加、二重口縁壺肩部に波状文、有段高坏、半中実の有稜系高坏脚柱部、柱状の埴形高坏脚柱部などの特徴を評価すれば、庄内式古段階～中段階古相の土器群と評価される。これに対し、b層では尖底の有孔鉢や外反す



第116図 川辺 3 次出土遺物 6 (S = 1/4)

る有稜系高坏など庄内式中段階古相の土器も認められるが、a層出土遺物よりも形式的に後出する中段階新相に位置付けられる直線的で長い口縁部（397）を包含し、出土遺物の型式と溝の層位がパラレルに対応せず、a・b層は庄内式古段階から中段階新相の間に機能し、埋没が完了したと理解される。なお、c層については出土遺物が少なく判断が困難だが、二重口縁壺口縁部長がa・b層出土のものより明らかに短く古相を呈す可能性がある。

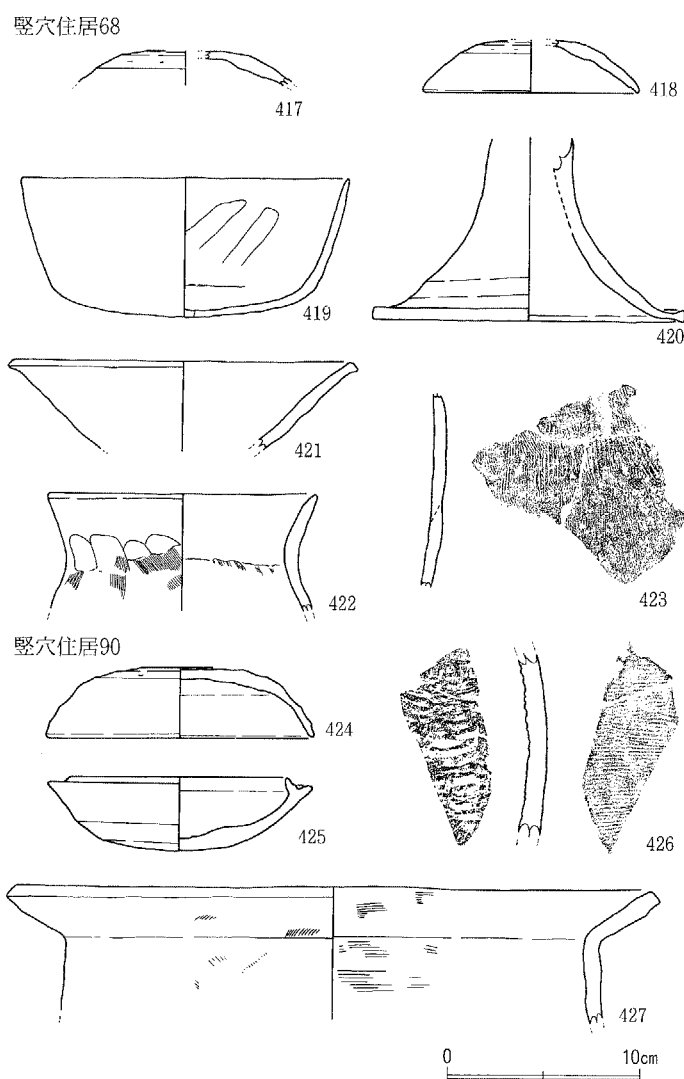
このほかに庄内併行期の遺物を出土した遺構としては、土坑84（414）や土坑89（415・416）が認められるが、資料碎片のため時期の限定は困難である。

417～423は、竪穴住居68出土遺物である。417・418は坏H蓋で、天井部はいずれも回転ヘラケズリが認められる。419はやや丸みを帯びた底面に直線的な口縁部を備える坏Gで、口径17cm、器高7.3cmを測り、深い。420は、竈支柱の長脚の高坏脚部である。脚柱部から裾部にラップ状に広がり、端部は外側に端面をもつ。418～420は、いずれも形態的・技法的特徴は須恵器だが、軟

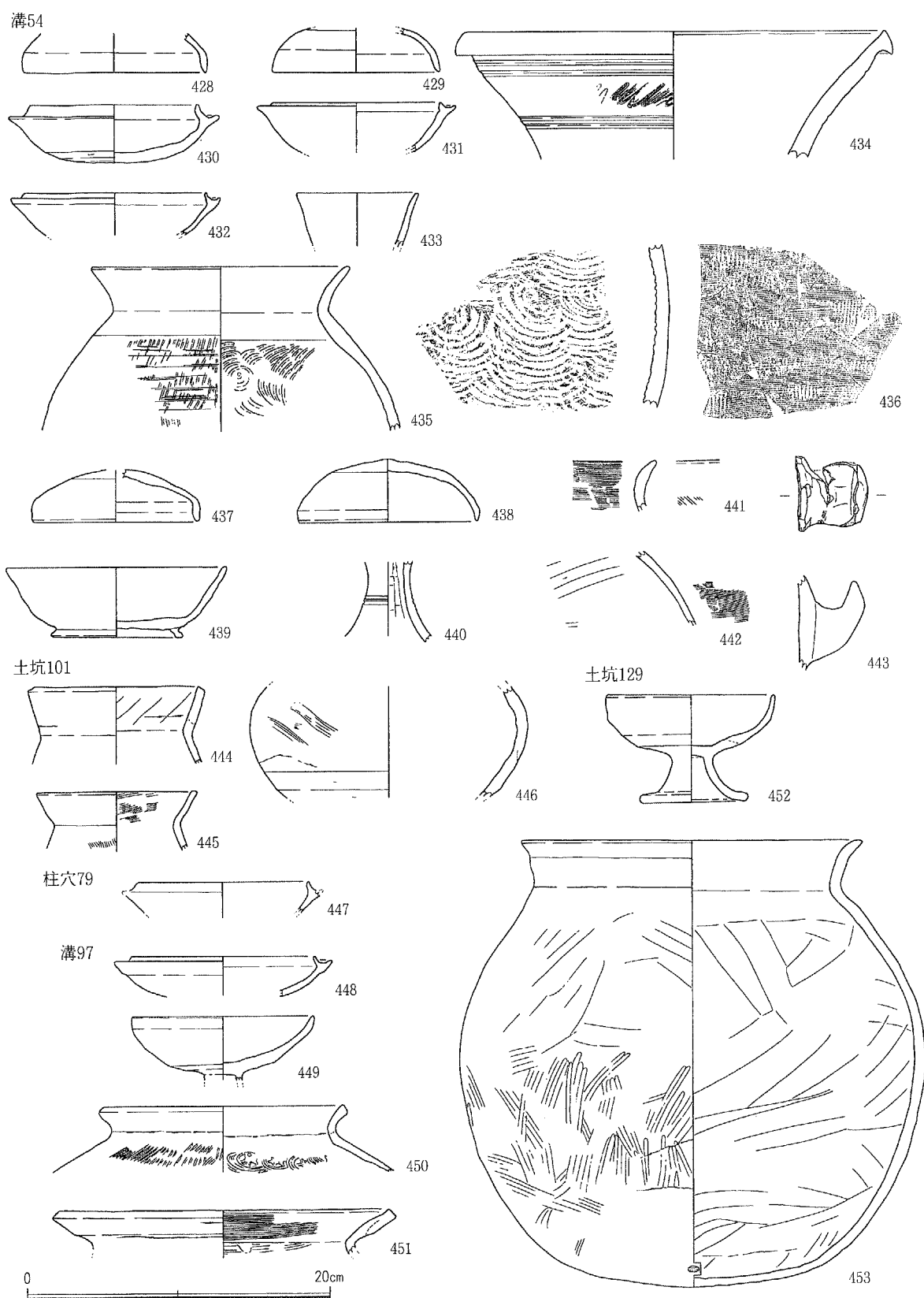
質で橙色（7.5YR7/6）の色調で、土師質焼成の様相を呈す。421は土師器高坏口縁部で、422・423は土師器甕である。422は頸部のくびれが不明瞭な小形の甕口縁部で、製塩土器か。423は甕体部下半で、外面のタテハケの原体が上半と下半で異なる。竪穴住居68は須恵器類の形態から飛鳥Iと考えられる。

424～427は、竪穴住居90出土遺物で、424・425が須恵器坏H、426が甕体部、427が土師器甕口縁部である。なお、424は主柱穴90-8掘形からの出土で、天井部には回転ヘラケズリが認められ、425も底部に回転ヘラケズリが行われる。また、426もカキメ・同心円文が認められるが土師質焼成である。

428～443は溝54出土遺物で、このうち428～435がa層、436～440はb層出土の須恵器、441～443が土師器



第117図 川辺3次出土遺物7 (S = 1/4)



第118図 川辺 3 次出土遺物 8 (S = 1/4)

甕の一部である。a層からは坏H蓋・身(428～432)、平瓶または甕口縁部(433)、甕口縁部(434)・壺口縁部(435)などが出土した。坏H底部(430)には回転ヘラケズリが確認される。434は頸部を凹線と波状文により施文し、やや古相を呈す。b層出土遺物には、坏H蓋(437・438)、坏B身(439)、高坏脚部(440)、甕(436)が認められる。坏H蓋天井部は回転ヘラ切り不調整である。高坏脚部には中央に突線が認められ、長脚の痕跡とみられる。a・b層の出土須恵器を比較すると、坏Bの有無や坏Hの天井・底部の処理方法をみても、層位的に後出するa層が、型式学的組列ではb層より古相の様相を示す。このことから、a・b層の堆積の時間差が無く、飛鳥Ⅱ～Ⅲの段階と考えられる。なお、溝54は2次溝464の延長部にあたるが、2次調査出土遺物の時期ともこの理解は矛盾を生み出すものではない。

444・445は不整形土坑101出土の土師器甕で、頸部であまりくびれずに口縁部を付加する形態である。2次的焼成を受けており、器壁が剥離する。422同様製塩土器か。446は土坑101を側溝で断ち割った際出土した須恵器壺体部下半である。

447は、建物2を構成する柱穴79出土の須恵器坏Hである。受部立ち上がりは内傾し、短い。資料は少ないが、2次掘立柱建物1と同様に飛鳥Ⅰに帰属すると理解している。

448～451は溝97出土土器群で、須恵器坏H(448)、高坏(449)、短頸壺(450)、土師器甕(451)が認められる。高坏は碗形の坏部で、脚部は長脚のものと推測される。450壺体部には同心円文が付されるが、通常のものより中心は「*」が刻まれる。飛鳥Ⅰ～Ⅱと考えている。

452・453は、土坑129内に設置されていた土器である。452は須恵器高坏で、碗形の坏部に低脚を付す。453は、底が丸底で球形の体部から緩く外反する口縁部を備える土師器壺である。体部には外面がミガキ、内面が板ナデで仕上げられ、口縁部はヨコナデされる。体部下半外面にはミガキののち数条の擦痕が何ヵ所かで確認される。底部には焼成後に径7mmの小孔が穿孔される。土坑129は、溝97埋没後に設けられたことから、上限が飛鳥Ⅰ～Ⅱで、高坏の形態からも飛鳥Ⅱ前後の所産と考えられる。当該期の一般的な土師器である甕とは、形態・調整が異なることから、壺として報告した。焼成後ではあるが穿孔することから、特別な使用を目的とした土器であることは、個体そのものからも推測される。

2・3調査区では、以上のとおり弥生時代前期、庄内併行期、飛鳥時代の遺物が出土した。庄内併行期、飛鳥時代の土器群は、2次調査において出土したものと大過ない。ただし、特殊な遺構であった土坑129の土師器壺は、周辺に類例が無く、遺構自体とともにその意味が興味深い。また、先述のとおり紀ノ川下流域北岸では、ほぼ初出とみられる弥生時代前期新相の土器群も、その一括性の高さとともに貴重な資料であると考えられる。

第5節 川辺遺跡小結

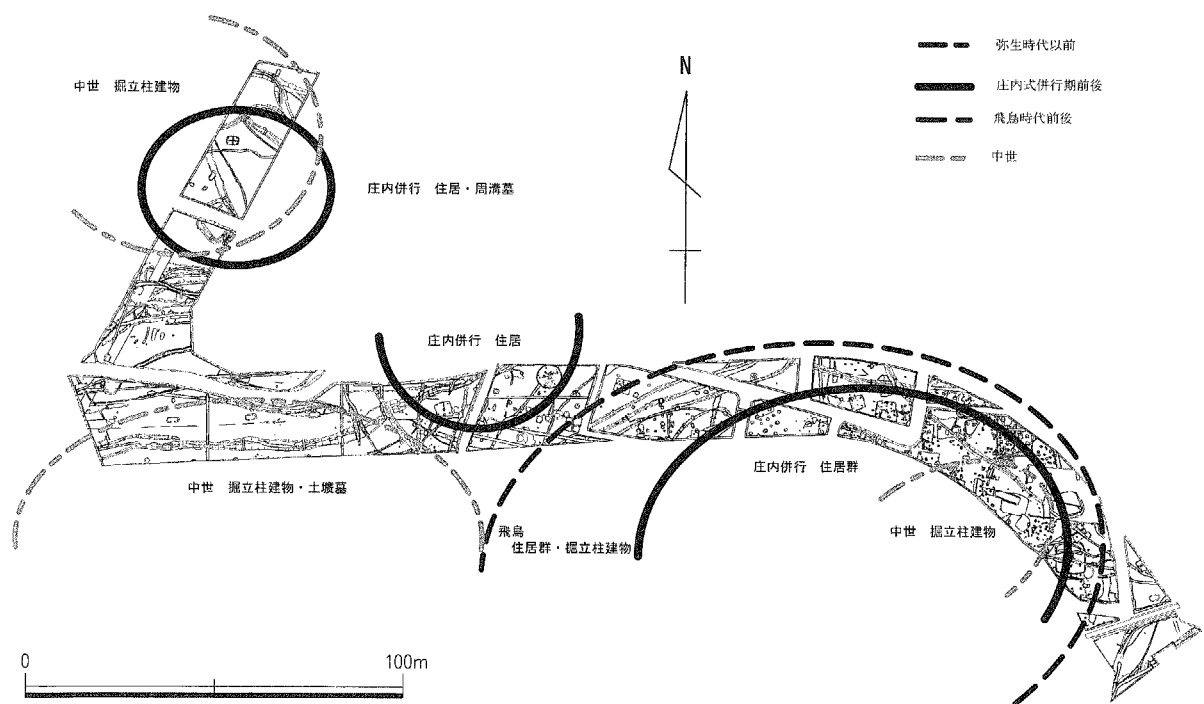
前節まで概観してきた川辺1～3次調査の成果を、以下に概観することで小結としたい。

遺物のみの出土として最古なのは、各調査で出土した縄文時代に帰属するとみられる石製品類だが、土器類の出土は確認されない。遺構としては最古なものは、3次調査で検出された弥生時代前期後半の土坑で、うち2基の土坑には接合関係の認められない壺、甕などが折り重なるように出土したものの、その機能・用途は不明である。また、その埋土は遺構面ベースである地山と酷似しているもので、紀ノ川右岸での当該期の遺構がほとんど確認されないのは、土壌の認識が困難であることに起因するものと推測される。

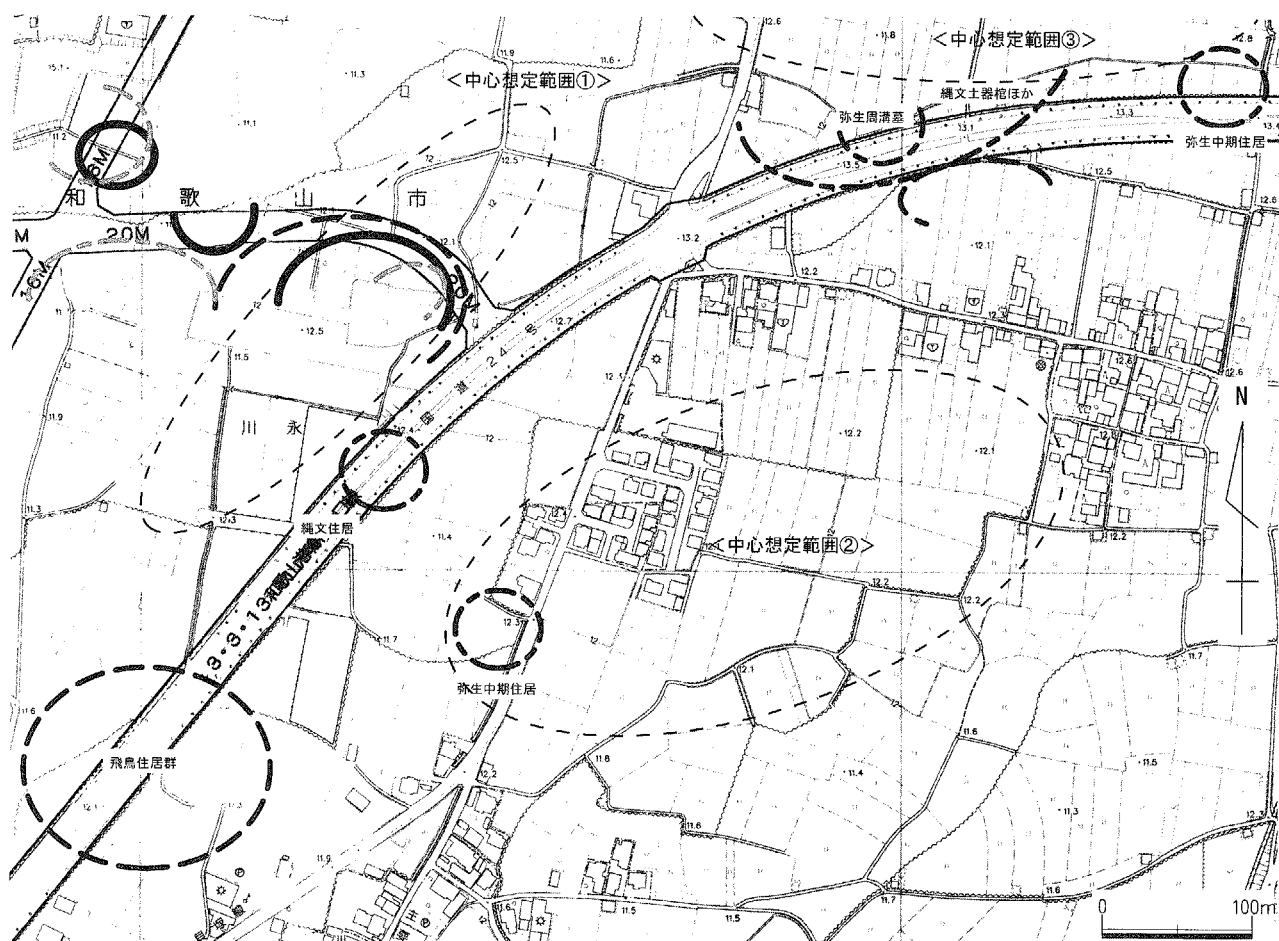
弥生時代中期の遺構ならびに遺物の出土は全く認められず、空白期間が認められる。後期後半になると土坑・住居からの遺物の出土が認められるが、遺構は展開しない。調査地における本格的な土地利用は、庄内式併行期を待たなくてはならない。若干の時期幅は存在するものの、庄内併行期でもやや古相の段階において、円形竪穴住居1基のほか、多数の方形竪穴住居が検出されたほか、多数の溝群が認められ、一定量の土器が出土する。この住居群は、微高地の頂部にあたる2次調査C調査区を中心として分布するもので、この範囲では一定度住居群が集中する傾向にある。その一方で、微高地縁辺部や低地にあたる範囲にも住居のほか、周溝墓も検出され、調査区外の北側などに住居の分布が展開する可能性はあるものの、その密度は微高地上と比較するとはやや低いもので、集落の縁辺部と理解される。また、周溝墓については調査地の都合により確定されなかったが、単なる方形でなく前方後方形の可能性も残存し、その場合には庄内併行期における他地域との関係性について重要な示唆を含むものと考えられる。

庄内併行期の集落は、出土遺物の検討から布留式期を迎えることなく廃絶したようで、その存続期間は決して長いものでなかったようである。その後、古墳時代前・中期には遺構、遺物とも確認されず空白期間が存在し、古墳時代後期末ないしは飛鳥時代になると再度活発な土地利用状況が窺われる。多数の方形竪穴住居が検出されただけでなく、周囲を溝が圍繞する大形の総柱式掘立柱建物が検出され、一般的な掘立柱建物と様相が異なる。さらに、このほかにも多数の柱穴を検出しており、組み合わせることができなかったものの、多くの建物群の存在が予見される。ただし、当該期の遺構群は庄内式併行期の住居群が集中した微高地上にのみ立地し、微高地縁辺部にまで展開しない。また、庄内式併行期の集落同様その存続期間は、土器編年で飛鳥Ⅰ～Ⅲに限定されるもので決して長期間に及ぶものでない。

奈良・平安時代には遺構・遺物とも明瞭でなく、10世紀前後の遺構と包含層からの遺物の出土がわずかに認められるに過ぎない。この平安時代の遺構・遺物が散見される状況は、山口遺跡同様である。また、川辺遺跡において遺構面が2面以上検出される調査区では、この飛鳥時代以降、中世までの期間に上面遺構面のベース土が堆積していることから、当該期の遺構の不在ないしは



※上・下面のある調査区は下面の遺構概略図を使用



第119図 川辺遺跡遺構分布図 (S=1/2000・S=1/5000)

希薄である理由は、上・下面間の土壌が堆積する際に、自然流路等による侵食の可能性も考慮する必要がある。ただし、微高地上での遺構の分布からは当該期には庄内併行期や飛鳥時代ほど土地利用状況は想定されず、相対的に遺構密度は低いものと予想される。

中世の段階には調査区周辺には、いくつかの集落が存在したようであるが、遺構密度は希薄で、各掘立柱建物群の間に、土壌墓や空白区間が存在しており、今回検出した建物群は大規模な単一の集落でなく異なる複数の集落の可能性が考えられよう。

以上が今回検出された遺構群の概要であるが、ここで既往の調査成果と比較してみたい。

まず既往の調査成果を振り返ると、当文化財センターが実施した一般国道24号バイパス線に伴う調査では、縄文時代晩期の土器棺や住居址が検出されたほか、弥生時代中期の円形竪穴住居、方形周溝墓、庄内併行期の溝群、飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物群などが検出された。また、(財)和歌山市文化体育振興事業団(以下、市事業団)が実施した調査でも弥生時代中期後半の竪穴住居が検出されている。

縄文時代の状況は資料的に限界があり、今回の調査でも出土遺物もなく検討することは困難である。弥生時代中期には住居跡が計3棟検出されているが、市事業団と当センターの検出した竪穴住居は、直線距離で約600mの距離位置しており、当該期の環濠集落が直径400m程度である点や当文化財センターの調査でもその時期に帰属する他の遺構が不在である点などから、両者は異なる集落に属す住居の可能性が高く、川辺遺跡にはいくつかの弥生時代中期の集落を包括する遺跡と推測される。

庄内式併行期の様相については、今回の調査で集落が初めて検出されたもののその存続時期、分布範囲は限定されたものである。弥生時代後期の住居が不在であるのは、他の紀ノ川下流域右岸の低地に立地する集落群と類似し、時代的背景を考察する際の一資料となろう。また、弥生時代中期や庄内併行期では住居群は、現況の標高で12.0m以上において集中する、ないしは検出される傾向が認められ、一つの集落としてはその分布範囲が広範に及ぶことなどを併せて考えれば、①今回の2次調査C調査区の北東から南西にかけての範囲、②市事業団検出の弥生時代中期の住居から北東の範囲、③当センター検出の弥生時代中期の住居と方形周溝墓の北側の3つの範囲を、川辺遺跡に属する集落の中心範囲の候補として推定することが出来る。ただし、②・③の範囲が弥生時代中期に、①が庄内併行期に、集落の中心として機能した可能性もある。また、飛鳥時代には①の範囲とその南側が選択されている状況である。仮に集落形成の選地が行われたのであれば、その要因は河川位置の変動等、周辺環境の変化が要因として推測されよう。

いずれにせよ川辺遺跡という広大な遺跡に調査区というトレンチを入れたに過ぎない程度の調査範囲である現状では、これ以上の推測は困難である。今後の周辺の調査成果により、川辺遺跡の実態が明らかにされることを期待する。

第Ⅳ章 まとめ

前章まで山口、川辺遺跡の調査成果を報告してきた。ここで、簡単に振り返ると、山口遺跡では飛鳥時代の掘立柱建物群を検出し、そのなかには棟持柱を付設するものもみられた。特徴的な建物が含まれ、その廃絶時期からも山口遺跡の北側に位置する山口廃寺との関係性が想起された。特徴的な出土遺物として、サヌカイトの接合資料が出土し、和歌山県内では珍しい例である。このほかにも、庄内式新相～布留式古相の遺構や中世の掘立柱建物群等を検出したが、いずれも溝や土坑の検出に止まっており、遺跡の中心は調査区周辺に、おそらくは東側に位置するものと予想される。

川辺遺跡においては、既往の調査では知られていなかった庄内式併行期の住居群と周溝墓が検出され、当該期の紀ノ川下流域状況に関する新資料が発見された。また、飛鳥時代の竪穴住居も多数検出されたほか、周囲に溝を圍繞する大形の掘立柱建物が検出され、単なる一般的集落と位置付け難い。今回検出された遺構群との時間差が存在するものの、『日本書記』安閑二（535）年五月の条に記述されている「川辺屯倉」との関係性が想起されずにはおられない。また、出土遺物では紀ノ川下流右岸地域では珍しく弥生時代前期土器が一括性の高い状況で出土したのが、注目されよう。

このように両遺跡とも庄内併行期や飛鳥時代など、時代の転換点と位置付けられることの多い時期の遺構群が多数検出され、遺物も一定量の出土をみた。以上のような良好な資料に恵まれたにも関わらず、本報告では遺構、遺物のどちらについても周囲の調査事例との比較、検討や出土遺物の資料操作による検討、考察を加えるには至らず、事実関係の記載に終始するのみとなったのは残念である。その結果、多くの課題を残すこととなったが、本書の刊行により最低限の責務は果たせたと考えている。

以上のように、計8次7ヶ年にわたり実施された山口・川辺の両遺跡の発掘調査成果を2年間の整理期間を経て、発掘調査報告書として刊行することが出来た。最も古い調査が実施されたのはすでに10年以上前に遡る。整理作業は、調査当時作成した記録類を理解することから始める状況であった。さらに、調査には3名の担当者が従事したため、各担当者間での土層・帰属時期について当初より必ずしも一致していたわけでない。また、編集担当が全体の調査面積の1割にも満たない面積しか調査を実施していなかったため、遺跡についての十分な理解が及ばず、調査成果の一部しか本書に掲載できていない危惧を覚える。調査成果の記録類については、財団法人和歌山県文化財センターで保管しており、その記録類とともに、本書が和歌山市ないしは紀ノ川下流域における地域史を知るうえでの基礎資料として、多くの方々に利用されることを望むものである。

【引用参考文献】

- 和泉市教育委員会1996『上町遺跡発掘調査報告書』和泉市埋蔵文化財調査報告 3
- 井馬好英編1999『山口遺跡 第6次発掘調査概報』和歌山市文化体育振興事業団調査報告書21
(財)和歌山市文化体育振興事業団
- 尾上実1985「大阪南部の中世土器」『中近世土器の基礎的研究』
- 川口修実2003「川辺遺跡発掘調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報』平成13年度
和歌山市教育委員会ほか
- 九州陶磁器研究会編2000『九州陶磁の編年』
- 佐藤隆2003「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年」『大阪歴史博物館研究紀要』 2
(財)大阪市文化財協会
- 鋤柄俊夫1995「大阪府南部の瓦質土器生産(1)」『日置荘遺跡』大阪府教育委員会
- 武内雅人1984「古代末期紀伊国の土器様相」『考古学研究』121 考古学研究会
- 中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』
- 土井孝之1989「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編 I
- 土井孝之編1991『西田井遺跡発掘調査報告書』(財)和歌山県文化財センター
- 奈良国立文化財研究所編1976『平城宮発掘調査』Ⅶ
- 西村歩1996「和泉北部の古式土師器と地域社会」『下田遺跡』
(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書18 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 額田雅裕1988「和泉山脈と和歌山平野」『和歌山地理』 8 和歌山地理学会
- 乗岡実2000「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会
- 前田敬彦1990『山口遺跡第5次発掘調査報告書』和歌山市教育委員会
- 前田敬彦2003「和歌山県における庄内式併行期の土器編年」『古墳出現期の土師器と実年代』
(財)大阪府文化財センター
- 松下彰編1995『川辺遺跡発掘調査報告書』(財)和歌山県文化財センター
- 森隆1990「西日本の黒色土器生産」(上)『考古学研究』146 考古学研究会

山口遺跡写真図版



山口遺跡調査区全景
(北上空から)



山口遺跡代替地全景
(西上空から)

PL. 2

山口遺跡
掘立柱建物 1・2
(南から)



山口遺跡
掘立柱建物 1・2
(北から)

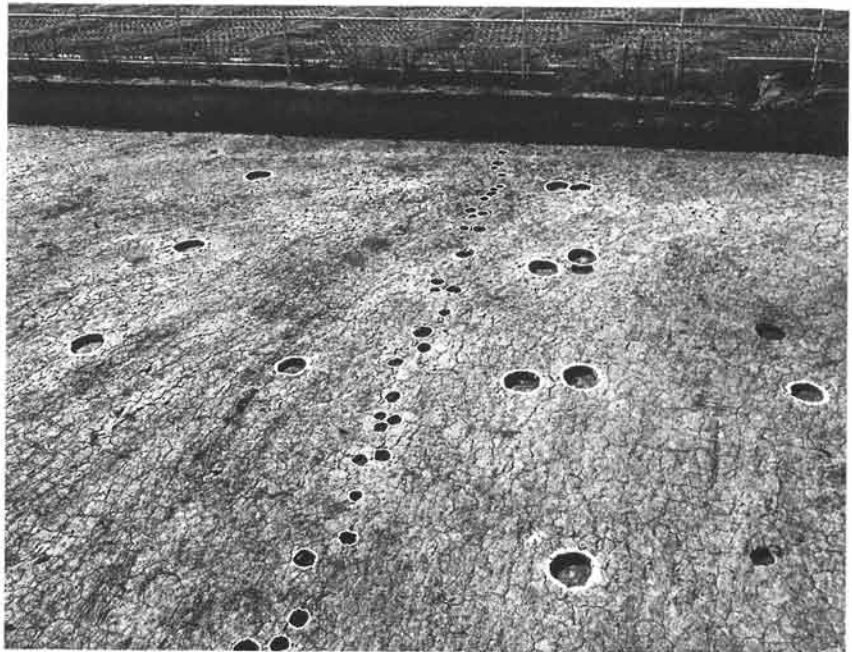


山口遺跡
掘立柱建物 1 (東から)



PL. 3

山口遺跡
掘立柱建物2（南東から）



山口遺跡
土坑248（南から）



山口遺跡
代替地遺構全景（北から）

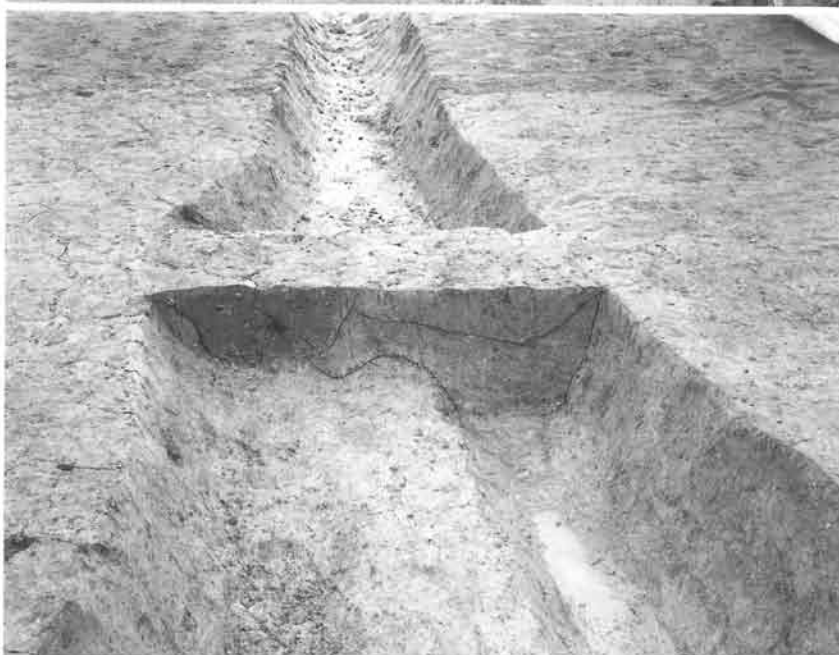


PL. 4

山口遺跡
溝261（北から）



溝261
セクションベルト
（南から）



山口遺跡
溝262（東から）



PL. 5

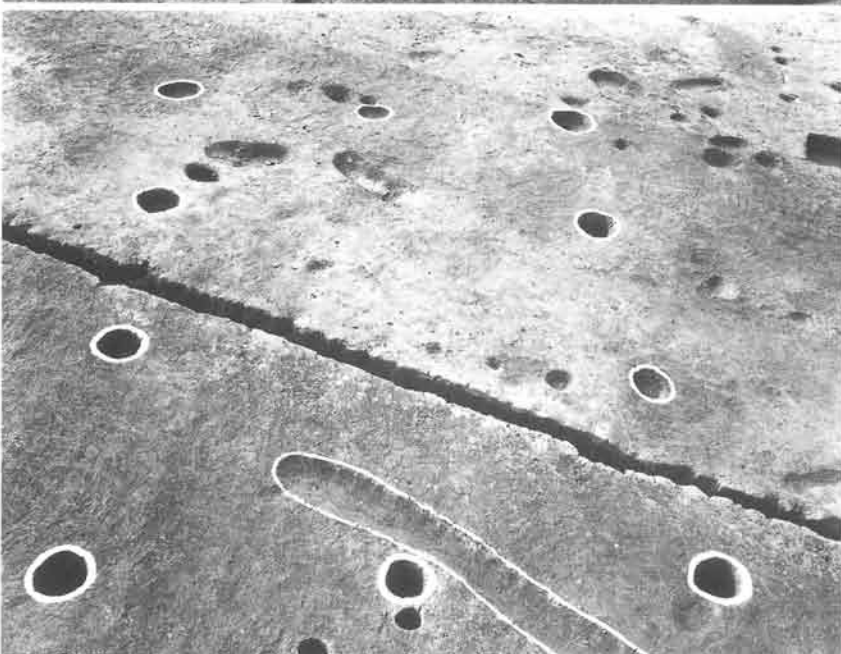
山口遺跡
A地区全景（南から）



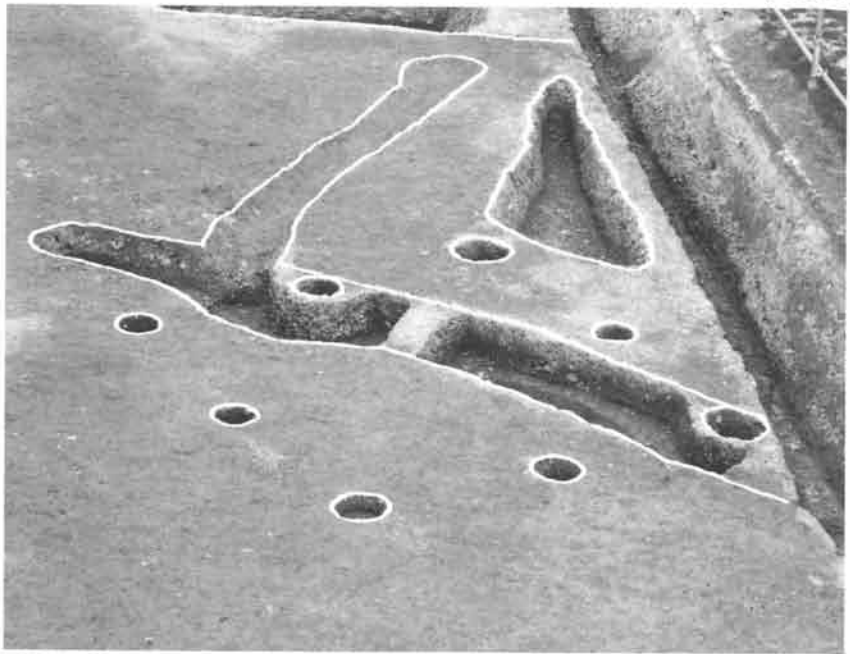
山口遺跡
掘立柱建物183（南から）



山口遺跡
掘立柱建物183（東から）



PL. 6



山口遺跡
掘立柱建物182（南から）



山口遺跡
掘立柱建物181（南から）



山口遺跡
掘立柱建物181（東から）

PL. 7

山口遺跡
溝145（北から）

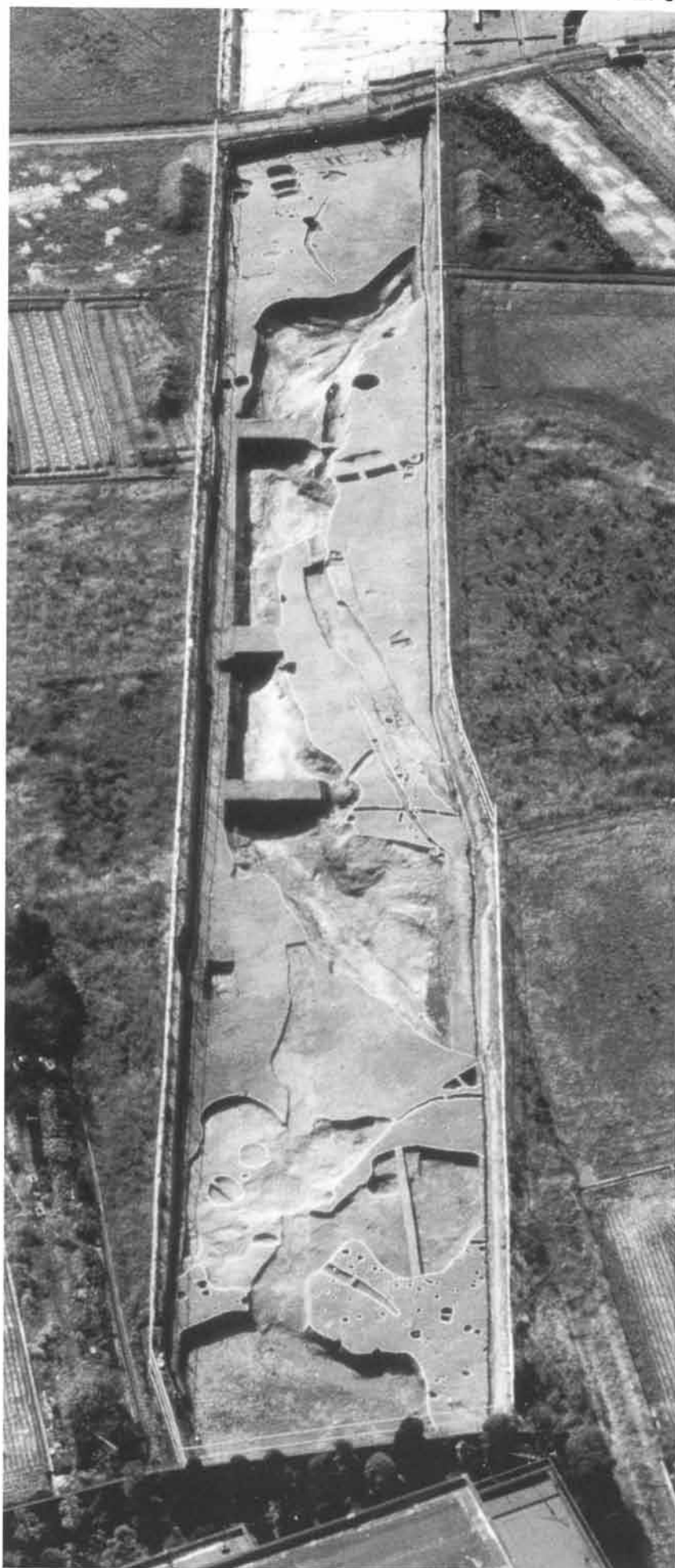


溝145
セクションベルト
（南東から）



山口遺跡
溝111・112・113
（南西から）





山口遺跡
B地区全景
(北側上空から)

PL. 9

山口遺跡
B地区全景（南から）



山口遺跡
B地区全景（北から）



山口遺跡
溝35全景（南から）



PL.10

山口遺跡
溝35北半部（南から）



山口遺跡
溝35南半部（北から）

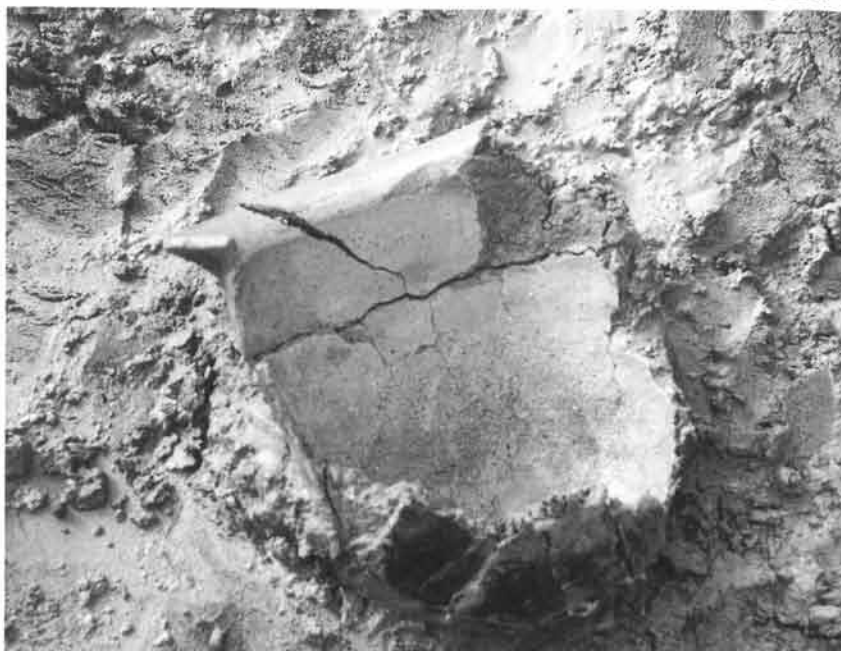


溝35
セクションベルト 4
（南から）

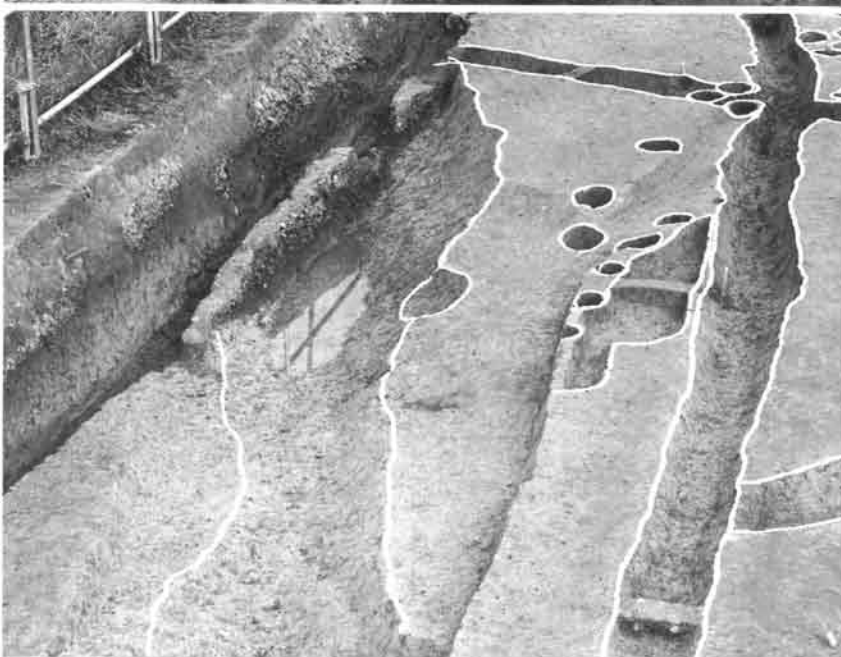


PL.11

溝35
遺物出土状況（南西から）



山口遺跡
溝30・51（南から）

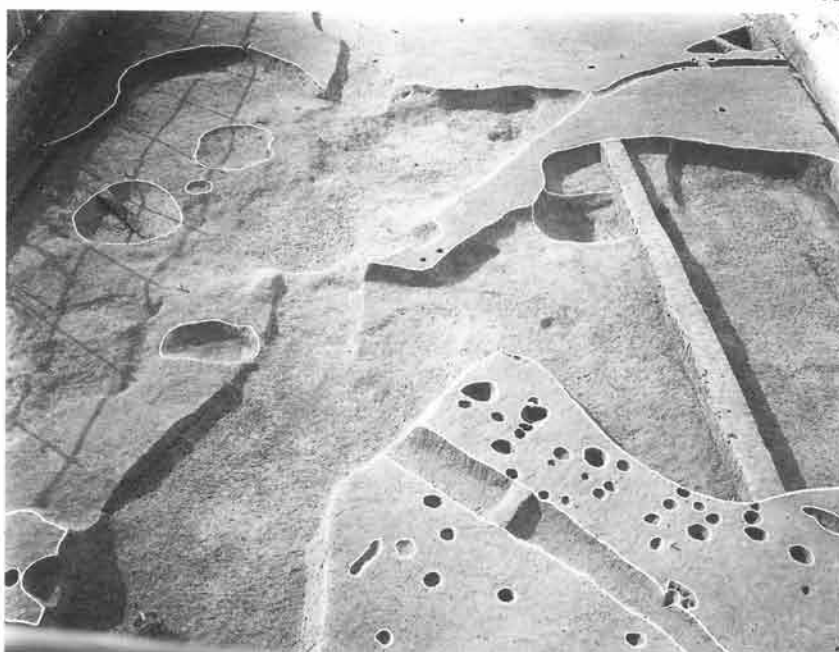


溝30
遺物出土状況（東から）



PL.12

山口遺跡
SX-31・32・33
(北から)



SX-31
セクションベルト
(東から)



山口遺跡B地区
北西隅柱穴群(南から)

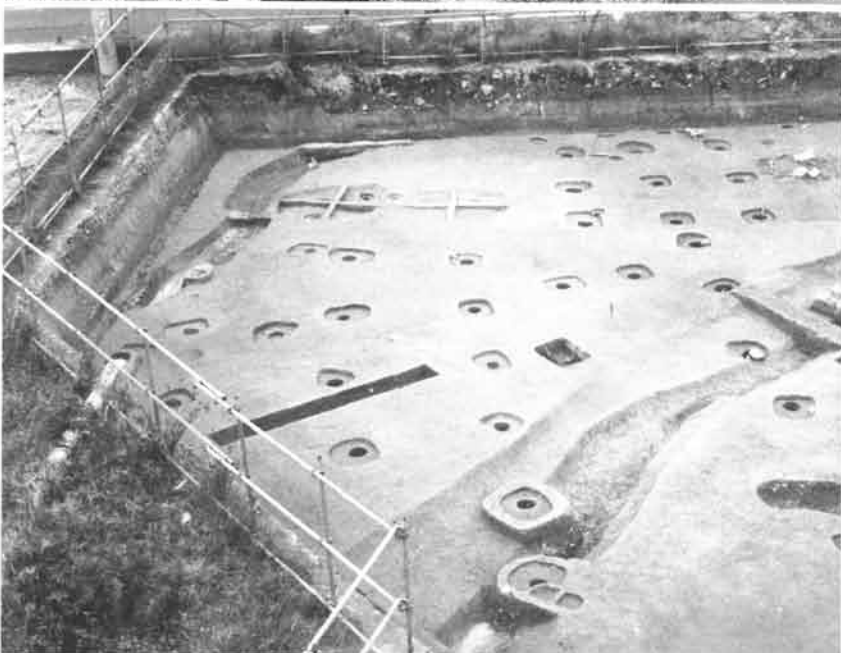


PL.13

山口1次全景（南から）



山口1次西半部
掘立柱建物1・2
（南から）

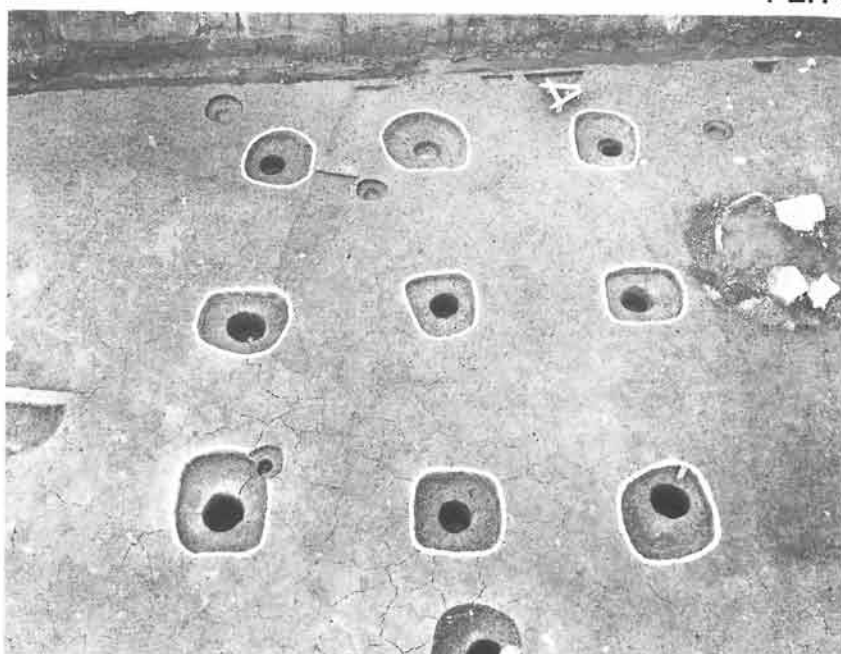


山口1次東半部
溝1・72（南から）



PL.14

山口1次 掘立柱建物1
(南から)



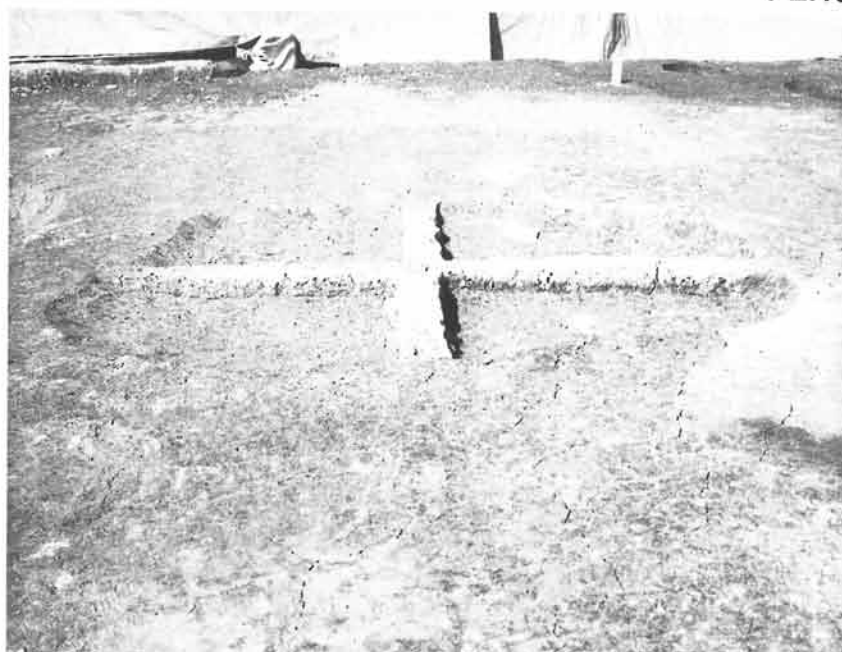
山口1次 掘立柱建物2
(東から)



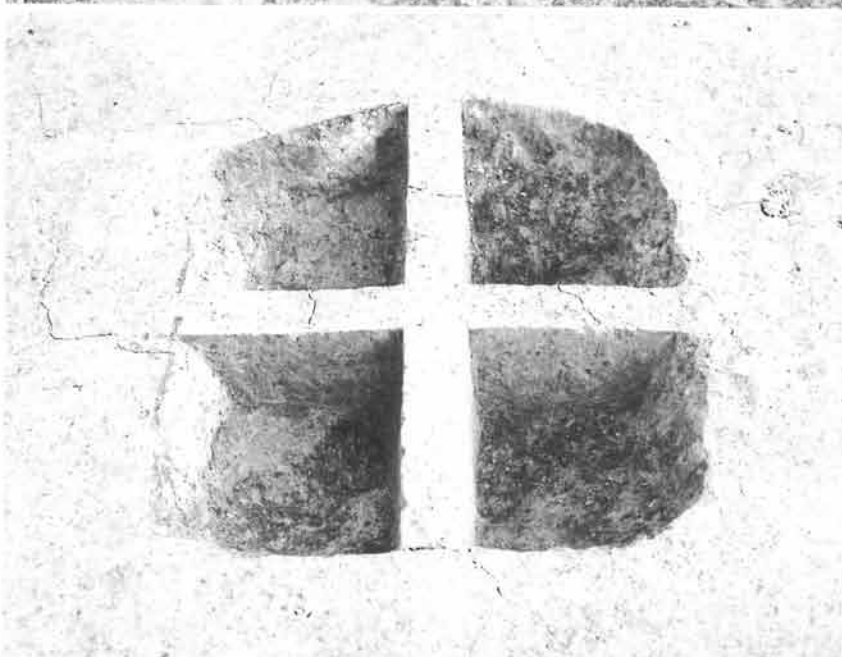
山口1次 土坑84
(南西から)



PL.15



山口1次 土坑64
(南から)



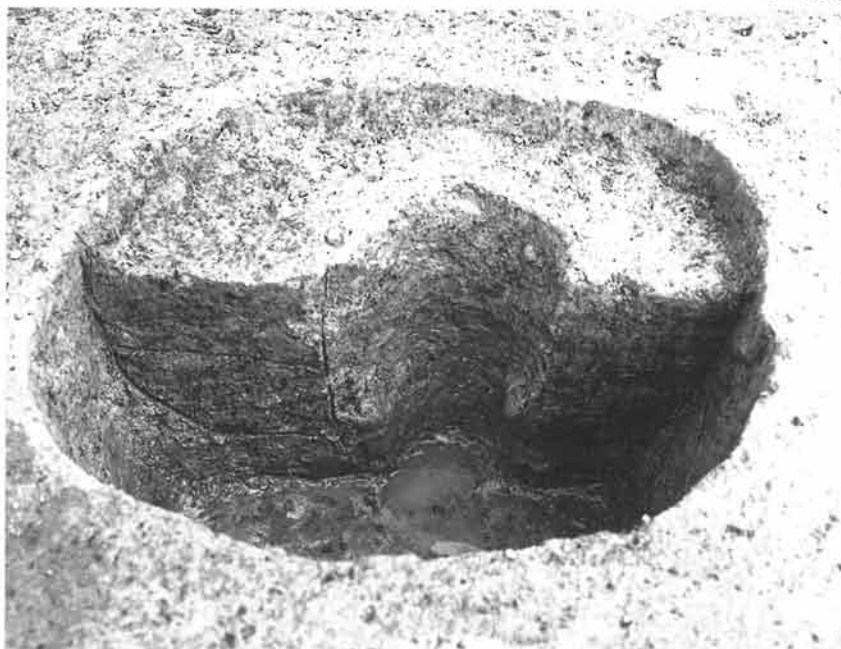
山口1次 土坑16
セクションベルト
(南から)



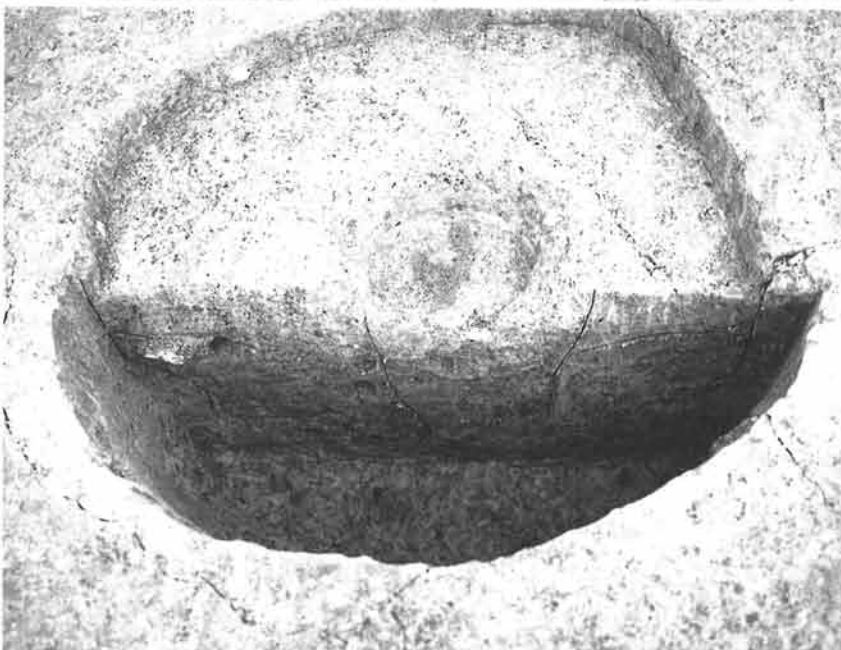
山口1次 土坑16
完掘状況 (南から)

PL.16

山口1次 掘立柱建物1
柱穴6 断割状況
(西から)

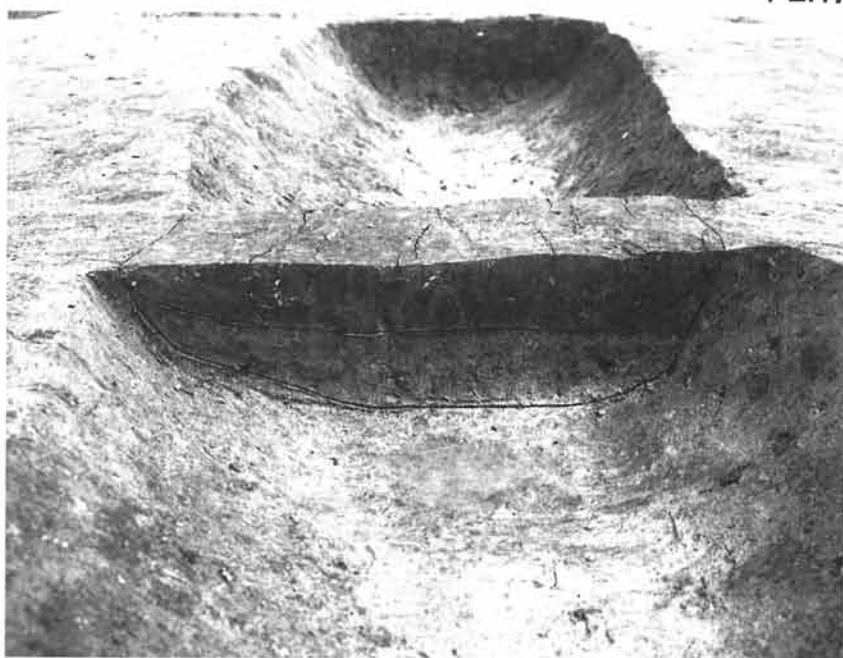


山口1次 掘立柱建物2
柱穴80断割状況
(西から)

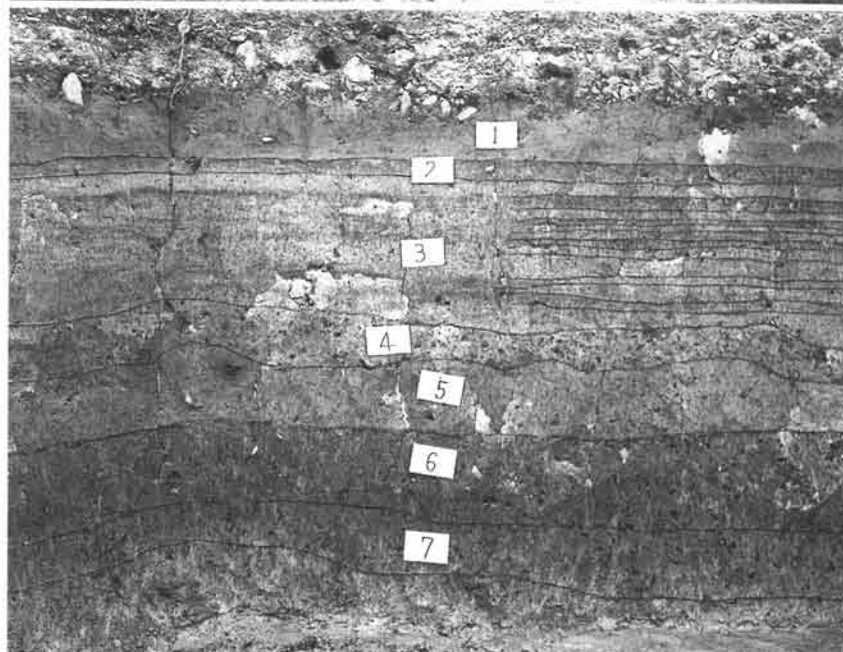


山口1次 溝1
セクションベルト
(西から)





山口1次 溝72
セクションベルト
(南西から)



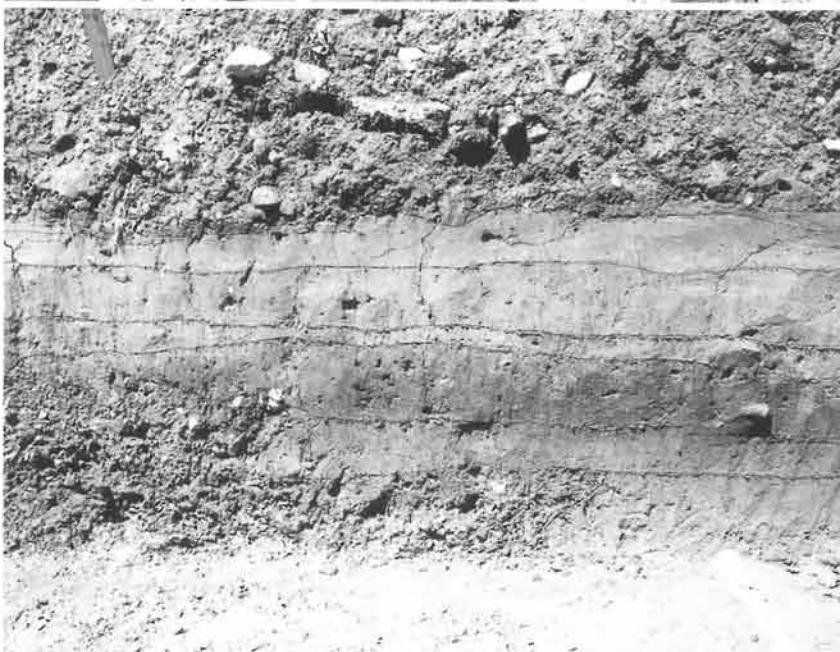
山口1次 基本土層西壁
(東から)



山口1次 下面遺構全景
(南から)



山口2次 A調査区
西半部全景（東から）



山口2次 A調査区
西半基本層序（南から）

山口2次 A調査区
溝11（東から）



山口2次 A調査区
溝87・88（東から）



山口2次 A調査区
溝87・88（北から）



PL.20



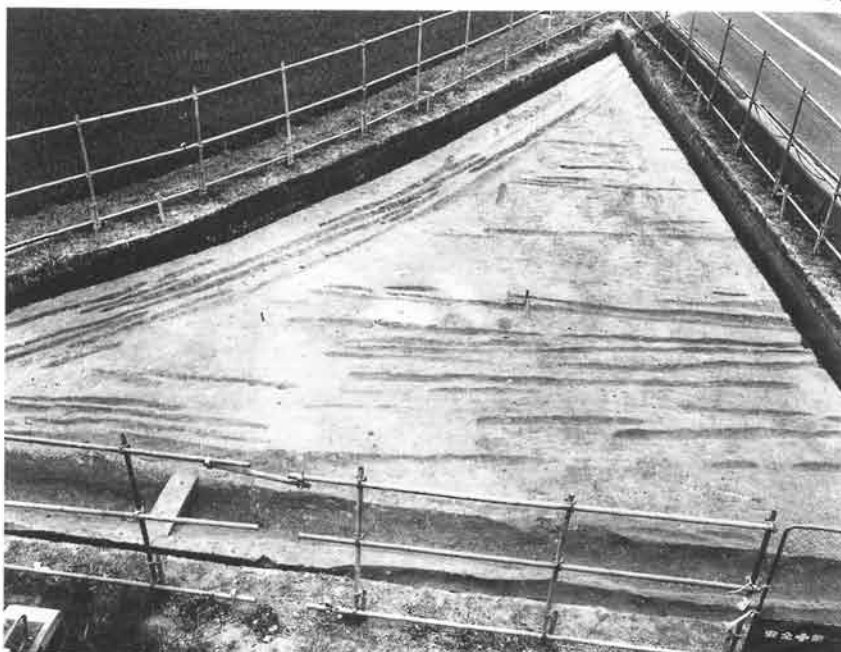
山口2次 A調査区
東半全景（西から）



山口2次 A調査区
溝66（西から）

PL.21

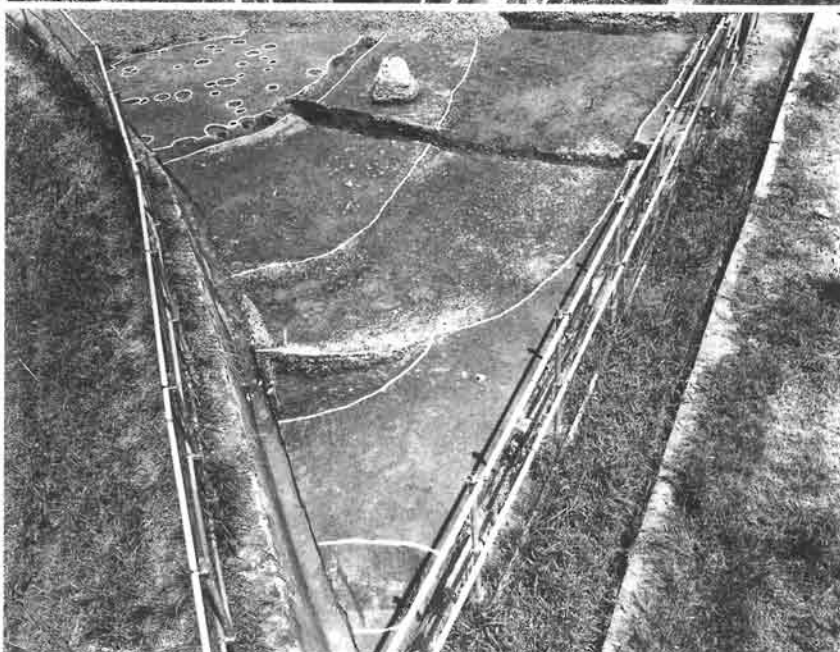
山口2次 B調査区
第3層上面遺構面全景
(東から)

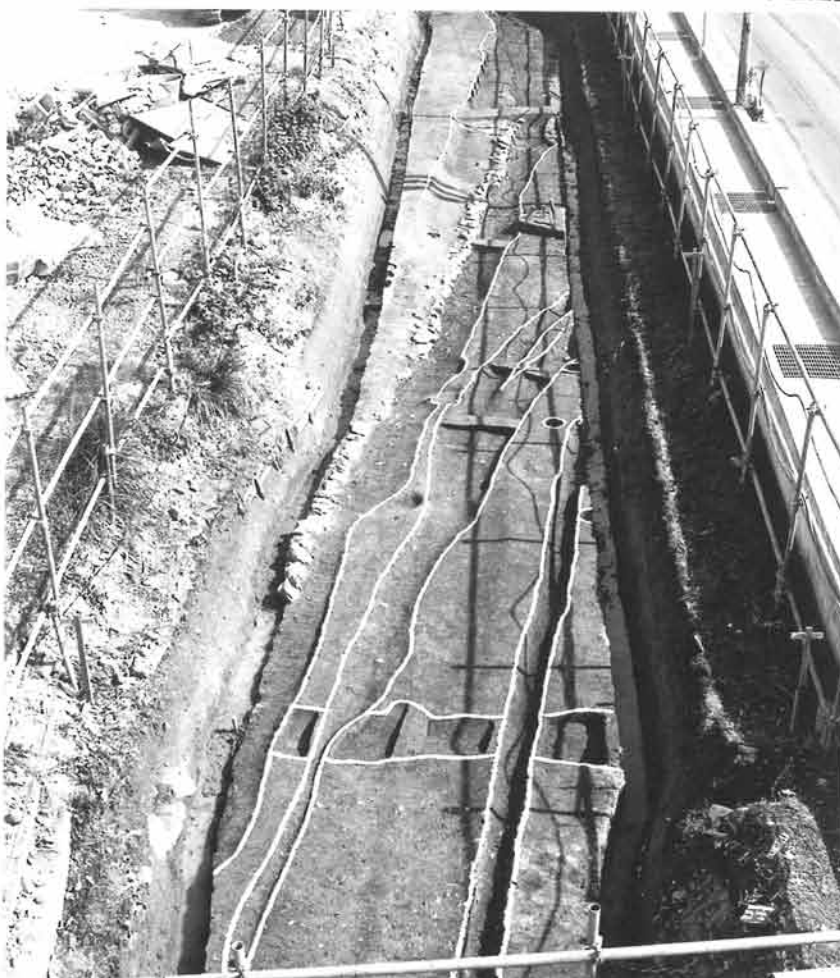


山口2次 B調査区
第5層上面遺構面全景
(南から)

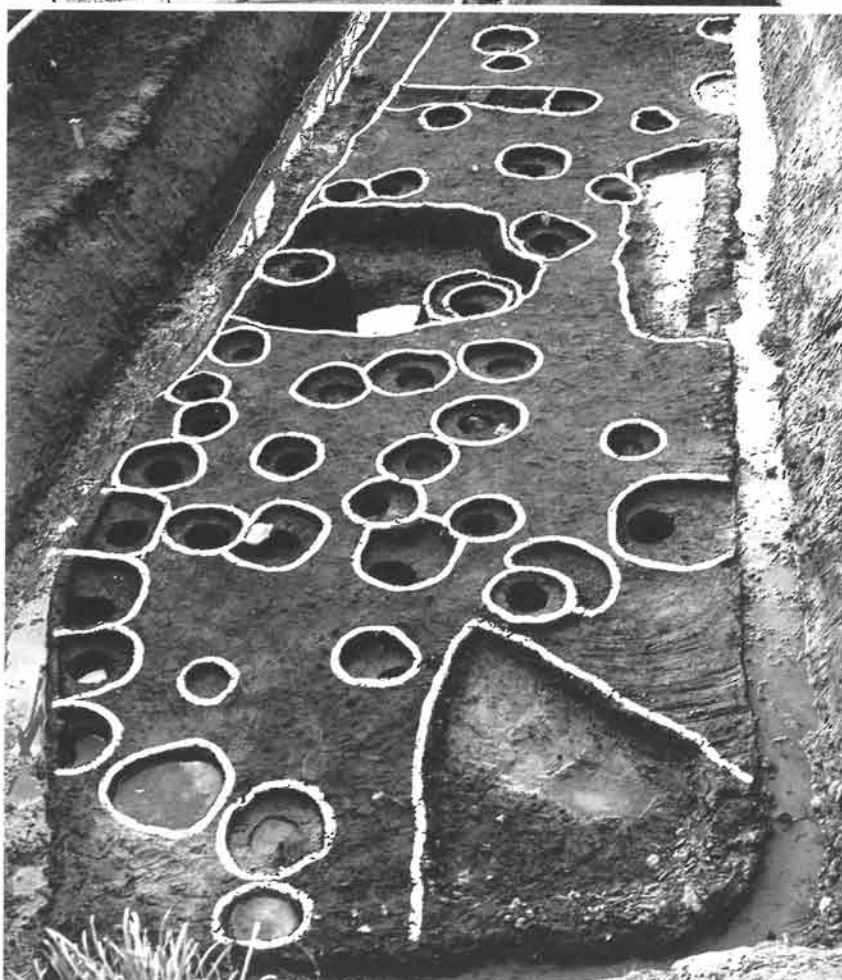


山口2次 B調査区
最終遺構面全景 (南から)





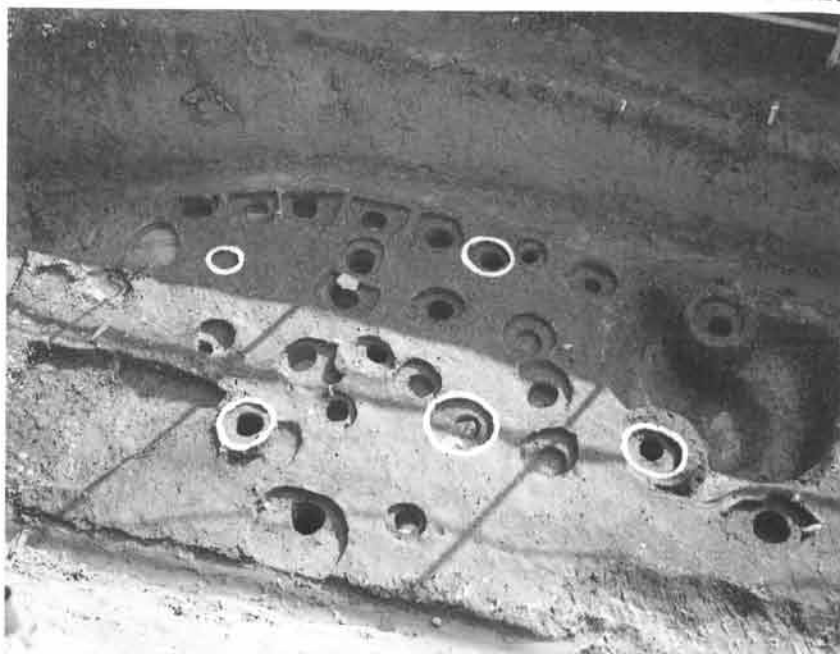
山口3次 C調査区
上面遺構面全景（西から）



山口3次 C調査区
下面遺構面全景（西から）

PL.23

山口3次 C調査区
掘立柱建物4（北から）



山口3次 C調査区
掘立柱建物5（北から）



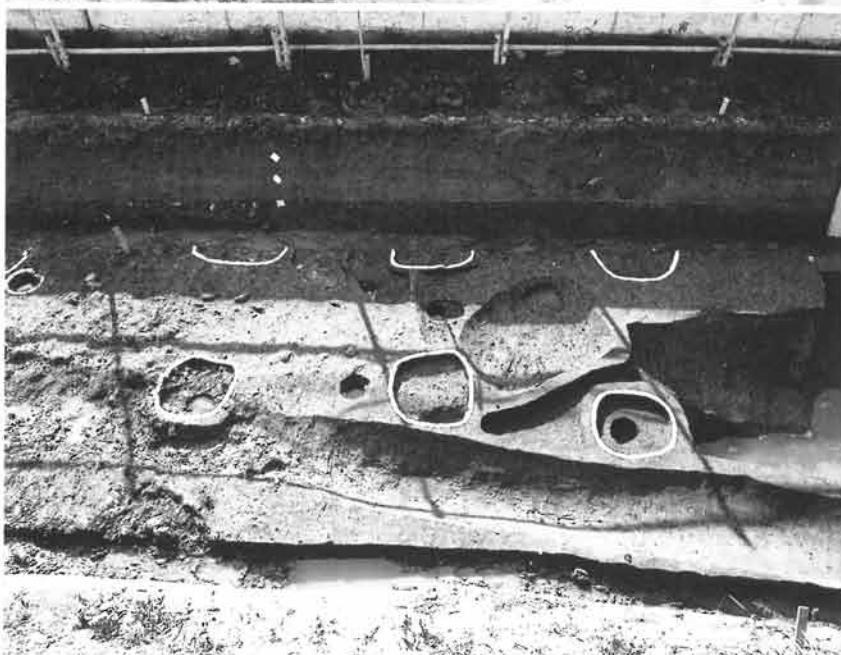
山口3次 C調査区
掘立柱建物6（北から）



山口3次 C調査区
掘立柱建物7（北から）



山口3次 C調査区
掘立柱建物8（北から）



山口3次 C調査区
溝79（西から）

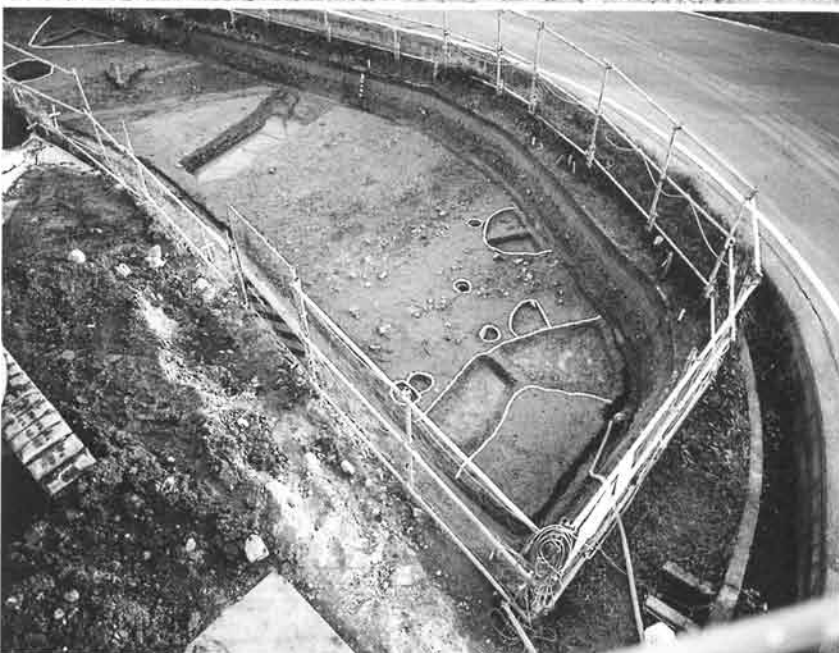


PL.25

山口3次 D調査区
土坑66（北から）



山口3次 D調査区
下面遺構全景（北西から）

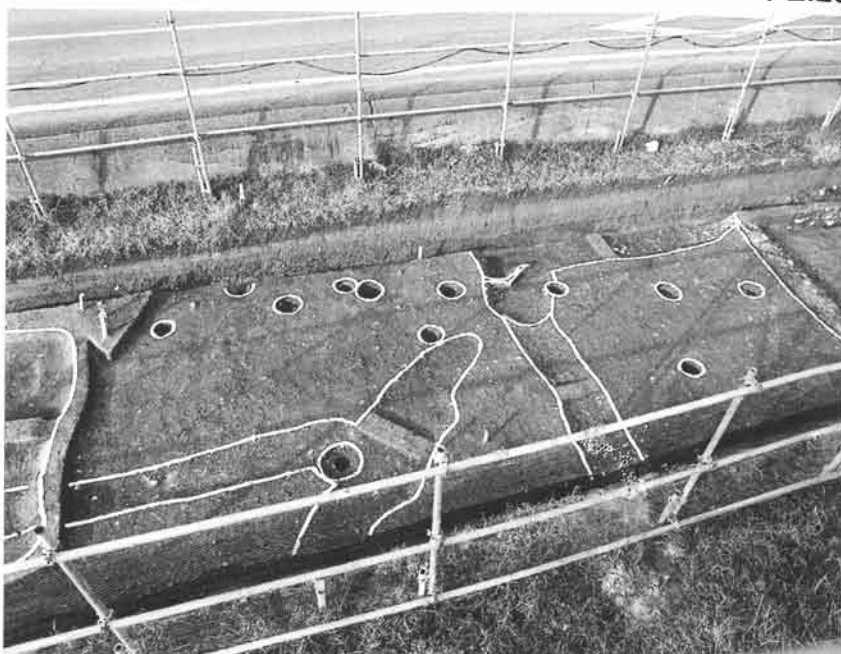


山口3次 E調査区
上面遺構全景（西から）



PL.26

山口3次 E調査区
掘立柱建物2・3
(南西から)



山口3次 E調査区
下面柱穴群と溝118
(西から)

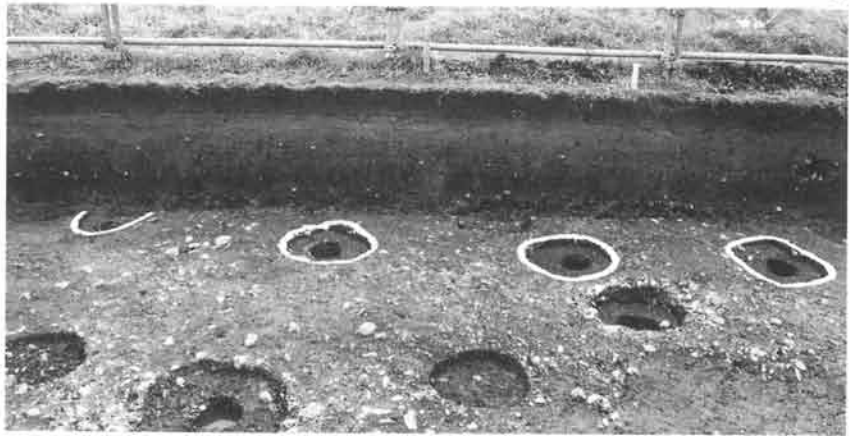


山口3次 E調査区
掘立柱建物9 (南から)



PL.27

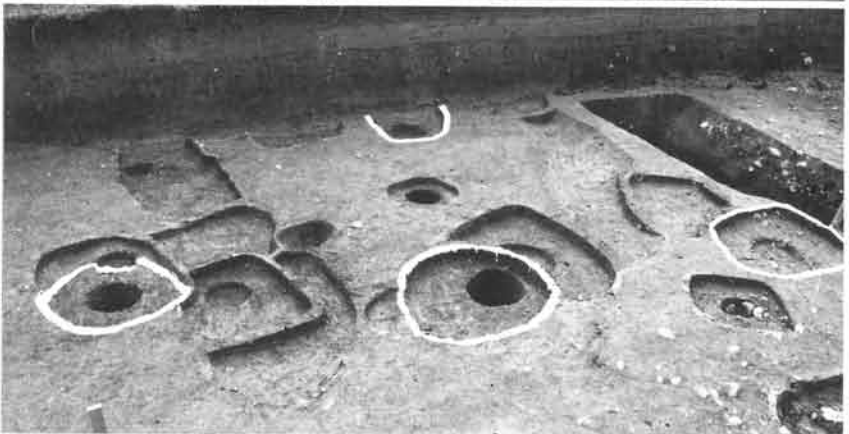
山口3次 E調査区
掘立柱建物10（北から）



山口3次 E調査区
掘立柱建物11（南から）



山口3次 E調査区
掘立柱建物12（北から）



山口3次 E調査区
溝118（南から）



山口4次 G・H調査区
全景（東から）



山口4次 G調査区
土坑3（南から）



山口4次 H調査区
溝6（西から）





3



4



5



6



7



8



9



10



11



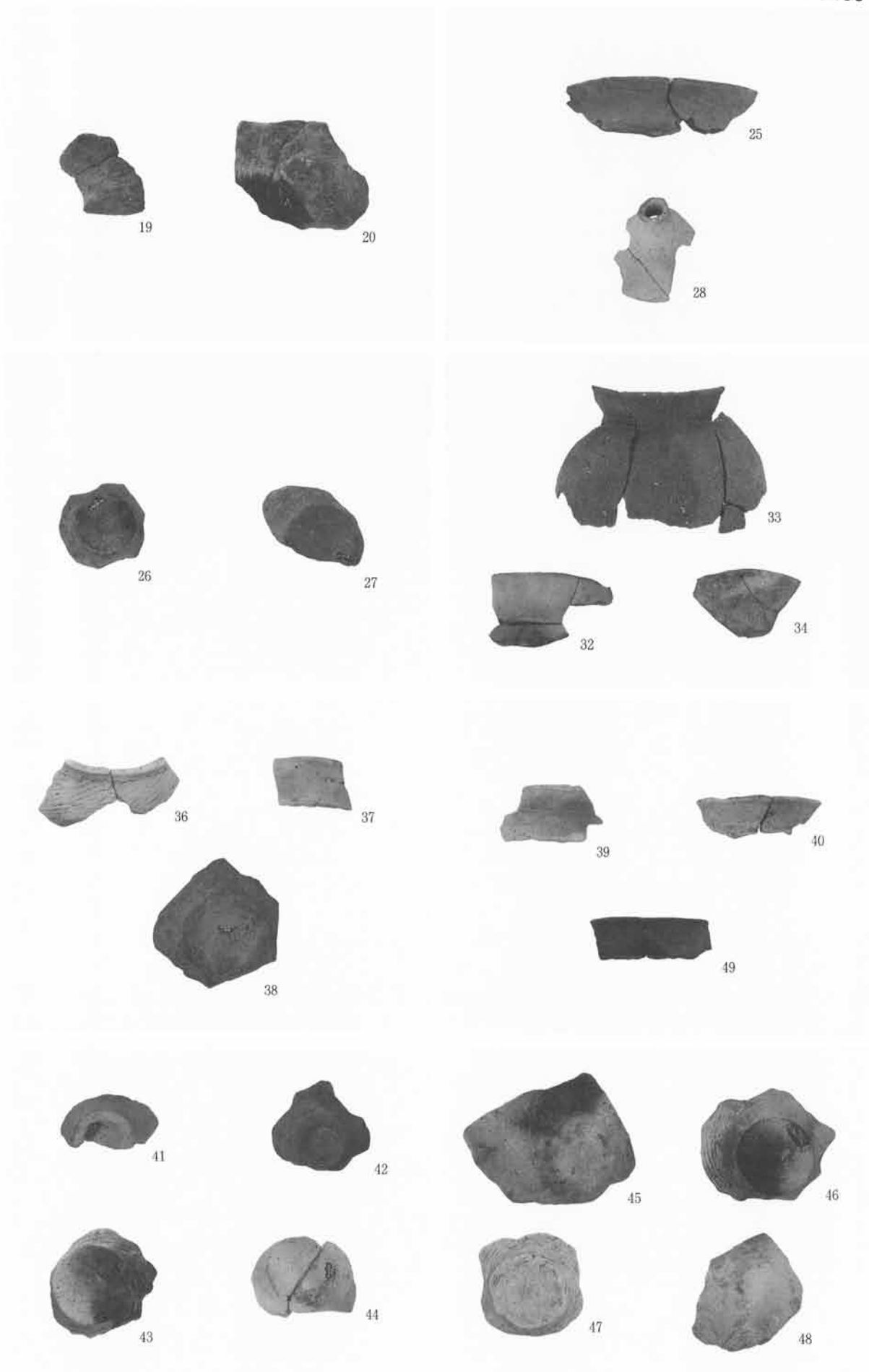
13



14



15





51



52



53



54



56



61



62



63



65



67



66



69



68



70



73



76



77



78



79



80



81



83



84



87



88



86



89



90



91



93



94



95



96



98



99



100



101



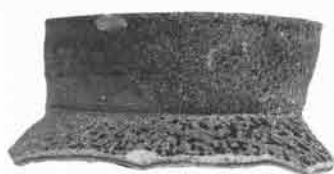
101 (上から)



102



105



108



110



111



114



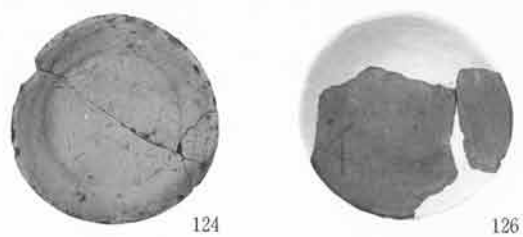
113

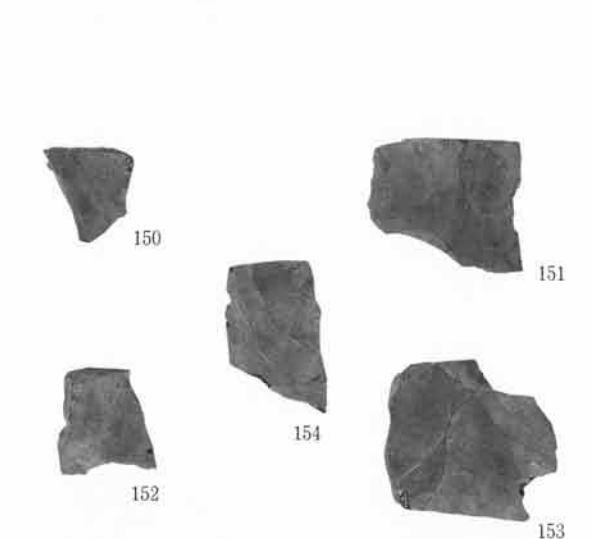
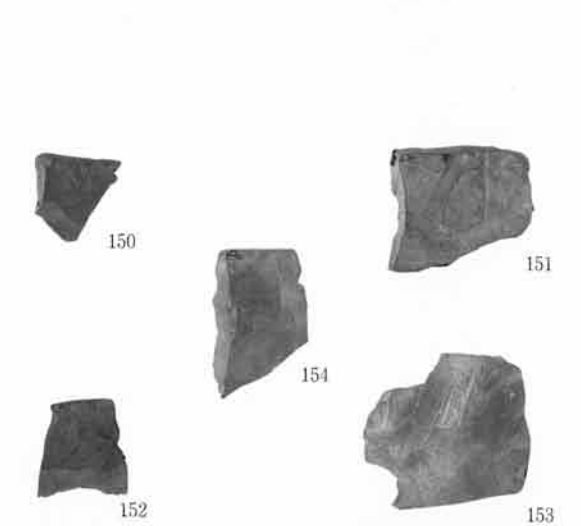
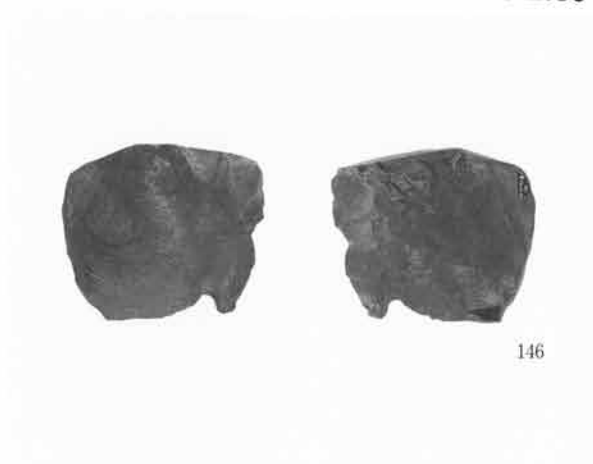
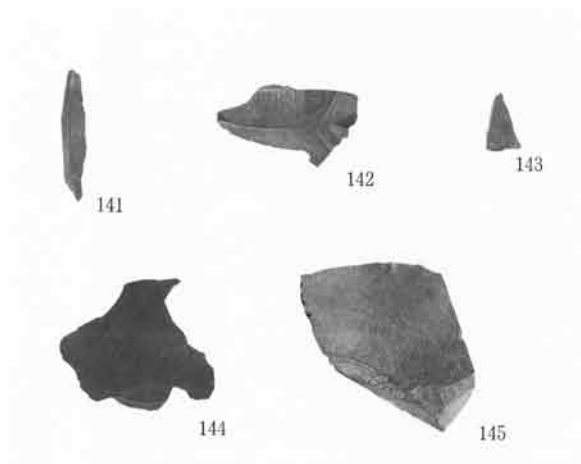


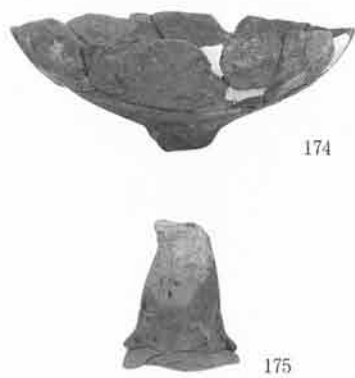
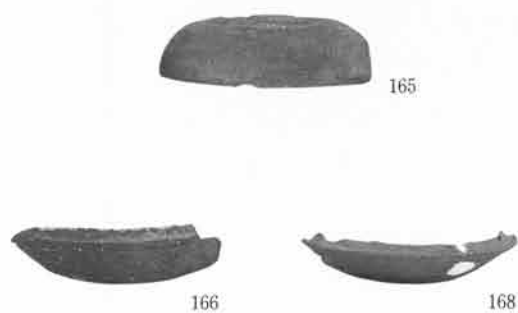
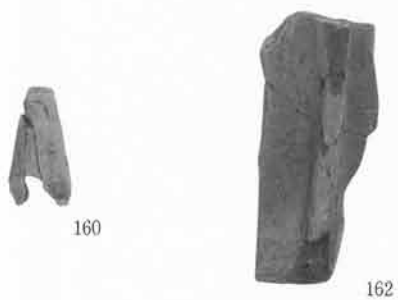
116

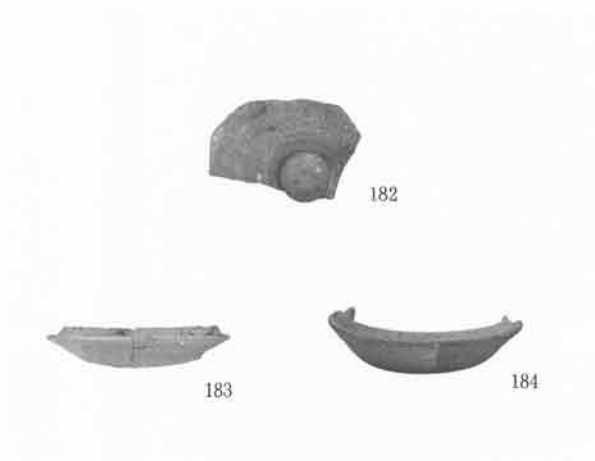


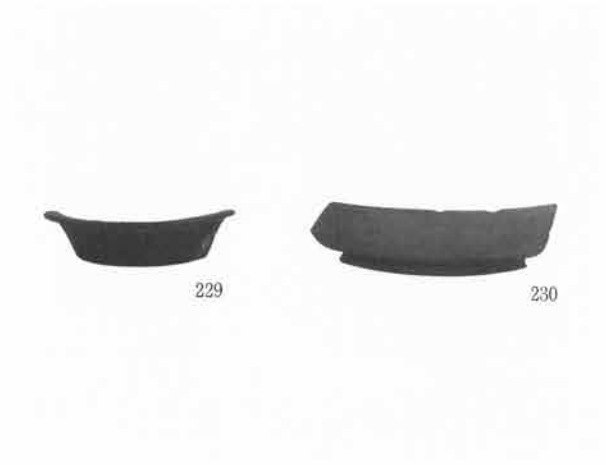
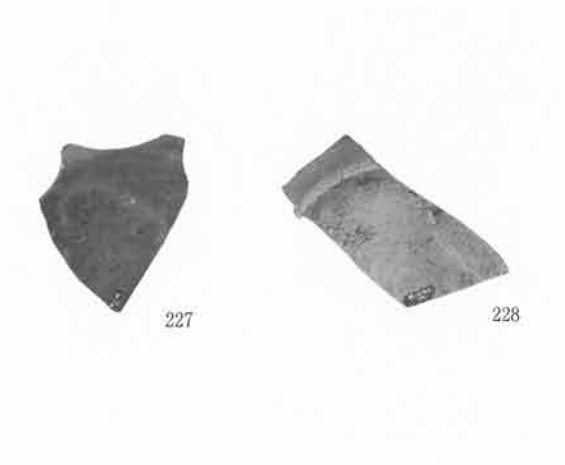
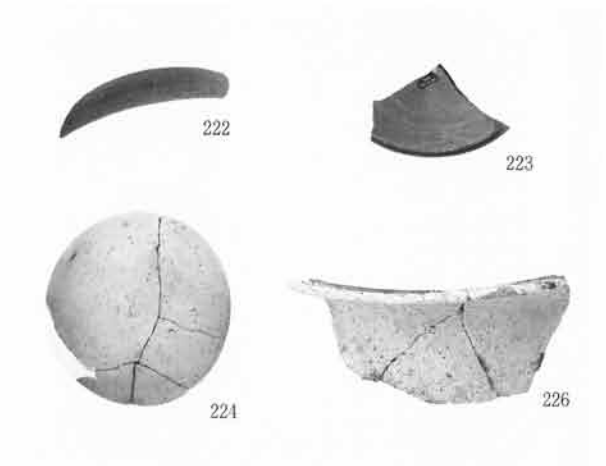
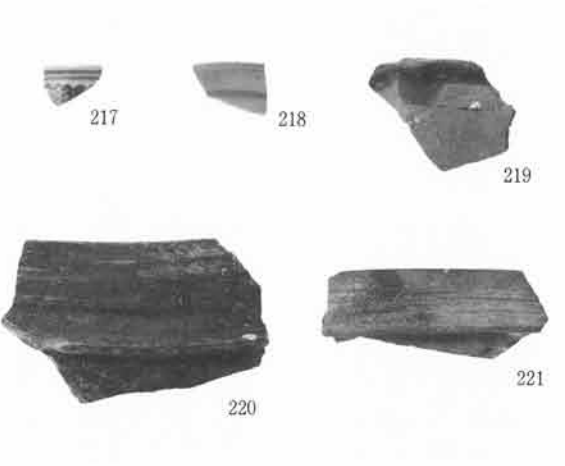
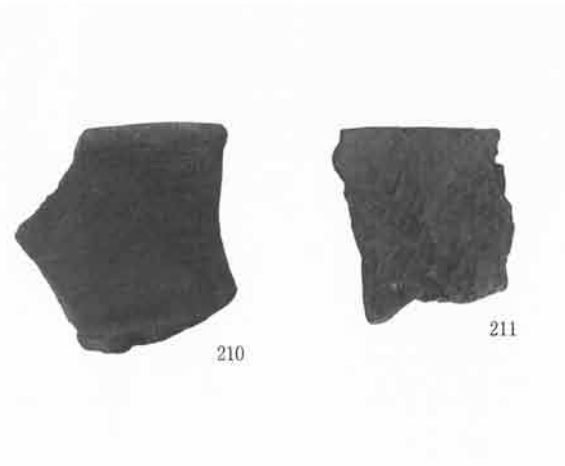
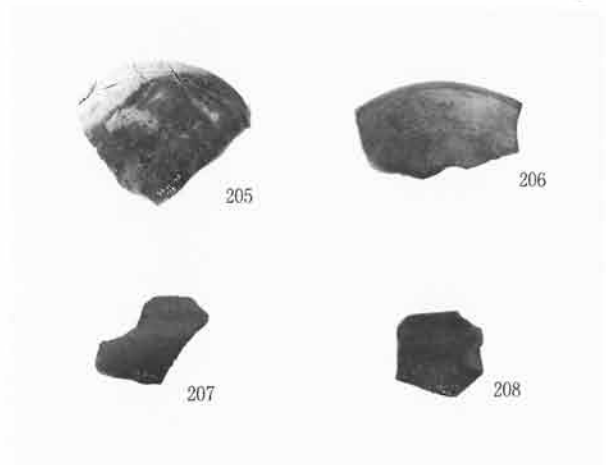
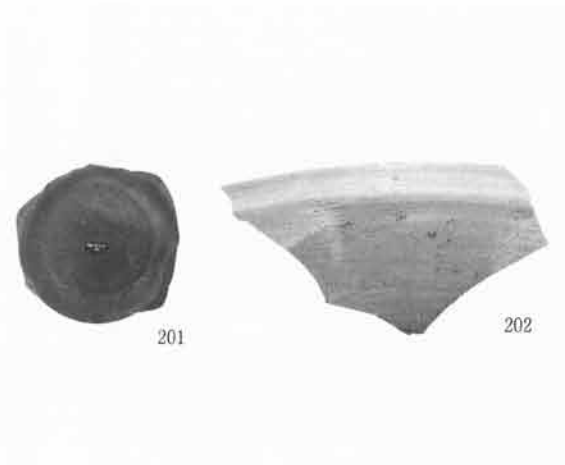
119

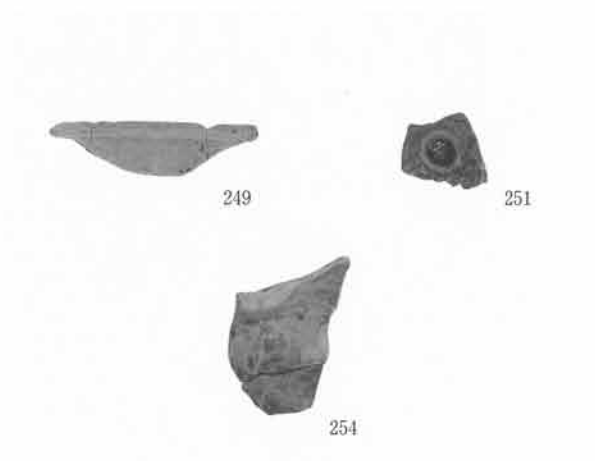
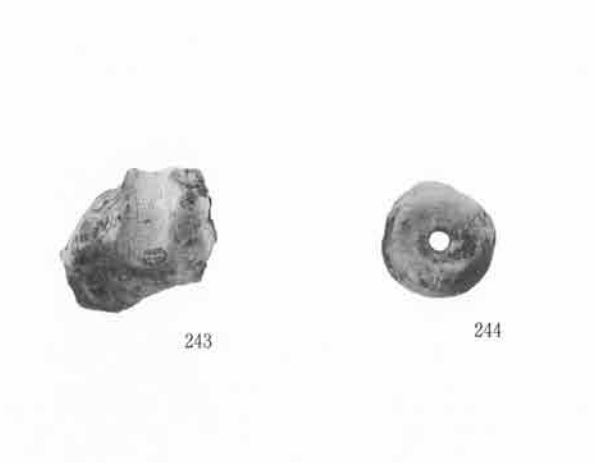
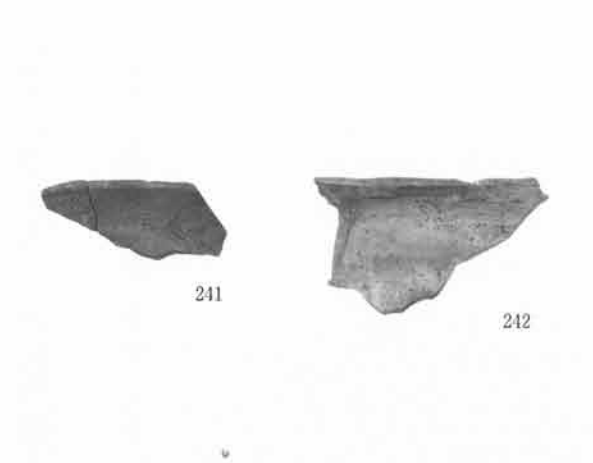
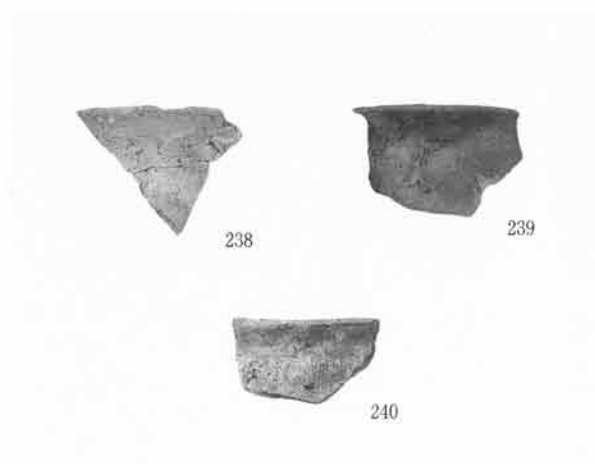
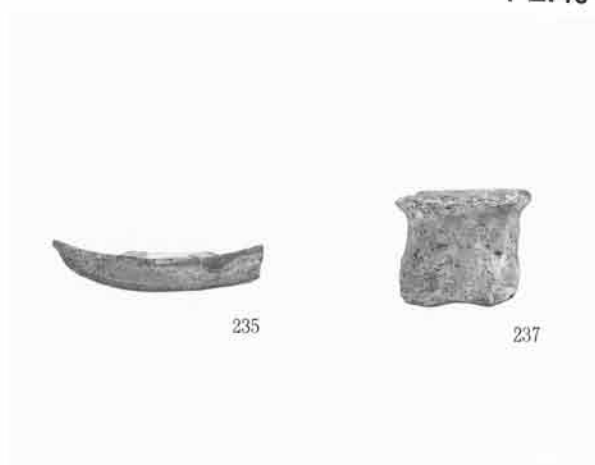
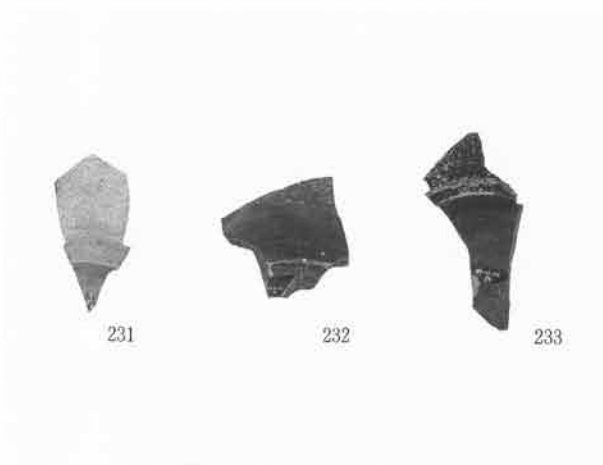














256



257



258



259



260



261



262



263



264



265



266



267



268



269



270



271



272



273



274



275



278



279



281



282



283



286



287



290



291

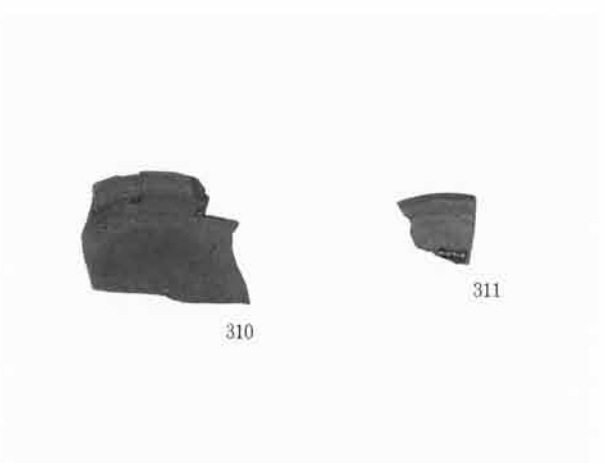
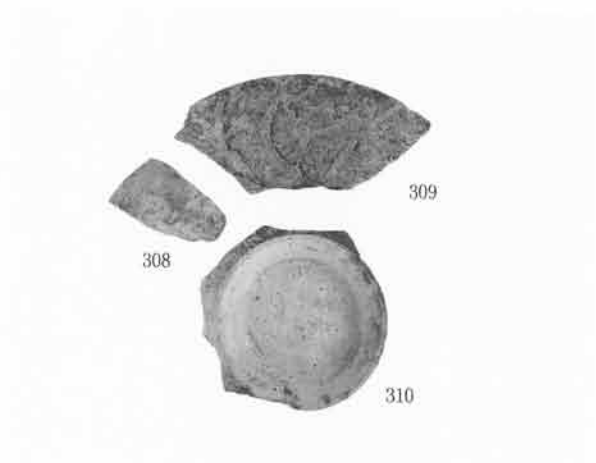
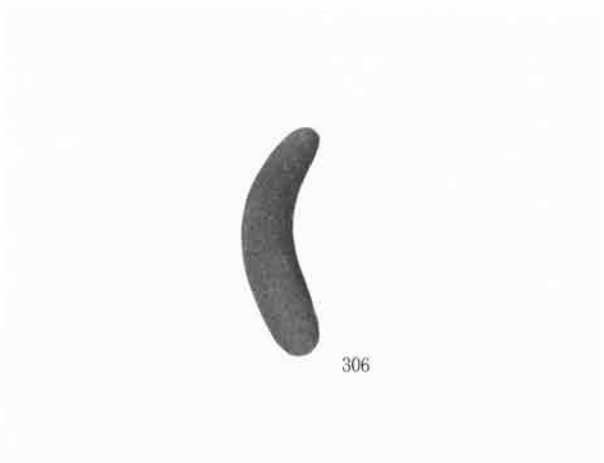
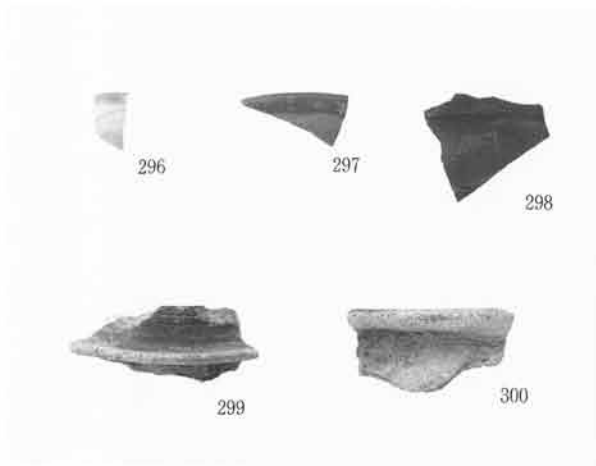


292



293

PL.43





313



314



315



316



318



319



320



321



322



323



324



325



326

川辺遺跡写真図版

PL.45

川辺1次調査区全景
(西上空から)



川辺1次北側調査区
上面遺構全景(北から)



川辺1次南側調査区
上面遺構全景(西から)



川辺1次 掘立柱建物1
(北から)



川辺1次 掘立柱建物2
(東から)



川辺1次 掘立柱建物3
(東から)



川辺1次 掘立柱建物4
(北から)



川辺1次 掘立柱建物5
(北から)

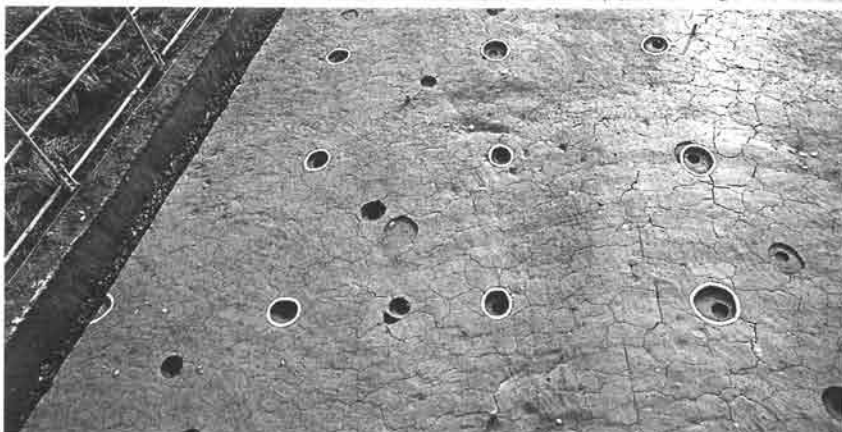


PL.47

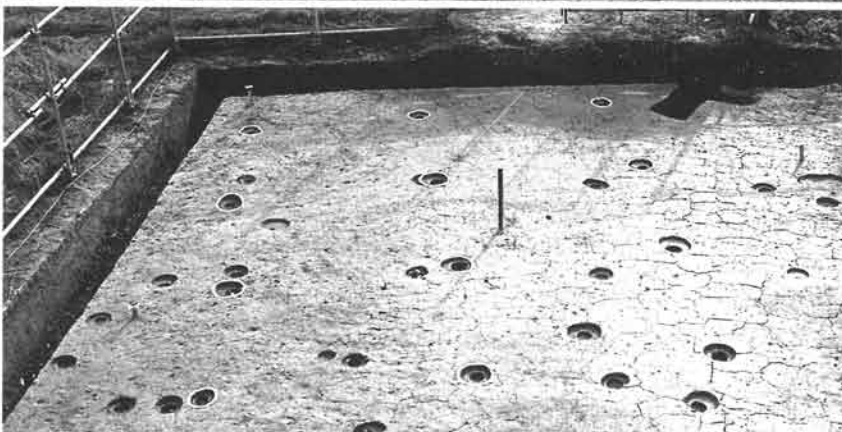
川辺1次 掘立柱建物6
(北から)



川辺1次 掘立柱建物7
(北から)



川辺1次 掘立柱建物8
(北から)

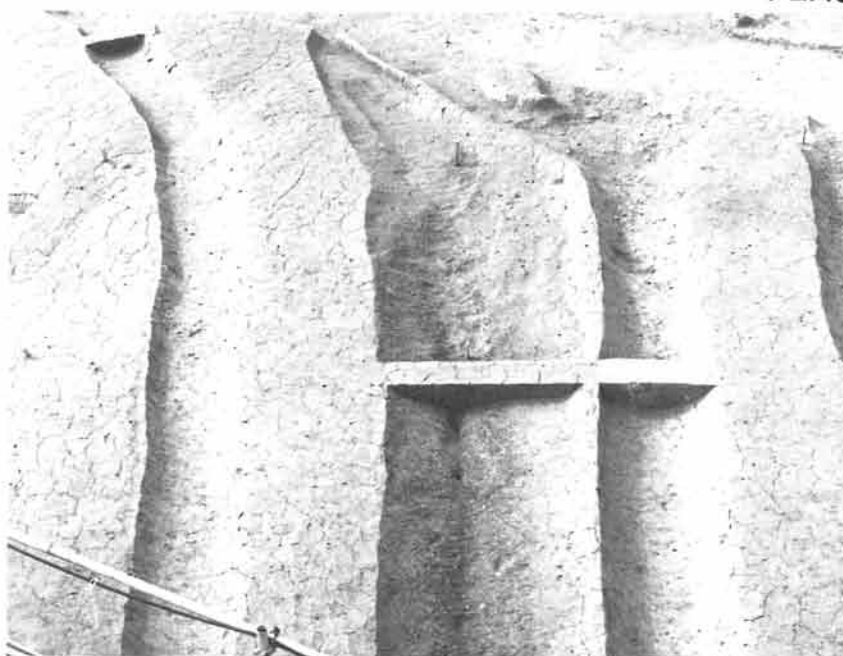


川辺1次 掘立柱建物9
(東から)



PL.48

川辺1次
溝403・410・411・415
(東から)



川辺1次
溝465 (東から)



川辺1次
溝490 (東から)



PL.49

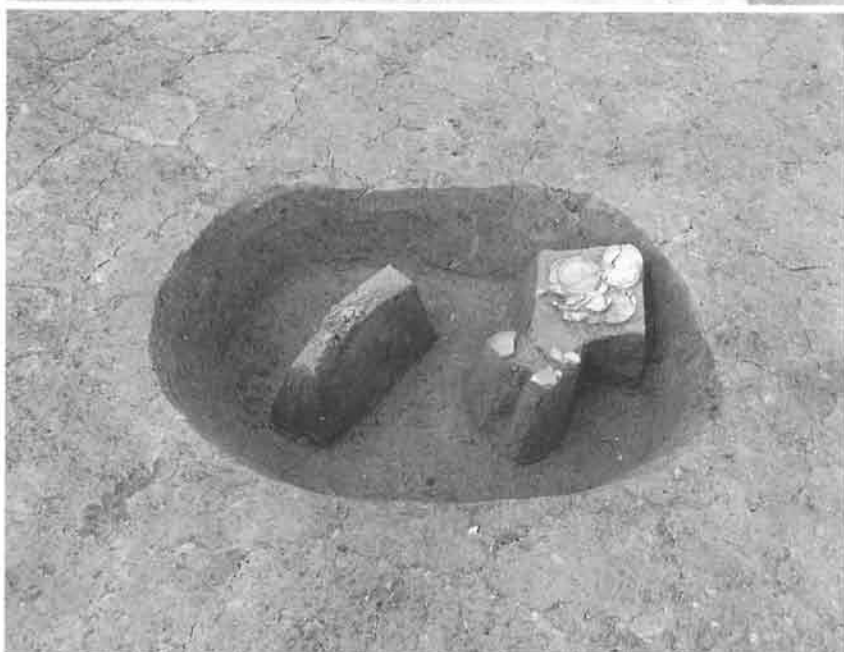
川辺1次
土壙墓362（北から）



川辺1次
土壙墓365（南から）



川辺1次
土壙墓375（東から）



PL.50

川辺1次北側調査区
下面遺構全景（北から）



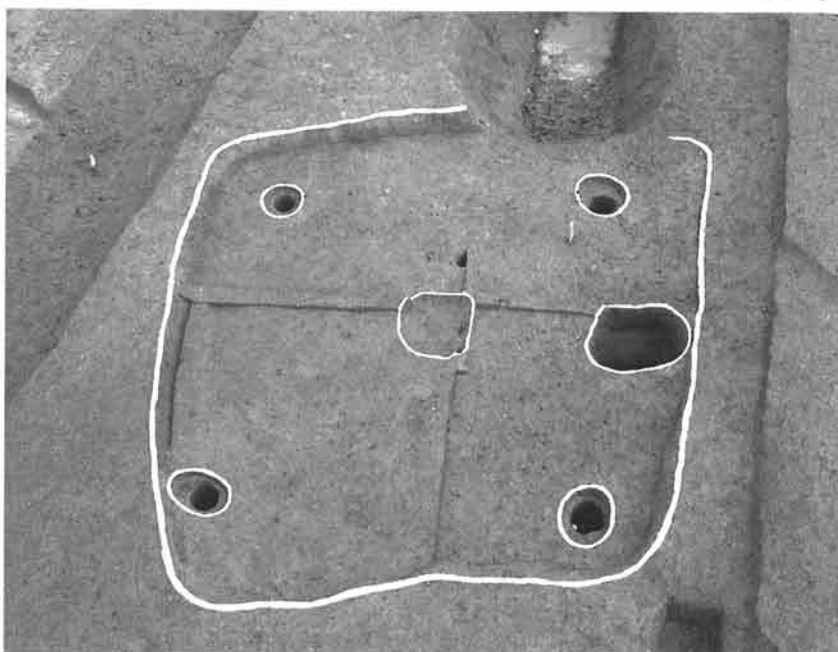
川辺1次北側調査区
下面遺構
南半部全景（南から）



川辺1次南側調査区
下面遺構全景（西から）



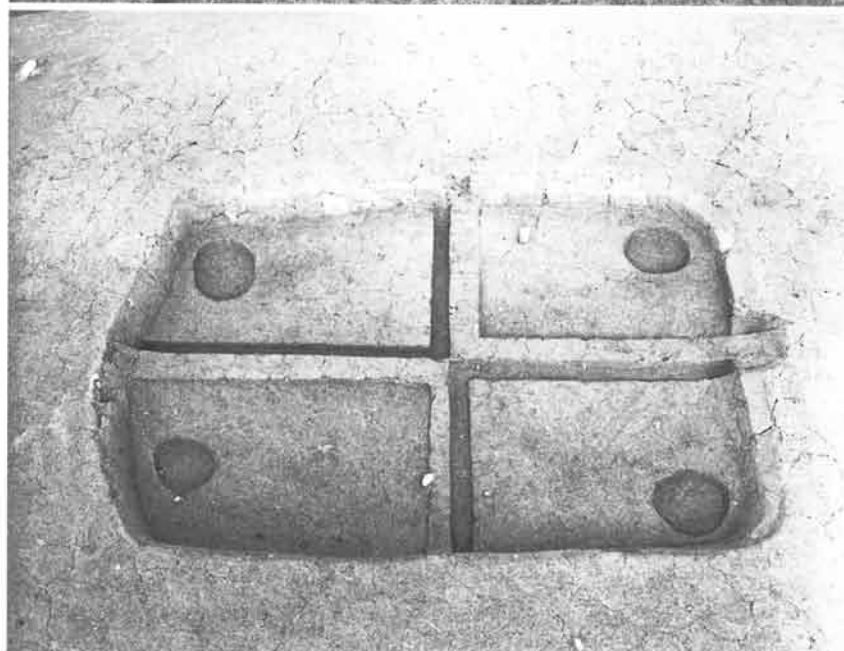
PL.51



川辺1次 竪穴住居17
(西から)



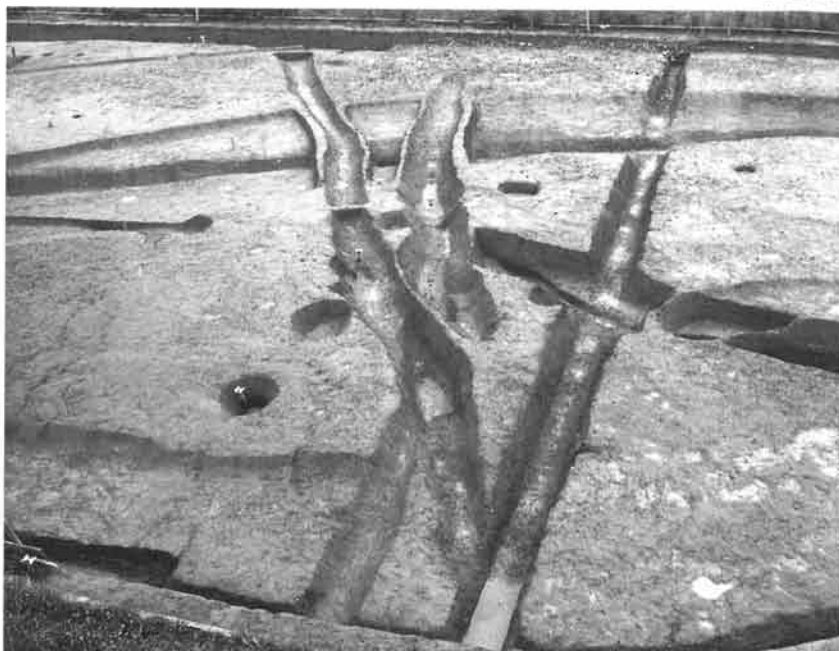
川辺1次 竪穴住居17
炭・焼土検出状況
(西から)



川辺1次 竪穴住居495
(南から)

PL.52

川辺1次 溝44・48
(北から)



川辺1次 溝48
セクションベルト
(南から)



川辺1次 溝357・12
(南から)

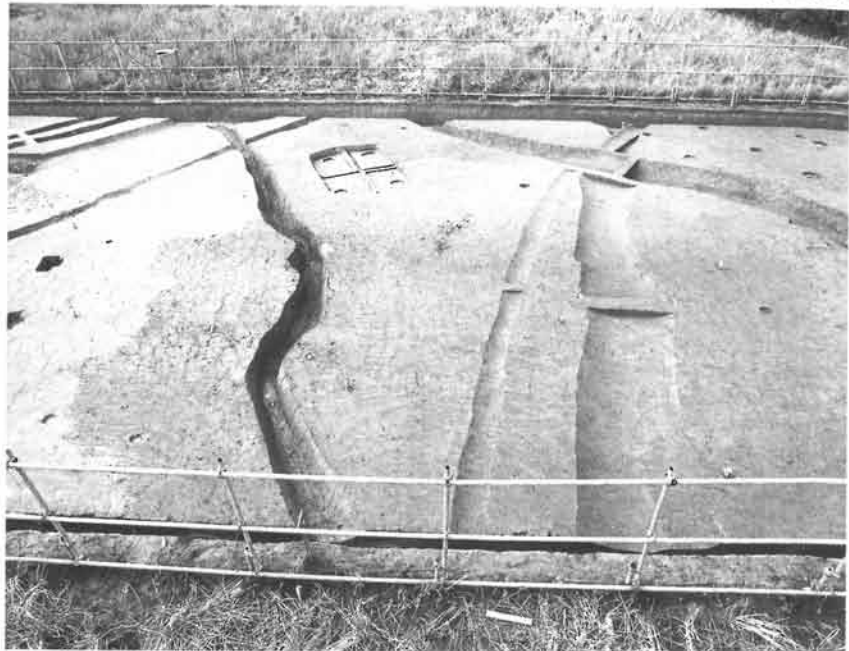


川辺1次 溝357
セクションベルト
(南から)



PL.53

川辺1次
溝465・468・469
(東から)



川辺1次
溝467・490 (東から)

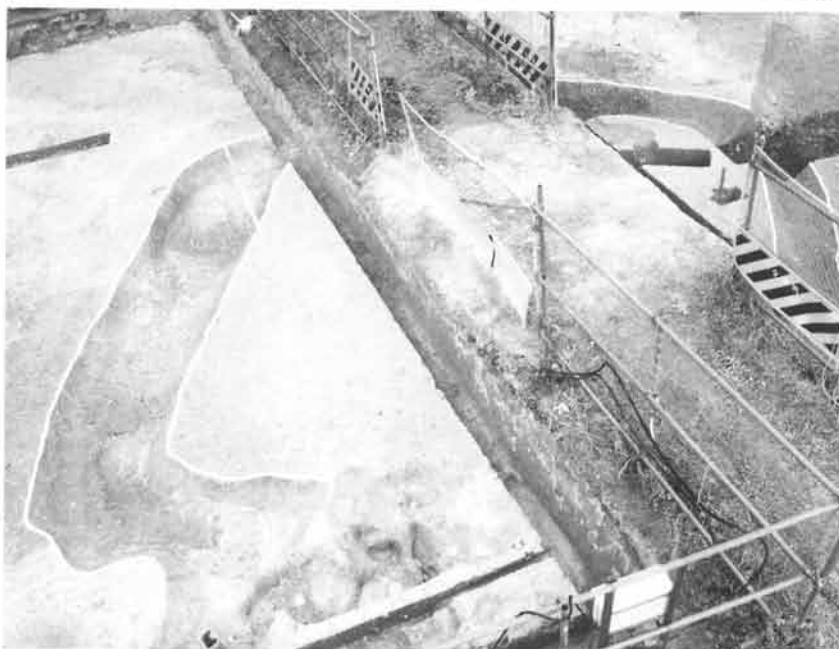


川辺1次 土坑354
半裁状況 (南東から)



PL.54

川辺1次
遺構536〔方形周溝墓〕
（東から）



周溝部土器出土状況
（上から）



周溝部土器出土状況
（南から）

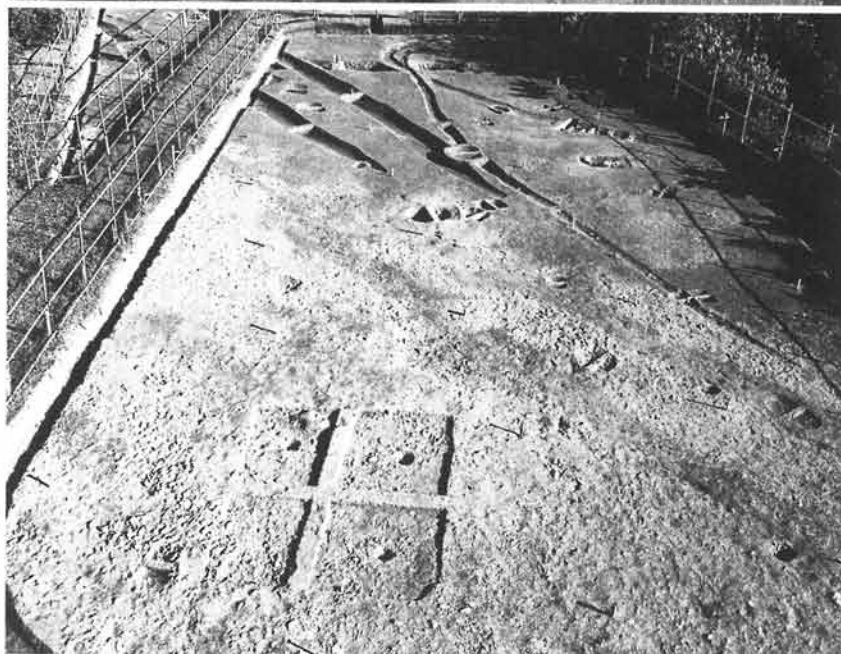


北側周溝南壁土層
（北から）





川辺2次調査区 全景
(西上空から)

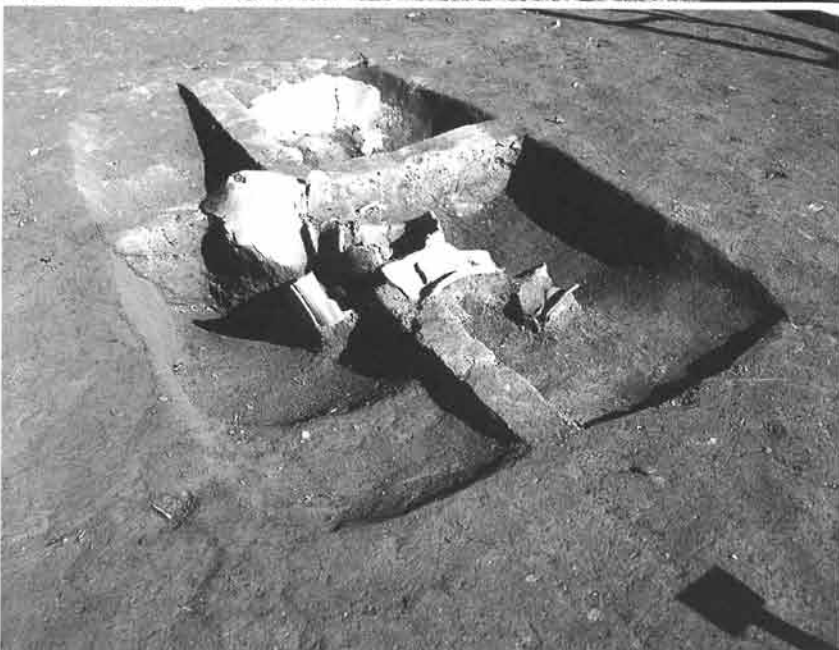


川辺2次A調査区 全景
(西から)

PL.56



川辺2次A調査区
東半部 全景（西から）



川辺2次A調査区
土坑26（南から）



川辺2次A調査区
土坑31（南から）

PL.57

川辺2次A調査区
竪穴住居1（東から）



同上
竪穴住居1 竈部分
（北西から）



川辺2次A調査区
竪穴住居2（西東から）



PL.58

川辺2次A調査区
竪穴住居4（北から）



同上
竪穴住居4（東から）

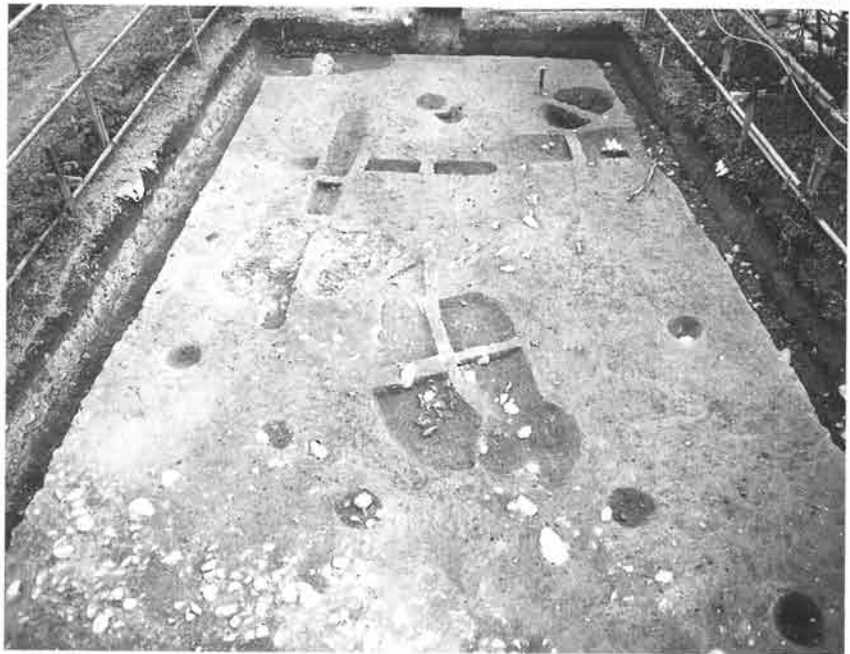


同上
竈断割状況（西から）



PL.59

川辺2次B調査区
東半部全景（西から）



川辺2次B調査区
土坑35・39（西から）



川辺2次B調査区
土坑37（南東から）



川辺2次C調査区
上面遺構全景（東から）



川辺2次C調査区
中央掘立柱穴群（南から）



川辺2次C調査区
下面遺構全景（東から）



PL.61



川辺2次C調査区
掘立柱建物1（南から）



同上
柱穴222 断割り状況
（西から）



川辺2次C調査区
掘立柱建物2（東から）

PL.62

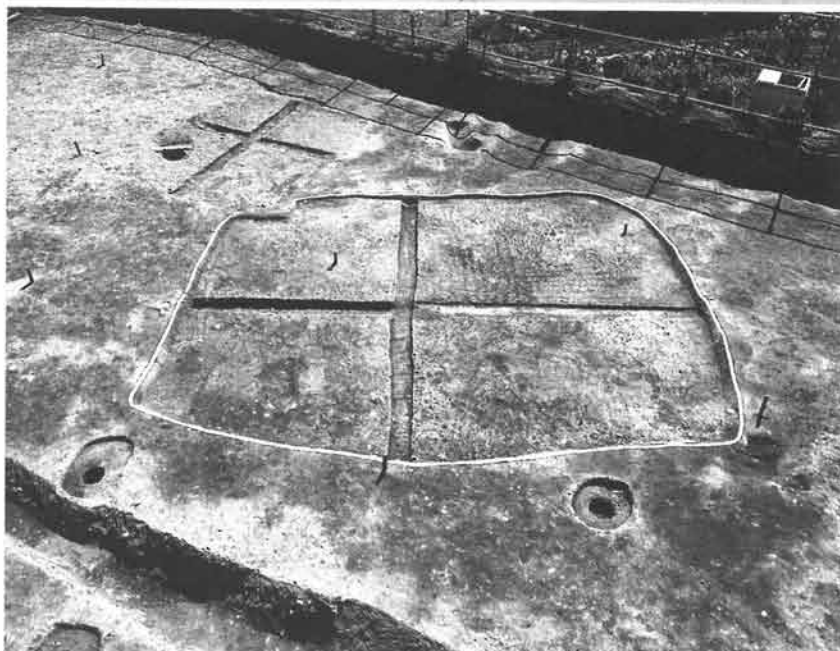
川辺2次C調査区
中央竪穴住居群（東から）



川辺2次C調査区
竪穴住居572（南東から）



川辺2次C調査区
竪穴住居558（北から）

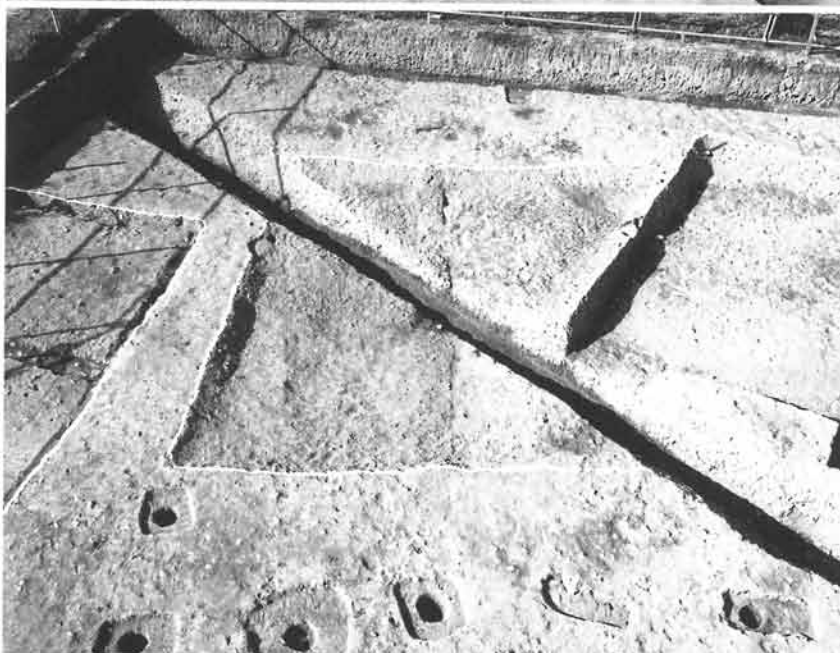


PL.63

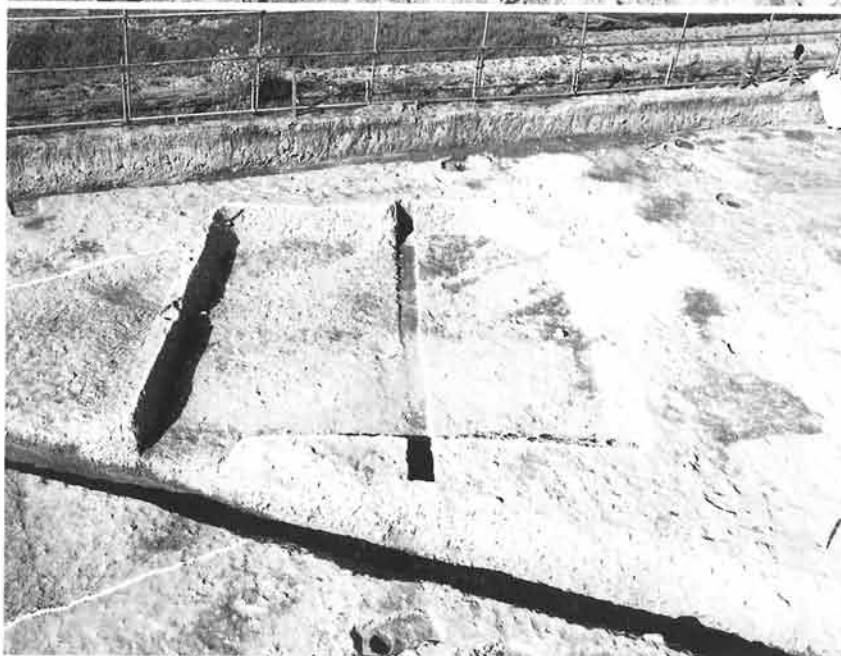
川辺2次C調査区
竪穴住居558 セクショ
ンベルト（北東から）



川辺2次C調査区
竪穴住居611（南から）



川辺2次C調査区
竪穴住居612（南から）



PL.64

川辺 2 次 C 調査区
竪穴住居579・586
(北から)



同上
(東から)



竪穴住居579 炉土層
(北東から)



PL.65

川辺2次C調査区
竪穴住居586 セクショ
ンベルト（北東から）



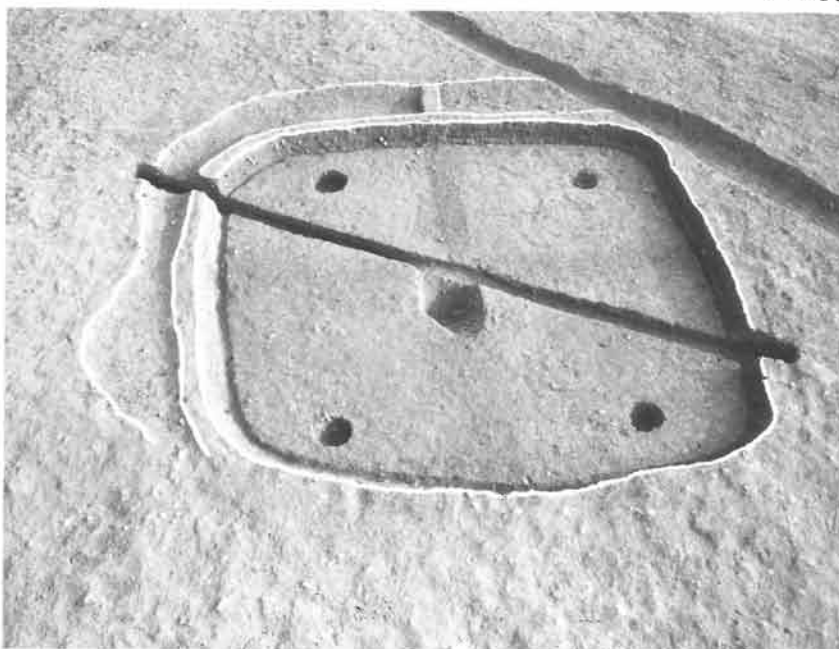
竪穴住居586
炉跡断割状況（東から）



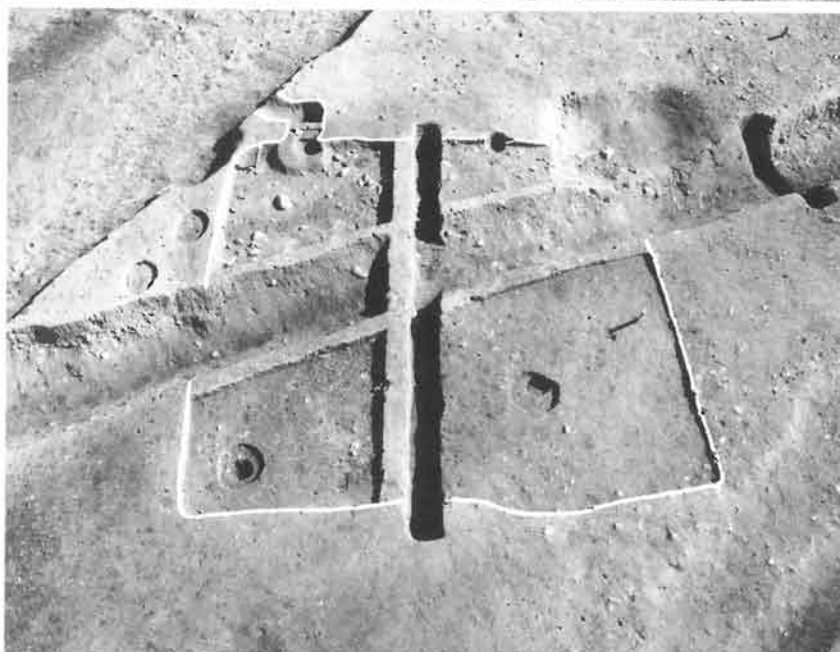
川辺2次C調査区
竪穴住居587（北から）



PL.66



川辺 2 次 C 調査区
竖穴住居575 (西から)



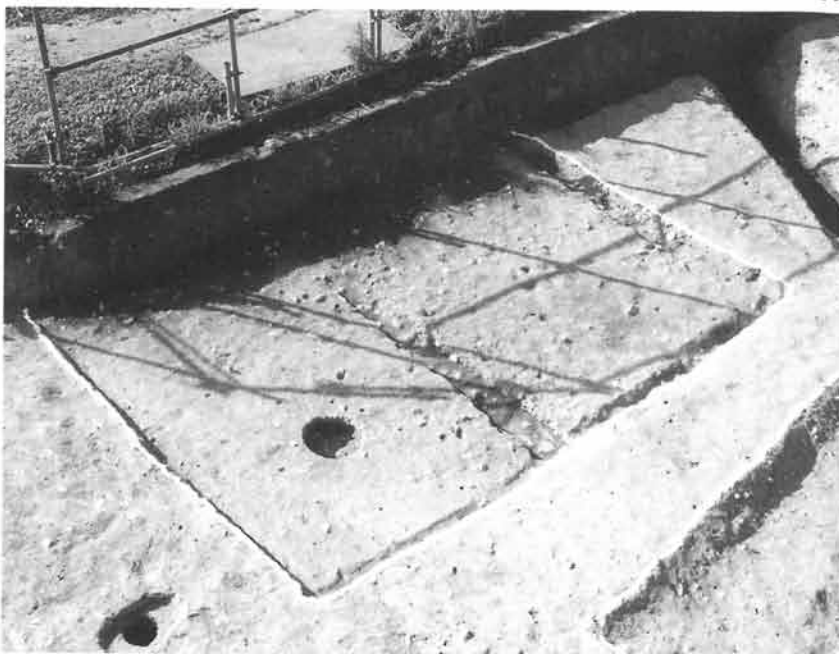
川辺 2 次 C 調査区
竖穴住居361 (南西から)



同上
竈・煙道部 (西から)

PL.67

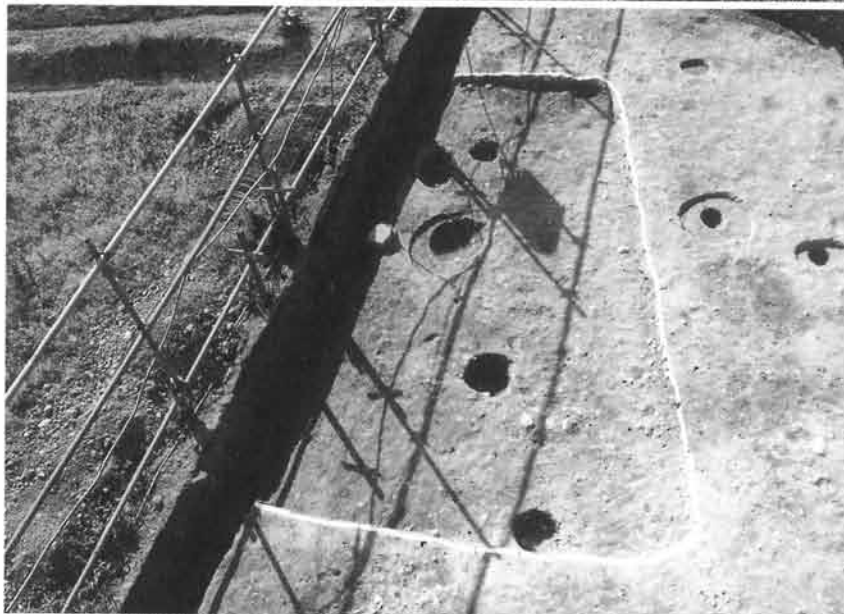
川辺2次C調査区
竪穴住居480（南東から）



同上
鉄斧出土状況（北から）



川辺2次C調査区
竪穴住居517（東から）



川辺2次C調査区
竪穴住居149（北から）

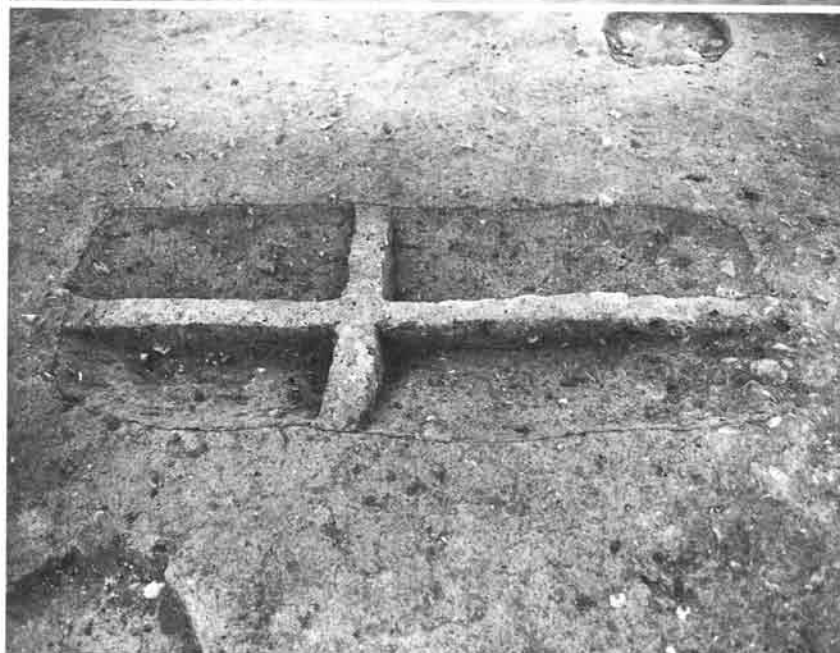


PL.68

川辺2次C調査区
土壙墓591（西から）



川辺2次C調査区
土坑425（北から）



川辺2次C調査区
溝359・368（東から）

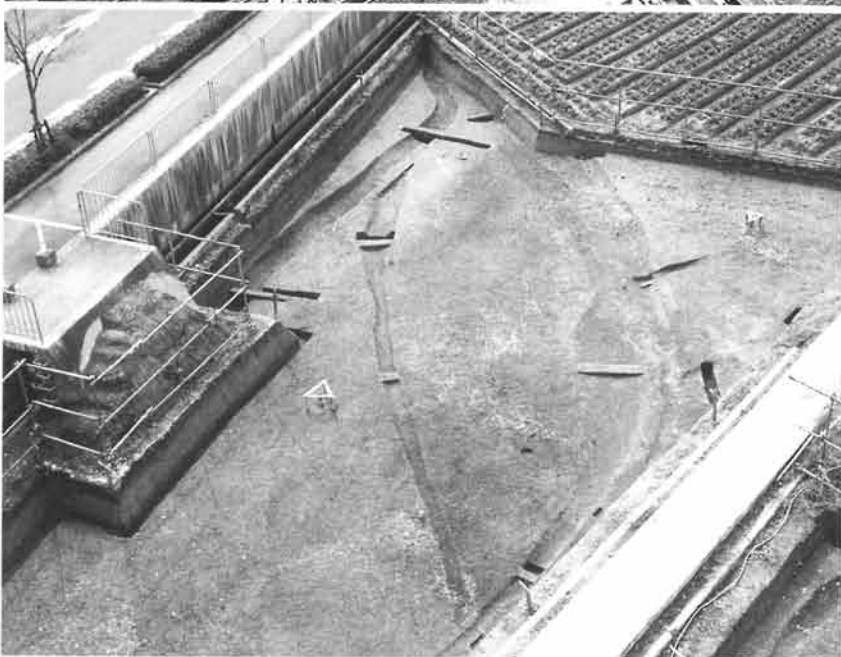


PL.69

川辺2次D調査区 全景
(東から)



川辺2次F調査区
溝67・68・71 (東から)



川辺2次F調査区
溝495 (東から)



川辺3次1調査区
上面遺構 全景（西から）



川辺3次 土坑17
（西から）

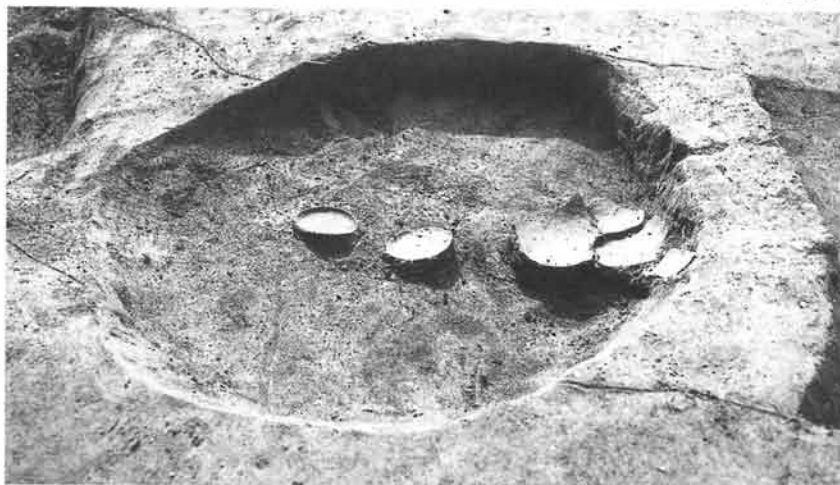


川辺3次 土坑30
（北から）



PL.71

川辺3次 土坑45
(東から)



川辺3次1調査区
下面遺構全景(西から)



川辺3次 竪穴住居44
(南から)



同上
遺物出土状況(南から)



PL.72

川辺3次 溝21・22
(南西から)



川辺3次 土坑44
(南西から)



川辺3次 土壙墓123の
遺物1～3出土状況
(北西から)



同・遺物4～6出土状況
(南東から)



PL.73

川辺3次2調査区全景
(西から)



川辺3次3調査区全景
(西から)



川辺3次 掘立柱建物1
(南から)



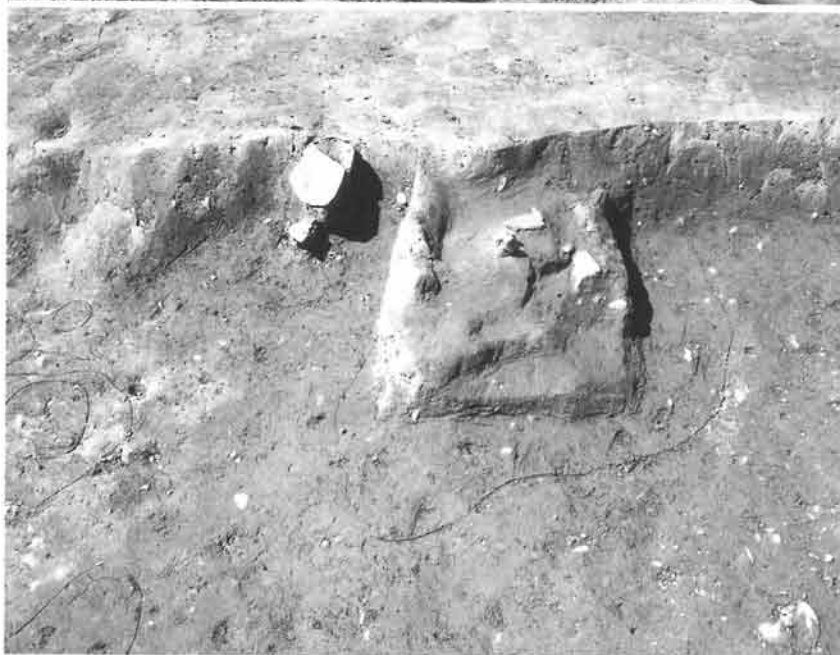
川辺3次 掘立柱建物2
(南から)



川辺3次 竪穴住居68
(南から)



同上
竈部分 (南から)



川辺3次 竪穴住居90
(南から)



PL.75



川辺 3 次 竪穴住居94
(南から)



川辺 3 次 溝54
(南東から)



同上底部
遺物出土状況 (南西から)



川辺3次 土坑101
遺物出土状況（南から）



川辺3次 土坑68-4
遺物出土状況（南から）



川辺3次 土坑137
遺物出土状況（南から）

PL.77

川辺3次 土坑129
検出状況（南から）



川辺3次 土坑129
須恵器高坏検出状況
（南から）



川辺3次 土坑129
f層検出状況（南から）

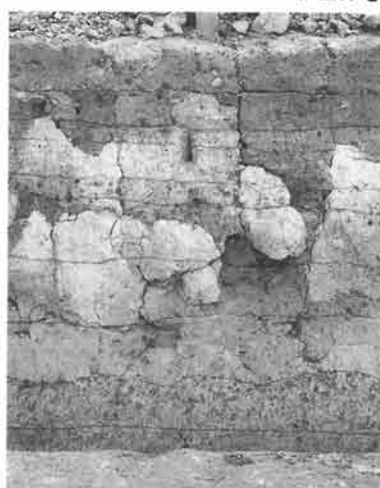


PL.78

川辺1次基本層序
北側調査区東壁
(K4区g13付近)



川辺1次基本層序
南側調査区北壁
(J4区s19付近)



川辺2次基本層序
A調査区南壁
(J4区e22付近)



川辺2次基本層序
B調査区南壁
(I4区r20付近)



川辺2次基本層序
C調査区北壁
(I4区f21付近)



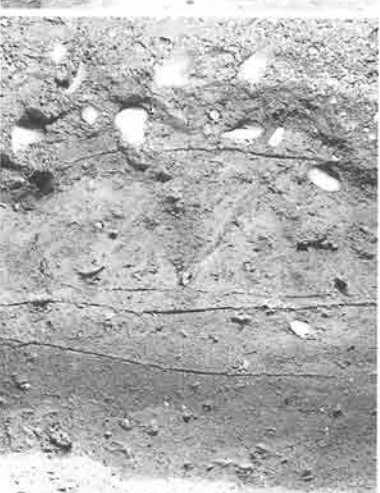
川辺2次基本層序
C調査区南壁
(H5区w8付近)



川辺3次基本層序
1調査区北壁
(J4区f17付近)



川辺3次基本層序
2調査区東壁
(I4区j18付近)







21



22



24



25



26



23



27



28



29



30



31



32

PL.81



35

M 1 - 66



36

M 1 - 64



37

M 1 - 85



37 (天井部)

M 1 - 84



38

M 1 - 103



39

M 1 - 36



40

M 1 - 107



43

M 1 - 44



44



42

M 1 - 41



45 (底面)

M 1 - 40



46

M 1 - 40



47



48

M 1 - 91



50

M 1 - 91



51

M 1 - 89



53



56

M 1 - 89



57



58

M 1 - 61



60



63

M 1 - 55



61



62



64



65



67



66



73



75



74



76



77



78



83



84



88



89



90



91



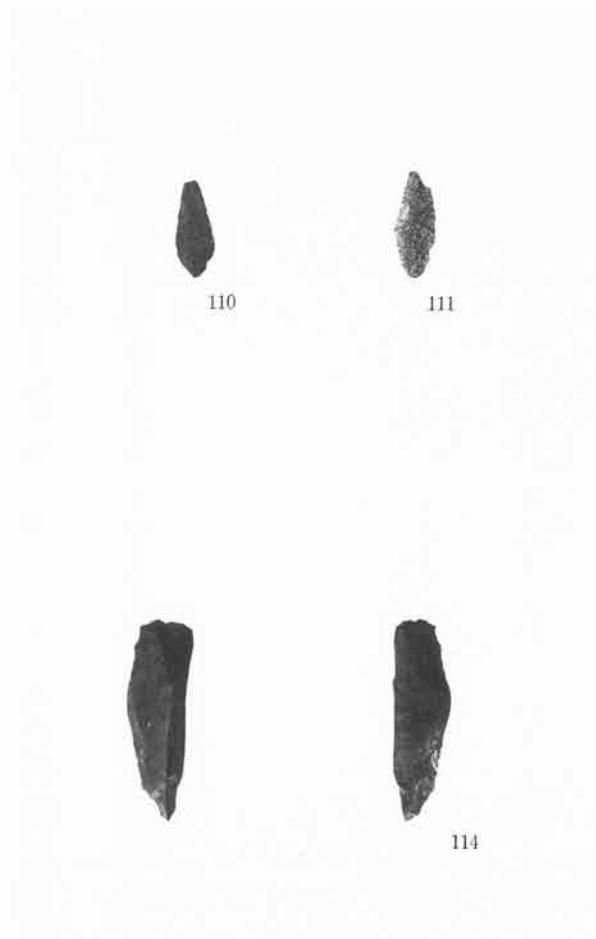
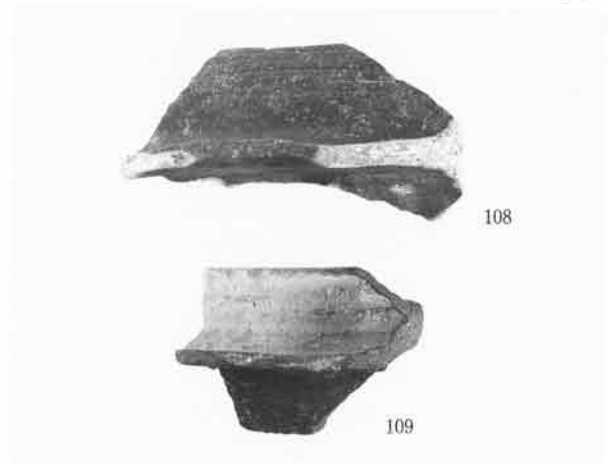
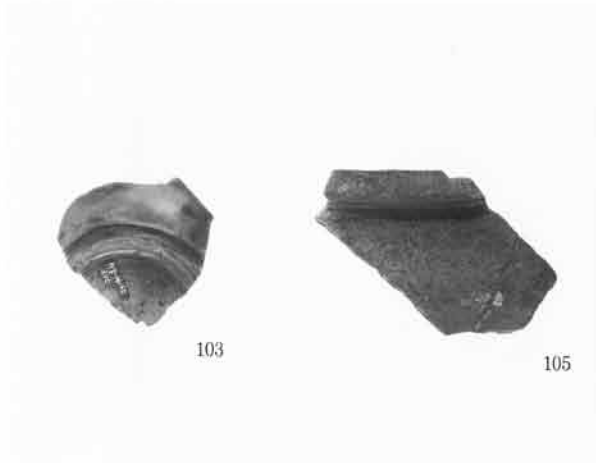
94



97



102





119



120



121



122



123



124



125



126



128



129



130



132



133



134



135



136



137



138



139



140



141



142



143



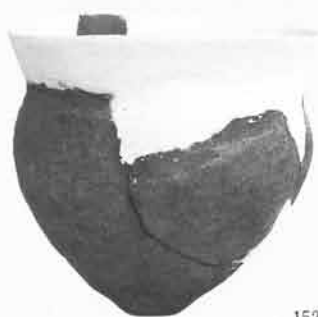
144



145



146



152



149



154



155



156



157



159



163



161



162



170



171



172



174



179



181



182



183



184



188



189



190



194



199



203



204



205



206



207



208



210



212



211



214



216



217



219



220



221



226



228



237



239



240



241



243



244



246



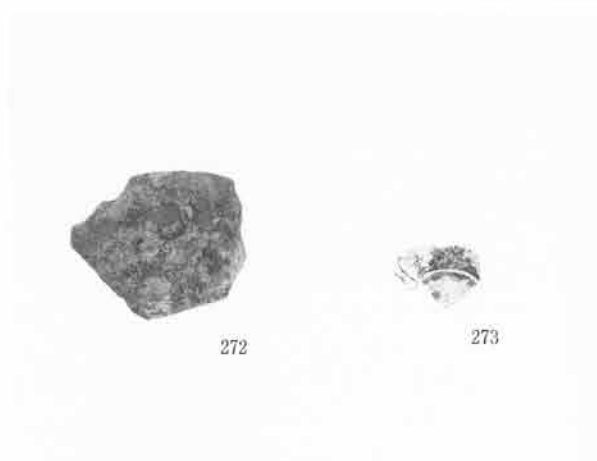
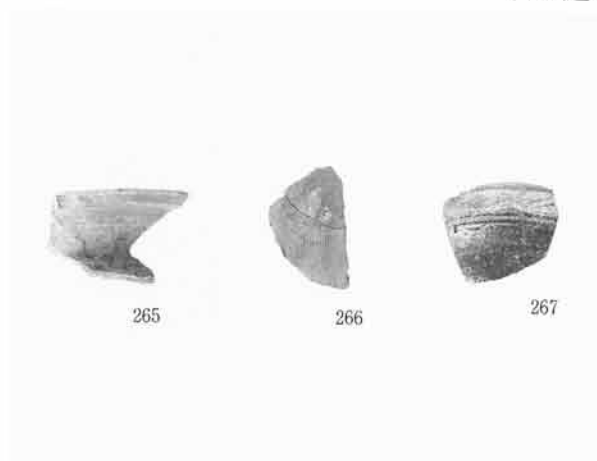
247

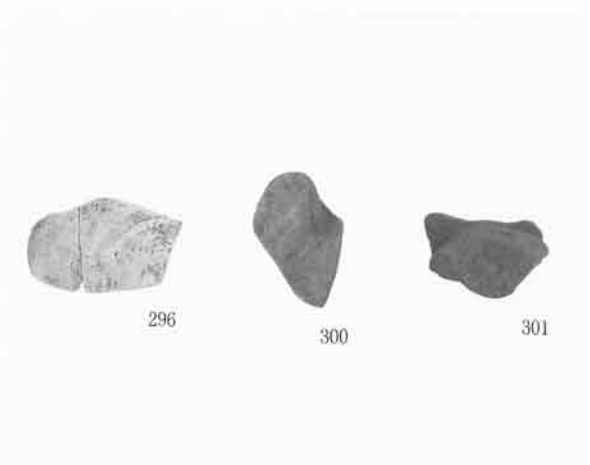
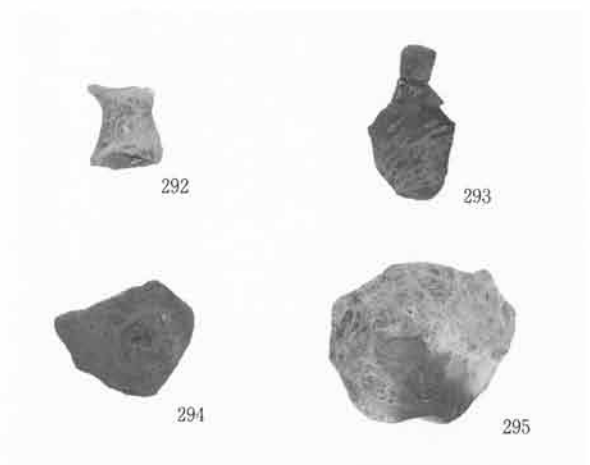
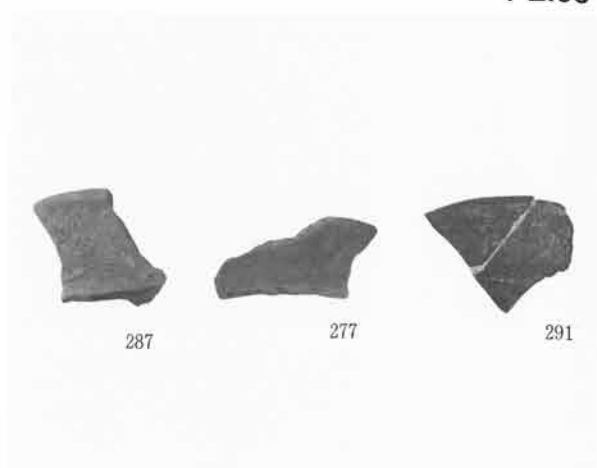


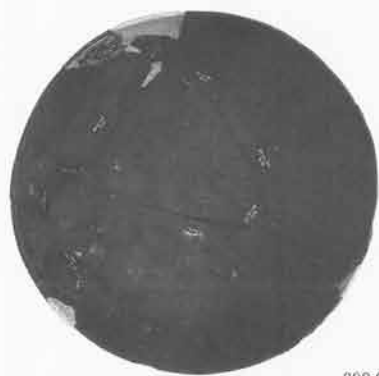
261



262







303 (内面)



303 (底面)



305



305 (底面)



306



307



308



309



310



311

PL.95



312



313



314



315



316



317



318



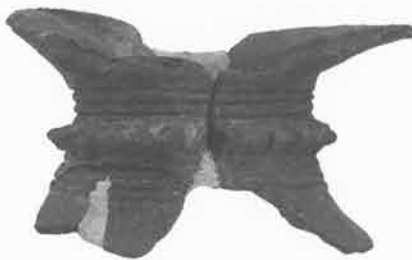
319



320



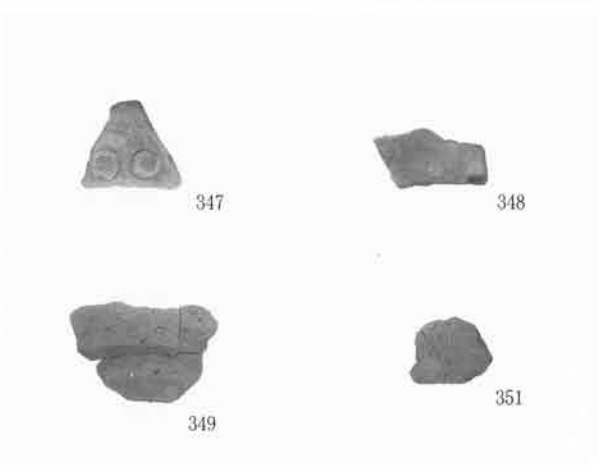
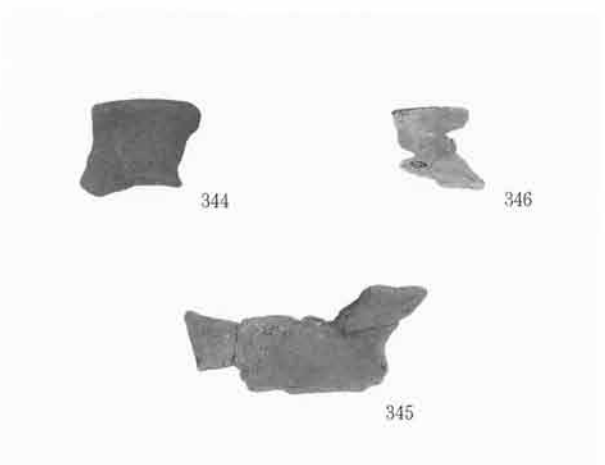
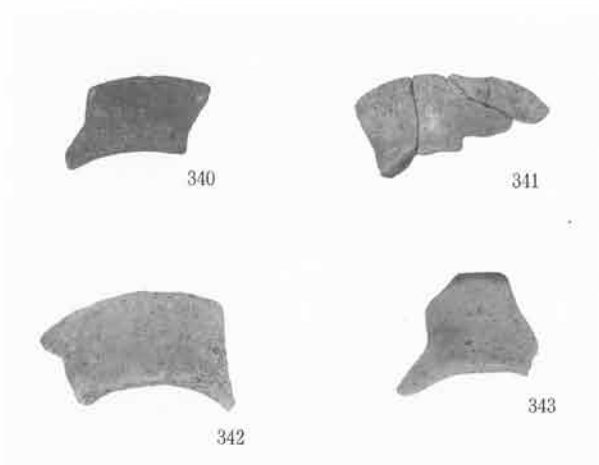
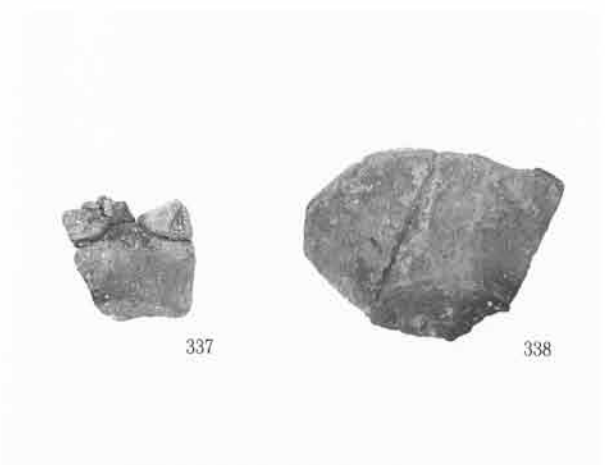
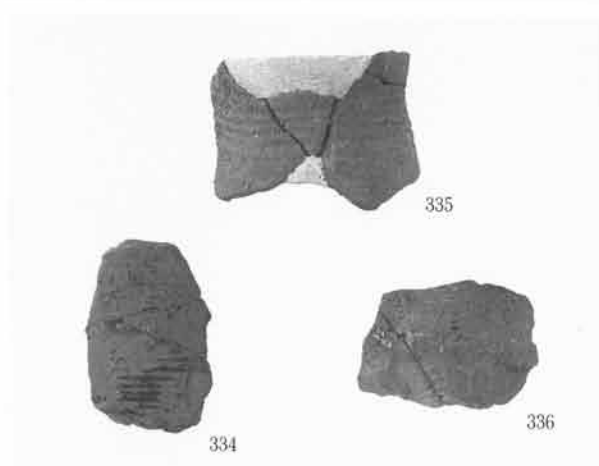
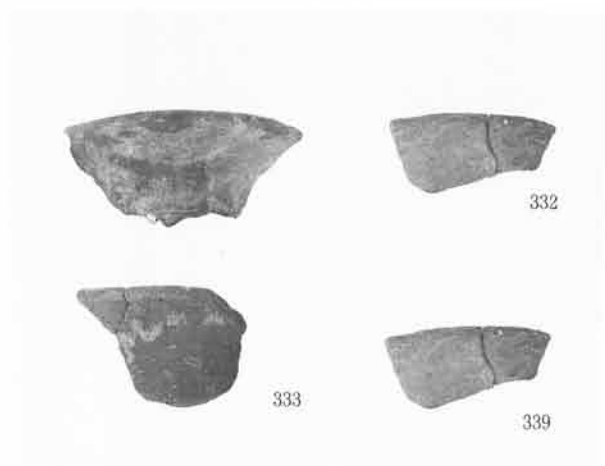
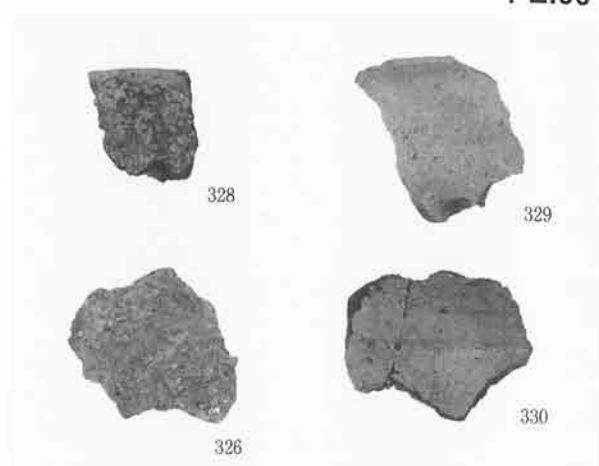
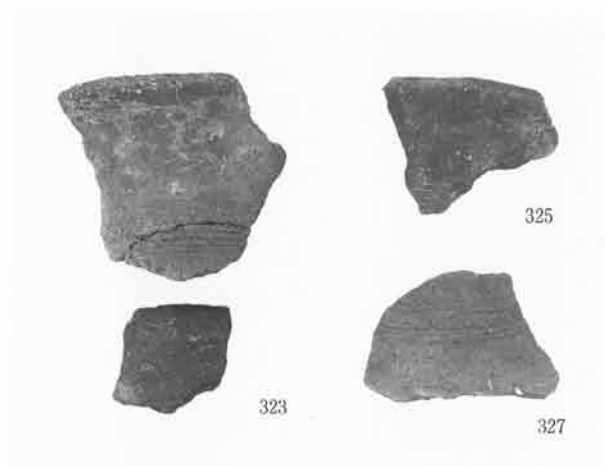
321



322



324





357



358



359



361



363



364



365



369



368



370



372



395



376



378



380



383



384



385



391



392



394



395



397



398



400



403



405



408



410



411



412



418



421



420



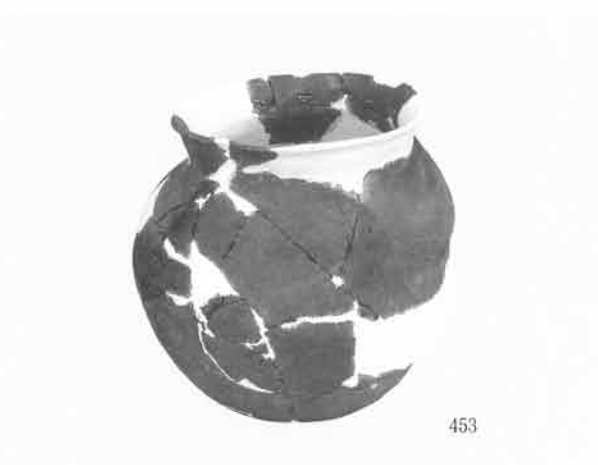
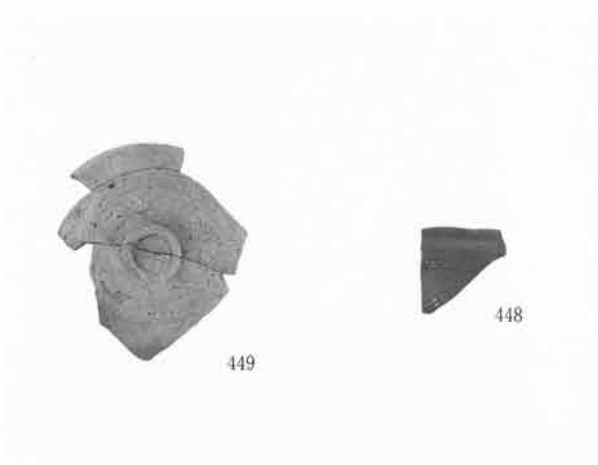
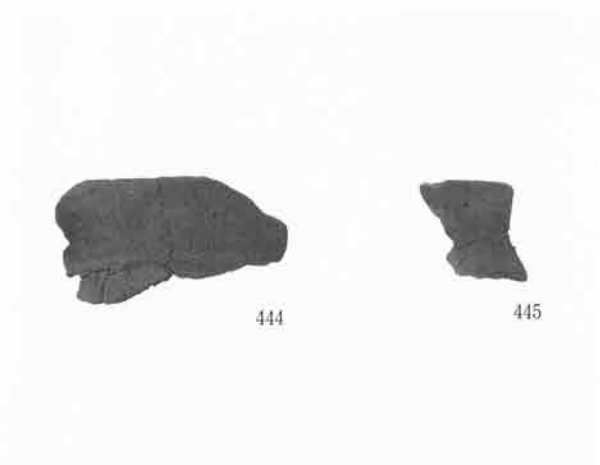
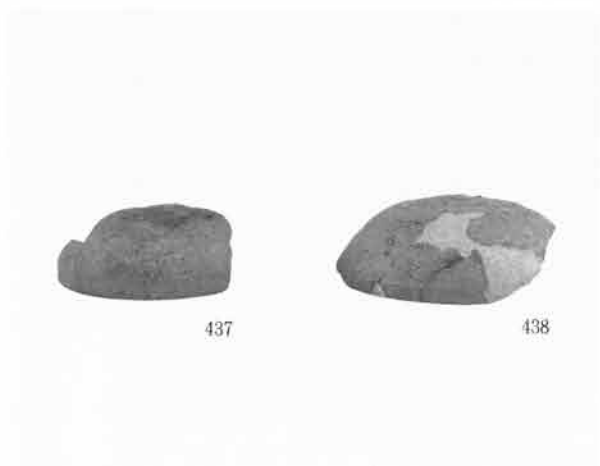
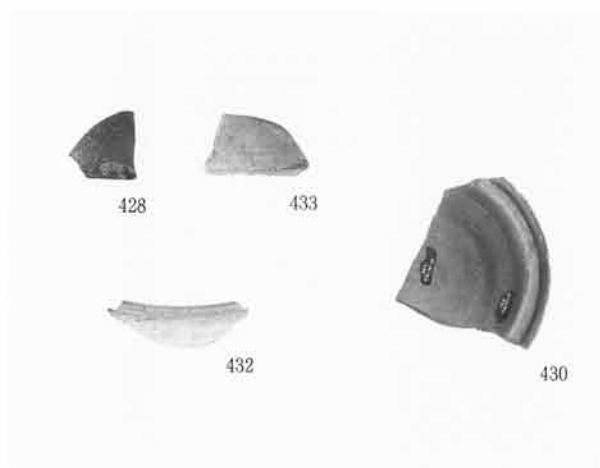
421



423



425



報告書抄録

ふりがな		やまぐちいせき・かわなべいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名		山口遺跡・川辺遺跡発掘調査報告書							
副書名		県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良事業に伴う発掘調査							
編著者名		村田 弘・佐伯 和也・藤井幸司							
編集機関		財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地		〒640-8268 和歌山県和歌山市湊571-1 TEL 073-433-3843							
発行年月日		西暦 2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村		遺跡 番号	北緯 〇/〃	東経 〇/〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
やまぐちいせき 山口遺跡	わかやまし 和歌山市 やつやまぐち 谷・山口	3020150	142	34°	135°	山口遺跡 1994年6月18日～ 1995年3月20日	5,720	県道和歌山 貝塚線およ び県道粉河 加太線道路 改良工事	
				16′	16′	1次調査 1998年9月22日～12月25日	420		
				05″	08″	2次調査 1999年6月22日～8月31日	446		
						3次調査 1999年8月21日～11月30日	478		
						4次調査 2000年1月16日～3月23日	420		
かわなべいせき 川辺遺跡	わかやまし 和歌山市 かわなべ 川辺	3020150	145	34°	135°	1次調査 1997年3月18日～12月25日	3,636	県道和歌山 貝塚線道路 改良工事	
				15′	15′	2次調査 2000年8月21日～3月23日	2,714		
				35″	10″	3次調査 2002年3月5日～6月25日	1,063		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
		縄文か？ 弥生～古墳				サヌカイト接合資料			
山口遺跡	集落跡	弥生～古墳 飛鳥～奈良 平安 中世		掘立柱建物・溝 掘立柱建物・溝 土墳墓 掘立柱建物		庄内～布留式土器 須恵器・土師器 土師器 土師器・須恵器・陶磁器		棟持柱をもつ大 形掘立柱建物を 検出	
川辺遺跡	集落跡	弥生～古墳 飛鳥 平安 中世		竪穴住居・溝 掘立柱建物・竪 穴住居・溝・土 墳墓 土墳墓 掘立柱建物・土 墳墓・溝		弥生土器・庄内～布留式土器・ 袋状鉄斧 須恵器・土師器 土師器 土師器・須恵器・陶磁器		庄内併行期の竪 穴住居や周溝墓 および 飛鳥時代の大形 掘立柱建物や多 数の竪穴住居を 検出	

山口遺跡・川辺遺跡発掘調査報告書

— 県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良工事に伴う発掘調査 —

2005年3月31日

編集・発行 財団法人 和歌山県文化財センター

印刷・製本 有限会社 土屋総合印刷